



夢の城

1

耳を澄ましてこらん
ほら、
静けさの音が聞こえてくる…

For Hisa

第1部 ドシアン

フロローグ

第1章 ドシアン

第2章 メロランス

第3章 フラヨーラ

特別な一日

20xx年12月のある暖かい冬の日、とある場所での会話――

“ねえ、教えて。この写真に写っている可愛い男の子は誰なの？ 女の子は？ みんな今、どうしてる？”

“バカねえ、もうその人たちはこの世にはいないのよ。その写真に写っている人たちはねえ、もう何十年も昔にみんな死んでしまって、あんたに会うことはできないの。最近亡くなったおばあさんがいたでしょう。こちらに写っている女の子はね、あのおばあさんのお母さんにあたる人だったの。つまり、あんたのひいおばあさんにあたる人っていうわけ”

“でもママ、この子、まだ女の子じゃないの。とっても可愛いわ。黄色い服を着て、にっこりしてる。まるで、そこから出て来そうみたい”

“そうね、でも誰だってそんなときがあるのよ。そして、この女の子も。名前はリサとって、とっても早く死んでしまった、ということよ。そして、この男の子は、シレールとって、この女の子のお兄さんにあたる人ということよ。その人がどんな人生を歩んだかということは、実はママも、よくは知らないの”

“ふ～ん、イレーネおばあさんがもっていた写真って、これ一枚きりなの？ 他にはないの？”

“そうね、随分昔の写真だから。最近整理していたら、たまたま出てきたのよ。どうもこれ一枚きりで、他にはないらしいわ”

“つまらないな、それじゃどんな子かわかんないじゃないの。じゃママ、友達のところへ遊びに行ってくる”

“気をつけてね、ステリア”

“うん、じゃあね...”

ステリアと呼ばれた娘は、母親に見送られながら、冬の明るい陽射しの中を駆けて行った。

娘が駆けて行く先には、新興住宅の新しい家並みが立ちはだかり、街角の真新しそうなコンビニエンス・ストアでは、若者の男女が、なにか楽しそうな会話をしながら、中に入って行こうとしている。

ステリアの母親の目に映ったその光景は、ごく普通の日に目にする光景だった。

こんな日は、他の日にもあり、他の日となんら変わることはない日であって、これとって特徴のない日々が、彼ら人々の上に、永遠に繰り返されていくことだろう...

第1章

...この夏も静かに終わって行く。ある人にとっては、思い出の多かった夏。楽しかった夏の旅。そこでめぐり会った人や、ひとときの忘れられない思い出。こうして、ひと夏のドラマは終わり、今頃は、どこかの窓でその回想にふけているのかも知れない。――しかし、ぼくにとって、この夏は、何もない夏だった。ただ静かに、普段と変わらずに夏は過ぎて行き、やがてこの夏も終わり、秋を迎えることになるだろう。そう、ぼくはもう既にそのときを待っているのだ。秋のあの樹木の輝き。そして何よりも澄んだあの青い空―― ぼくの胸は、その憧れに向けて、もういっぱいだ。秋は、ぼくの心を厳粛にし、そして遠い回想に向かわせる。ぼくの心は、もう既に迷っているのだ。ぼくの頭には、様々な昔の想いが眠りから覚めてその活動を開始し、一体、どこをどう整理し、何から手をつけたらいいものやら。それぐらい、様々な思い出や、想念にあふれ、もうそれだけでくたびれてしまいそうなのだ。そしてそのように、閉じ込められていた想念が眠りから覚め、心から解放されるのも、このような季節の変わり目だからということができよう。ぼくは、それらの思い出の中から、今回は、忘れられない犬との出会いについて、語ることにしようと思う。それを語るには、今が一番いい季節なのだ。

それにしても、ぼくはあの犬のことは、胸の痛みを伴わずに思い出すことはできない。ぼくと共に人生の一時期を過ごしたあの犬は、今は灰となり、地の下で安らかに眠っているからだ。それとも天国で元気に駆け回り、ぼくが来るのを待っているのかも知れない。いずれにせよ、ぼくはあの犬が死んだとき、心ひそかに、いずれお前のことを思い出して書いてやるよと約束したのだった。なぜなら、あの犬こそは、数少ないぼくの友だちの中で、唯一友と言える友だちだったし、ぼくの人生のある時期を、ぼくの心の支えとなり、ときには、ぼくの相談相手、またときにはぼくのぐちの聞き手ともなって、ぼくを励まし続けてくれたかけがえのない存在となってくれたからだ。あの犬は、同時にリサにもなついていたが、リサ以上に、ぼくにとって関係の深い存在だった。だから、その犬が死んだと知らされたとき、正直言って、ぼくのショックは大きかった。もうあの犬の元気な姿も、犬との心の交流もないのだなと思うと、目の前が急に真暗になったような、大きなものを失ったような気がした。そして無論悲しかった。あのときの、犬を失った深い悲しみは、他のものでは慰められないような大きな悲しみだった。それはもう二度と味わいたくないような悲しみだったし、事実、味わうことはなかった。そしていつしかあの犬のことは忘れ、それからもう何度目の夏が過ぎようとしているのだろうか？ そのことを思うと、単に悲しみとは言えない、むしろ恐ろしささえ感じるのだ。あの犬の生きた庭は、今も眼前に、あの雲の下、光を受けて残っている。又、あの犬の最期となった犬小舎も、もうめったに足を踏み入れることのない家の裏に、今もなお打ち捨てられているだろう。そのことを思うと、ぼくはもう一度、あの犬のことを考えずにはいられない。

もうはるか過去に滑り落ちて行ってしまったあの犬の生涯とは何だったのだろうか？ 時は、まるで何もなかったように、庭に花を咲かせ、よく茂った木の葉は風に揺れているのだ。だが何年も昔には、確かに、同じ庭の香りを鼻でかぎ、元気いっぱい走りまわっていたあの犬がいたのだった。ぼくはそのことを決して忘れることはできない...

あの犬が初めてぼくの家に来て来たのも、ちょうど今のように季節の移り目の頃だった。正確にはもう少し後で、九月の二十九日と、当時のぼくの日記には記されている。だから秋たけなわといったときで、一年中で一番季節のいいときだったのだろう。その日に、ぼくと最初の出会いとなったあの犬は、ぼくの家に来て来た。天気は晴れていて、ちょうど外では秋の日ざしが感じられるような家の中だった。玄関のドアがノックされ、リサが一匹のシェパードの子犬を大事そうに抱えて姿を現した。やがて、その犬はリサの手から離れると、既に板で囲いをしてある玄関の狭い範囲内を、初めて見る物の不安と、遠い所から連れられて来た悲しみのせいか、まだしっかりとできていない足でうろうろと歩き始めた。ぼくが可愛さの余り触れようとすると歯を向き、小さいながらも意地を見せ、手をつけられないようにも思われた。そのときの情景は、当時のぼくの日記にこう書いてある。

「かわいそうなセーレン、十二時過ぎにリサに連れられてやって来たとき、大きな箱に入れられて暑かったのかハアハアしていたけれど、すぐそこから解放されると今度は家の中をそこらじゅう悲しそうな声と共に歩きまわったのだ。これからここで住むことも知らずに。でも急にお父さんやお母さん、それに兄弟たちがいなくなったことには気がついていたらう。いや、そのためにセーレンは、こうして動きまわったのだ...」

セーレンというのが、ぼくたちがこの犬につけた名前だった。この犬がいずれ来ることは、リサから聞いて知っていたし、犬用の小さな小舎も既に作って用意してあった。リサは、勤め先の知り合いから、最近シェパードの子犬が合計六匹も生まれたので、そのうちの一匹を譲り受けることになったのだが、そのうちの四匹がメス、残り二匹がオスで、そのオスの一匹が、この日、リサに連れられてはるばると我が家へとやって来たのだった。誕生日は八月の十一日ということだったから、まだ生まれてから一ヶ月と少ししか経っていないというほんの赤ん坊の状態だった。しかし、いっばしの魂は備えているようで、親・兄弟とからもぎ放されて、たった一匹となってやって来たこの子犬の悲しい気持ちは、そのときのぼくにもよく分かるのだった。ぼくたちはじっと、その悲しい子犬が、家の中をうろうろ歩き回る姿を見守った。ときにはいたずらっ気を出して、ぼくは、その頼りげない足に指を掛けてやったのだが、するとその子犬は、ぼくの指に足が引っかかってポテンとその場に倒れ込むのだった。その姿が何とも言えず可愛いく、ぼくもリサも笑顔を見せて喜び合った。しかし、犬にとってはただですら悲しいのに、そのうえいじめられているとしか感じられなかつただろう。

ぼくは、犬の能力を試すために高いところから飛び降ろさせたり、ちょっとしたことを試みさせたりしたが、この悲しい犬にとっては、それどころではなかったはずだ。やがて子犬は、部屋のあちこちをうろうろしたあげく、もうすっかりあきらめたのか、玄関の片隅の冷たい床の上で、用意してあった犬小屋には見向きもせずしゃがみ込み、おとなしくなってしまった。ぼくたちはじっとそんな子犬を見つめた。ぼくが触れようとする歯を向けて警戒する子犬、しかしうろついているときにはその背中に触れて可愛い感触を既に味わったその子犬、その子犬は、ぼくの家に住人となることを観念したわけではないが、永い旅と新しい事態に疲れ、訳の分からない悲しみにじっとひたっているようだった。ぼくたちは、しばらくそっとしておいてやることに決めた。

そのときの事態を知る為に、再び当時の日記に耳を傾けよう...

「...まずセーレンが、この家に引きとられて来たのだけど、あしたにはセーレンの兄さん（あるいは弟？）が他の人に引きとられて行くのだそうだ。そして、そのうちには姉妹たちも両親から、いや兄弟達からまで引き離されて別々の家へ引きとられて行くのだろう。かわいそうなセーレン、そしてまたセーレンの兄弟達、いや両親ももちろん涙を流していることだろう。...でもまだ（誕生してから）二ヶ月もたっていないというのに、大きくなって一人前のシェパードらしくも見える。体長は50センチもあるのだ。でも、やはりまだほんの赤んぼうなのだ。なんといってもこの世の光を見てから一ヶ月と少ししかたっていないのだから。だからセーレンのその顔はあどけなくかわいらしいし、歩くのだってまだまだぎこちなさそうだ。もちろん何もなければ普通に歩くことはできる。でもちょっと前足をひっかけたりしてやると、バタンと倒れてしまうのだ。30センチぐらいの高さの居間からテラスへ飛ぶときだって少しばかりためらいがちだし。セーレンはやがて動きまわるのをやめてしまった。家の中をだいたい見てしまってもうあきたからと言うより、悲しみに耐えているんだ。そしてそんなときぼくがするように、セーレンも横になって目を閉じてしまった。もう悲しいことは忘れてしまいたいと言っているかのように。

そのうちセーレンはすっかりおとなしくなってしまった。腹が減ったときにはいろいろねだるようにしてまた動きまわったときもあったけれど、今ではもう玄関の、犬小屋がそこに置いてあるにもかかわらず、タイル張りの方がいいらしく見えて、そこで横になって、ひとりぼんやりしている。かわいそうなセーレン、その幼い心には何か知らないけれど楽しくなれないようなつまらない気持があるのだ。“ぼくのお父さんやお母さんはどこへ行ってしまったんだろう？ それに、ぼくの兄さんや姉さんたちは？”セーレンは言葉にはならないけれど、そんなことを感じているに違いない。そして奇妙そうにぼくたちを見つめる。なでてやっても、その奇妙そうな目つきは変わらないのだ。そのうちに慣れてくれればいいが...」

ともかく以上のようにして、寂しい村のぼくたちの家に、リサによってはるばるとセーレンは運ばれて来て、ぼくたちの一員としての生活の第一歩を踏み出したのだった。出だしとしてはちょうどいい秋の日ざしで、セーレン自身の心はともかく、ぼくたちの心に何か晴々したものを与

えてくれたのだった。

ぼくは、ドアの閉まった薄暗い玄関の片隅にうずくまっているセーレンをつくづくと眺めながら、思った。“お前は、思っていたように単純な動物なんぞじゃなく、我々人間が感じるような結構複雑な魂を持っているようだ。ただそれを言葉でうまく言い表せないだけで、お前が感じている中身は、我々人間と同じものなんだ。そうとは、お前が来るまで気がつかなかった。これからはせめて、友達として付き合ってくれよな、可愛いセーレン...”

それからぼくたちは、犬をしばらくそっとしておく為にも、ぼくたちの居間へと引き上げて行ったのだった。居間のソファーにしばらくいると、ときおり吠えていた悲しい声も、やがて消え、静かな静寂にとって代わった。セーレンは眠りについたのだ。

セーレンが初めて来た遠いあの日のこと、ぼくは、あの日のことをもうはっきりとは覚えていない...

しかし、あの日には、リサがいたし、心は爽やかで、空が晴れていたのは確かだった。ぼくたちのあいだに、未来はぼう漠としながら、光に満ちていたし、そのようなひとときがすみやかに滑り去ろうとは思はずもなかった。ぼくたちは、この犬の登場によって、きずなが一層、確かなものとなった。ぼくたちは居間のソファーに座って、過ぎ行く秋の日ざしを眺めていた。

そのとき、既にセーラがいないということは、一つの心に空けられた穴だった。しかし、家にやって来た一匹の子犬は、彼女の穴のいくらかを埋めてくれることだろう。そんな、期待にも似た満ち足りた気持ちで、ぼくたちは、この日の午後を過ごすことができた。秋の葉は色鮮やかで申し分なく、そんなぼくたちの心を歓迎するかのように、秋の日ざしを浴びて、庭に残っていた。

“あしたから、犬の世話をしなくちゃならないわね”

とソファーに座っていたリサが、何んとはなしに口を開いた。

“それは大丈夫さ。食事もやるし、散歩にも連れて行ってあげるから。犬との散歩には、この辺はもって来いの場所なんだ。まずは庭からだね...”

そう言って、ぼくたちは家の庭を眺めた。

庭には、リサが植えた秋の花が咲いていた。

“でも、せっかく植えた花を踏ませないように気をつけてね”

とリサは、少し心配顔をして、言った。

“大丈夫。子犬なんだから...”

とぼくは、リサの心配を笑いながら、答えた。

それから、やわらかい日ざしを浴びた、まだ犬によって踏みにじられていない庭を、ぼくたちはじっと見つめた...

その日の午後は、なんとはなしに過ぎて行ったのだと思う。ちょうどこの日のように空は晴れて、しかも賑やかで、楽しいふんいきに満ちた午後だった。

だが、ぼくたちの楽しい気持ちとはうらはらに、あのセーレンは、陰気な玄関の片偶で、つまらなさそうに、また、悲しそうにうずくまっていた。ぼくたちは、何度もそんなセーレンを見に行った。だが、この子犬は、相変わらずうずくまったまま、恨めしい目をぼくたちに向けるだけだった。

“そのうちに慣れるさ”と、ぼくは再び居間に戻ってくると、リサに言った。

“早く慣れて、家族の一員になれるといいわね”と、リサは、にっこりとして、答えた。

そして、ぼくはふと、昔、まだ家族がいた頃飼ったことのある子犬のことを思い出した。家もこの家ではなく、ぼくらの生まれ故郷オディープでのことだった。その頃は、ぼくらもまだ小さく、子犬とて随分大きく感じられた。村のはずれに捨てられていた雑種の子犬をぼくたちが見つけ、親には内緒で飼うことを決意したのは、もう随分と昔のことだ。初めは、村のまき小屋などでこっそりと飼っていたのだが、そのうちそこが難しくなり、ついにこっそりと家の浴室などに入れ込んだりするようになった。親は全くそのことに気づかないでいた。そんなある日、忘れもしないあの日の朝、急に浴室からリディアの悲鳴が聞こえ、部屋からすっとなで行くと、リディアは、身にバスタオルをまとい、浴室の片隅でしっぽを振っている小さな子犬におびえているのだった。ママは顔をしかめ、

“一体これは何？”と、やって来たぼくたちに向かって尋ねた。

ぼくたちはそれで、初めて白状しなければならなくなった。

しかし、結果は思っていたほど悪くはなく、親の寛大な措置により、この子犬は無事家族の一員となることができたのだった。

しかし思い出深いあの犬も、親の雑種の血を引いていたせいも、やがて成長すると、それとなく、ぼくらの手から離れ、どこかへと消えて行ってしまった。あの犬についても、いろいろと思い出はあり、とりわけ、家出をしたまま帰らなくなってしまうことが、ずっとぼくの頭に残った。その後、一度見かけたという噂も聞いたことがあるが、それ以来、パツタリと音信は跡絶えてしまった。犬一匹で、その後どのように生きて行ったのか、もうぼくたちには知るよしもなかった。しかし、この犬の家出は、深くぼくの心にしこりを残した。妹たちは、ぼくのしつけがいけなかったのだと言って非難した。全くその非難が正当だとは思わなかったが、思い当たる節もあり、ぼくは、彼女たちの非難に黙って甘んじた。

その後、苦難の時期に、一度子犬を飼ったことがあるが、これについては、それほど深い思い出はなく、それは、ぼくに買われ、ただ生きて、そして死んで行ったのだった。

そういうわけで、今回の犬は、これで三回目だった。そのいずれの犬も同じ種類ではなく、また、ぼくとリサだけが生活を共にした。初めの犬のときは、家族の全部がいたが次の犬のときは、もはや父親がはず、そして今回のセーレンのときは、セーラすらもういなかった。しかし、そうした寂しい家にセーレンがやって来てくれたことは、貴重なことだった。

リサが言った。

“この子犬は、どんな犬になるんでしょうね。それも、あたしたちの育て方ひとつよ。兄さん、よろしくね”

“分かってるよ”と、ぼくは答えた、内心とまどいながら...

というのも、ぼくには、この犬を賢い犬に育てるといふなんの計画も持ち合わせていなかったからだ。ただ、二、三のことを覚えれば、それで充分だ。それ以上のこと、芸を仕込んだり、しばらく訓練士のところに預けて特訓を受けさせたりするなど、思いもよらないことだった。この犬は、ごく普通に育ててくれればいい。ぼくはそう思った。

その日は、そのようにして過ぎて行った。晩方、ぼくたちは、子犬に、皿に入れた牛乳をやったように思う。しかし、初め、子犬は、少しなめただけで、全く食欲を示さなかった。きっと、新しい環境と心痛とが、食欲を押さえていたのだろう。しかしやがて、ぼくたちのいないときに、ペロペロと牛乳をなめる音が、居間にいるぼくたちの耳に聞こえて来たので、ぼくたちは互いに顔を見合わせ、その瞳は喜びに輝いた。食欲がとうとう心痛に勝ったのだ。こうして、この犬も、新しい環境になじんで行くことだろう。

リサは立ち上がり、食事の準備にかかった。ぼくは、玄関へ見に行くことをせず、そのまま自分の部屋へ引き上げた。恐らくは、その日の出来事を書き留めるためにも...

しかし、その当時のぼくは、決して普通の意味での健康体ではなかった。ものごとに素早く反応し、感じる心は残っていたが、その心はもろくて、崩れ易かった。それまでの決して正常とは言えないぼくの生活が、こうして平和と余裕とをもたらしてくれたにもかかわらず、ぼくの心を不安定な、ともすれば闇に沈み込んでしまうそんな気分から抜け出すことを不可能にしていた。おもて面は正常でも、ぼくの心の内面は、嵐が吹きすさぶような、ペシミスティックな気持ちをどうすることもできなかった。ただ唯一の救いはリサで、彼女の内面は、いつも晴れやかで、一片の曇りもその中に見つけることができないのが、ぼくの心を明るくした。彼女はいつも、春風のようにさわやかで、そんな彼女を見ることは、暗くすさんだぼくの心にとって、毎日が明るい希望だった。しかし、彼女と離れ、ひとりになると、再び暗い気持ちが頭をもたげて来た。ぼくがしたセーラへの仕打ち。それが、彼女が家を飛び出した原因ではなかったか。しかもそれは、いつか、あの初代の犬にした仕打ちと全く同じ性質のもののような気がして、一層、ぼくの心を暗くした。ぼくは、セーラへの、そして、あの犬への思いやりが欠けていたのかも知れないのだ... その為か、セーラも、そしてまたあの犬も、家を飛び出し、どこかへ消えて行ってしまった...

ぼくは、いなくなったセーラのことを気がかりだった。そして、ぼくたちの運命も、また気がかりだった。ただリサだけが、このまま何事もなく、順調に行ってくれること、それだけをぼくは願っていた。そして、リサは充分、ぼくのこの期待に答えてくれていた。彼女自身、何事もなく、順風の吹くまま、その道を歩んでいた。この悲しい家庭にあって、彼女には少しも、そのかげりすら見ることはできないのだった。リサはいつも陽気で、自然にふるまっていた。そんな

彼女を見るのが、まるで春の花のように、ぼくにはうれしかった。

やがて、

“兄さん、食事出来たわよ”と言うリサの声がする。

ぼくは筆を置き、明るい食堂のテーブルへと、自分の部屋を出て行くのだった。

秋の一日はゆっくりと暮れて行く。初めてセーレンがやって来たあの夜も、恐らくこの日のように静かだったにちがいない。虫の鳴く声、恐らくそれだけが唯一夜の静寂を破る音だった。セーレンは早々と眠り、ぼくらだけの夜が始まった。

しかし、夜は静かだった。リサは自分の部屋で、音楽を聞いたり、本を読んだり。ぼくは居間で、ぼんやりと時を過ごしていた。部屋の明かりを暗くし、窓ごしにこうこうと輝く秋の星空を眺めていた。恐らく、“悲しみの村”を構想していたのも、又、“ローラの悲しみ”を知ったのも、その頃のことだった。セーラはどこでどうして暮らしているのだろうか？ 絶望の果てにたどり着くのが、悲しみの村の構想だった。だが、そんな村など、現実に存在するはずもない。また、“ガラスの動物園”に出て来るローラも、救われる道はこの世のどこにも存在しないのだ... そんな暗い思いを抱きつつ、ぼくはあの夜を過ごしていた。――ちょうどその頃、ぼくは一つの映画を見た。孤独で単調な生活のリズムの中で、まるで一羽の小鳥が舞い込んで来たかのように、ぼくの心を動揺させ、ぼく的生活とは別世界があることを告げてくれた印象深い映画。それは外国の映画で、遠い国での若々しい生活のあることを教えてくれた。ぼくはその映画を、ただひとりで、リサにも告げず、孤独にこっそりと見た。別に秘密にするほどの映画でもなかったが、なぜかしら、その映画の若々しさが、孤独な観衆の前に演じられた何んともいえない新鮮さが、ぼくひとりのものにさせたい気を起こさせたのだ。後で分かったことだが、リサもこの映画を見ていた。彼女は友だちに誘われて一緒に見たというのだ。そのことが分かった日の夜、ぼくとリサとはその映画について語り合った。それはともかく、その映画は、長い、孤独で単調なぼく的生活にあって、数少ない楽しみの一つとなっていて、その後長くぼくの記憶にとどまった。それはまるで、長い間にあってパッと輝く映像のように、また、潤いのない木枯らしのような生活の中で、ふと通り過ぎた微笑みのように、ぼくの心に刻み込まれたのだった。それは、孤独ですさんだ生活であったがゆえに、一層強くぼくの心にしみ入ったのだった。そのような映画は、他にもいくつかあって、それが当時のぼくにとって、数少ない楽しみとなっていた。それをぼくは、こっそりと、ひとりで楽しんだ。

当時のぼくは、孤独でいつもひとりぼっちだった。いや、ひとりきりの世界に閉じ籠りたいという気持ちが強く働いていた。カフカの「城」に出会ったのも、ちょうどその頃だった。“アマリア”“フリーダ”“オルガ”それら、「城」の登場人物に、ぼくは夢中になった。こんな不思議な、そして、こんなに人を惹きつける昼間の世界というものが、他にあるだろうか。

ぼくはカフカの描くその不思議な魅力に、ついつい吸い込まれて行くのだった。その頃の日記に、ぼくの心の揺れ動きとして、こうある。

「この秋というものは―― そうだ、この涼しさ、このさわやかな光、この静かなまどろんだ光景はすべて秋のものに違いない！ 夏はもう去ろうとしているのだ―― なんとぼくの心をワクワクさせるのだろう。でも、このことは、ただ秋というそれ自体に含まれているからではない。秋といい、その穏やかな明るい光景といい、でもそれは、見る人の心によって二つに分かれるのだ。それがどんなに明るくさわやかであろうとも、寂しく、空虚で、味気なく感じるときがある。でもまた、秋というものは、なんとさわやかで、心を誘い、心をワクワクさせるときがあるのだろう！ そして、今がそのときなのだ。ああ、この物語が、この物語の世界がまるですぐ近くに存在しているようだ。そうでなくとも、ぼくのこの心は秋であり、あれらの人々がそこで営み、これから後どのように展開して行くのかという希望で大きく、大きく、この体を突き破ってさえ、広がって行こうとしているのだ...」

ぼくは、ぼんやりと、暗い明かりの中、居間に座っていた。やがて、ドアに光が差し、リサが現れた。

“そんなところで何してるの？ ひとりぼっちで”とリサは言った。

ぼくは振り向いて、そんなリサを見た。

“考えているのさ”と、ぼくは答えた、“人生のはかなさを... でも、お前のことも考えてはいるんだ。本は読んだの？”

すると、リサは、にっこりとしてぼくを見た。

“兄さんらしいわね。人生がはかないなんて”とリサは言った、“暗い部屋にいるからそんなことをつい考えてしまうのよ。ねえ紅茶でも飲まない？”

“そうだね”と、ぼくは答えた、“リサの好意だからいただくよ。――でもやっぱりいろんなことを考えると、分からなくなってくるのさ。人生って何だろうね。親しい人との出会いと別れ。そんなことを考えていると、悲しくなってくる”

“兄さんって、何をめそめそしているのよ”と、リサは言った、“本当に変よ。もう少しさ、元気を出してよ、本当に”

リサの言う通りだった。しかしその当時のぼくに、他のどんなことができただろう、ただ人と世を悲しむ以外には...

再びその当時の日記。

「きょうもまた一日が終わったらしい。でも、またぼくは知らずにうかうかと一日を過ごしてしまったらしいのだ。夕焼けは、まるでもう消えかかるろうそくの火のようだ。今にすぐ、まっ暗なただ光の点を散りばめたにすぎない空が全天をおおうようになってしまうことだろう。でも、ぼくはまたこの明るいうちに知ることもなく過ごしてしまったらしいのだ。

むしろ寒気を感じさせるきびしい風が窓の外では吹き荒れているらしい。このことは、ぼくの悲しい心をますます悲しませる。ぼくはまるで狂ったある特定の日に向かって、毎日少しずつぼくの生命をすり減らしているような気がしてならないのだ...」

そのような荒涼とした、悲しい夜を迎えていたあの頃が今となってはなつかしい。それは、セーレンの登場と切り離すことのできない背景であり、セーレンを思い出すことは即ち、あの頃の思い惑った自分を思い出すことにつながるのだ。

「...ぼくはただ、戻って来たに過ぎなかった。何ひとつ楽しむこともなく、何ひとつ新しいことを感じることもなく、ただ悲しみながら一日をすごしてしまったに過ぎなかった。こういう日を過ごすのは、ぼくはとてつらいのだ。」

いかなる生産もなく、無為に過ごしていたあの頃、しかし、リサとの束の間の楽しみもあった。彼女と、休日を借りて、モダンアートの美術館や動物園に行ったのも、セーレンが来る少し前のことだった。電車や、史跡での雑踏、その当時、目にした光景が、今も目に浮かぶようだ。みやげ物店でのショッピング、拝観料の支払い、帰りには雨に降られ、傘の用意のなかったぼくたちは、ビショぬれになり、駆け込むようにして、駅の構内にたどりついた。

「...ヒドイ雨の中を息を切らせながら戻って来たのは六時頃だった。帰るなりまずしたことは、家の中が暗かったので電燈をつけたこと。そしてもちろんさっそく服を着替えたことだった」

当時のぼくの頭は、そのような様々な思いで、いっぱいだった。ぼくはじっと、日が暮れて行くのを待った。ぼくの沈んだ孤独な心。それを慰めてくれるのは、ただぼくの妹、リサしかいなかった。

“ねえリサ、最近のぼくは、暗いかい？”

とぼくは、そばにいるリサに聞いた。

“ええ、暗いわ”

とリサは、目を輝かせながら、答えた。

“自分でも、それは分かっている”と、ぼくは言った、“でも、仕方のないことなんだ。ぼくたちの運命があのようなじゃね”

そう言って、ぼくは、つい最近までの息の詰まるような生活のことを振り返った。都会での絶望。狂気のような生活。今は少々ゆとりができたが、あの頃の悲惨な生活のことは、決して忘れることはできなかった。リサだって、同じ体験をかいくぐって来たはずなのだ。しかし、ぼくと同じように辛いとは考えなかったらしい...

“あたしも、あのときのことは忘れてないわ”とリサが言った、“だって、忘れられるものですか。——でも、今はもう過ぎたことよ。これからの生活もあることなんだし、もうそろそろ忘れてもいい頃じゃなくて？”

“リサの言うことは分かるさ”と、ぼくは言った、“でも、――もう少し考えさせて欲しいんだ。ぼくの生きて来たこと、あのよう苦しまねばならなかったことは何んだったのかをね。ぼくは、結論が出るまで、ひとりで考えていたいのだ”

“分かったわ。兄さんはひとりでいたい、でしょ？”リサは言った、“ということは、あたしは邪魔ね”

“いや、そうじゃないんだ、リサ”と、ぼくは、引き止めるように言った、“お願いだからここにいてくれよ。決して邪魔なんかじゃない。むしろ、ずっといて欲しいんだ。リサは、ぼくにとって、必要不可欠さ。ぼくは、お前を、そばにおいておきたい。それでこそ、心が休まるというもののさ...”

リサは、にっこりと笑った。

“それで、どんな風にお要りょうなの？”と、リサは尋ねた。

“どんな風って、――ただお前がいるだけで、ぼくは嬉しいんだ”と、ぼくは、少し困惑気味に答えた、“お前となら、楽しい話もできる。その他、何んでもできるような気がするんだ...”

“でも、兄さんは、ひとりで考えていたいって、言っていたじゃないの？”と、リサはなおも尋ねた。

“それと、これとは別さ”と、ぼくは言った、“お前がいるときにはもちろん、ぼくは、お前のために、時間をさくつもりさ”

リサは、おかしそうに、にっこり笑った。

“そんなに気づかってくれなくてもいいのよ、何も”と、リサは言った、“あたしだって、ひとりで過ごせるんだし、邪魔だったら邪魔ってハッキリ言ってくればいいの”

“そのときはそう言わせてもらおうさ。でも、今は違う”と、ぼくは言った、“今はお前に聞いてもらいたいんだ。お前に行かれりゃ困るのさ”

“じゃ、何を聞かせたいの？”

とリサは、少し興味を持ってぼくを見た。

ぼくは、しばらく、言葉を選ぶように、部屋の一点を見つめた。

“...ぼくの過去”やがて、ぼくはポツリと言った、“それは短いようで、長い。いろんなことがあったからね。――でも結局、みんな去って行ってしまった、このぼくから。それが悲しいね。ぼくのママ。パパ。拾われた子犬。昔の友だち。それからセーラ。おじいさん。数え上げればきりがなし。中には死んでしまった人もいるけれど、みんなどこへ行ってしまったのだろう。ぼくにとって、この別れが一番辛い気がするんだ...”

“分かるわ。兄さんのその気持ち”リサも、沈んだようになって、言った、“だって、あたしも同じなんですよ。あたしも、ママや姉さんがいなくなってしまうことは悲しいわ。兄さんには口にしないけれど、寂しい思いだってしているのよ。――でも、そのことでくよくよしたりなんかしない。別れがあれば、出会ってあるんだし、人ごみに出れば気だって紛れるわ。あたしは、そうして、気を紛らせているのよ...”

“ぼくはね”と、ぼくは言った、“もう別離しかないような気がするんだ。あのような深いきずかなんて、もう二度と来やしない。結局、あのときが一番よかったんだし、一度別れると、あとはもう別れっぱなしの人生しか待っていないような気がするんだ...”

“そんな悲しいことを言わないで”と、リサは、悲しそうな顔をして言った、“別れっぱなしだなんて。そうなりゃ、結局、ひとりぽっちになってしまうじゃないの。そんなのいやよ。寂し過ぎるもの。お願いだから、そんなことだけは考えないでね”

今度は、ぼくがニッコリする番だった。

“御免よ。少し言い過ぎた気がする”と、ぼくは言った、“大丈夫。そんなに深刻なものでもないさ。――でもただ、ぼくはこの別れについて考えたい。親しかった人や、親しかった動物。それと別れる、ということは、人生にとって一番辛いことなんだからね。その原因が、ぼく自身にあるのか、何かもっと他のことに原因があるのか、そのことをも合わせて、ぼくはじっくりと考えてみたいんだ。――あんまり楽しい話じゃなさそうだったけど、ぼくの言いたかったのはそれだけのこと。リサに分かってもらえれば、そのことだけでも嬉しいんだ...”

リサの目は、再び輝いていた。

“じゃあね。ゆっくりと考えるといいわ”とリサは言った、“あたしはこれでおさらばするから。また、あしたという日があることだし”

そう言って、リサは立ち上がった。そして、ぼくに頬を突き出し、ぼくからお休みのキスを受け取ると、自分の部屋へと引き上げて行った。

時計の針を見ると、もう寝る時刻だった。ぼくは、玄関で眠っている闖入者のことを思い、それから、ぼくも居間を立つことにして、自分の寝室へと引き上げて行った...

だんだんと秋らしくなって来るこの頃、しかし、ぼくの頭は重い。秋を見る目は、喜び輝くのではなく、憂いを含んでいるようだ。どうしてだろう？ リサがいなくなってしまったからだろうか。今も、あの小道の向うから、あるいは、そこの森の陰から、あの、微笑みをいっぱい浮かべた彼女が姿を現し、こちらへ歩いて来るような錯覚に捕らわれるときがある。しかし、決して彼女は姿を現すことがない。小道は小道、森は森のまま、ただ秋風がそこを通り過ぎて行く...

しかし、何年も昔のあの頃、その頃には彼女は姿を現したのだ。あの森の陰から、そこの小道のところに、彼女はいて、子犬と戯れていた。ぼくは、そんな彼女の姿を何度も見たものだ。穏やかな秋の日ざしと、そんな彼女たちの上には、美しい空が広がっていた。気候は心地良くて申し分がなく、あんなのどかで、夢見るような気持ちで過ごすことのできた生活は、もう二度と戻っては来ない...

あの朝、秋のまっただ中で、ぼくは目覚めた。心地良い目覚めだった。柔らかな光を部屋の中に入れてあるカーテンをかき上げると、何とも言えない葉の緑が目飛び込んで来た。それは、朝の光を浴びて、まぶしく輝いていた。

そのあふれるような緑の葉を通して、秋の青い空が見えていた。何とも言えない美しい空――ぼくは、夢誘うようなその空を、しばらくじっと見つめた。窓から入ってくる秋風がなんとも言えず、さわやかだった。しばらく、ベッドに横たえ、喰い入るように、庭の木や、澄んだ空を眺めていたが、ふとぼくは外に出たくなった。ベッドから飛び起き、やがてぼくは庭に出た。まだ朝は早く、空気はヒンやりしていた。庭の片隅に咲いている紫や白やピンクの花が、風に揺れていた。森は、部屋の中から見えたより後退したように見え、無言のまま、何かぼくに語りかけている... しばらく、風にそよぐ小さな花々を見つめていた後、ふとぼくはリサのことが気になった。彼女はもう起きているだろうか？ 彼女の部屋の窓は、すぐその雑草が生えた白い壁のところにあった。ぼくは好奇心に駆られ、彼女の窓のところにそっと歩み寄った。窓は少し開け放され、白いレースのカーテンが風に揺れていた。しかし、その奥の部屋の薄暗がりの中に、はっきりと認めることができた、ベッドの上に彼女が横たえている姿を。彼女は、暗闇にポッと浮かび出たベージュ色のベッドの上に、横になって眠っていた。髪の毛が枕の上に乱雑に広がり、足の方は、暗闇に吸い込まれるように消えていた。パジャマ姿の彼女は、完全に眠り込んでいた。それで、ぼくはふと、悪戯を思いついた。窓から物を投げて、分からぬように彼女を起こしてやろう。ぼくは、風にそよいでいる一本の花を折った。それを、少し開いた窓から、彼女の顔を目掛けて、ポイツと投げた。それは見事に、髪の毛に隠れた彼女の顔に当たり、とっさにぼくは窓の下に身を隠した。リサは気がついたのだろう、ごそっという音が部屋の中からした。それで、ぼくはゆっくりと顔を上げ、部屋の中を覗いた。リサは既に起き、ベッドの上に体を起こして、まだ寝ぼけまなこのまま、不思議そうに手に取った何かを見つめていた。彼女の指に取られていたもの、それは間違いなくぼくの投げた花だった。乱れた髪の毛の頭で、しばらく、それを見つめた後、彼女は不意に窓の方に振り向いた。ぼくは身を避けようとしたが、もう遅かった。

“兄さんね、悪戯をしたのは”と、リサは、窓のところにいるぼくを見て、言った、“だって、こんな花が飛んで来るはず、ないもの”

ぼくもにっこりして、答えた。

“お前の寝姿を見ていると、つい悪戯をしたくなってね”

“随分早起きね”と、リサは言った、“また、きょうはどうして？”

“別に何んでもないんだ”ぼくは答えた、“それにしても、いい朝だ。リサも、ここへ来て見えない？”

そう言うとリサは、ぼくの方を向いたまま、スリッパをはき、姿にはかまわず、ぼくのいる窓ぎわまでやって来た。そしてカーテンをあけ、窓を全部あけると、気持ちよさそうに空を見上げた。

“本当にいい朝ね”と、彼女は振り向いて、ぼくに言った。

彼女が余りそばに来たので、ぼくの体には、彼女の体温が身にしみて伝わって来るような気がして、ぼくは嬉しかった。ぼくは、壁にもたれたまま、満足そうに彼女に合図を送り、それから

再び、秋のまっただ中にある庭に目をやった...

一日の過ぎるのは早い。今はもう夜。しかし、静かで、気持ちのいい夜だ。虫の鳴き声がある。ぼくは、何んとはなしに一日を過ごした。この日もまた、暮れてしまった。ぼくは昼間、モディリアニのことを考えた。彼と、その妻、ジャンヌ・エビュテルヌのことを。短いが、燃焼した生涯だった。そして、その一時期を終え、永久に闇の中に消え去ってしまった二人。もう彼が亡くなってから、半世紀以上がたつ。しかし歴史は、まるで何もなかったかのように、現代の光景をくり広げる。その歴史の、はるか後方へと追いやられてしまった彼らの生涯とは、何んだっただろう。幾つかの特徴のある彼の絵だけが、かすかに、彼らの生きた時代と、その生活を告げているようなのだ。しかしそれさえも、幸運な例かも知れない。南極に住む、ペンギンやアホウドリの仲間、それらは何も残さず舞台から消え去って行く。子孫というただ一つの例外を除いては。それら動物には、芸術も、音楽も、一切のものが無縁の存在なのだ、ただ日々の糧を得るために働き、子供に餌を与え、その他必要な幾つかのことを教えては、消えて行く... それで、生命の本当の姿かも知れない。生きること、虚無に抗して、何か価値のあるものを残して死んで行くこと、それはただ人間にだけ与えられた特質なのかも知れない。モディリアニは絵を残した。それは不滅となり、現代においてもなお新鮮で、輝いているのは、彼の持つこの特質のせいなのだ。彼の生涯は短かったが、彼の生命は、彼の死後をも突き抜けて、その悲しいジャンヌの物語と共に、今日までも届いている。やがてそれは、永遠という刻印をも帯びることになるだろう...

そんな風にして、ぼくは、何んということもなしに、一日を過ごした。モディリアニの何んとも言えないその絵の良さに、しばらく心が奪われたのだ。それは、いいことなのかも知れない。およそ、何かに心が奪われるということは、いいことなのだ。増して、きょうは気持ちのいい秋晴れの日。ぼくは、モディリアニの生涯と、その絵を知って、幸せだった。また、永久に帰って来ないジャンヌ・エビュテルヌを知って、幸福だった。ぼくは、歴史の彼方へと去って行ったいろんな人のことを、こんなふうに、ひとりで考えるのが好きなのだ。そしてしばらく、彼らとお付き合いを願う。彼らは、暖かく、このぼくをもてなしてくれる。ぼくは、そんな彼らを見るにつけ、たとい人間的な資質に欠陥があろうとも、またたとい、貧しく、陰惨な人生だったにせよ、それは共感を呼び、ついには、こう言わざるを得ないのだ、何んと素晴らしい人生なんだ、まるで小説のようだ！ と。それこそ、ぼくの心が騒ぎ、求めていた人生そのものだったのだ。ぼくは、モディリアニと、この秋の一日をしばし過ごすことができ、幸福だった。気持ちは晴れ晴れとし、あの空のように、澄み切って、何ひとつなく、そして幸せだった...

...けさ、何か胸騒ぎがして、ぼくは飛び起きたのだ。外はまだ真暗で、虫の音しか聞こえてはいなかった。時計を見ると、まだ朝の四時。ぼくは、窓から真暗な外を見やった。

かろうじて、薄明かりの中に、庭の木や、遠くの森などが黒いシルエットとなって、静かに浮かび上がっていた。しかし、なんと恐ろしい光景なんだろう。その静まり返った死のような光景が、身にしみて、寂しさを感じさせたのだ。もう、誰もいない。地上から永遠に人々が、あの、ぼくに説教したママも、よくいさかいをしたセーラも、元気よく跳びはねていたあのセーレンも、そしてまたあのリサの笑顔も、まるで闇の彼方へ消えてしまうように、姿を消してしまった。そしてもう、誰もいない。ぼくは空しく、薄明かりの空を、地平線の彼方を、まさぐった。何も反応はなく、何ひとつ答えは返っては来なかった。闇をかすめたあのリサの微笑も、もうそこに存在してはいなかった。結局、ぼくは孤独なのだ。この地上に、みんなからとり残されて、ひとりぼっちなのだ。そして、ひとりで考え、苦闘し、悩み、あるいは、悲しんでいるにすぎない。ぼくと、世界とを結ぶこの小さな窓、しかし、そこから見える光景は、余りにも寂しく、もう見続けることはできなかった。ぼくは目を閉じ、窓に背を向けた。そして、思い出そうとした。今や、ぼくの記憶の中にだけしか存在しない、あのなつかしい日々の生活のことを。それだけが、ぼくの心に光をともし、この暗い、孤独な朝を、明るくしてくれる唯一のものだったのだ...

孤独の中で目覚めたとき、ぼくは夢を見ていた。不思議な夢だった。思い出すのが遅かったせいか、大部分を忘れてしまったが、中心のいくつかの部分は鮮やかに覚えている。ぼくは、思い出してから考えたのだ、どうしてあのような夢を見たのだろうか？

...ぼくは、一人見知らぬ小さな町にやって来た。人通りが意外になく、余りにも静かな街。その片隅では、団地で、鉄筋コンクリート作りの建物の建築工事が行われていた。既に近くでは、出来上がった建物が幾つかあり、主婦や子供たちが、話し、あるいは遊んでいるごく普通の光景が見られた。ところで、工事現場に再び目をやると、そこでは一人の作業着を着た男が、無線でやりとりをしていた。一見何んの変哲もないこの光景が、このドラマのきっかけを造ることになった。というのも、すぐ町の通りを歩いてみれば分かることだが、ここは陸の孤島であり、未知の惑星のほんの入植地に過ぎなかったのだから。ぼくは、人通りのない寂しい街路を歩いて、街はずれの小じんまりした宿舎にやって来た。そこから周囲には、もう人跡未踏の森や草地が広がっていた。ところで、一人の男が、事件だと顔色を変えて、駆けて来た。言われるままに、宿舎の近くの現場に駆けつけると、そこには望遠鏡がある方向に据え付けたまま置いてあり、他に人影はなかった。その男の話によると、この望遠鏡で観察を続けていた男は突然行方不明となり、代わりにビデオにとった観察記録が残されていて、その内容を見ると驚いたということだった。さっそく望遠鏡を見ながら、記録を再現させてみたが、確かに驚くべき内容だった。望遠鏡が向けられたジャングルのような森に、確かにそこにはいないはずの人影のようなものが、それも一人ではなく数人の姿が、はっきりと映っていたのだから...

その夜、ぼくは興奮して、なかなか寝つかれなかった。明け方だろうか、ふと何か外にいるような気がして、ぼくは、宿舎から出た。

既に薄明るい宿舎の周りの雑木林に、確かに誰かいた。ぼくは声を掛け、近づいた。しかし、そこから姿を現したのは、見も知らぬ敵だった。ぼくは思わず、用心の為にと持って来た、神経銃を発射した。賊は、他にも、やぶや木陰から次々と姿を現したが、ぼくは負けずに抵抗し、ついにひとり残らず捕虜にした。

そうして分かったことだが、彼らは、この惑星に住む原住民で、我々と同じ姿をしていた。ぼくは彼らを支配し、その象徴として、王の娘を妻にした。この娘は、ひかえ目でなかなか感じのいい娘だったが、王はこの結婚に不満らしかった。娘は、別に不満ではないらしかったが、王はなかなか姿を見せず、ぼくに会いたがらなかった。その後、行われた祝宴の席では、ぼくの食事に毒がもられていて、危うく一命を落とすところだった。このことでも分かるように、ぼくが彼らの社会に溶け込むのは、なかなか容易ではないらしかった。そうして共に、彼らの社会で何日も暮らしているうちに、ぼくはホームシックにかかった。やはり住み慣れた自分の社会に帰りたい。ぼくの仲間も同じ心境だった。しかし、そうするには、一つの問題が生じた。自分の国に、ぼくの妻を連れて帰るべきなのだろうか？ここで、ぼくたちが、みんなから歓迎されず、差別を受けているように、ぼくたちが自分の国に帰れば、今度は、この可愛い妻が、差別を受けることになるのではないだろうか？ 仲間に相談すると、連れて帰らない方が彼女の為だ、という意見だった。しかし、彼女と別れるのは、忍びなかった。ぼくは、それで、彼女の家族全員を、あの王をも含めて、馬車に乗せて連れて帰ることを計画した。馬車の道中、王だけはやはり不服そうだった。しかし、彼女は幸せそうで笑顔すら浮かべていた。ぼくは言った、今度は、ぼくの村の小さな家で、結婚式をあげようね...

以上が、ぼくが覚えているかぎり、見た夢のすべてだった。

...あの当時、ぼくは無職でよく図書館へ勉強しに行ったものだった。別に何かになるという当てもなく、ただ心の整理と思想を深めたいという気持ちから、ぼくは、ほぼ毎日、図書館に通った。家からそう遠くはなく、バスに乗って三十分ほどの街の郊外のところに、それはあった。静かな森に囲まれ、白い、近代的なコンクリートの建物が特徴的だった。その中は、いつも静かで、ぼくの知りたい本も豊富だった。ぼくの坐る席は、ほぼいつも決まっていて、窓ぎわの森が眺められるところであり、ときどき疲れた目を、森を眺めて休めたりした。図書館の近くには、大学があり、学生たちがこの図書館を利用したりもしていた。ともかく、図書館から出ると、よく学生たちの姿が、森やレストランや、その他の場所で見られたものだった。しかし大学は、ぼくには無縁の世界だった。ぼくは、ひとりで道を歩きながら、彼らの楽しそうな笑顔や、並んで談笑する様子を眺めた。当時、豊かな彼らを見て、何を感じただろう。ただ、彼らとは違う、ということだけ意識していたことは確かだ。ぼくは、無言のまま、図書館から自宅に向かった。ともかく、当時――今でも時々そういう事があるが――自分の中に閉じ籠もりたいという狂おしい気持ちを抱いていたのだった。そして、あらゆる不幸、悲惨の原因を探り当て、救いに至らしめたいとそう考えていた。

ぼくの孤独癖は、ますます強まるばかりだった。ぼくは、ひとりで歩き、ひとりで考えるのが好きだった。いつもは、夕方それほど早くなく、家に帰り着いたのだが、あの日は違った。家に変化が起こり、子犬が腹を空かせて待っていたので、ぼくは予定を早目に切り上げて、帰ることになった。

「かわいそうにセーレン、ぼくはセーレンがたったひとりぼっちで寂しくしていることを思うと、たまらない気持ちになって、予定より二十分も短縮して帰ってきたのだ。裏口のドアをあけるなり、玄関の閉じ込められたセーレンのいるはずのところでは、急に、閉じられたドアをゴツゴツ叩く音が聞こえて来た。同時にその悲痛げな吠え声も聞こえた。腹が空いたろう。寂しかったろう、いったいこの何時間も、まだ幼いセーレンはどのようにして過ごして来たのだ。すぐ飯をつくってやった。そしてドアをあけるなり、セーレンは飛びついて来たのだ。さあ、食べなさい。でも、ドアをあけるなり目についたのは、うんこやしっこの跡。可哀そうに、こんなのといっしょに長い間閉じ込められていたのか。でもセーレンはもう夢中で、ごはんをあっちこっち散らかしながらガツガツ食い始めた。...またあす、セーレンをひとりぼっちにさせることを思うと、たまらなくなる」

帰って来たとき、もう西空の太陽はゆっくりと消えて行き、あかねさす雲の色は鮮やかだった。ぼくの家は、静かな村のはずれに、赤い西陽を受けてひっそりと立っていた。既に門の明かりがついていたが、これはぼくがつけて出かけたものだった。ぼくは帰って来た。やっと我が家へと。我が心の落ち着き場所へと。ここだけは、誰にも侵されず、誰も知らない、ただぼくだけの城だ。ぼくとリサの――ぼくは、それを見るとき、いつも心はなごんだ。そこには、世の、いわゆるいざこざも、恨みも、憎しみも、何もない。ただ心の安らぎがあるばかり。そして、何よりも、孤独に帰ることができる。そこで、ぼくの心は羽ばたき、自由の空気を、胸いっぱい吸うことができるだろう。このように、いつも、ぼくは自分の家を見るのが嬉しかった。誰の目に触れることもなく、誰にも犯されず、ひとりひっそりと建っているぼくの家を見るのが...

垣根にかけられた門をあけかけたが、とたんにぼくには分かった。まだ誰も帰っていないことが。庭に咲く白い花が実に美事だ。それらが、最後の明かりの中で、秋のそよ風に揺れながら、帰って来たぼくを歓迎するかのよう、ひっそりと笑顔を向けてくれている。庭の雑草も、風に揺れ、その様は、ぼくの家を孤独を、いっそうきわだたせる。主のいないぼくの家は、よくその孤独に耐えたのだ。しかし、今、ぼくは帰って来た。こんな寂しい主だけれども、きっと家も喜んでくれていることだろう。とりわけ今回は、その家の中に、子犬が一匹、このぼくを待っていてくれたのだ。ぼくは急いで、裏口に回った。もし玄関のドアをあければ、そこにいるはずのあの子犬が飛びかかるかも知れず、衣服を汚されては困るからだ。

でも、裏口へ回る前、玄関のドアのところで聞き耳を立てると、早くもぼくの帰宅に気づいたらしく、情ない犬の鳴き声が、ドアの向うから聞こえてくるのだった。それは、悲しそうな、また解放を待ち望んでいるような、あのかん高い鼻声だった。ぼくは急いで、裏口へ回った。そして、服を着換えることもせず、真先に子犬の下へとんで行った。子犬は、ぼくを待っていた。もはや敵ではないのだ。ぼくは、そばに寄り、しゃがんでその頭をなでてやった。しかし、何んという惨状だろう。糞と尿のたれ流しのおかげで、その光景もさることながら、匂いもひどかった。ぼくはさっそく台所にとって返し、ミルクを与えてやることにした...

多分、そんな日があった。もう記憶の彼方の出来事で、はっきりと思い出すことはできない。人は、よもやその日のことを後になって思い出すことがあるとは考えることなく、その日を過ぎて行く――ぼくもそうだった。ぼくのその日の出来事も、もう遠い昔のことで、記憶の彼方へと去り、再び出会うこともない。ぼくはその日、何んということもなく生き、時を過ごし、一日の勤めを果たしたに違いない。それは、他の何百という日と何んら変わるものない一日であり、その日の特徴を、特に切り離して思い出すことなど、不可能なことなのだ。それは、他の何百という同様の日の中に埋もれて、もう再び浮かび上がることはない...しかし、それでもぼくは、その日を浮かび上がらせるように努めることにしよう。それも、記憶によってではなく、想像の力によって...

ぼくが犬に食事を与え、一段落すると、そのとき、家の外で虫の鳴き声に混じって、足音がした。もう外は、真暗闇だった。やがて、その足音は、家の前まで来て止まり、代わりに、表の木戸のきしむ音が聞こえた。子犬は、耳をピンと動かし、その音に素早く反応した。もう間違いなかった。リサが帰って来たのだ。ぼくは、抱いていた犬を放し、彼がドアに走るがままに任せた。リサは、表のドアから帰って来た。ドアがあき、リサが姿を現すなり、子犬は彼女に飛びついた。リサは一瞬、驚いたように、かがんで――あとずさりをしたようだった。でもすぐ子犬と気がつくのと、彼女はしゃがんで、その頭をなで始めた。それから彼を抱き上げ、ぼくのところまで――彼女は、やって来た。

“ただいま”と、リサは言った、“子犬って、とっても可愛いわね”

気がつくのと、彼女の白いスカートが、ほんのわずかだが、犬によって汚されていた。それでそのことを指摘してやると、リサは、驚いて犬を離し、嘆いた。

“どうしましょ。これ、気に入っていたスカートなのに。あした、着て行けないわ”

リサのそのしかめっ面を見る程、ぼくは愉快だった。

“まあ、犬を飼えば、そんなところさ”と、ぼくは、意地悪く、答えた。

リサは、子犬をにらみつけるようにし、それからプイッと振り向いて、自分の部屋へ引き上げて行った。

ぼくは、居間のソファーに腰を掛けたまま、何も知らない子犬を手招いて、抱き寄せた。犬のぬくもりが、ぼくの腕に伝わって来た。何んと子犬って可愛いのだろう。その毛のつやといい、

その頭のそり具合、まんまるいひとみ、そしてその鼻。可愛い手。

そのすべてが感触よく、ぼくは満足だった。ぼくが、膝の上にかかえてやりながら、尻尾をつかんでいたずらをしてやると、子犬は牙を向いて、その手を噛もうとした。そのときの表情と言えば、子犬ながら、野性のおおかみを思わせた。でも、鼻の当たりにしわができるその表情が、またとってもいい。ぼくは、からかい半分に、何度も何度も、尻尾を引っ張っては、子犬に挑発してやった。

しばらくすると、リサが再び居間に現れた。服を着換え、シャツにチョッキ、下はスラックスという姿だった。これなら、犬をいくら抱いて、毛がつこうと、汚されようと一向かまわないという服装だった。彼女は、ぼくの横に坐り、ぼくの腕の中で安らいている子犬の頭をなでながら、話しかけた。

“大人しいわね。もうだいぶ慣れたみたい。初めて来た頃に比べたらね。ねっ、帰って来たとき、どうもなかったの？”

ぼくは、そのときの状況を説明した後、言った、“でも、ぼくが全部片づけておいたんだ”

“そう。それは、御苦労さま”と、リサは、ねぎらってくれた。そして、つくづく、セーレンを眺めながら、彼女は言うのだった、“きっともう、本当の親のことは、忘れてしまったようね。兄弟のことも、もう忘れてしまったかも知れない。そしてきっと、あたしたちのことを家族の一員と思い初めているに違いないわ。そうでしょ？ そうなれば、しめたものよ...”

“さあ、どうだろうね”と、ぼくは答えた、“でもまるで、赤ん坊みたいだ”

その言葉で、ぼくたちの視線は、ぼくの腕の中で、自分の毛の生えた腕をしきりになめたりしている子犬の上に、注がれた。

リサはやがて、食事のしたくの為、エプロンを腰に巻くと、炊事場に消えた。

ぼくは居間に残り、子犬をひざに乗せたまま、新聞を広げ、記事に目をやった。静かな夜だった。虫の音が、秋の夜の更けて行くのを告げていた。

ぼくたちのテーブルの上には、明るい光が射していた。そして、暖かい食事。リサとぼくとは、いつも向き合って、食事をした。そして、この日は、ぼくたちのテーブルの下に、セーレンが寝そべっていた。そしてときどき、ぼくたちが与える食事を期待した。恐らく、そんなに与えることはなかったが、それでもついつい、その期待げな姿を見ると、与えてしまうのだった。セーレンが、十分消化したかどうかは分からない。多分、その幾つかは吐きだしたかも知れない。でも、セーレンがいることで、ぼくたちのテーブルは、いっそう明るさが増した。ぼくは、リサに向かって、言った。

“ねえ、セーレンを置いて出掛けるとするのは、忍びないな。だからといって、一日中、家にいるというわけにも行かないし。何か妙案はないものかな”

“確かに可哀いそうね”と、リサも同意した、“これからは、なるべくそばにいるよう努めることね。それができないようなら、せめて散歩で、お返しをしてあげることよ”

“散歩ね”と、ぼくは言った、“散歩なら大いにやろう。ぼく自身、最近、運動不足だし。一一昔を思い出すね。よく自転車に犬をつないで走ったものさ。でも今は、自転車がないから、足で連れて行ってあげることしよう”

“丈夫な犬に育ててね”と、リサは、注文をつけた。

“できるだけ、努力をするよ”と、ぼくは答えた。

それから、ぼくは犬を抱き上げ、テーブルの上に顔を上げさせたりした。リサも、笑顔で答えた。犬は、新しい家の新しい出来事に、きょとんとしている表情だった。子犬を育てることは、人間の子を育てることのように、ぼくたちにとって楽しいことだった。

“また横になったわ”と、リサが言った。

見ると、セーレンは、床の上であお向きに寝ころがっていた。上向きの手の折れた様子がとっても可愛いらしい。白い腹をこちらに見せていたので、ぼくは軽く足のつま先で触れてやった。

セーレンについての話題は尽きることがなかった。それは、ぼくたちにとっての子供だった。足を彼の腹に当ててやると、セーレンは、ぼくの足を手でつかみ、噛もうとした。ぼくは驚いて足を引っ込めた。それでもなお、セーレンは寝ころがりながらぼくの足のくつ下をくわえようとしたので、とうとう諦めてくつ下をセーレンにくれてやった。

リサはテーブルごしにそんなセーレンを見つめ、微笑んでいた。

“子犬が来て、賑やかになったわ”と、リサは、笑顔で言った、“今までに比べれば大違い。やっと、家に明かりが灯ったみたい。この子犬ちゃん、どんな風に育つんでしょうね”

“あまり友達も来ることがなかったしね”と、ぼくも答えた、“でも、お前の友達が来たときほど賑やかじゃないようだ。あの、何んとか言う子が来たときは参ったからね”

“ポーラ”と、リサが言った。

“そうそうその子”と、ぼくは思い出して言った、“あの子が話すと本当に賑やかだった。でも、この子犬だって、そのうちあのポーラに劣らず賑やかになるだろうさ”

“いずれそんなときが来るわね”と、リサも同意した。

ともかくも、この家に火が灯ったようなちょっとした出来事だった。この可愛いちん入者のおかげで、ぼくらは、心の暖まる思いがした。

食事も無事終了し、ぼくも、リサの後片付けを手伝うことにした。すると、セーレンもむっくりと起き上がり、ぼくらのあとに付いて、台所までやって来るのだった。

“あっちへ行け！”

と、足で追いやろうとしても無駄だった。セーレンはやっぱり付いて来て、ぼくの足や、リサの足にまつわりついて後片付けの邪魔をした。

結局ぼくが、リサの許しを得て、セーレンを玄関の自分のベッドへ連れて行くことにした。しかし、彼をベッドに置いて立ち去ろうとすると、セーレンは悲しそうな声を立てて、付いて来ようとした。途中に置いてある衝立を乗り越えてでも来ようとするそのけなげな姿に、ついにぼくは負けてしまった。もうしばらくぐらいいいだろう。ぼくは、暗い玄関にではなく、明るい居間に、もうしばらく置いてやることにした。

“しかし、もう少しだけだぞ”と、ぼくは、セーレンに向かって念を押した、“寝る時間がくれば、ちゃんと寝床へ連れて行くからね。そのときには、ちゃんとひとりで寝るんだぞ”

ぼくは、彼を足下の絨毯に寝かして、本を読みながら、リサの来るのを待った。

リサはやっと、エプロンをはずしながら、居間にやって来た。しかし、居間にセーレンが寝そべっているのを見て、驚いた目をした。その姿はまるで、赤ん坊に不意を打たれたときの若い母親のようでもあった。

“どうしたの。寝かしたんじゃないの！”と、リサは言った。

“ひとりにしておくのが忍びなくてね”と、ぼくは答えた、“とうとう負けてしまったのさ、このちびさんに...”

セーレンはそうとも知らず、ひとり満足そうに、自分の腕をなめたりしていた。

“あまり、甘やかしたりしたらダメよ”と、リサは、若い母親のように言った、“けじめだけはちゃんとつけておかなきゃ”

“何もそんなに向きになることはないさ”と、ぼくも答えた、“何せまだ初めなんだから...”

“兄さんって、案外甘いよね”と、リサは言ったが、今回は仕方ないと許してくれたようだった。リサもやっと、セーレンのそばのソファに腰を降ろした。

“...秋ね”と、しばらくしてから、リサが言った。

ぼくは、彼女の方には向かず、本に熱中していた。

“兄さんは、秋が好き？”と、リサはさらに尋ねた。

ぼくはやっと、彼女に顔を向けた。

“秋は嫌いじゃないさ。ただ寂し過ぎる点を除いてはね”

“あたしも同感”と、リサは言った、“でもこのところ、兄さんはずっとひとりでしょ？ 寂しくはないの？”

“それほどでもないさ”と、ぼくは答えた、“自分なりの過ごし方をしているんだから。今は、自分の本来の孤独に帰ることができて、むしろ幸せなくらいなんだ...”

“孤独が幸せ？”と、リサは不思議そうな顔をして、言った、“でも、あたしには御免だわ。そりゃ、ときにはいいかも知れないけれど、しょっちゅうではね。”

そのあいだ、何か考えることでもあるの？”

“大ありだね”と、ぼくは答えた、“様々なこと。街で人を見かけたり、自然と触れ合ったり、それだけでも、ぼくの心を駆り立てるんだ、詩や創作にね。いろんな事柄に、ひとりで出会い、観察し、思索するということがいいことなんだ。ぼくは、そういう生活を望んで来たし、今がそのときなんだ...”

“でも、去年の今頃は忙しかった”と、リサは、遠くを見つめるような瞳で言った。

ぼくも、その言葉で、一年前のことを思い出した。

“そうだね、去年はセーラがいたし、生活が苦しくて、毎日が火の車だった...”と、当時の生活を振り返りながら、ぼくは言った、“あの頃に比べると、今は全く天国さ。あのセーラに見せてやりたいぐらいだよ”

“でも決して惨めだとは思わなかったわ”と、リサは強調した、“確かに貧しかったかも知れないけれど、精一杯努力していたんだもの。姉さんだって、弱音なんか、一度だって吐かなかった”

“頑張り屋だったからね、あのセーラは”と、ぼくは思い返ししながら、言った、“でも、案外単純なところがあったりして―― ぼくがちょっと遊びに連れてやると、子供のように喜んだりするんだ...”

“そりゃ姉さんだって、嬉しいときは喜ぶのよ”と、リサは言った、“あの頃の兄さんは、いろいろと問題も多かったことだし...”

“確かにお前やセーラには、随分と迷惑をかけた”と、ぼくは素直に言った、“今さら、弁解は言わないけれど、でも、ぼくだって辛かったのさ。何もかもうまく行かなくて... 恐らく、人生の過渡期、とでも言うべきものだったのだろう。誰もが一度はくぐらねばならないね。でも、特に、お前たちに迷惑をかけてしまった。今では、すまないと思っているよ”

“いいのよ、何もそんなに謝らなくても”と、リサは言った、“姉さんだって、決して本当に兄さんのこと、恨んでいたわけじゃなかったんだから。それどころか、兄さんのこと、愛していた証拠ならいくらでもあるわ。ただ余り表には出そうとしなかつただけよ”

“分かってる”と、ぼくは言った、“ぼくだって、セーラのこと、本当に憎いと思ったことは一度もなかった。だから、セーラに当たったことがあったとすれば、それは、セーラが憎かったからじゃなく、本当は、自分自身が情けなく、憎かっただけなのさ。ぼくは、セーラが好きだったし、愛してもいたさ...”

“でも、姉さんは家を飛び出してしまったし、それっきり”と、リサはポツリと言った、“今頃どこにいるのかしら？”

“本当に、セーラに対して、馬鹿なことをしたと思っているよ”と、ぼくは、しみじみと言った、“あのとき、ああきつく叱らなきゃ、叱りつけなきゃ、セーラも何も家を飛び出したりしなかったかも知れない。セーラにとっちゃ、何か相当にショックなことがあったに違いないんだ、ぼくにはだいたい想像がつくけどね。――でも、欲を言えば帰って来て欲しかった。”

まさか家を飛び出して、本当にいなくなるなんて思いも寄らなかった...”

“本当に気の毒な姉さん”と、リサも同情するように、言った、“でも、姉さんは、たった一度の、自分の為の選択をしたのよ。そして恐らく、それに破れて、自分で責任をとったんだと思うわ。あたしたちには一度も、その心のうちを言おうとはしなかったけどね、でもあたしには分かるわ。姉さんは、生涯で最高の恋をし、そして、それに破れたのよ”

“お前もそう思うかい？”と、ぼくは言った、“そしてその相手は、セーラは強く否定していたけれども、やっぱりあの外国の船員なんだろ？ ぼくも何度か見たことはあるけれど、セーラが、ああいう風な男に参ってしまいそうなことは、よく分かったさ。一時は熱を上げ、その後は手を切ったとか言っていたけど、恐らくまた付き合い出していたに違いないんだ。――そしてもしその通りだとすれば、ぼくの判断は間違っていたかも知れないけれど、正しかったとも言えるんだ、その悲劇とも言える結果から言えば。ぼくはセーラに随分ヒドイことも言った、どうせ付き合い合ってもダメだ、というような。でもその通りになったとすれば、皮肉なものさ...”

“兄さんの言う通りよ”と、リサも言った、“姉さんがあの人とずっと付き合いしていたことは確かよ。そして、他にも随分付き合い合ったようだけど、姉さんが本当に好きになったのは、あの人だけしかいない...”

“お前も随分詳しいんだね”と、ぼくはにっこりして、言った、“――でも、お前から本当のことを聞かされるとは思いもよらなかった。ぼくも多分、あの男が原因だろうと思ってはいたけれど、やっぱりそうだったのか... でも、どうして、リサはそのことを知ってるんだい？”

“だって”と、リサは言った、“そりゃ、あたしには分かるわよ。――それに、正直言うと、何度も見たのよ。姉さんが付き合いをやめたと言ってからも、それから、あの事件の直前にも。でも、姉さんの為を思って、あたし、黙っていたわ...”

“それでよく分かったよ”と、ぼくは言った、“貴重な証言、有り難う。ただもう少し早く言って欲しかったな。そうすりゃ、ぼくも納得していたのに... はっきり分からなかったから、ぼくはセーラを誤解してもいたんだ。ひょっとして、悪い男に何かされたんじゃないだろうかって。そんなことを考えたこともあった...”

“御免ね、兄さん”と、リサは言った、“隠すつもりはなかったんだけど、つい言いそびれてしまったのよ。でも、本当のことを言えて、これですっとしたわ。これで、兄さんにも、姉さんの本当の像がよく分かったでしょ？”

“まあね”と、ぼくは答えた。しかし、すぐには言葉が続かず、ぼくは、セーラのことを改めて、あれこれと考えた。いつか、彼女らと行った楽しいお祭りの日のことを思い出した。フラワーショーのお祭りの日のことだったろうか、きれいな服を着た娘さんたちが飾りたてた車に乗ってパレードをくり広げ、ぼくたちは通りからその華麗なショーを見ていた。セーラも、とっても無邪気で楽しそうだった。

途中、ホットドックを食べたり、アイスクリームを食べたり、とにかく楽しい一日を過ごした。あのとき、セーラの未来が、予見し得ただろうか？

“...静かだねえ、この辺は”ぼくはふと、現実に戻って言った、“外では虫の音がしているよ。ほら、この犬は気持ちよさそうに眠っている”

その言葉で、リサもぼくも、ソファの足下で目を閉じている小さな生き物に目をやった。でも、その気配に気づいてか、急に目をあけ、ぼくたちを見た。

“きっと部屋の中が暖かいからよ。ホラ、目を覚ました”と、リサが言った、本当に、この犬って可愛いわね”

そう言って、リサは、子犬の肌をさするのだった。ぼくもつい引き込まれて、セーレンの背中辺りを、柔かくなでてやった...

静けさの中で、時計の針がカチカチと、時を刻んで行った。部屋の中は明るく、いかにも暖かそうで、真暗な窓の外は、冷たそうだった。

“ねえ、ぼくは無駄に時を過ごしているような気がするんだ”しばらくして、ポツリとぼくは言った。

リサがその言葉で、犬の頭をなでる手を休め、振り向いた。彼女のその表情は、ぼくにある魅惑を与えた。その表情は、無言で、真剣だった。

ぼくは、言葉が続けた、

“今、この瞬間にも、他に楽しいことがいっぱいありそうなのに、ぼくは、こうして、家の中で、ボンヤリと時を過ごしているに過ぎない。きょう一日だってそうだった。殆ど何もせずに、ただ時が経って行くのだけが早かった。その瞬間にも、もっと他に楽しいことがいっぱいできそうだという気がするんだ。でも、本当にそんなものがあるのだろうか？”

“兄さんは考え過ぎるのよ”と、リサが言った、“兄さんの悪い癖。行動する前に考えてしまうんだから...”

“確かにね”と、ぼくは言った、“一一でも、どうしようもないんだ。空想だけが羽ばたいてしまうんだから。ぼくは、現実だけに浸り切ることはできない。もっと他にいい生活が、素晴らしい本当のものが、必ずどこかに存在しているのではないだろうか、そんなことをふと考えてしまうんだ。そうなると、もう今の現実に満足することはできない。ぼくの魂は、別の現実、芸術や夢や、空想の世界へと羽ばたいてしまうことになるんだ... それは確かに悪い癖さ”

“兄さんは、昔、孤独で、余りにも多く夢を見過ぎた。それが原因でしょ？”

とリサは、ぼくを見て言った。

“なぜ知っているんだい？”と、ぼくは振り向いて、言った。

“だって、昔、口癖のように言っていたもの”と、リサは答えた。

ぼくは思わず、にっこりした。

“そうだったね”と、ぼくは言った、“確かに昔、ぼくは孤独だった。今も孤独には違いないけれど、今以上に孤独だった。そしてそのとき、現実を見るのではなく、空想癖がついたのも、確かなことだった。それというのも、現実が、正面から見据えるには余りにも辛く、耐え難いことだったからさ。ぼくは、現実から余り喜びを受けなかったし、しまいには、現実には全くといっていいほど、期待をかけなくなってしまった。しかし、その代わりに得たものといえば、どれほどあったらろう？ ほとんど、何もないんだ...”

“兄さんは、もう世の中に戻らないの？”と、リサは尋ねた。

“分からない...”と、ぼくは答えた、“多分、いましばらく、時が必要なんだ。じっくりと考える時がね...”

“そうして、また何もできなかつたって嘆くのね”と、リサは言った、“それは、悪循環を作るだけよ”

ぼくは、じっくりと考えた。自分の過去を振り返りながら...

“でもやっぱり、ぼくにはこれしかできない”と、ぼくは言った、“他の人には他の生活があるように、ぼくには、ぼく的生活しかないんだ。孤独、夢、希望、絶望、悲しみ、それがぼくの運命なら、ぼくにはそれしかないんだ。ただ、無気力な生活だけはしたくない。あくまでも、自分自身を保っていたいのさ...”

“兄さんって面白いわ”と、リサは笑って、言った、“兄さんは、あたしの出会うどの人とも似ていない。とってもユニークで、そんな兄さんがあたしも好きなの”

“ぼくは、馬鹿なだけさ”と、ぼくは言った、“他の人がみんな世の中をうまく立ち回り、そして結局は幸福なのに、ぼくにはそれができない。なぜだろう？ 運命のいたずらとしか、ぼくには思えないんだ...”

“兄さんは何かにこだわっている。というより、何かを恐れている”と、リサは言った、“きっと、変化を恐れているのね。自分が自分でなくなり、世の中に翻弄されて、別の人間になって行くことをね。――でも、それが大多数の人の通って行く道で、結局は幸福につながって行く道なのに...”

“よく分かっているさ”と、ぼくは答えた、“結局ぼくは、本当に今の世の中を愛してはいないんだ。ちょっと距離を置き、そして、特殊なフィルターをかけられたレンズを通してしか、今の世の中を見ることはできない。例えば昔、まだ何も分からなかった頃、フローベールによって描かれたボヴァリー夫人の世界、それが十九世紀の世の中の現実だと思ったものさ。余りにもリアルで本当らしく思えたからね。――でもそれは、本当の現実とは大違いだったんだ。ぼくは、それに気づいてから、世の中を見るのが怖くなった。世の中は、殺りくや暴力、そうでなくても、権利や精神の侵犯は、日常茶飯事のことだったのだから。ぼくは、そういう世の中からののがれたかった。何んとしても、自分の精神の落ち着く場所を見い出したかったんだ...”

“そういう兄さんが面白いわ”と、リサはさらに笑った、“あたしも姉さんも、世の中なんか、ちょっと怖くないもの。むしろ、世の中に出ると、親切な人の方が多いわ”

“しかし、そういうお前に急に襲いかかる悪い奴がないとも限らないんだぜ”と、ぼくは言った、“そんな形で、いつ何んだとき、死ぬハメになるかも知れない。たった一回きりの命を、そんな形で失っていいものなのかい？”

“何も、そんなこと言っていないわ”と、リサは言った、“一一でも仮によ、そんなことにでもなれば、それは仕方ないものとしてあきらめる他ないわ。だって、そんなこと言っていたら、何もできないじゃない。世の中に出ることはおろか、生活だってできやしないわ。そしてもし途中で一一兄さんが言うように一一命が絶たれるようになるとしても、それはその人の運命よ。そういうものとして、受け容れる他ないわ”

“ぼくにはそれが、承服できないことなんだ”と、ぼくは言った、“リサのように、簡単に割り切ることもできないんだ。一一ぼくも、永遠とは言わない。でも、死ぬ限りは何かを残して死にたい。何もせずに、人生の途中で死んで行くなんて、ぼくは決して容認できないんだ...”

“あたしもそれは同感よ”と、リサは言った、“でも、それぞれ何を残すかっていうことね。子孫だけの人もあるし、子孫を残さずとも偉大な業績を残す人もいる。でもまた、子孫だけと言っても、その子孫から素晴らしい才能の人が出てくるかも知れない。もしそうだとすれば、そんな子を持った親は、鼻高々よ。一一でもまた逆に、子孫も何も残さずに寂しく世の中から消え去って行く人もいる。一体、兄さんは何を世の中に残そうと思っているの？”

“恐らく何も、何もさ”と、ぼくはポツリと言った、“何も残さないだろう。きっと人生のある一時期に見た、誰も見たこともない夢さえも持って、この世から消え去ってしまうことになるだろう... そう考えると寂しいものさ、ぼくが生きているということは...”

“本当に兄さんって寂しい人”と、リサが言った、“昔、ママがいた頃の兄さんって、そんなことはなかったのに...”

当時、ぼくにとって、一日は長く感じられた。最近のように次々と経過して行く時ではなく、昼も、そして夜も長かった。それはどうしてだろう？ 充実し、幸福だったからだろうか？ そんなことはなかった。しかしただ、一日が、とても貴重なもののように思っていたことは確かだ。昼間、太陽が青天を照らし、やがて夕方となり、空が静かに暮れて行く。そこには様々な思いが込められ、なんと感動的な光景だったろう。夜もまた、長い、大事な夜だった。この大切な時を逃してはならない。それは、もう永遠に帰って来ることのない、一回きりの貴重なひとときだった。ぼくは、その貴重な一瞬一瞬を、ただ騒いで過ごす気にはなれなかった一一また、そんなことはできないことでもあった。ただじっくりと、内面のおもむくまま、思考を働かせ、過ごしたかった。その貴重な時を埋めるには、偉大な文学作品、哲学書に触れるのが最も効果的、かつ有効な手段だった。ぼくは、それらの作品を読みながら、ますます内面の探査へと向かって行った...

しかし今、覚めた目で見ると空しいのだ。今になって考えてみると、それら幾百もの文芸書や哲学書よりも、たった一人のリサ、あるいはたった一匹の犬のほうが、はるかにぼくの魂にとって、慰みとなり得たのだ。それらを失うということは、この世で最も辛いことだった。他の何にも増して、生きた存在を失うということは、ぼくに死にも等しい苦痛を与えたのだ。――今は、ぼくはひとりとなり、そうした感情も癒えたが、そのことは決して、根本的な治療になり得たとは思ってはいない。むしろ、生き生きとした感情を失った、哀れな人間になり下がったとしか、そうしか思われぬのだ。しかし、そうしたぼくにも強力な友だちが現れた。本――またしても本だが、この本は読むにつれ、面白い。今のぼくの唯一の心の友と言っていいような本だろう。そこには、真心からの動物愛が描かれているのだから。その題名は、「人、犬に会う」あの高名なロレンツ博士の著作だ。ぼくはそこでのあの章、「イヌの日」の章で語られている内容ほど、人と犬との睦まじい光景について書いた本を他に知らない。ぼくとセーレンとの関係もあのようだったらと今さらながら、後悔されるほどなのだ。しかし、現実はそうではなかった。ただ、怠惰に時は流れて行った...

“兄さんってまるで、中世の騎士が身につけていた鉄仮面みたい”あの日、リサが言った言葉が、ぼくの耳に聞こえて来るようだ、“まるで世の中の人のように思えないし、さわると鉄のように冷たいんですもの。その鉄の向うにある心は、どこへ行ってしまったの？”

ぼくは、意外な言葉で振り向いた。

“ぼくは生きている”と、ぼくは言った。

“でも、死人のように生きている”と、すかさずリサが言った。

“そう見えるかい？”と、ぼくは言った、“――でも、そう見えたとしても、仕方のないことなんだ。ぼくの考えていることは、誰にも知られず、しかも、悲しいことなんだから”

“悲しいこと？”と、リサは尋ねた。

“そう。リサは知ってるかい？”と、ぼくは言った、“アンデルセンの童話にたびたび出て来るお姫様。あのお姫様が、人魚姫もそうだったし、白鳥にされた王子の妹姫もそうだったが、いずれも唾にされていたということを。話すことができないということは、しばしば最も辛い試練であるし、苦痛でもあるんだ。アンデルセンは、確かにそのことを知っていた。――そしてぼくも、自分の苦しみについて、語る言葉を持たないんだ...”

“どうして話せないの？”と、リサはなおも尋ねた。

“というのも、聞く人なんて、誰もいないからさ”と、ぼくは言った、“聞く人がいなければ、人は黙る。それだけのことさ。ぼくはある日、気が付いたんだ、人にしゃべろうとしたって無駄なことだ、ということに。ぼくが話そうと思ったことは、それほどこの世の中から隔たっていたんだ

今思うと不思議なくらいだがね、ともかくその日以来、ぼくは、人に向かって話すことをやめてしまった。しゃべらない、無口な人間になってしまったのさ...”

“一体何が、兄さんをそんなに変えてしまったの”と、リサは、心配そうに眉をひそめながら、言った。

ぼくは、黙ったまま、答えようとはしなかった。今さら、そんな理由を述べたてたところで、何んになるだろう？ 貧乏、孤独と、見捨てられ、それだけで充分なのだ、人が被いがたい打撃を受け、再起不能となる為には。ぼくは完全に世の中とすれ違い、そのまま成長したのだった...

“...でも、ぼくだって、まだ新鮮な呼吸をやめたわけじゃない”しばらくしてから、ぼくは言った、“楽しいことには、楽しいと感じるし、美しいことは、美しいと感じる。ただ悲しみだけに反応するわけじゃないんだ。――しかし、ひとりぼっちのときが多いと、つい悲しみの方にだけ目が行ってしまう...”

“兄さんの心の中って、測り知れないわ”と、リサが言った、“一体、その鉄仮面の奥で何を考えているんでしょうね...”

“何も。何もさ...”と、ぼくは答えた、“もう、ぼくの心を捕らえるものは何もないんだ...”

「セーレンは今、ぼくと同じこの応接室でひとりベルトをくわえて戯れている。...セーレンも結局、生まれて来なかったほうがよかったのだ。こうして暇つぶしのためのみに何かしていなければならないセーレンなど...。ぼくはセーレンをどのようにしたら楽しませられるのかがちっとも分からない。だといってずっとかまっていたあげのわけにも行かないのだ。でも、ただひとりで遊んでいるセーレンを見ると、どうしても何かしてやりたい気持ちがするのだ。相手になれず黙認しているのが耐えられない」

セーレンが来てから、何日か経った日記にはそう書いてある。

今は昼で、久し振りに静かな日が訪れた。ひとり旅。様々なことを見て、感じ、結局、何も得ることなく、あの静かな我が家へと帰って来た。そんなぼくを待っていたのは、つい昨年までいたリサでもなく、まして、あのセーレンでもなく、ただ風に揺らいている庭の雑草だけだった。しかし、とにもかくにも、自分のあのなつかしい家に帰ることができて、ぼくはその再会を喜んだ。そこには、旅の途中で知り合った見知らぬ顔ではなく、様々な思いが、昔の香や、匂いや、昔の日の思い出などが込められているのだ。ぼくは久し振りに我が家の姿を見、それに再会できて嬉しかった。つい数年前、セーレンが戯れていた庭もそのままだったし、リサがいつも、朝、あけ放していた窓も、変わらないままだった。家は、風にさらされたままにも存在していた。

そこでは昔、リサやセーレンや、その他の人々や動物たちの息づかいが見られたものだったが、今はかつての面影はなく、すっかりひっそりしている。しかし、それでも別にかまわないのだ、そこの主はこのぼくだし、昔の記憶を再びよみがえらせることができるのだから。そのうち、また、リサも訪れてくれることだろう。それに、これは、あの本で知り得たことなのだが、セーレンの二世が再びこの家におさまることになるとも限らないのだから...

ところで今、庭を吹いている風は、昔を思い起こさせる。都市で見る光景は余りにも変化が著しいのに、ここだけは、この周辺だけは、時が何度も回帰するようなのだ。風景は、昔と今もさして変わらず、雲の流れや、風の吹く様子を眺めていると、ふと、昔がそこを通り過ぎて行くような気になることがあるのだ。そんなとき、ぼくは、昔を捕らえようとして夢中になる。するとやがて、鮮やかに昔の記憶が蘇ることがある。そんなとき、ぼくは、何か探していたものにやっとめぐり会えた時のように、有頂天な気持ちになるのだ。そのとき、鮮やかに昔は蘇り、ぼくはためらうことなく、あの時、あの日に帰って行く...

「リサは、友だちと待ち合わせがあると言って、もう八時過ぎには出かけて行った。ところで、ぼくの方は、きょうは休みだったので、のんびりと一日を過ごすことにした。居間に行き、ステレオのスイッチをひねると、長いソファーに横になった。やがて音楽が流れて来た。ポピュラー音楽だった。そしてぼくはそのまま、うっとりした気分になりながら、目を閉じていたけれど、それからどれくらいたったろうか、いつのまにかあの美しいメロディーにとって代わってステレオがニュースを伝えているのにぼくはふと気がついた。そして眠ってしまっていたことに気がつくのと、ぼくはハッとして体を起こしたのだったが、そのとき窓の向うのうららかな空や森などが目に入るや、ぼくは強い衝動にかられたのだった。とっっても晴れていて、いい天気だった。空は澄み切っていて、一段と高く、広々としているように思われた。ぼくはそれらに誘われたのだ...」

そういう日が確かにあった。セーレンがベルトをくわえているのと、この日記とは同じ日のことではなかったが、だいたい同じ頃を描いたものだった。今となっては、その日の前後の出来事について鮮やかに思い出すことは不可能だが、ぼくは思い切って、その日に入って行くことにしよう...

セーレンは居間にいた。庭で飼うつもりだったが、家族の一員として、自然、家に上がり込むようになってしまったのだ。もちろん庭に出して、草むらで遊ばせることもあった。しかし、何しろまだ幼く、虫がわくかも知れぬ草を食べてしまうかも知れないことを恐れ、ぼくは家に入れることにした。そしてその日、セーレンは早くもソファーの上に上がり、ぼくが投げ与えてやった古ベルトを、それが歯型でいっぱいになるまで、噛んだり、引き伸ばしたりしながら、遊んで

いた。当時、怠惰に時を過ごしながら、ぼくは何を考えていたのだろうか？

リサは、昼間は、勤めに出かけていなかった。ぼくはひとりでセーレンの相手をし、そして、物思いにふけったりした。哲学書。キルケゴールに出会い、「あれか、これか」を読み出したのも、その頃だった。そして、まだ哲学の意味の何も分からぬまま、ただ、「誘惑者の日記」の文章の美しさ、内容の素晴らしさに、ただ感嘆し、心から魅せられたのも、その頃だった。やがて、深く読み進むにつれて、その哲学に隠された本当の意味を読み取り、それによって、人生の全体像についておぼろげながらも分かるようになるのは、だいたい先のことだ。その頃はまた、プルーストの「失われた時を求めて」のうち、「囚われの女」の章だけを買っていた。しかし、すぐには読まなかった。というのも、すぐにもぼくの心を虜にしたのは、キルケゴールの神秘に包まれながらも、不思議な魅力を放つ書物、「あれか、これか」だったからである。ぼくはまだ訳の分からぬまま、そこに書かれている書物の意味を読みとろうとした。

ぼくは、もう百年以上も昔に亡くなったデンマークの偉人に出会って、言い知れない感動を覚えた。そしてしばし、今のぼくには、もう見ることも触れることもできない、憂うつで暗い、当時のデンマークへと飛び、あれこれと考えるのだった。その頃は、実際のデンマークすらほとんど知らなかったのだから、一世紀前のデンマークが、いかに謎に包まれ、神秘に包まれていたかは、想像に難くはない。しかしあえてぼくは、一世紀前の、まだヘーゲルやシェリングがいた当時のベルリン、デンマークの周辺へと羽ばたいたのだった。

ソファの上で無邪気に戯れている子犬のセーレンは、ぼくの魂がそんなに遠くまで飛んでいることに気づいていただろうか？ 自分の名が、まさにその偉大な哲学者から借りられた名前であることも知らずにいたあのセーレンは。――このセーレンの名前について、リサは、どこからその名前が出て来たものか、何も知らなかった。ぼくは、やがて来る子犬の名前に、セーレンがいいと言い、リサは何も疑わずに、それに同意した。――しかしある日、リサはめったに入らないぼくの書齋で一冊の本を見つけた。きっと、ぼくが少し席をはずしている間、どんな本を読んでいるのかと気になったのだろう。机の上に置かれたまだ読みさしの本を彼女は手にとり、パラパラとめくった。その著者の名は、彼女もぼくから聞いて既に知っており、難しいと言って嫌っていた例のキルケゴールだということはすぐ分かったが、その洗礼名までは知らなかった。しかし、このとき、ふと表紙の次の見開きのページに、キルケゴールの他に、洗礼名が載っていることが目に止まり、しかもその名が、偶然にも、シェパードに名づけられた名前と同じだということを見つけたのだった。ぼくが戻って来ると、リサは尋ねた。

“ねえ、キルケゴールって、セーレンって名前だったの？”

ぼくは、不意をつかれた感じだったが、黙ってうなづいた。

“じゃ、それで、その名前をつけてたの？”

ぼくはまたもや、黙ってうなづいた。

“キルケゴールって、どんな人かは知らないけれど、なんだか名づけられたあの犬が可哀そう...”
リサはそう言ったが、しかしそれ以上、この件に関して何か言うことはなかった。リサはその後、この犬を呼ぶとき、「ちびちゃん」と呼んだり、「セーレン」と呼ぶこともあった。

セーレンは、ソファの上でひとりで遊んでおり、ぼくは、日が射したり、射さなかったりする空の雲を眺めていた。いつかとして同じでないその雲は、永遠を思わせもした。ぼくの魂は、早くもデンマークへの思いでいっぱいだった。当時のデンマーク。憂うつで暗いデンマークの空は、このようだったろうか？ それとも全く違ったものだったろうか？ しかし、空は、一世紀前のデンマークへの思いを告げていた。風が時を消し去り、もう不可能となった遠い時が、ひしひしとぼくの胸に迫ってくるのだった。人が生きて行くとは？ この永遠の問いに対する答えが、その遠い時代の一人の人の中に凝縮されているように、ぼくには思われて来るのだった。ぼくは、是非ともその人と出会い、その人の思想に触れたい思いがした...

ぼくはやがて、風に誘われるまま、家の外に出ることにした。もちろん、小さなセーレンも一緒だ。ひょっとして、その日が初めての散歩の日となったのかも知れない。しかし、ぼくにとってその動機は、犬の散歩の為には必要だというよりも、ふと風に誘われて、という方がはるかに正確だった。ぼくは、そのような動機でもない限り、休みの日には、めったに外に出て行こうとは思わなかった。ぼくにとって書物は、ときに新鮮な空気を吸うよりも、命の糧になった日々があったのだ。しかしこのとき、ぼくは外に出たくなかった。風が誘うまま、流れ行く霊が誘うまま、ぼくは家を出てその後について行きたくなかった。そうすれば、あるいは、ぼくの望むデンマークの国にめぐり会えるかも知れない... しかしまた、その空想よりも何よりも、セーレンに様々な珍しいものを見せてやることは必要なことだった。

垣根を出る頃から、セーレンは喜びを露わにしていた。尻尾を振り、嬉しそうにぼくについて来た。いつもなら、庭の中止まりなのに、今回はセーレンにとっても、大海原に繰り出す思いだったに違いない。垣根の木戸をあけ、ぼくとセーレンとは家の前を通る小道に出た。セーレンは少し不安そうだったが、しかしぼくがいるので嬉しそうだった。日は明るく、風はきつかった。秋のさわやかな風が、ぼくの足下を吹き抜け、そして全身にふりかかった。日射しは強かったが、しかし寒いぐらいだった。犬はすぐ周りの草や木に寄り道をしたが、ぼくが先へ進むと、すぐあわてて追いかけてくるのだった。もう家からだいぶ来た頃、ぼくが我が家を振り返ると、セーレンも不安そうな面持で、ぼくの家を見た。しかしすぐ気が変わり、さらに先へ進むように、セーレンはおねだりをした。

“お前には分かっているんだろうか？”

と、ぼくは犬に向かって言った。

“人の恋。花のしおらしさ。命のはかなきこと。そうしたすべてのことについて、人間は苦しみ、人は考えるんだ。しかしお前は何も考えようとはしない。ただ無邪気に遊んでいるだけだ...”

しかし、そうした犬の無邪気さを見ることは、ぼくにとって、魂の安らぎでもあった。苦しい思考から解放されて、ぱっと一息つくこともできるひとときだった。

ぼくは犬を伴って、さらに先へと進んで行った。

やがて、風に揺れる草むらにぼくたちはやって来た。草むらでは、いろんな野草が、思い思いに花を咲かせていた。家の庭でも、リサの植えた花々が、マリーゴールドや、ゼラニウムや、キンレンカ、ホウセンカなどが一度に花を咲かせていたが、何んといっても野性の花を見つけるのが、一番嬉しかった。セーレンは、草むらに分け入り、花に止まった蟻に鼻を近付けたり、頭を振ったり、駆けたりして遊んだ。ぼくは草むらに突っ立ち、子犬が元気に草むらではしゃいでいる様子を、じっと眺めていた。空は青く、雲はなんと急速に流れて行くことだろう。そしてここは、なんと静かで、人のいないところなんだろう...

ぼくはあえて、人とは出会わない、静かなところを選んだのだった。ぼくはいつも、人の知らない隠れた場所へ行くのが好きだった。そこでは思いっきり、ひとりだけの自分の時間を楽しむことができる。ぼくは、セーレンを連れて、岩のあいだに少しだけ小さな花が姿をのぞかせている静かなところにやって来た。ここまで来れば、もう誰れとも会う心配はなかった。もしここで仮に事故にでも会い、死んでしまったとしても、恐らく一週間は、見つかることがないだろう。道のすぐ向うは、小高い丘と、森が広がっていた。周りに見えるめぼしいものといえば、一本の樫の木が、道端に、象徴的に立っているだけだった。そこは、ここから少し離れた羊飼いの、また、ときおり近くを通ることもある狩猟者たちも、めったに踏み入れることのない、秘められた場所だった。――ぼくは、程よい岩の上に腰を降ろし、おいしい空気を胸いっぱい吸い込んだ。セーレンは、ぼくのすぐ横で、前足で何を思ってか穴を掘ったり、何か新たなものに対する観察を怠らなかつた。ぼくは、何かしら、満足でもあった。ゆったりと流れ行く雲。冷たいが、心地良く吹き付ける風。ぼくは、いつしか時の経つのも忘れ、自分が今、どの時代に属しているのかさえ分からなくなってしまうのだった。ここだけは、あるいは、十九世紀に戻っているのかも知れず、キルケゴールやヘーゲルのあの時代が、すぐそこまでやって来ているような、そんな錯覚にさえ捕らわれるのだった。――しかし、同時に、ぼくの頭には、様々な思いがめぐって来た。

あのセーラの楽しげな顔。街路樹の葉が散り敷き頃、セーラはマフラーを首に巻いて、ぼくから去って行った。あれは、去年の今頃だったろうか。

街の空は、寒々として、冷え切っているようだった。セーラは、マフラーを胸に押し込み、襟を立てて、ぼくと別れて行った。しかし、その表情は楽しそうだった。希望にふくらみ、何か幸福に出会うかのように、その足どりは軽かった。ぼくは、彼女が行くのを止めはしなかった。それは彼女の自由だったし、彼女のぬくもりがぼくから失われて行くとしても、仕方のないことだった。ぼくは確かに悲しい思いがした。まるで恋人を失ったときのような、心に穴があく思いがした。やがてセーラは、並木道の向うの、ビルの谷間へと消えて行った。――あれは寒い日だった。風がピューピューうなりをたて、ぼくの寂しい心に一層拍車をかけた。ぼくは彼女が消えてしまうのを確認すると、向きを変え、寂しい自分の寝ぐらへと引き上げて行った...

そう、街では随分寂しい思いをした。ぼくはいつもひとりだったし、街の浮浪者と変わらぬ生活だった。時折り見かける野良犬だけが、ぼくの友だちだった。生活に楽しみはなく、だからよく夢を見た。不思議な夢だった。中には、真に迫る夢もあって、ぼくを驚かせた。アパートの寝ぐらで、よく真昼間に、ぼくは悪夢にうなされながら目覚めた。目が覚めて、ぼくは、あの田舎ではなく、都会のまったただ中の貧しいアパートの屋根裏部屋にいることに、気がついた。しかしそれだけ一層、ぼくは、天に近づいているような気がした。絶望すればするほど、人は天に近づくものなのだ...

その昔、ママもパパもいて、楽しい家庭が存在していた頃は、もう随分昔のことになってしまった。今ではその感覚も次第に薄れ、そのうち、人の愛、家庭の暖かみの何んたるかについてさえ忘れてしまうことになるだろう。それは悲しいことであり、恐ろしいことでさえあるのだ...

犬が急に駆け出したので、ぼくは、現実に戻された。セーレンは、何か小さな獲物を見つけ、草むらの方に駆けて行った。ぼくは、セーレンの行く手を目で追ったが、それらしきものは見えなかった。やがてつかまえたのか、急に草むらの中腹でセーレンの動きが止まったので、ぼくは確認に行くことにした。やって来ると、セーレンがつかまえていたのは、リスのような小動物だった。それは、セーレンの両手につかまり、目をパッチリ開けておびえているように、こちらを見つめていた。しかし、セーレンも、この動物をどうしたものか、もて余しているようだった。ぼくは、セーレンを、その動物から引き離し、逃げるがままにさせてやった。そしてぼくは、別の方向に向けて駆けた。セーレンはあわてて、ぼくの後を、元気よく駆けて来た。

穏やかだった空も、そのうち陰りが見え始めて来た。ぼくは、犬との散歩を早々に切り上げ、別のルートを通って、我が家へと帰ることにした。それは楽しい帰宅だった。葦の生えた静かな川面の見える脇道を、ときには駆けっこをし、また時には抱いてやったりしながら、あの森の向うの、ぼくの家へと帰って行った。途中、人には誰とも出会わなかった。

家に帰って来た頃、空には一面うろこ雲が広がり、美しい夕暮れの色に輝いていた。とりわけ、森やなだらかな丘の見える西の空の光景は、感動的だった。それを目にしながら、この日も確実に終わりを告げていることを感じた。この寒そうな光景の中でも、ぼくの家だけは、西陽を受け、明るく輝いていた。いつも黙ってぼくを迎えてくれる静かな家。ぼくは、そんな自分の家が好きだった。

ぼくが、犬を居間に上げ、自分で沸かした暖かいコーヒを飲んでいるとき、リサが垣根を歩いて帰って来た。玄関のドアをあけるなり、彼女は言った。

“寒いわ。もうコートが要りそう”

そう言って彼女は、ぼくと一緒に出迎えたセーレンに一瞥くると、あわただしく、自分の部屋に行こうとした。

ぼくは、彼女のいかにも寒そうな装いを目にしながら、彼女の背から、声をかけた。

“その服装じゃ寒いだろ？ もっと暖かそうなのに着換えなきゃ”

“ええそうするわ”

そう言って、彼女は自分の部屋に消えて行った。

やがて、彼女が居間に姿を現したとき、チェックのスカートに毛糸のセーターという、暖かそうだが、少女っぽい姿になって、やって来た。それは、彼女の今頃の普段着でもあった。

ぼくは彼女の為に、コーヒを用意してやった。リサはソファに坐るなり、コーヒを口にした。

“帰り、とても寒かったわ。兄さんは、ずっと家にいたの？”ポツリと、彼女は、ぼくに声を掛けた。

“いや、犬を散歩に連れてやったんだ。少し遠出をしてね”

そう言うと、リサは子犬に目をやり、セーレンの頭をなでるようにして、言った、

“そう、よかったわね。とうとう散歩に連れて行ってもらって。で、どこまで連れて行ってもらったの、ちびちゃん”

セーレンは、リサになでられるままになっていた。

“例の狩猟の森のもう少し行ったところさ”と、ぼくは言った、“あそこまで行けば、本当に静かさ。もう誰もいない...”

“あんな遠くまで！”と、リサは驚いて、言った、“でも、危険はないの？”

“心配は無用さ”と、ぼくは言った、“狼に追われるような道は通らないから。――でも、セーレンも、今回は本当に喜んでいただようだった”

“そうね。そりゃ嬉しいもの”と、リサは、まるで子供をあやすように、言うのだった、“ちびちゃんも、やっと外に出ることができたのね。そりゃ嬉しかったでしょ、ねっ、ちびちゃん”

そう言って、リサは、可愛さ余ってか、両手でセーレンを膝の上まで抱き上げた。そして、好きだと言わんばかりに、その柔らかな毛の生えた体を両手で抱き締め、彼女の頬をその鼻の辺りにすり寄せるのだった。ぼくは、そんなリサの様子を、微笑ましく思いながら、見守っていた。

“きょうは、割と早かったんだね”と、やがて、ぼくは言った。

“そう。寒かったから、真っすぐ帰って来たわ”

と、リサは、子犬から頬を離して、ぼくに答えた。

“仕事の方は、どうなの？”と、ぼくは尋ねた。

彼女は、相変わらず子犬の方を向いたまま、何かを語りかけているそぶりだった。

“仕事は楽しいかい？”と、ぼくは再度尋ねた。

“ええとっても”と、彼女はちらっと笑顔をぼくに見せ、それから再び犬と遊びを楽しみながら、言った。

“いいね。楽しいことがあって”と、ぼくは、ひとりこぼした、“お前を見ていると”と、ぼくは続けた、“生き生きしていて、人生が本当に楽しそうだ。――それに比べ、ぼくの人生とは、なんてつまらないんだろう。ねえ、どうしてこういう違いが出てくるんだろうかね...”

“それは、兄さんが、本当に生きようとしなからよ”と、リサは、相変わらず犬の相手になりながら、言った。彼女は、犬が彼女の顔をなめて来ようとするのを、懸命に防いでいるようだった、“兄さんも、今のこだわりを捨てて、もっと積極的に世の中に参加しようとするればいいの。そうすれば、おのずと道が開けてくるわ”

“もう何度も言ってるだろう？ 今のぼくには、もうそれはできないって”

とぼくは強調した、“今のぼくは、もっと心の整理をしてみたいんだ...”

“なら、楽しい人生はあきらめることね”と、リサは言った、“人と一緒に行動することをしないんだから。そんな人生に、楽しいことを期待することの方が無理というものよ”

“分かってる”と、ぼくは言った、“ぼくは、内気で、はにかみ屋なのさ。それに、ひとりであることの方が好きな人間でもあるんだ。そういう誰にも知られざる楽しみの中に、本当の楽しみを見つけ出すのさ。――でも最近、つくづく、そういう自分が寂しい人間だ、という気がして来るよ”

“当たり前じゃない”と、リサは、きっぱり言うのだった、“そんな人って、周りを見ても、兄さん以外にはいないわ。あたしの見る男の人って、みな楽な生活を送っているのに、兄さんだけがどうして、そういう難しい人生を歩んでいるのかしら？”

“それは、ぼくの内面に起因するのさ”と、ぼくは言った、“ぼくは、自分の芸術を行う為に、どうしても自分だけの時間を必要とするんだ。その分だけ、世の中とズレ込もうと、それは、自分の欲求として、仕方のないことなんだ”

“兄さんが好きなのは、社会じゃなく、自然なのね”と、リサは言った、“あたしも自然は好きよ。でも、そればかりじゃ、しまいにあきてしまう...”

“リサッ”と、ぼくは言った、“ぼくの考えていることは、そんなに単純なことじゃないんだ”ぼくは、強調するように言うのだった、“こんな言い方をすれば、キザに聞こえるかも知れないけれど、ぼくは、人生について、もっと深めたいのさ。人生から、本当の考えというものを得てみたいのさ。リサには悪いけど、ぼくには、その為に、社会と関わっている暇はない。ぼくは、この宇宙、自然、人生から、なんらかの答えを引き出してみたいのさ”

“兄さんって、他の人には思いもよらない、大問題にかかわっているようね”と、リサは、ニッコリしながら、言った、“まるで、哲学者か、何かみたい。それよりは、あたしは、今の世の中を生きていることの方がずっといいわ”

“ぼくにとっちゃ、この問題に答えられない限り、世の中を生きるわけには行かない。というのも、そんな人生は、とっても不安で危なっかしいからさ”と、ぼくは言った、“それでは余りにもあっけなく思われるからなんだ”

“でもあたしは”と、リサは反論した、“人生をそんなに重々しく感じて生きるぐらいなら、むしろあっけなく思われてでも生きて行くことの方がいいわ。その方が、気も楽だし、楽しいもの”

“ぼくだって、単純に生きられる人を、むしろ羨みたいぐらいさ”と、ついぼくは、本音の部分をもらすのだった、“でも、その生き方は、ぼくにはできないんだ...”

“どうしてなの？”と、リサは、しばらくしてから、振り向いて、言った、“どうして、みんなと同じような生活ができないの？”

ぼくは黙った。言ってももう同じことだ、と思ったからだった。

“ねえリサ、それより、きょうは実に寒いねえ”と、ぼくは話題を変えて、言った、“こんなとき、ぼくはいろんな事を空想するのが好きさ。例えば、あのきれいな空の向うには見たこともない夢の国があるのだろうか、とか、全く子供じみたことだけどね。その昔、お前たちと空想ごっこにふけたことが、今だに抜け切らないでいるんだ...”

“あたしたちにはとるに足りないことが、兄さんには深い影響を与えてしまったようね”と、リサは、子犬を膝の上でなでながら、しみじみと言った、“確かに昔、窓辺で、姉さんとも一緒にそんなことをして遊んだこともあったわ。あの頃は本当に、丘の向うに何があるのか分からなかったんですもの。本を読んだり、空想し合ったりで、本当に楽しかったわ”

“ぼくは、あの日のことを今だに忘れることはできない”と、ぼくは言った、“振り返ってみても、あの頃が一番楽しかったときなんだから...”

“ねえ、いつまでもそんなことにこだわるのはよくないと思うわ”と、リサは言った、“人は、進歩して行かなくっちゃならないもの”

“その後のぼくの人生が、余りにも悪過ぎたんだ”と、ぼくは言った、“まさに灰色の人生だった。

孤独で、貧乏で、いつもひとりぼっちで、見捨てられて... そんなぼくが、それより前の人生にこだわるのが許されないのだろうか。ぼくはできるものなら、もう一度、あの頃から歩みを始めたい。それがかなわぬなら、せめてあの頃に、もう一度、戻ってほしいのさ...”

“不可能なことを言う兄さん”と、リサは言った、“今のあたしを見てよ。あたしは、こんなに大きくなったんだし、もうあの頃のあたしに戻ることはできないわ”

“そうだね。それにパパだってもういない”と、ぼくは言った、“あの頃は、両親に包まれて、だから、ぼくたちは幸せだったんだ。何不自由なく、不安もなく、ぼくたちは伸び伸びと過ごすことができた。――だがそれが、両親によって、恐ろしい社会から守られた生活であることを、ぼくは、何も知らなかった。そしてそれっきり、もう二度と来ることもない幸福な生活だということについても、ぼくは知らなかったんだ。世の荒海にほうり込まれ、残酷な運命に陥って、初めて、ぼくはそのことに気がついたんだ...”

“兄さんの人生がそうだったんなら、それもそうでしょ”と、リサは言った、“あたしは、兄さんの生活がどんなだったのか、詳しくは知らないわ。――でも、もう戻って来ないものに戻れと言ったって、それは、去って行く人を引き止めるようで、惨めなだけよ”

“分かっているさ”と、ぼくは言った、“ぼくはどっちつかずで、宙ぶらりんで、惨めなだけなんだ。ときどき死にたくなることもある。生きていても何も無い、という考えに捕らわれてね。でも、それは思いとどまるんだ。死ねば楽だけど、何かを失う、そういう気がするからさ。リサは、死について考えることがあるかい？”

“そんな恐ろしいこと”と、リサは、顔をこわばらせて、言った、“死ねばそれっきりよ。もう怒りも、幸福も、表情に表わすこともないわ。静かだけど、完全な無の世界よ。そんな寂しい世界なんて、あたしはいやよ”

“ときには、心地良い眠りの誘惑にかられることもあるのさ”と、ぼくは言った、“そして、そこでは、キリストの復活のように、一切が回復されるといった、勝手な理屈までつけてね。――でも、それは本当に魅惑的な考えだけれども、覚めた眼では、決して信じられることではないんだ。それでつくづく考えてしまうんだ、ぼくは何をすればいいんだろう？”

“ともかく、毎日を生きることね”と、リサは言った、“それしかないわ。そして、永い人生を生きた後、自分の人生を全うすることよ”

“お前って、まるで人生の達人のようなことを言うんだね”と、しばらくしてから、ぼくは言った、“その点、恐れ入るよ...”

“どうして？”とリサは言った、“あたしはただ、思ったことを言ってるだけよ。兄さんみたいに難しく考えたりしないから”

“それはそうと、ぼくはまた旅に出掛けてみたい”と、ぼくは言った、“この単調な生活から抜け出る為にもね”

“あら、あたしとこの犬をほっというて出掛けて行くの？”と、リサは言った。

“そうはしないさ。――でも、犬の件については考えものさ”と、ぼくは言った、“汽車の旅に連れて行くことは難しいからね。でも、未知の世界がぼくを呼んでいる。人知れない田舎とか、雪山だとか、行ったこともない街などがね。ぼくは、そんなところで思いがけない出来事に出会うのが好きなのさ。例えば、ママやセーラにバッタリ出会うというような。...いずれにせよ、このセーレンのことは、なんとか解決するさ”

“あたしもそう願うわ”と、リサは言った、“そろそろ夕飯の支度ね。兄さんは、ちびちゃんの晩飯を頼んだわ”

そう言って、彼女は、セーレンを膝から降ろして、立ち上がった。彼女が、居間から立ち去ったときは、もう窓の外は、うっすらと暮れて行きつつあった...

「...遠くから、どこからともなく、かすかなチャイムの音が聞こえて来た。さわやかな、冷たい風が、明るい、開け放された窓から吹いて来て、ぼくの頬をかすめた。さわやかな目覚めだった。ぼんやりとうるんだ目で、あお向きながら、窓から空を見ると、薄い軽やかな雲が、青い空をゆったりと風に乗ったまま流れていた。音は耳に入らなかった。静かだった。ふと気がついた時、ぼくの掛け布団の上にはセーレンが横になって、小さな鼻息をたてながら眠っていたのだった。静かな、平和な、豊かな昼。――ぼくはこれらに満ち足りた気持を覚え、しばらくそのままうっとりとして横になっていた。...今のチャイムはどこから聞こえて来たのだろう――？でも、もうぼくには永遠に無縁となってしまったこのチャイムの、楽しげで、明るく、幸せに満ちた出どころを想像するのは容易なことだった。そのときのぼくの念頭には、ぼくと犬がいること、そして確かに明るいぼくの心をふくらませる空があり、確かにチャイムの音が聞こえて来た――このことだけがあって、他には何もなかった。だから、ここから遠く離れたところに、濃い緑の森におおわれた少女達や少年達の出入りする、大きく広々とした学校がひとつだけ建っているのだろう。そしてそこまでは、無限の豊かな空と、無限の緑の草原があるだけで、他には何もない、誰ひとり存在してはいないのだ。そしてあの学校ほどぼくの心を占めるものはないだろう」

以上が、当時のぼく的生活だった。明るい秋の日の昼、ぼくは何も思わず、自分の部屋のベッドの上で眠っていた。秋の日ざしを浴びた窓際の葉を通して、明るい日ざしが、この部屋にも差し込んで来ていた。ぼくはただ眠っていた。ぼんやりと思考もおぼろだった。床の上にはいたはずのセーレンが、いつのまにか心地よい、ぼくのベッドの上に上がり込んでいることも知らずに...

しかし、何かチャイムのような音に誘われて、快い眠りから覚めたとき、ぼくの目に映ったのは、窓の外にどこまでも広がり、夢誘う青い空。そして、窓際に茂る木の葉だった。ぼくは、ぼんやりと、風に運ばれて来たチャイムの音の源について想像した―― そんな日のある時間の出来事を、ぼくは日記に書き留めた。今、古びた日記帳から、ぼくは、その箇所を見つけたのだ

そのときには、セーレンがいたし、リサも勤めに出掛けていて、ぼくの気分は申し分なかった。あのように快い眠りと目覚めは、もう知ることもないだろう。――やがて、思考も働き出し、ぼくは起き上がって、窓際に向かった。なんとも言えない、穏やかで、美しい秋の風景だった。まっ青に広がる空に太陽が、まぶしい光を照りつけていた。

「いやあ！ 太陽さん今日わ！ また晴れたね！ いやあ！ 青空さん今日わ！ また会ったね！ ちょっと尋ねたいことがあるんだけど、ねえ太陽さん、今頃リサはどうしてる？ 今頃あの子はどうしてる？ リサはお店？ そしてあの子はまたあの山かい？ ふたりは幸せかい？ だったらどのように幸せなのか教えておくれよ。ねえ、青空さん、教えてよ。ぼくにはちっとも分からないんだ。そして雲さん、君がいなくちゃ青空も太陽もちょっと物足りなくなるんだけどその雲さん！ 今頃セーラはどうしている？ あいかわらず孤独かい？ 悲しんでいるのかい？ その近況をぼくに教えておくれよ。何も、ぼくは悲しむことなんかないね。ぼくは孤独じゃないね。そうだ、みんなに彼女たちが愛されているように、ぼくも彼女たちを愛している。なのに、ただその意志の通じ合いがなくって寂しがっているだけなんだ。ねえ、だから教えておくれよ、ぼくはやはりできるだけ早くその意志の通じ合いを実現したいんだ。このことをどのようにすれば実現することができるだろうか。このことは君たちだけが知っている。だから、雲さん、青空さん、太陽さん！ もちろん彼女たちにも教えてあげて欲しいけれど、ぼくにも教えておくれよ！ お願い！ お願い！ お願い！...」

結局、太陽も、空も、雲も、何も答えてはくれなかった。ただ、その変わらぬ表情を見せてくれる以外には――しかし、ぼくは別に失望はしなかった。ただその当時、神秘的な考えが支配的で、羽根が生えて空を飛ぶことができたり、突然見知らぬ町へやって来たり、自然と会話をかわしたり、そんなことを夢見ていただけなのだ。リサは、そんなぼくのことを笑っていたが、ぼくは、まじめで真剣だった。もちろんそんなことが実際に起こるとはぼくも信じてはいず、自然が答えてくれなかったとしても、ぼくは失望したりはしなかった。――ぼくは、窓から再び部屋に目を向け、そこにセーレンが、愛苦しい顔でぼくを見ていることを確認した。セーレンこそ、ぼくの友だちだった。ぼくは、子犬の方に歩み寄り、セーレンをできる限り抱いてやった。

...お前こそは、何も知らず、しかも、ぼくの心をすべて分かってくれる唯一の友だちなのだ...

ぼくは、犬に買っていた少量のビスケットをやり、それから庭に出た。庭には、リサが植えていた様々な花が咲いていた。ぼくは、それらの一つ一つに目を止め、それから森のあいだを飛んで行くカラスの姿なども見つめるのだった。犬はしきりに散歩に行きたがっていたが、ぼくは、その場から動こうとはしなかった。ぼくは、さわやかな風を受けながら、昔のことを考えていた

...

まぶしい舞台の上で、飛びはねるように踊る、ある踊り子がぼくの心をつかえた。観客席のこちら側は暗かった。ぼくは、主役ではなかったが、その背後で踊っているただあの彼女、あの彼女にだけいつも視線を定めていた。年の頃は、ぼくとそう変わらない。あるいは少し、彼女の方が年上かも知れない。しかし、彼女のどこに惹かれたのだろうか？ その細い体つきもさることながら、少しも表情をくずさないその顔が、何よりもぼくの心をつかえた。細い首から突き出した可愛い顎などが、いかにも天性の踊り子を思わせた。そんな彼女を見るのが、ぼくは好きだった。――ただ彼女を見る為に、何度か同じ劇場に足を運んだが、彼女と出会う機会は、全くなかった。しかし、それに反して、彼女と会いたい気持ちは、募ってくるばかりだった。

ある日、たまりかねて、ぼくは楽屋裏に侵入することに決めた。ぼくが他の人と余り目立たなかったせいか、この侵入は思いの外、簡単にできたのだった。忙しく働いている誰もが、このぼくを侵入者とは気がつかなかった。ぼくは、自分があたかもここで雇われている裏方のようにふるまい、ごく自然に彼らのあいだに溶け込むことができた。ショーの世界が、一見華やかだが、泥くさい場所であることを知ったのも、この時が最初だった。やがて、舞台を引き上げて来る大勢の踊り子に混じって、タイト姿の彼女が姿を現した。一瞬、ぼくの胸が高鳴った。どうすればいいのか、ぼくは分からなかった。そうして、何もせずに立っているうちにも、彼女は他の踊り子と何かしゃべりながら、化粧室へと消えて行った。

しかしやがて、ぼくの執念が実って、彼女と会える日が訪れた。舞台が引けた楽屋の裏口で彼女が出て来るのを張っていたおかげで、まさに帰って行こうとする彼女に会うことができたのだった。

“ティーナさん！”と、ぼくは突然、物陰から姿を現して、街灯の明かりの中に立った。幸いこの日は、すぐ友人と別れて彼女はひとりだったが、この突然の事態に彼女は驚いたようだった。

“ティーナさん！”と、ぼくは続けた、“ぼくは君の本名を知らないんです。確か、舞台ではティーナって呼ばれていましたね。――ぼくは、君のファンなんです”

ティーナは振り向き、足を止めた。明かりの中で、ぼうっと浮かび上がったその顔は、間違いなく、もう何度も舞台上で食い入るように見つめたあの顔だった。化粧がなくてもそれほど変わらなかったが、ただ髪の毛だけが違って長く伸ばしており、舞台上で見るよりはいくらか年上のように思われた。

“あたしのファン？”と、ティーナはにっこり笑って言った、“それで、何が望みなのか？”

ぼくは、この時の為に用意していた紙とペンを差し出した。

“サインしてもらいたいんです”と、ぼくは言った、“――そしてもしよければ、ほんの少しだけ、お茶でも付き合ってもらいたいんです”

“今、何時だと思ってるの？ 坊や”と、ティーナは言った、“もう十時よ。家では誰も心配していないの？ ーでも、それでもいいっていうんなら、ほんの少しだけ。少しだけならかまわないわ”

まるで夢のようだった。あの彼女の口から、信じられないような夢の言葉をたまわったのだ。

ぼくは紙とサインペンをポケットに引っ込め、

“こっちにいいところがあるんです”と言って、彼女を案内した。

彼女は途中、本名がパメラであることを白状したが、自分の年齢については言わなかった。ぼくが、自分の年を正直に言うと、“あんたよりは少し年上のようね”と言うだけで...

やがてぼくたちは、往来に面した小さなレストランのテーブルにいた。

“ここがあんたのお気に入りの店？”と、パメラは、席に着くなり言った。

ぼくは、彼女のコートを椅子に置きながら、答えた。

“そんなにしょっ中じゃないけど、ときどき来るんだ”

彼女は、じっとぼくを見つめた。

“あんたって不思議な子ねえ”やがて、パメラは言った、“こんな遅くまで、ここで、こんなことして、お父さんに叱られないの？”

“ぼくに親はいないよ”と、ぼくは、たばこに火をつけながら、答えた。

“じゃ、ひとりで暮らしているの！”と、パメラは驚いた顔をして、言った。

“別に不思議なことじゃないさ”と、ぼくは、さも当然であるかのように答えた、“君だって、親と暮らしてるわけじゃないんだろう？”

“親は田舎にいるわ”と、パメラは答えた、“あたしが街に出て来たからって、親に別に迷惑はかけてないわ。ーその年でタバコを吸ったりしてさ、随分とやること早いんじゃない？”

“苦労してるんだよ”と、ぼくは答えた、“他の子のように楽な生活じゃないんでね。そんな話より、君のことを話そうよ”と、ぼくは言った、“じゃ君もひとりで暮らしているのかい？”

“いいえ、友だちと”と、パメラは答えた、“彼女はデザインの仕事をしているのよ。将来、デザイナーになりたくてね”

“じゃ、女の子”と、ぼくはほっとして、言った。

“どうして？ 彼ならよかったの？”と、パメラは言った。

“いや、それでいい”と、ぼくは答えた。

パメラは初めて、ぼくに少しばかり、興味を寄せている様子だった。彼女の胸元に巻いている金の鎖が、初めてぼくの目に止まった。そのすぐ下には、ふくよかな彼女の胸が、衣服に包まれて隠されていた。

“ねえ、坊や。あたしのどこが気に入ったの？”

しばらくしてから、パメラが尋ねた。

“坊やじゃないよ。シレール”と、その口調に抗議して、ぼくは言った、“ぼくにはちゃんと、シレールという名があるんだ”

彼女は、思わず笑った。

“じゃもう一度言うわね”と、パメラは言った、“シレールさん、どうしてあたしが気に入ったの？”

答えにくい質問だった。しかし意を決して、タバコの火を消しながら、ぼくは言った、“君のその表情だよ。それに君のあの踊り。軽やかなあの足さばきや、スラリと伸び切った腕。ぼくはすべてに感心してしまった。あごを突き出したときの姿なんかね、なかなかのものさ。他の踊り子じゃ、ああは感じさせない。ところが君とくれば、すべてぼくの望み通りなんだよ...”

“よく見て下さってるようね”と、パメラは、にっこりしながら、言った、“でも、あそこへ来るまで、なかなか大変なのよ。レッスンに次ぐレッスンで。他の子より特別うまいとは思わないけど、褒めて下さってありがとう、シレールさん。踊りは好きなの？”

“いやあ、そんなに見る方じゃないよ”と、ぼくは正直に答えた、“一一でも、好きな人がいれば見に行くさ。たとえば、君のようにね”

“へえ一、じゃ、何回見てくれたの？”と、パメラは言った。

“七回”と、ぼくは答えた、“六回目と七回目は、楽屋裏にまで来てたんだけど、覚えていないだろうか？”

“楽屋裏まで！”と、パメラは驚いて、言った、“よく入れたわね。一一そう言や、あんたに似た人、いたような気がするわ”

“じゃそれがきっとぼくなんだ”と、ぼくは言った、入るのは別に何んでもなかったさ。でも、あんまりたくさん、君のような踊り子が一遍にやって来てさ、本当に信じられないような気持ちだった。ダンサーって素晴らしい。そんな気がした。そこへ君が姿を現したとき...”

“声を掛けなかったの？”と、パメラは尋ねた。

“結局、何も言えなかった。もともと侵入者だったしね”と、ぼくは言った、“きっと勇気が出なかったんだ。一一でも、結局、こうした形で君に会えたんだから、言うことなしさ”

“そう。随分苦労をしたようね”と、パメラは、目を輝かせながら、言った、“あたしも、そんなファンがいてくれたなんて、嬉しいわ”

“本当に嬉しい？”と、ぼくは尋ねた。

“そりゃ、ダンサーにとって、客に慕われるのって、最も素晴らしいことよ”と、パメラは言った、“それが年上の紳士の場合もあるし、あんたのように若い方の場合もある。でも、あたしにとってはどちらも同じように、幸せなことだわ”

“じゃ、これからも付き合ってくれるね”と、ぼくは言った、“これっきりなんて、ぼくはいやだよ。せっかくこうして会えたんだから...”

“分かったわ”パメラは、少し考えた後、言った、“また気が向いたらいらっしやい。他に予定がなければ、また会ってあげてもかまわないから...”

“本当だね”と、ぼくは念を押すように、言った、“君って、思った通り、優しいんだね。たった一回目で、別に警戒もせず、付き合ってくれたんだから。——しかも、これからも付き合ってくれるなんて。ぼくは、そんな君が好きさ”

“だって、あんたが悪いことをするような人に見えなかったからよ”と、パメラは言った、“——でも、これだけは言っておくわ。確かに付き合っちはあげる。でも、ただそれだけよ。それ以上のことは、何も考えていないんだから”

“分かってるよ”と、ぼくは言った、“ぼくも、それ以上のことは何も要求しやしないさ”

“じゃ、これで、約束成立ね”と、パメラはにこやかに、言った、“もう遅くなったわ。お互い帰りましょ”

“ぼく、家まで送るよ”と、ぼくは言った。

“いや、いいのよ。無理しないで”と、パメラは、ていねいに断った、“あたし、自分で帰るわ”

結局、彼女の飲物だけ、ぼくはおごることになった。彼女はコートを着、出口でタクシーを拾い、そこで、ぼくと彼女とは別れた。パメラは、それほど遠くないところに住んでいると言っただけで、結局、住所をぼくに教えてはくれなかった。ぼくは、通りに立ち、寒い風を身に受けながら、その場から去って行った。彼女と会えたという喜びと、また会えるという喜びを、じっと胸に噛みしめながら...

やがて、急に肌を刺すような寒さが訪れたかと思うと、いつの間にか空には雲が張り出して来ていた。ついさっきまであれほど輝いていた太陽が分厚い雲の陰に隠れ、日陰となったこのあたりに冷たい風が吹きまくるようになって来た。その雲は、ただならぬ雲であり、やがて降って来るだろう雨の前兆でもあった。

“今回は散歩をやめよう...”

うっとおしい空を見上げながら、ぼくはそう思った。しかしすぐに部屋に入ることはしなかった。ぼくは、庭の石に腰掛けたまま、考え続けた。

これまで生きて来た人生で、ぼくは何を見つけたのだろうか？ 何も。ほとんど何も見つけず、何ひとつ手に入れたものはなかった。また、しっかりと身についたものもなかった。ぼくは、嵐のような世の中を生きて来たが、結局、そのあいだをすり抜けて来たに過ぎなかった。何ひとつ、心に受け止めたことはなかったのだ。孤独こそが、ぼくの生きた足跡だった。

楽天的に、楽しく世の中を渡って行くこと、それは、ぼくの生き方ではなかった。ぼくは、目立たず、歓声の渦や、荒々しい世の中を、ただ通り過ぎて行った。ぼくは結局、一人の生活が向いていたのだし、それが好きでもあったのだ。一人で空想にふけったり、夢を追ったり、昔からそういう生活になじんで来たし、今もってそうなのだ。ぼくは、社会から人生を学んだことはなく、ただ空想によって人生を創り出すことに喜びを覚えて来た人種でもあったのだ。ぼくは、社会とのこのかい離に悩まされることはあっても、それに安らぎを覚えたことは一度もないのだった。ぼくはあるとき、こう考えた、結局一人で生きて行くしかないのだ、と。ぼくにとってそれは、肉体的であるばかりでなく、精神的にも一人であることを、意味していた。社会を解さないぼくに、社会が解することを期待することなどあり得ないことだった。しかしその方が却って、気が楽な面もあったのだ。もはや誰の心にも止まることはなく、またぼくの心に止まるような人がいたとしても、その人と関係を持つことはあり得ない。ただ、そのような人は、ぼくの作品の中で再び登場し、しばらくの時を一緒に過ごし、それからぼくの手を、今度こそ本当に離れるだけなのだ...

それでいいと決心してから、もう永い年月が経過した。今もって、かつてのこの決意は、いささかも揺るぎないのだった。――ぼくは、実際の人生をあきらめた。しかし別の世界で、再度人生を始めることを決意したのだった...

ふと、森の方に目をやると、荒れ野が風に揺らいで、大地のはかなさを感じさせた。しかもそこだけが、どういうわけか日光を浴びており、いやがうえにも気をそそられずにはいられないのだった。大地のはかなさ――それは、言うまでもなく、人々の、生きる物の、その生命のはかなさを意味していた。風に吹かれるままの、人々のいないこの荒涼とした光景が、生きることのはかなさと共に、何か恐ろしいものを、ぼくに感じさせたのだ。それは、深い、古代からのささやきかも知れなかったが、ぼくには、その陰うつな空の色と共に、それが何を意味しているのか、知ることはできなかった。ぼくはじっと、荒涼とした森や、空や、荒れ野の風景を見続けた...

...ぼくは、ひとりで生きて行く。ぼくは、ひとりで、ぼくに一番合った世界をつくって行く...

この文章を書いてもう久しい。どうして既にあの頃、そのような決心を固めていたのだろうか。世の迫害と哀れさとを、ぼくは既に身にしみて味わっていた。ぼくは、鬼の顔をした厳しい世に向かって、雄々しく立ち向かって行く強靱な精神を持った種族の人間ではなかった。鬼の社会では、人間は鬼にならねばならないのだ。ぼくはそこで、弱い人々も、たくましい鬼に成長して行く姿を見た。あの大人しいセーラだってそうだ。しかし、ぼくはついに、鬼になることはできなかった。

それが自分の敗北を意味するとしても、その窒息しそうな世の中で生きて行けるとは、とても思えなかったのだ。そんな息詰まるような世の中にいて、ふと思ったのは、子供の頃の言葉に表すことのできない幸福だった。ぼくの心は絶えず、そのふるさとに立ち返った。何も知らなかったあの頃――その頃を思い出すことは、涙が出るほど幸福なことだった。優しくぼくを包んでくれた母。ぼくは、二階の自分の部屋で、暖かい日ざしが降り注ぐ机に向かって勉強をしていた。窓の外は明るく、青い空も、ぽっかりと浮かぶ雲も、言いようもない幸福を告げていた。ふと、母が部屋に入って来、ぼくは振り向いた。お茶を持って来てくれたのかも知れない。しかしぼくは、母の姿を見て、言いようのない幸福感に包まれるのだった。自分がしていることには意味があり、幸せのしるしに満ちていたのだった。窓の外から射し込む明るい日ざしが、机を照らし、ぼくを照らし、そして、丘をも照らした。ぼくたちは、窓の外の清々しい光景を見やった。あの頃、ぼくはまだ幼かったし、母もまだ若かった。ぼくたちの表情には、自然とほころぶ、生命力あふれた笑顔が宿っていた。ぼくたちは、微笑みながら、そのうっとりするような、幸せなひとときを過ごした。――このような光景は、くり返し、くり返しぼくの心に現れた。周りにはもう誰もなく、自分ひとりだけの限界状況に陥れば陥るほど、そのような光景は、強くぼくの心を刺激し続けたのだった。寒い北風が吹き荒れ、街に紙くずや枯れ葉をころがすような秋、ぼくはひとりだった。もう家族は、誰もいなかった。その手がかりすらなく、その痕跡は、もうぼくの心の中にしか存在しなかった。すれ違うすべての人は、ぼくには全く関係のない、知らない人ばかりだった。そんなよそよそしい顔の中にふと、あのなつかしい、ママの顔でも見つけ出すことができれば、どんなに救われた気がしたことだろうか。あるいは、セーラ、リサでもよかった。見覚えのある顔にパツパツとでも出会えば、それだけでもぼくは、この冷え切った精神から救われることができたのだ。しかし、すれ違うすべての人の顔から、親しい顔を見出すことはできなかった。ぼくは歩き、歩き続けた。氷のように冷たい顔をした街を歩きながら、ぼくは思い出していた。その昔、ぼくにも家族がいたときのことを―― 寒い日、年を明けたい日ざしの冬のことだった、外はピューピュー風がうなりをたてていたが、日射しは明るく、室内は暖かだった。家には、祖母が来ていた。ロッキングチェアに腰掛け、膝には暖かな毛織物を巻いて、いかにもぬくような姿をしていた。そこには、家族全員がそろっていた。母親も、祖母の横でにっこりと立っていた。ぼくたちは、床の上におもちゃの機関車を広げ、熱心に遊んでいた。セーラもリサも、物珍しそうに、ぼくの機関車を見つめ、それを動かすのを手伝ってくれたりした。パパも、祖母をはさんで、母親と反対側に立って、そんなぼくらの様子を眺めていた。やがて、ぼくたちの機関車は動き始め、レールの上を走り出した。ぼくがスイッチの操作をし、機関車は動いたり、止まったりして、次々と駅や踏切を通過して、また元の所へ戻って来た。再び調子が悪くなり、ぼくは、妹たちが見守るなか、機関車をいじり始めた。そのようにして、幸せな休日は静かに過ぎて行った。ぼくたちの目は、誰も家の中に向けられ、生活を楽しもうとしていた。家事の手を休めた母も、今はただ静かに、ぼくたちのすることを見つめていた。

みんなに見つめられ、とりわけ久し振りに母が、ぼくたちの相手になってくれたことが、ぼくは嬉しかった。母がパパに楽しげなまなざしを送っているのが、幼いぼくの心に深い印象として残った。――そんなことがまるで嘘のような冷たさだった。空の雲は、寒い北風に吹かれるように足早にビルの間を動いていた。ぼくは、まるで感情をなくした人間のように、無言のまま、ただひたすら孤独に街を歩いた。しかし、決して、感情が覚め切っていたのではない。

ぼくは、考えていたのだ。どうしたのだろうか？ もう随分と昔に親によって与えられた幸福。それはどこへ行ってしまったのだろうか？ しかし、それを、ぼくの手によってもう一度くり返したいとは思わなかった。人々はすべて、親から楽しい幼年時代を授かり、それを子孫に伝えて行く。しかし、なぜか、ぼくは、そうしたいとは思わなかった。あの幸福は、ぼくだけの幸福で、ぼく一代限りにしたかった。ママは、幼いぼくに幸福を伝え、それをまた次の世代へと伝えて行くことを願っていたのかも知れない。でもそれは、悲しいけれど、ぼくでお終いなんだ。ぼくは何も残さない。幼い頃の幸福は、しっかりと胸に収め、それを死ぬまで放さないでぼくは生きて行く。それは幸運にも天上から与えられた贈り物で、それを誰かに伝えられるなどとうていぼくには考えられない。ぼくに出来ることはただ、幼い頃に与えられた夢と幸福とをただふくらまし続け、それがついにどうしようもなく大きくなって破裂するまで、ふくらまし続けることだけなのだ。後には、空虚以外の何も残らないとしても、ぼくにはそうすることしかできない...

結局、ぼくが相手としているものは、夢や過去や幸福という正体のないこの空虚以外のものではない。ぼくはそれを知っていた。しかし、孤独の中で、それ以外の何を相手とすることができただろうか？

つい最近、ぼくはある夢を見た。母親が死んだ夢だった。死んだ時、というよりはもう既に死んでいたのだ。ある日、ちょっとした用事で、ぼくは友達を家に連れて来た。まず門の鍵をあげ、次いで家の鍵をあげ、二重にも三重にもした鍵をあげてやっと玄関の戸を開けて家の中に入ることができた。家の中は薄暗く、ガラーンとして、空気も冷たかった。ぼくは、そこから少し物を取ると、すぐ中から出て来た。そして再び鍵をかけながら、すぐ前に立っている友人に言った、

“母親が死んでね、家の中が本当に寂しくなった”

何気なく意った言葉の中にも、しかしぼくが本当に言いたかったことは、ぼくと、ぼくの家の状態を知って欲しい、ということだったのだ。もうめったに人が寄りつかなくなったぼくの家に、ほんの少しの忘れ物をしたという用事だけでも、この友人が来てくれたということは、ぼくにとって嬉しいことだった。そしてそれほど――母が死んでからというもの、この家は、寂しく、変わり果てたものとなっていた...

目が覚め、それが夢だと知って、ぼくはほっとした。なるほど、確かにぼくは家の中でひとりだったが、ぼくの知らないどこかでは確かに生きているとそう信じて来た。

しかしそれが、この夢のようにもうこの世の人でないことが分かったとしたら、そのときには、もはや普通の気持ではいられなくなるだろう。大いなる悲しみに沈み、まるで荒野が見える北風が吹きすさぶ冬空の下に置かれたように、人生の無情さを知り、心は打ち沈むことになるだろう

...

リサが勤めから帰って来て、ぼくは、憂うつな感情から解放された。秋空と雲は、ゆっくりと暮れて行きつつあった。ぼくは、それを見送りながら思った。憂うつさは確かに忌むべきものかも知れないが、ときにはそれが必要なこともあるのだ。この世に、憂うつさや孤独を知らない人があるとするなら、確かにその人は、おめでたい、単純な人と言えるだろう。しかしそれで済まない人も、一部にはある。さようなら、ぼくの昼間の憂うつよ。そして、憂うつな昼間の秋空よ――

こうしてまた再び、いつもの単調な夜が始まった。ぼくは、書斎から居間に戻り、そこでセーレンの相手をしながら、新聞を呼んだりした。きょうは、いつもより寒さが増したなと思う以外、別に他の日と何んの変更もなかった。

素晴らしい夕暮れだった。西の空の雲のふちが金色に輝き、透明な秋の空は徐々に暮れて行った。太陽は姿を見せなかったが、雲の陰から最後の光を投影し、ぼくに別れを告げているようだった。地上では北風が吹き荒れ、散らした木の葉を道の上に敷きつめている。遠くの森も館もすべてが北風の洗礼を受け、いよいよ凍えて行く。さようなら、きょうの一日よ...

ぼくはこの日、街を歩き、様々なものを目にした。コートを着、連れだって歩く子供たち。植木に水をまく女。走って行く車の後部座席から、ぼくを見る為なのか、じっと後ろ向いていた、女に抱かれた赤ん坊。北風に洗われ、今にも倒れそうに、寂しいところにぽつんと建っている貧しい共同住宅。自転車に乗って、ぼくの前を走って行った少女たち。マーケットから出て来た子供連れの家族。――彼らは、とにかく一日を過ごしたのだった。友だちとしゃべり、親としゃべり、そういうふうにして一日を過ごした。しかしぼくにとって、これら人々の生活ぶりを見聞きしたこの街は、全くの無縁そのものだった。ぼくは、この街とも彼らとも同化してはいず、ただそこを通り過ぎたに過ぎなかった、しかも、たったひとりぼっちで...

この街を歩くぼくの心の中では、この街は完全に消え去っていた。ぼくは思った、ぼくが期待と興奮のうちに見た街は、こんな街ではない。あれはどこの街。どこの風景だったのだろうか？

ぼくが見たのは優しい女だった。どうして彼女と出会ったのかは覚えていない。しかし、彼女のことは既に知っており、いわば再会に近い形だった。

彼女は、昔の香りを持っており、ぼくの胸に強く訴えるものがあった。ぼくは、彼女と会って、ますます別れられない気がして来た。

“君の家は知ってるよ。まだあそこにあるの？”

と、ぼくは、彼女が住んでいた、あの瀟洒な家のことを思い出しながら、言った。

すると、彼女は、にっこりとして答えた。

“今は、あそこに住んでいないわ。いい家だったけどね。今は別のところで、***に住んでいるの”

“あんなところに！ その場所は知っているよ。ぼくがよく行ったことのある場所だもの”

と、ぼくは驚いて言った。あの広い公園の近くかい？”

“そうよ”と、なおも彼女は、楽しそうに答えた。

“じゃ、行ってみようよ”

ぼくたちは、手を取り合って、公園に向かった。

広い公園は、既に雪におおわれていた。公園を埋め尽くしている樹木以外は白一色で、人の気配は、殆ど見られなかった。

“この公園の裏手の方に住んでいるのかい？”と、ぼくは尋ねた。“あそこには、簡素な、いい住宅街があるね。それで、誰と暮らしているの”

“今は、ひとりよ”と、彼女は答えた。

その言葉で、ぼくの胸はときめいた。結婚など、とっくにあきらめていたぼくだったが、今、目の前に、昔の香りを伝えてくれる、美しい、理想の彼女が現れたのだ。ぼくは、彼女と結婚したい、と本当にそう思った。後は彼女が、それを承諾してくれるか、だけだ。ぼくは、ごく自然に、言った。

“ねえ、君、ぼくと結婚しよう”

すると、彼女は、何んの抵抗もなく、まるでそれが当たり前でもあるかのように、ごく自然に同意してくれたのだった。

彼女のその笑顔を見、ぼくの胸が熱くなるのを感じた。こんな幸せな、こんな素晴らしいことが他にあるだろうか？

“じゃ、とりあえず、君の家に行こう”と、ぼくは、白い公園を見て、言った。

“ええ、こっちよ”と、彼女は、手招きで、ぼくを案内してくれるのだった。

それが夢だと知って、別にぼくは失望しなかった。そのような彼女は確かに昔いたし、ぼくは、夢の中でしか幸福になれないことを知ったからだった。現実を決して、このようなものではない。そのような彼女が仮に現実にはいたとしても、決して事がこのように運ぶはずがないことを、ぼくは知っていたからだった。――それに、ぼくはそれほど覚めた現実を愛しているわけではない。むしろ、夢のような幸福を、ただ夢の中でのみ実現すること、そのほうが、ぼくの幸福にとって、より自然だという気さえしているのだ。

夢の中に現れた、あの彼女、そしてあの公園、それらはみな、非常に素晴らしいものだった。それを、現実の中に求めたところで、しょせん無駄というものだろう。夢と現実とは、ときには似通っていても、お互い別々の軌道上を走る、相容れることのない二つのものなのだから。夢を現実の中に求めることはできないし、また現実を夢の中に導入するということもできない。――それがたとい夢の中の彼女だったとしても、ぼくは、現実性を帯びた理想の彼女に会えて、幸せだった。しかも夢の中で、彼女とぼくとは、結婚の約束をしさえしたのだ...

すっかり夜となり、雄大なオリオン座が西の空でまたたいている。何んの音も聞こえず、ひとりで無限の空間と対峙することは、心を謙虚にする。ぼくは、犬と一緒に、窓から暗い夜空を見た後、部屋の中を見た。冷たさは一段と増し、そろそろ薪が必要となるだろう。明るい照明が照らすぼくの部屋は、いろいろと物が置かれ、何かを語りかけるようで、何も語らない。この犬だってそうだ、彼はときどきうなったり、ぼくの顔をなめてくれたりするだけで、本当の語り相手としてはやはり不足なのだ。でも今のところはこいつで我慢することにしよう、家にはこいつしかいないのだから...

そのとき、外でコトツと物音が聞こえ、リサの帰宅を告げた。ぼくは、あえて玄関まで迎えに行かなかった。しかし、セーレンはすぐぼくのそばを離れ、リサを迎えに行った。やがて、居間に現れた彼女は、少し疲労しているようだった。

“御免、遅くなっちゃって”と、リサは、ドアのところに立って言った。

彼女の髪の毛が、きょうは特に可愛いらしい...

“仕事かい？”と、ぼくは何気なく尋ねた。

“そうじゃないの。帰り、友だちに誘われて、ちょっと寄って来たのよ”と、リサは答えた。

“じゃ、もう食事は済まして来たのかい？”と、ぼくは言った。

“ええ”と、リサは言った、“それから、少し気にしながら、“兄さんは？”

“終わったよ”と、ぼくは答えた、“お前の帰りが遅いから、こいつと二人で食事をした”そう言って、ぼくは、セーレンを指さした。

“自分でやったの？”と、リサは、なおも気にした風に尋ねた。

“簡単な食事ぐらいなら、自分でできるさ”と、ぼくは答えた。“お前の帰りがいつもより遅いよ”

“分かった、それでいいのよ”と、リサは言った、“他に何か変わったことは？”

“別に。いつもの通りさ”と、ぼくは答えた。

その言葉に安心して、彼女は、自分の部屋に引き上げて行った。

彼女が行くと、ぼくは、そばに坐っているセーレンを見つめ、ソファーの上に横になった。なんといい気持だ。ソファー、天井、そして暖かそうな絨毯。リサが帰って来るだけで、家の中は暖かさに包まれる。彼女の香り、彼女の体温、それらは着実に、この家に、彼女という生きた刻印を帯びて、根を降ろしているのだった。この壁にも、この背もたれにも、あのキャビネットにも、リサという顔がのぞいていた。彼女が帰って来た。それらすべての品々が、驚いたように目を覚まし、このぼくを見つめていた...

...今、暖炉の火が燃えている。窓の外は、まっ青な空が広がる。ときおり、小鳥が空を横切っ
て行く。し〜んとしているこの家。そしてあの森。ここに人気はない。あのセーレンすら、もう
いない。リサは、ここから遙か離れた都会で暮らしていることだろう。時折よこしてくれた手
紙も、今では滞りがちだ。空は青く、光に満ちてはいるが、いかにも冬空という感じ。昔、この
家にいたあのセーレンは、ここから少し離れた森の近くの墓地に眠っている。最近、ある新聞記
事を読んだのだ。警察犬として活躍した老シェパード犬が、嗅覚も落ち、足腰も弱って来たので
引退するに至ったのだ、と。往年のころは数々の活躍をし、様々な表彰を受けた犬も、寄る年波
には勝てなかったらしい。今後は、余生を犬舎でゆっくりと過ごすということだが、老犬はなん
だか寂しそうだと書いてあった。ぼくはこの記事を目にしたとき、亡きセーレンのことを思った。
老犬と書かれていたこの犬の年を見ると、それでもなおまだセーレンのほうが四つ年上だとい
うことが分かった。たった三年で命を閉じたセーレンだったが、この老犬のことを思うと、いか
に年月の過ぎるのが早いのか、ということが分かるのだった。セーレンは、今、森の墓の下で眠
っている。空は、彼が生きていた日と同じように青く輝いているが、その命は、永久にこの地上
から去ってしまったのだ...

ぼくは、そんな感慨を胸に抱きながら、窓から空を眺めている。何も答えない、ただ青いだけ
の無限に広がる空。空だけが純粹だし、彼は、すべての時代を超越して存在しているようにも思
える。十年前も百年前の出来事も彼は知っているのだし、これから起こるであろう永い年月をも
、彼は知ることになるだろう。しかし、ぼくらは、あのセーレンをも含めて、限られた短い期間
しか生きることはできない。しかし、その短い命も、無限の生命を持つ空に相對することにより
、何か、幸福を感じることもできるのだ...

ぼくはふと、空から地上の庭先に目をやった。そこでは、いくつかの可愛い花がそよ風に揺れ
て咲いていた。ヒナゲシ、キンギョソウ、キンレンカ。それらは、今年、何度めかの花を咲かし
、今も咲いているのだった。ぼくは、かつてスコットランドの人知れない浜辺で、動物と共に暮
らしたギャビン・マクスウェルの書物をテーブルの上に置き、生きることの厳しさと幸福につい
て考えた。彼のようにひとりで暮らすと、自然に対する感覚は鋭くなり、厳しい生活の中に、幸
福とめぐり会うこともあるだろう。結局、幸福は孤独と引き換えにしか得られないものなのだろ

うか... 確かにひとりで暮らすことは、並たいていのことではない。しかしそこにこそ、本当の生活、人生に対する本当の考え、というものがしっかりと根づくものなのだ。

社会の波にもまれて暮らすこともひとつの生活かも知れないが、そこでしっかりとした自己を確立することが、本当に可能なことだろうか？ ぼくには分からなかった、ただこうして孤独な時間を、自分と対峙しているとき、自分の何かが見えてくるという以外には...

空や森や家が、黙して語らないというのは、本当のことだ。しかしそれらは、無言のうちに、無限の語りかけをこのぼくに見せてくれる。ぼくは、それらを見つめているうちに、心の翼は、幾百の鳥となって無限の国と時代へと飛び立って行くのを感じるのだ。ぼくの過去。遠い時代。遠い国。ある部分は、書物で見せてくれるというのは本当だが、それ以上の部分となると、これはもう実際に羽ばたいてそこへ行くしかないのだ。書物の鬼と言われたあのアルゼンチンのボルヘスだって、こうして、様々な時代、様々な国へと羽ばたいて行ったに違いない。アルゼンチンの風土である乾いた陽気さを携えて。彼が、静かな図書館の地下室で、明るい庭が窓越しに見えるその日ざしを受けて、様々な国と様々な時代の書物をただひとり読みふけたその幸福の時間を、一体誰が知ることができるだろう？

だが数年前、ぼくの家には、リサがおり、セーレンがいた。この日のような寒い日なか、外は晴れていようとも、家の中は赤々と暖炉の火が燃え、セーレンは、ぼくの椅子のそばの床の上で、心地良さそうに眠っていたに違いない。しかしその頃の生活が、決してぼくにとって、精神的な幸せを形づくっていたとは言えない。再び当時の日記――

さっき、ぼくが目を覚ましたとき、空は青く晴れ渡っていた。明るい穏やかな真昼だった。そしてすべてがぼくにはあったのだ。愛するリサがいようと、他のあり余るほどの幸せに比べればなんになろう。リサの存在はもうぼくを幸せにすることはできなかった。ぼくには、すでにすべてがあったのだ。リサも、セーラも、あの人もこの人も世界のすべての人々がぼくのものだった。あの花も、この木も、そしてあそこの森、あそこの空、あそこの荒野も、世界のすべての自然が、このぼくのものだった。ぼくはあまり満たされ過ぎたので、その一部を誰かに分け与えたいと思った。ぼくは今、自分がどこにいるのかも知らず、それらすべての象徴的なものの上に漂っているように感じた。――だが、ぼくはこの家にいたのだ。ぼくのそばにあるものと言え、ただ犬一匹にすぎなかった。そしてぼくはやはり、ひとりだけ、だったのだ。ぼくにあったすべてのものが、まるで空に放たれた風船のように、みるみるうちに、ぼくから去って行ってしまった。

当時、ぼくは孤独だった。社会的に孤独だったがそれ以上に、精神的に孤独だった。自分にとって、自分を支えてくれるような真理。それが未だ分からない為、ぼくの心はさ迷い、一層孤独へと沈潜して行ったのだ。だが、周囲にはすべてがあった。

日記のように、淡い幻想ではなく、それは確固として、そこに存在していた。リサは、ぼくに優しく接してくれた。生活の上では、ぼくは恵まれ、幸福でさえ、あった。

“兄さん、知ってる？”と、ある晴れた日、リサは編物をしながら、ぼくに言った。

空は、この日のように晴れて明るく、窓辺の花がほほえむかのように、そよ風に揺れていた。ぼくたちは居間にいて、セーレンが、そばの床に柔かな体を横たえていた。心地良い、夢のような昼の日中のことだった。ぼくは、本を読んでいる手を休め、リサに振り向いた。彼女の晴れやかな顔が、冷えた部屋の中で冬の日ざしを浴びて一段と白く輝いて浮かび上がるのだった。

“一体何が？”と、ぼくは尋ね返した。

“ここからそう遠くないところにね、白く切り立った崖があってね、そこに何千羽というセグロカモメや、ウミガラスの類が空を廻っているのよ。壮観という他ないわ。それに、海がとってもきれい。果しなくて、灰色がかった青さでねえ、切り立った崖がとってもきれいのよ。もう一度、あそこへ行ってみたいわ”

“いいねえ、そんなところ”と、ぼくも頭の中で、そんな光景を想像しながら言った、“いつ行ったんだい、そこへは”

“姉さんと、伯父さん夫婦とよ”と、リサは答えた、“最近偶然見つけたの。あの頃は、ただ連れて行ってもらっただけでよく覚えていなかったんだけど、そこが、そんなに遠くないところだということは、偶然新聞で発見したの”

“そうかい、それでそこへはどう行けばいいんだい？”と、ぼくは尋ねた。

“車で行けば、一時間少しのところよ”と、リサは言った。

“へえ～、そんなに近いのかい？”と、ぼくは驚いて言った。

ここが、海からそう遠くないことは、ぼくも知っていた。しかしぼくは、憧れを誘う海よりは、冥想にふけることのできる内陸の方が好きだったし、極力海のことを考えまいとして来た。しかし今、彼女の言葉で、この憂鬱さを払いのける海が、何か救いの神のように、ぼくの心に立ち至って来たのだった。

“海岸線がまたとっても長いのよ”と、リサは言った、“人を寄せつけないほど厳しくて、寂しくて、でも野鳥や詩人にとっては天国のようなところね”

“そうかい。いよいよ、そんなところなら行きたくなって来た”と、ぼくは言った、“でも、またどうしてお前たちは、そんなところへ行ったんだい？”

“伯父さんが連れて行ってくれたの”と、リサは平然として、答えた、“旅行の途中、近くのホテルに泊まったとき、ホテルの主人が教えてくれたのよ。それで、早速行こうということになって、あたしたち、車で行ったわ”

“いい生活をしていたんだね、お前たちは”と、ぼくは、少し羨むように言った。

リサは、にっこりと笑顔を返した。

“さっき新聞でと言ったでしょ”と、リサは言った、“新聞にそのホテルのことが載っていたの。それで分かったの、あそこがこんなに近くだということが。なつかしいわ。あのホテルにも、もう一度行ってみたいわ”

“なら、一度行ってみようよ”と、ぼくは提案した、“お前たちが昔行ったとやらのホテルや、それにカモメのいる海岸にも...”

“そうね”と、リサはにっこりして、答えた、“でも、そのホテルで、泊まり客が死んだのよ。自殺か事故死か分からないらしいの。片田舎のホテルだというのに、なんだか気味悪いわ”

“それで知ったのかい”と、ぼくは、事の次第を知って、言った、“でも別に気にするほどの事でもないさ。ぼくたちがそこへ死に行くわけでもないんだから”

“そうね”と、リサは、また笑顔を取り戻して、言った、“ただ、こんな形で思い出すことになるなんて、意外だったわ。すっかり忘れていたことだったもの。——でも、場所が分かってよかったわ。あんなにいいところなんて、そうめったにめぐり会うことなんてないんですもの”

“海辺のホテルでの事故か”と、ぼくは、他のことに捕られるように言った、“何か推理小説にでも書かれそうな事件だね。その女の人には気の毒だけど、美しい自然は、その人の死にもかかわらず、そこに残っているんだね”

“どうして女の人って分かったの”と、リサは驚いたように言った、“あたし、女の人って言わなかったはずなのに”

“第六感で分かるのさ”と、ぼくは答えた、“そんな死に方をするのは、女の人に決まっている。その方が、小説にもちょうどいい設定なのさ”

“兄さんってヒドい。人の死をそんな風に言うなんて”と、リサは、少しぼくに抗議をした。

“ただ言ってみただけだよ。悪気はないさ”ぼくは、にっこりして謝った。“——でも、そういうところなら、いつだって行ってみたい。そこなら、きっと気も晴れるだろう”

“そうね”と、リサも同じ思いのようだった、“あそこなら、カモメの鳴き声も、波の音も、風の声も聞くことができるわ。人間の世界がまるで嘘みたいに、自然の迫力に圧倒されるの。何度でも足を踏み入れて耳を傾けたい。そんな気さえしたのに、一回きりで帰ってしまうなんて惜しい気がしたわ”

“そりゃ、残念なことをしたね”と、ぼくは言った、“——でもそのうち、行ってみようよ。できたら、このセーレンも連れて”

その声で、ぼくたちは、床の上に気持良さそうに横になり、ぼくたちを見つめているシェパードの子犬に目をやった。ぼくの頭には早くも、断崖の上の野原で、元気にぼくたちと戯れているこのセーレンの姿が浮かんで来た。

窓の外は、青く晴れていた。遠く、森の頭上を白い雲がゆっくりとかすめ、動いて行く...

“ぼくには見えるようだ、風になびく草...”と、ぼくは言った、“そして静かなたたずまいのそのホテルとがね。――でも、どうしてその女、死んでしまったんだろうね？”

“さあ分からない”と、リサは首をかしげて言った。

“きっとその女、自殺なんだ”と、ぼくは言った、“何かの理由で世をはかなんで、そして場所がそんなところだから、死んだのさ”ぼくには、その女が部屋で倒れているところまで目に浮かんで来るようだ。その時の刑事だったらよかったのにね、そうすりゃその現場に居合わすことだってできたんだから。いずれにせよ、死んだ真相が明らかになるといい...”

“事故死という説もあってよ”と、リサは言った、“今のところ本当のことは分からないらしいの。なんなら、兄さんがその部屋に泊まって、真相でも調べたら？”

そう言って、リサは笑った。

“いいねえ。そういうのは好きだな”と、悪びれることもなく、ぼくは答えた、“そして彼女の足跡をたどるといのもいい。どこで生まれて、どこに学び、生いたちはどうだったか、職業は何か、結婚はしていたか？ していたとするなら幸福な結婚だったか、子供はどうだったか、などについてね。そういうの、なかなか面白そうだね”

“もしそれが本当に行われるなら、兄さんにあばかれる女って可哀いそうだな”

“どうして？”と、ぼくは尋ねた。

“だって、自分の私生活が人にあばかれて行くなんて、あまり気持ちいいものじゃないもの”と、リサは答えた、“あたしなら、いやよ”

ぼくはにっこりした。

“そんなこと、ぼくはしやしないよ”と、ぼくは落ち着いて答えた、“それが特別に興味を惹くというようなよほどのことがない限りね。――でもその女は、ぼくの知らない女だ。ぼくが真相を追求しなければならぬ何んの動機もない。ぼくの言えることはただ、その女が死んでも世界は残っているというだけのことさ...”

“本当にまた行きましょ”と、リサもなつかしむように言った、“あのままもう二度と行かないなんて惜しい気がするもの...”

その日の午前、青い空と明るい日ざしの下で、ゆっくりと過ぎて行った。ときおりリサは、セーレンと庭に出て一緒に遊んだ。ぼくは窓から、彼女がシェパードと戯れている様子を眺めた。ほのぼのとしたい気分だった。彼女が手にパン屑を持って、まるでイルカにするように、子犬のジャンプを手なづけている光景は、ふと昔を思い出させた。昔に登場した彼女は、今のようには大きくもなく、また魅力的でもなかったが、小さいなりの良さを持っていた。その彼女は、大きくなならない雑犬の子犬を追いかけようとして地面の上にひっくり返った。おてんばだった彼女は、よくころんだり、倒れたりして、あちこちにかすり傷などをこしらえていた。冬のまだ根雪が残っているところにも、彼女はころび衣服を濡らした。しかし、草むらのところどころに白い斑点のように残っていたこの白い雪は、暗い長い冬からやがて訪れる春を思わせた。

ぼくたちは、そのすぐ下を流れる小川に向かって一点一点しずくを落とすその白い氷の消えて行く様を、じっと眺めた。運動。転倒。そして観察。それがぼくたちの子供の頃の生活だった。――ぼくの目には、当時の生活と、今のリサとが二重写しになり、次第に当時の記憶の方が彼方へと消えて行くのが認められた。

“いろんなことがあった昔...”と、ぼくは思った。その中には、両親に連れられて家族全員が、見知らぬ寺院へ行った日のことも含まれていた。帰りには、もう日は沈んでいたが、レストランに入り、ごちそうにありついた。みんな、家に帰り着いたときにはもうぐったりしていた。ぼくはすぐ歯を磨き服を着替えると、寝間に入った。

“...あの日は、もう死んだ日なのだろうか？　しかしもしそうだとすると、この一秒、一秒さえもが過去に滑り込み、死んだ時間となるんだ。だから、そんなことはあり得ない。あの日は今も生きている。生きているぼくの胸に宿っている限りは...”

その時、外から急にリサの声がした。

“兄さん、外に出てみない？　冷たいけどいい気持よ”

彼女は、窓のところにやって来て、締めた窓ガラスをこつこつ叩き、笑顔を投げかけた。

“分かったよ。じゃすぐ行くからね”

そう返事をして、ぼくは上着を引っつかむと、外へ出るべく居間を出た。

午後、ぼくたちは、明るい日ざしの下、居間にいた。ぼくは、快い音楽をかけながら、本を読んでいた。リサは今は何もせず、ただソファーに背をもたせかけ、目を閉じて音楽に聞き入っていた。セーレンは、彼女のすぐ足下で忠実に坐っている。すべて、なごやかで、静かだった。さて、ぼくが読んでいた本は、あのフローベールの「ボヴァリー夫人」だった。片田舎の一人の無垢な少女がいかにか成長して行くにつれ、夢破れて行ったかのこの物語は、その濃密な描写においても、なかなか面白い読物だった。一昔前のフランスの片田舎の、よき街並みがそのまま伝わって来るような気がして楽しかった。昔と今と田舎では、それほど変わりが無いとしても、あきらかにその人物において、その意識や生活様式は異なってしまっている。もし今、その同じ場所に行ったとしても、この小説に書かれているような人々に出会うことはないだろう。なぜか知らないがぼくはそんな気がした。それというのも、その当時の人々には、今のような未来は予想もできなかった。しかるに、今のぼくらは、一世紀前のその時代を振り返ることも出来、そのあいだに、科学上の進歩をも含めて、いろいろなことがあったことを知っているのだ。もし現代にもエンマのようなヒロインがいたとしても、彼女はあくまでもこの現代の中で夢見、現代を生き抜く他あり得ないのだ...

“リサは、ボヴァリー夫人を読んだかい？”と、ぼくは尋ねた。

彼女は、快い眠りから急に起こされたように、驚いた表情で目をあけた。

“いいえ、まだ。それ、ママが好きだった本でしょ”

とリサは、ぼくの手をしている本の表紙を見て、言った。

リサの言葉で初めて知ったことだが、ママが読んでいたとは、ぼくは全く知らなかった。

“ママが好きだったって、どうして知っているんだい？”と、ぼくが尋ねると、

“子供の頃、ママが家で読んでいたのを見たもの”と、リサは答えた、“題名が特徴的な題だったから記憶の片隅に残ったのね。あたしが、ママがあんまり熱心に読んでいるもんだからそばに寄ると、ママは本を閉じてあっちへ行ってしまったわ。だから子供のあたしにゃ読んじやいけない本って、すぐ悟ったの。それで覚えていたの。そんな内容の本なの？”

“確かに子供が読むには難しい本だろうよ。でも、そんな本じゃない”と、ぼくは言った、“リサも一度読んでみるといいよ。面白い本だから、すぐに読めるさ...”

“そのうちにね”リサは、ぼくを見て、言った。

“そのうちじゃいい機会を取り逃がしてしまうことになるよ”と、ぼくは少し皮肉っぽく言った、“こういう本は、精神のまだ澆刺としているときに読まなくちゃ。それは、精神になんらかの影響を与えるような本なんだからね”

“一分かったわ。それじゃ、兄さんの忠告に従って、近いうちに読むことにするわ”とリサは言った、“でも、あたしはまだ若いし、そんなに早く年を取らないわ...”

“そう思うのが浅はかなんだよ”と、ぼくは、本をテーブルの上に置き、天井を見つめるようなそぶりで言った、“いつまでも若いと思っているなら、それは幻想というものなんだよ。年なんてすぐ取ってしまう。そのうちすぐに、あのママと同じような年齢に到達してしまうだろう。若いこんな時期なんて、長い人生からみれば、ほんの一瞬で、一抹の泡のように過ぎ去って行くものなんだ...”

“なんだか、そんなこと言われると、人生って空しいわね”と、リサも感慨深げに言った。

“...でも、肉体はすぐに年をとってしまっても、精神がいつまでも若い気持でいればいいさ”と、ぼくは、リサを慰めるように言った、“物に感じる心。それさえ失わず、いつまでも保って行くことが大切なんだ。何も心配することはない。それこそが若さを保つ秘訣なんだ...”

“まるで兄さんは物事を悟った老学者のようね”と、リサは、ぼくのことをにっこり笑いながら、言った、“それで何が言いたいの？”

“風にそよぐ草花—— そう、だから、若い今のうちに感動というものを覚えておくことが大切なんだよ。様々ないい作品に接して、人生の喜びを知っていなくっちゃ。そして無論、その反対の人生の悲しみをも。そうして人は、心が豊かになって行くものなんだ。——だからリサも、そういう名作には是非接してもらいたいんだ。知性を高める為にもね...”

“分かったわ”そう言うリサの表情は、喜びに輝いていた、“兄さんの忠告に従って、あたしもそうします。そうすりゃ、少しは美人に見えるようになるかしら？”

“今だって結構美しいさ”と、ぼくはリサを見つめて言った、“君は、彫像のまなざし、それが君のまなざし...”

“何？”リサは振り向いた。

“いや、何かで読んだ詩の文句さ”と、ぼくは答えた、“風が揺らすお前の笑顔に永遠あれ、ということ。突然光の前に踊り出たお前の笑顔に永遠あれ——ぼくの思っていることはそのことなのさ。でも、そんなこと、無理な相談だな...”

リサは、その可愛い笑顔をいちだんとほころばした。

“そうね。そのうち、しわと格闘しなくっちゃならないときがやってくるわね”と、リサは言った、“人間、いつまでも若くはいられないものね。そう思うとぞっとしちゃう。でも、今は、そんなこと考えたくもないわ”

“それでこそ、今のリサがあるんだ”と、ぼくは言った、“おいでよ、ぼくの可愛いリサ”

ぼくはそう言って、彼女の手をとった。冷たい、柔らかな手だった。

“空はあんなに明るいんだ”とぼくは言った、“今のこの瞬間こそ、永遠のひとつときとさえ言い得るんだ。だって、リサの若いとき、リサの一番美しいときがたったこの今なんだから。御覧よ、あの雲は、自分があんなに美しいのに何ひとつ物を言わないし、何ひとつ気づいてもいない。それと同じようにリサ、お前も自分の美しさに気づいていないだけなんだよ。本当はこんなに愛らしく、こんなに美しいのに、ぼくはそういうお前が好きさ。大好きさ。そんなお前が抱き締めたいぐらい好きなんだ。でも、そんなことできない相談さ。変に誤解されると困るからね。——でもせめて、お前にも知ってもらいたいんだ。お前のその存在がこのぼくにどんなに影響を与えているかについてね。その愛らしさとその美しさ、ぼくはそれを他にたとえるすべを知らないんだ。でもせめて、あの雲や、空の永遠さを見て知って欲しいものさ。いかに永遠さが美しく、そして脆いかについてね...”

“いいのよ、兄さん”とリサは、ぼくを見て言った、“あたしを抱いても、別に変なことでもないわ。ごく自然のことよ”

“そうかい。じゃおいでよ”とぼくは立って、窓辺にリサを呼んだ。

犬は、リサの立つ気配で、ピクリと耳をそば立てた。リサは、すぐぼくの立っているところまでやって来た。ぼくは、そんな彼女の腰に手をやり、少し彼女を抱き寄せた。

“いい空だね。本当にいい空だ”と、ぼくは言った、“あの空を見ていると、苦しみも悲しみも何もかも忘れてしまうような気になるんだ。この地上にある不幸なんて全部吹き飛んでしまいそうさ。そして心は何か、羽根が生えてどこか遠く、永遠と呼ばれている国に向かって飛んで行きそうな気にもなるんだ。なぜって、それだけこの地上には苦しいことが多いからね。中には、苦しいことだけで一生を終えてしまうような人さえいる。でも、そんな人々に対して、ぼくは何もできないんだ。手を差し伸べることさえできない。なぜなら、このぼくだって、本当は苦しいからさ。——でも、そんな中であって、お前とあの空は、しばし現実を忘れさせてくれる。そして、永遠をさえ、このぼくにかいま見させてくれるんだ。

永遠がどんなにしるしに満ち、どんなに憧憬の念をかきたて、どんなに幸福でまどろむように素晴らしいか、そんなことのすべてを、このぼくに教えてくれるんだ。それは、この苦しいさ中であって、奇蹟に等しい。本当に奇蹟に等しいのさ。ぼくは全くベツレヘムのマリアに出会うような気持さ。ああ、このことをどのように言ったらいいのだろう。ともかく、お前の存在は、ぼくにとってあふれる創作の泉のような存在なのさ。お前はその泉で、ぼくはそれを汲み取るだけでいい。あの真白な雲のどこに？ とお前は言うかも知れないけれど、その白さの無垢さが、純潔さが、ぼくに無限の衝動を与えてくれるんだ。そして恐らく、永遠さとは、そういうものじゃないだろうか？ ぼくは、そうだと信じているよ。この苦しみ多い世の中でただ一つ、救いに至らしてくれるもの——それは、この純潔さであり、無垢さと呼ばれるものなんだ...”

“兄さんって、随分といろんなことを考えるのね”と、リサは言った、“でもただひとつ分かったことがあるわ。それは、今が兄さんにとって一番幸福な時期だっていうこと、そうでしょ？”

ぼくはそういうリサの顔を見つめた。彼女の瞳はぼくの手の中にあつた。ぼくは、永遠の中に滑り行くこの一瞬を手放したくはなかった。ぼくは、彼女を一層強く自分の方に引き寄せると、彼女と午後の静かに暮れゆく空を、その永遠を思わせる時の経過がゆっくりと自然の色を変えて行く様を、じっと見入るのだった。それは、厳粛なひととき、彼女と心が一つに結ばれて過ぎる一瞬のようなひとときだった。ぼくはこのとき、永遠の中に溶け行く彼女の笑顔のようなものを、空の彼方に見たような気がしたのだった...

リサと暮らした幸せな時期——それはもう遠い記憶の中でしか思い出すことはできない。そういう日々は、まるでうねりのように、当時のぼくの生活の中に幾度か訪れた。しかし、リサのいない日には、ぼくは孤独で、憂鬱だった。そんな日は、ぼくは犬と二人きりで家の中で過ごし、夢を見、また空想をした。ぼくは、そういう時を過ごすのが楽しく、また幸福でもあった。そして余りにも多く夢を見たので、しまいには、夢の地図が頭の中で描けるほどにまでなってしまった... 人々にとって、寂しくまた孤独であるはずの時間が、ぼくには、これほどの潤いと、喜びをもたらしてくれるものとは、とても思われなかった。

——きょうの昼はとても明るくさわやかだった。午後の三時頃だったと思うが、どこからともなく無邪気な子供の声が聞こえて来て、ぼくは浮き立ち、空想をかきたてられたのだった。犬はすぐ頭のところにあるソファの上で、日の射し込んで来ているところの方がいいらしく、窓ぎわに寄って横になっていた。静かで、暖かく、すべてが快くぼくには感じられた。ぼくはずっと横になっていたのだったが、その陽気さに浮かされて、この心を表現する為にも今こそ書こうと思ってペンをとった。だが何を書くのだろうか？ ぼくの頭からは何一つ浮かんでは来なかった。それに、なにひとつ考えているようなものもぼくにはなかった。少しも考えていないのだ。いや、あれほど書こうと思っていたぼくの物語がちっとも考えられないのだ！

このことが腹立たしかった。それにこの頃、日記に向かうのがなぜかしらおっくうになってしまったのだ。自分の才能を疑っているのか？ だがまたどうして才能なんかが必要なのだ？ 実際、この頃、ぼくの頭は、日記に対して、いや本に対してもめっきり疲れてしまっている...

この頃、ぼくの疲れた心をほぐすようなぼくの見た光景は、幻だったのだろうか？ それとも本物だったのだろうか？

全体が黄色だった。全体がうっすらとして、静かだった。奥行きのもたない死の光景に、突然二人の人間が姿を現した。若い少女とその母親らしい人のふたりだった。ほのかな薄明かりの夕刻、この世界はまだ生きていたのだ。動くものをぼくのこの目が捕らえたのだから――

それはただちに、ぼくの視界から消えて行ったに違いない。ぼくは冬の日の怠惰な夕刻、窓からぼんやりと外を眺めているとき、突然視界の一部に現れたその二人の姿を認め、それが去って行くまでゆっくりと目で追ったに違いない。しかし、その彼女たちは誰だったのだろうか？ ぼくは彼女たちを見て、そのとき何を感じたのだろうか？ ただ起こった出来事をありのままに書いてあるだけで、日記には他に何んの説明もない。そして今のぼくにはもう、書いた当時のことについて思い出すこともできないのだ。なぜなら、余りにも多くの年月が、そのときから既に経過しているからだ...

当時の日記には、またこうも書いてある。

...だがぼくは、これ以上の人は見当たらないほど、単調な生活のくり返しだ。ぼくの体は、帰ったとたん停止してしまう。そしてそれから、心だけが活動して行くだけにすぎないのだ...

ぼくは、ある日の午後、ソファの上に寝ころび、ぼんやりと窓の向こうの雲を見つめながら過ごしていた。青い空に浮かぶ雲はゆっくりと、こちらの方から向うに向かってその形を変えながら動いていた。あるとき、ぼくの寝ころがっている目に、それが上向きになった人の顔に見えたのだ。誰の顔ということはなかったが、間違いなく女の顔だった。鼻の先がつんととがり、目はまっすぐ前方を見つめている。しかし雲が動いて行くにつれ、鼻や目の辺りが徐々に変形し、くずれ始めた。しかしそれでもそれは顔だったが、さっきの女とは似ても似つかぬ顔だった。今度のそれは男の顔だった。つんと上向いていた鼻は幾分下向きとなり、目と頬の辺りがやや灰色に変色し、どちらかと言えばインディアンの顔に似ていた。しかしそれもすぐ、変形して行く雲の動きには勝てず、面影は消えて行った。今度は再び女の顔に戻ったが、しかもそれは魔女の顔だった。

しかしまた別の風にも見られ、年老いた男がただじっと同じ顔を向けているというようにも感じられた。ぼくが遅ればせに感じたのはその時だった。次々と顔を変えて行くこの珍しい雲の動きを八ミリカメラにでも収めておけばよかったと――しかし、そんな暇は全くなかった。ゆっくりと流れ行く雲が、その顔の変化を見せてくれたのはほんの一瞬で、やがて視界の下の方へと流れて行った頃には、もう鼻や目の区別もなく、ただの雲に帰っていた。そうして、再び意味もない一つの塊に戻った雲を目にして、ぼくは、言いしれない悲しみのようなものを感じた。ついさっき、ぼくに見せてくれ、ぼくを少しばかり興奮させてくれたあの雲の顔はもはやなく、しかももう二度と、永久に見せてくれることはあり得ないのだ。再び雲が同じ姿を見せてくれると期待することは不可能なことだろう。そうだとすると、あの一瞬の顔は何んだったのだろうか？ それは、長い一生に一度しか咲かないと言われていた竜舌蘭の淡い花、あるいは吹いてはすぐ消えてしまうそよ風に似て、人生にその隠された意味を伝えるしるしのようなものだったのだろうか。ぼくは、もう二度と見る事のない雲の顔に、人生のしるしを見る思いがしたのだった...

あの頃、ぼくの精神がなんとか持っていたのは一つの奇蹟だった。つまり、すべての絶望の中で、それを食い止める最後のふんばりのようなものが働いていたのは、確かだった。それはリサかも知れず、ほんのかすかな明かりのようなものかも知れなかった。やがて、犬も成長し、遠出ができるようになると、ぼくは、誰もいない昼、よくセーレンを連れて、自転車に乗り、散歩に出かけたものだった。

細い田舎道をひた走り、左右に見えるなだらかな丘を幾度も越えると、やがて一段と小高い丘に石でできた古い城砦跡が見えてくる。もちろん今は人影もなく、草や木で荒れほうだいになっている。ぼくは、自転車から降りて、そこに登ることに決めたのだった。空は晴れていたが、空気はまだ冷たかった。ぼくは、自転車を道端に置くと、一気に登り坂を駆け上がり始めた。セーレンも、尾を振り、勢いよくぼくの後に続いた。やっと登り終えた頃は、白い息を吐き、体は少し汗に濡れていた。セーレンも、何度も白い息を吐き、城跡に生えた灌木の根っこあたりを足で掘ったりしていた。ぼくは、崩れかかった石垣にひょいとまたがり、体を横たえた。空気は冷たかったが、ほとんど風はなく、いい気持だった。それに、ここから見える眺めは、特に素晴らしかった。途中、何もさえぎるものはなく、幾重にも重なり合ったなだらかな丘の地平線まで見渡せた。向うに村があり、あちらには、薄黄色のよく整地された麦畑が、そして丘をおおうように広がる森が一望の下に見える。その上には、真青に澄んだ空が、ところどころ白い雲を浮かべて、広がっていた。ぼくは、腕枕をして、ぼんやりと、それらのどかな光景を眺めた。昔、ここを守っていた人がどんな人かは知らないが、彼らは、どんな思いで、この大地を見下ろしていたのだろうか？ そんな思いが、ふとぼくの頭をかすめた。よく晴れた日を浴びて、石でできた、重く、ずっしりした灰色の構造物が、物言わずそこに存在していた。塔の円い部分や、途中までしかない防壁の部分、それにほとんど崩れかけた城の部分などが、白昼の下に、そこにさらされていた。

また、丘の崩れた石灰質の部分が、その真白な膚をさらしていた。ぼくは、そこに、昔ここで住んでいた人々と、数百年を隔てる時を感じた。――しかし、ここから見える光景は、その当時から恐らくほとんど変わってはいないのだ... ただ、今のぼくは、他の都市のことも知っていた。科学・技術がいかに進歩したか、都市の様子がいかに様変わりしたか、その歴史を知っていた。だが、当時、ここで生きた人々にとっては、世界は広く、未知なものであった。増して、数百年未来のことなど、どうして想像できよう？ 彼らは、狭い範囲内で、狭い思考に導かれて生きる以外に道はなかった。誤った信念、数々の失策や失敗。然し、そんな彼らを今さらとがめだてして何んになるだろう？ 今のぼくらにも、過ちがないとは限らないのだから... ぼくは、ぼんやりと雲が、数百年の時空を過って行くのを感じた。

やがて、体が冷えてきたので、ぼくはむっくりと体を起こした。犬は、相変わらずせわしげに、ひとりあちこちではしゃぎ回っていた。

“さあ、セーレン、もうそろそろ降りようか？”ぼくは、犬に声を掛けた。

城砦跡を後にして、ぼくは再び自転車に乗って先へ進んだ。少しスピードをあげると、セーレンは、遅れまいと一生懸命、ぼくの後を走って来た。そのとき突然、道の陰に隠れていた石に自転車が乗り上げ、勢い余ったぼくは、自転車からほおり出され、草むらに投げ出されてしまった。自転車は、無人のまましばらく走った後、向うの草むらに倒れ、車輪が空周りを続けていた。ぼくはあお向きに倒れ、少し体を起こそうとすると、そこへ駆けて来たセーレンが、ぼくの頭のまわりを取り囲み、尻尾を振りながら、ぼくの顔をペロペロとなめ始めた。ざらっとしたセーレンの舌が、冷たくなったぼくの頬を少し暖めたのは事実だった。

“おい、やめてくれよ、セーレン”と、ぼくは、嘗められるのがかなわなくなって、言った。

セーレンを振り切り、やっとぼくは体を起こすことができた。まだ草むらでよく、ぼくはけがすることからはまぬがれたが、ズボンはかなり汚れていた。セーレンをその場に坐らせ、ぼくは彼を抱き寄せた。本当に忠実なセーレン。たといぼくがこの場で気を失ってしまったとしても、この犬はいつまでもぼくのそばにいてくれただろう。ぼくは、セーレンの首の周りに手を回し、この忠実な犬と共に、向うに倒れているぼくの自転車を見た。すると、明るい陽を浴び、無造作に打ち捨てられている自転車のはるか彼方に、自転車に乗ってこちらへやって来る一人の少女の姿が認められた。リサがやって来る、と一瞬ぼくは、そう思った。しかし、よく見るとそうではなかった。リサよりもはるかに若いほんの十才ぐらいの小娘だった。彼女が、曲がりくねった草むらの道を通って徐々にぼくらのいる方にやって来、やがて犬がいることに気がつくと、少し恐れるような顔をして、倒れているぼくには全く何んの考えも持ち合わせていないようなそぶり、ぼくらのいる前を通り過ぎて行った。――これが、この人気のない道での唯一の人との出会いだった。しかし、その少女の後ろ姿の中に、ぼくは、遠い過去に見たぼくの妹の姿を見る思いがした...

やがて、気を取り直すと、ぼくは立ち上がった。

“さあ、じゃあ再度出発だ”と、ぼくは、セーレンに語りかけるように言った。

自転車を起こし、ぼくは再びそれにまたがった。来るべき方向には、ただ草むらと、ぼくを誘うような空、そして、やがて訪れる春を予感させるような陽光が、このぼくを待っていた。ぼくは、それに向かって、最初のペダルを踏んだ...

灰色の塊のような雲が空を覆い、ぼくは草むらに横たえて、その日の朝見た夢のことを思い出していた。全天を覆うかのような白く、灰色の雲のように見えていたが、空の一方は晴れていた。空気はまだ冷たく、走ったばかりのぼくの体を徐々に冷やしていた。

一体、あれは何んだっただろう？ これとってとりえのない橋を渡ると、向う岸の斜面に大勢の人が坐っていた。ぼくが危なげに近づくと、ちょうど橋の下の辺りには特に多く人が固まっており、そこには川の支流が流れていた。ある人は、そこに足を突っ込み、また他の子供などは、川の中にすっかり体をつけていた。こんなに寒いのに、とぼくには彼ら、不思議な一行のすることが理解できなかった。――また、庭に咲いた花の姿と共に、昔の、もう人の住んでいない家がかくつきりと頭に浮かんで来て、ぼくをなつかしがらせた。今のぼくか昔のぼくかは知らないが、ともかくぼくは、人の住んでそうでないあの家の二階に上がり、その壁や、その天井を眺め、それからよくそこから眺めたことのあるあの窓辺に歩み寄り、その外側に少し突っ張ったバルコニーがあったことを思い出したのだった。そんなことはもうすっかり忘れていて、夢の中でしか見ることのないものだった。それからぼくは下におり、庭に出た。そこはまるで花園で、様々な木や花が植わっていた。朝の日光が、そのときようやく射し込み、ある花は、今まさにそのつぼみから花開こうとしていた。ぼくは偶然その場に居合わし、忘れ得ない印象を与えた。

セーレンは草むらでしゃがみ、退屈そうに、ぼくが起き上がるのを待っていた。空がいよいよ曇り空となって来たので、ぼくは上体を起こした。ぼくが再び自転車を走らせると、セーレンは元気よく、ぼくの後を追って来た。

“こうして思い出すと色んなことがある”と、ぼくは、その日の午後、窓辺で本を読んでいるリサにそれとなく話しかけた。窓の外は昼にしては暗く、少し沈うつな表情を与えていた。

“...ぼくには分からない。今まで過ごして来たことが...”リサは本を置いて、ぼくの方に振り向いた。彼女の優雅な服装が、この部屋によく調和していた。まるで、部屋によく似合った花瓶か、カンバスのようだ。ぼくはそんな彼女を見つめながら話しを続けた、“雨の街角を駆けて行く女の人、そして、濡れた街角の階段――ふと、昔見たそんな光景を思い出すよ。ここは大違いの光景だけどね、都会で見たそんな一瞬の光景を美しいと感じるよ。それにそれは、ある思い出と結びついている。

昔、ぼくが街のレストランでママとアイスクリームを食べたときの印象だ。薄暗い店内に客は他にほとんどなく、ぼくたち二人っきりだった。しかも大きなガラス窓を通して眺められる大通りにも、ほとんど歩く人の姿も見られなかった。そんな静かなところで、ぼくは、ママと向き合っ、アイスクリームをひとりで食べた。あんなに甘くて、あんなにおいしいと感じたアイスクリームは、あとにも先にも、もう二度と食べたことはなかった”

“そんなにおいしいアイスクリームを与えたママの力って、偉大ね”とリサは言った。“でも、気になることが一つあるわ。そのときどうしてあたしたちが、そこにいなかったのかしら？”

“さあ、知らない”と、ぼくは、答えた。“ともかく、ママと二人っきりだった。それからどこへ行ったのかも、もう覚えてはいない。――でもそんな記憶が、ぼくに、人生を不可解なものにするんだ。忘れ得ぬ印象、記憶、それらはまるで、なんの意味も、なんの値打もないものだろうか...”

“あたしにとっては、姉さんもあたしも、そこにいなかったということの方が不可解よ”リサはなおも、そのことにこだわっているようだった。

しかし、ぼくの関心は、それとは異なっていた。

“セーラは、あの街で暮らしていた。ぼくたちだってそうだ。裏街の非常階段の向うで見かけたセーラ。いつだったか、空はよく晴れていたように思う。セーラは、ぼくがいるのも気がつかないのか、黙ってそこをスーッと向うへ通り過ぎて行った。彼女だって、いつも都会のしゃれたところばかり歩いているわけじゃない。汚らしい、誰も寄りつかないような所を歩くことだってあるんだ。もともと、ぼくらの暮らしていたところだって、きれいなところだと言えたものじゃなかったけれどね。あのセーラも、いつの間にか街から姿を消してしまった。みんな、どこへ消え、どこへ流れて行くんだらう？ ――ともかく、昔は昔、今は今さ”

そう言っ、リサを眺めると、彼女の向うの窓の外は、いつのまにかよく晴れて、明るくなっていた。徐々に青い空が、雲を追い払いつつあった。

“ともかく、兄さんの胸に重くのしかかる過去、それを追い払うことが必要なようね”とリサは言った、“たとい姉さんと再会するようなことがあるとしても、それは未来においてでしかないわ。昔の姉さんと出会うことなんてもう不可能。今の姉さんは、あのときよりもずっと変わっているかも知れなくてよ。もしそうなら、兄さん、どうする？”

“確かにリサの言う通りさ”と、ぼくは言った、“――でも、ぼくにそれを消し去ることはできない。これまで生きて来たぼく――ぼくにとってはそれがすべてで、未来にはもう何も無いのだから... そんなこと考えるだけでもぞっとするよ”

“兄さんは生きる元気を失ってしまっている”と、リサは指摘した、“まるで、年寄りみたい。さあ、そんなこと忘れる為にも旅行にでも行きましょ。そうすりゃ、気分も変わり、周りに対する見る目も変わると思うわ...”

“人間の心って、そんなに単純に変わるものでもないさ”と、ぼくは落ち着いて言った、“それは、長い年月によって培われるもの。簡単に変わるもんじゃない。――でも、世間に出て行くこと。それは必要なことさ。セーラやママと出会えるかも知れないところはまさにそこなんだから... 空が晴れて来たね”

と、ぼくは、窓の外を眺めながら言った、“ぼくの心も、今ようやく晴れて来たところさ。まるで、子供の頃に返ったみたいだね。あのとき感じた新鮮な感覚が今伝わって来そうさ。――さあ、それじゃ、風呂にでも入ろう...”

そう言って、ぼくは、椅子に腰掛けたリサと美しい窓の景色とを後にして、浴室に向かった。浴室の窓は、西陽を受けキラキラと輝いていた。その光のせいで明るい、白い壁をした浴室は、昔を思い起こさせるような新鮮な香りがした。ぼくは、湯の蛇口をひねった。勢いよく湯が、浴槽に向かって落ちて行った。ぼくは、その流れの音を耳にしながら、ふとここだけが、歴史の鎖から切り離されて、昔さながらの永遠の時を刻んでいるような、そんな気がした...

風呂から上がると、空はすっかり晴れ上がり、しかも夕闇の迫る気配が感じられた。しかし、庭の樹木や垣根は、最後の夕陽を浴びて、まだ明るく輝いていた。風呂上がりのぼくは、体がほてっていい気持だった。遠くに浮かぶ雲も、ところどころ夕陽を浴びて黄色く染まっていた。

このまま暮れて行く...と、ぼくは感じた。このまま、この日も終わるんだ。一日、誰もが年をとって、地球が太陽の周りを少しばかり運行し、朝からほんの半回転ほどしただけだ。結局、宇宙の出来事において、それほど大したことではないのだ。しかしぼくにとっては、貴重なこの一日が失われるときだった。それは、ぼくにとっては、大きな心の痛手でもあった。

ぼくは、自分の部屋から見える、その悲しげな暮れつつある空を目にすると、もう耐えられなくなって、リサやあのセーレンの待っている暖かな居間へと向かった...

...空には、まぶしいばかりに星がいっぱい輝いていた。大きな鉄筋コンクリートの校舎がひとつ、そしてそのそばをずっと向うまで延びる広い道が一本走っていた。ぼくたち三人は、道の果ての空に暗号文字のような変わった星の集まりを見つけたので、急いで駆けて行った。校舎のそばの道は、三百メートルも行くとそこで、交通の激しい道と交差していた。ヘッドライトが次から次へと走って来ては、ぼくたちの前を通り過ぎて行った。やがて、交通が跡絶えた瞬間を見計らって、ぼくたちは、向う側の小さな道まで横断した。その道のそばには、小川が流れていた。その小川に沿ってしばらく行くと、やがて、こんもりした森にぼくたちはやって来た。森にはさまれた台地は、とても明るく、まるで真昼のようだった。いや、いつのまにかもう昼となっていて、空には美しい青空が輝いていた。

...以上のような書き出しで始まる夢を見たのはもう随分と前のことだ。あの頃、自分の心にとりついていたもののひとつに、自分の夢の世界があった。この追跡劇の果てにぼくが目にしたものは、今も強烈に目に焼きついていて、忘れることができない。――それは、あのプールだった。そのさわりの部分だけを、当時そのままの生々しい文章で、ここに再現することにしよう...

ところが、（崖をよじ登って）向う側へやって来たとき、ぼくたちは三たび驚かされてしまったのだ。そこには、目を見張るばかりの美しい、裸の少女たちが遊び戯れている大きなプールがあったからだった。しかし、ぼくたちはためらわなかった。彼女たちは誰ひとりとして銃を持ってはいない。しかも、そのプールを横切る必要があったのだ。すぐ、プールサイドに駆けつけて来ると、服のままプールに飛び込んで、色とりどりの水着姿の少女達に混じった。この多くの少女達の誰ひとりとして、そんなぼくたちに気づいた者はなく、なんら変わったこともなく、自分達の遊びに戯れているだけだった。

この大きな屋敷の庭に造られた美しいプールは、山奥の秘められた場所にあり、岩陰から遠く、見降ろすことのできたときのことを、今でもよく覚えている。ここはどういうわけか、若く、美しい少女たちだけで防衛されている秘密の御殿であり、花園だった。ぼくたちは、その中のひとり、ここを防衛する銃を持った女兵士と出会い、その後も関係を持った。

...だが、（銃を高くかかげながら）もう少しで向う側にたどりつこうというときになって急に、銃を持ったひとりの少女兵士が姿を現したのだ。それは、とても美しい少女だった。まだぼくたちに気づいていない様子だったので、ぼくたちが彼女をねらい撃ちすることもできただろう。しかし、撃ち殺してしまうには惜しいような美少女で、とてもそんな気にはなれなかった。ぼくの仲間たちも同然で、気づかれないように引き返すことにした。仮に少女に見つかったとしても、このプールには大勢彼女の友人が戯れているのだし、ぼく達に向かって発砲は出来ないはずだった。――ところが、その少女兵士は、やがてぼく達を見つかるや、手に持っていた銃をその場に投げ捨てて、ぼくたちのいるこのプールに、裸になって飛び込んで来たのだ。そして、ぼくの仲間のひとりの少女にやがて追いつくと、なんの抵抗もさせずにその少女を連れ去って行った。

やがて再び彼女が姿を現したとき、もう仕事はすっかりすませたように晴れやかな表情をしながら、あっけにとられているぼくたちをその場に残して立ち去って行こうとした。しかし、すぐぼく達は、その少女を追いかけた。やがて、脱衣室でやっと追いつくことができたが、少女は別に驚いたふうもなく、それどころかぼく達のずぶぬれの服を見ると、にこやかにタオルと着替えの服を貸してくれたのだ。ぼく達は、全くとまどってしまった。ただ目の前にいる美しい半裸体の少女の水着姿に見とれるばかりで、言葉も出て来ない始末だった。

するとその少女兵士は、ぼく達に飛行機が一番いい席の切符を渡して、“これで帰りなさい”とそう言ったのだった。ぼくたちは、その言葉にうまく乗せられてしまい、連れ去られた仲間の少女のことはすっかり忘れてしまって、そのまま飛行機に乗せられるハメになってしまった...

以上が、幻のプールのある屋敷での、ぼくらの不思議な経験だった。ぼくは、目が覚めたとき、自分が自分の部屋にいることを知り、あの澄み渡った空の下の、まぶしいばかりのプールで、はち切れんばかりの若い肉体をぶっつけ合っていた少女達の秘められた世界が、本当に未知の世界へと行ってしまったことに、何か悲しい思いがした。それは、この地上のどこかに存在していなければならないし、存在しているはずなのだ――そう思って、ぼくは、自分の心を慰める他はなかった。しかし、ぼくは未だに思い出す――岩に登って初めて目にしたときの、あの御殿、あの青いプール、日光を浴びてまぶしいばかりの芝生と、あの生命のほとばしりを感じさせる少女達の水着姿の感動を。そこは、一体何処なのだろう？ どこに行けば、そこにぼくはめぐり会うことができるのだろうか？ それ以後、ぼくは永いあいだあちこち捜し歩いて来たが、未だかつて、そのような場所にめぐり会ったことはないのだ...

再び、当時のぼくの日記に帰ろう...

美しく晴れた日だった。遠くの青い山々が重なりあった光景は、そしてその向うの遥か彼方に見える青い空や、白くくっきりと浮かぶまるで島のような雲を見ると、ぼくに、あの向うはどんな世界なんだろう？ あの山の向うの青い空の下はどんな人々が住み、どんな素晴らしい世界が待っているんだろう？ というような想像をかき立たせ、その向うへ行ってみたい誘惑心を起こさせずにはいられなかった。見えない山で区切られた向うの世界。そして何よりもあの山の向うの見えない世界を美化した象徴が、あの美しく澄み切った青い空なのだ。あの山の向うの住民は、ここからではあんなにも遠くに見える空を、真上に見つめている。美しく、明るく、静かで、豊かな世界、それがあの空の下、あの雲の下にはある。永遠に、ぼくにとって夢であり、空想であり、理想である世界、それがあの山の向うの世界なのだ。そして、あの澄み切った空は、その下にある世界を映しはしないが、最も強く心を打ち、感じさせる鏡なのだ...

さて、その晴れ渡った空も、きょうは消え行こうとしている。さようなら、一日の希望よ、一日の青い空。この日も暮れ、やがて夜が空を覆うだろう。もう二度と帰っては来ない、ぼくに喜びと、回想と、幾許かの知恵を与えてくれたこの日の青い空さん、印象的な、遥かな遠いまなざしを送り続けてくれた美しく澄んでいた空よ、さようなら...

...ぼくの心は暗い。恐ろしくなるほど暗くなることがある。ぼくは、どこから来て、どこへ行くこうとしているのだろうか？ ときどきそれが見えなくなるときがあるのだ。そんなとき、ぼくは全く自分を見失い、まるで大地の裂け目に足をすくわれたときのように、目の前が真暗になってしまう。そのとき、ぼくの知識と経験とは全く方向性を失い、ごちゃごちゃになり、しまいにはその意味すらも失って、消滅する寸前にまで行ってしまふのだ。しかしやがて、ぼくには、妹たちと暮らした楽しい日々があったことを思い出し、実は、ぼくの心の原点にはその思い出—様々な思い出—があり、ぼくの未来が再びそれに向かっているのだということに気づいて、やっと安堵の気持ちを取り戻すのである。

孤独な日々に、楽しかった昔を思い出すことは、難しいことだ。妹がいた時には、その有り難さが目に見えず、また注目することもなく、ごく普通のこととして受け取り、ぼくは他のことに、哲学や文学にいそしむことができた。しかしその妹が去って初めて、ぼくは、彼女のいたことの偉大さに、彼女が与えてくれた幸せの大きさに気づき、狼狽するのだった。それは、ぼくの心に空けた大きな穴であり、他のいかなるものでもってしても埋めようのないものだった。たといこれから、彼女について、幾千幾万字と書いて語ろうとも、決して彼女のあの生身の生の埋め合わせとなることはないだろう。そう考えると、空しく、悲しい。それは、ちょうどあの愛犬セーレンが亡くなったときに感じたのとほぼ同じ感じだった。しかしただ、妹については再会の希望がある。あの愛犬セーレンについては、もう墓の中でしか希望を持つことはできないだろう...

ぼくは最近、死後の生活について考えることが多くなった。というのも、人類は多くの死を経験して来たのだし、今生きている人もいずれは死ぬことは確実だからだ。もちろん、ぼくはまだ死にはしない。しかし、人が生きて死ぬというこのことは、何んだらう？ ぼくの幼い頃からの関心がこの一点に尽きている、と言っても言い過ぎではない。ぼくが最初にそのことを経験したのは、人間の死、というよりも「人形の死」から来ているのだ。この死は、ぼくの妹のリサも、ずっと幼いときに経験しているはずだが、もう彼女は忘れてしまっているかも知れない。

それは遙か遠い昔、ぼくたちがまだ幼かった頃、一つの人形がぼくたちのあいだの友だちだった。それがどんな種類の人形だったかについては、もう言うまい。ただいかにも安っぽく、手作りの人形だったことは確かだった。ぼくたちは、その人形をはさんで、互いに遊び合った。ぼくたちの子供部屋で、他のガラクタと一緒に、その人形と会話をし、空想は次第に広がって行った。その人形が、そのときどんな王国を築き上げ、どんな楽しい話しをもたらしてくれたかは、今となっては、もう記憶もなく、確かめるすべもない。しかし、その人形と語り合う夜は楽しかった。そこには、ぼくたちだけの秘密の世界があり、秘密の会話があった。

しかし、相手はなにしろただの人形のこと、互いに手に取ったり、抱いたり、奪い合ったりするうちに、だんだんとその寿命がやってきた。

顔は醜くなり、衣服はボロぎれ同様となり、家に来た当時のあの新鮮さは、今や見る影もなく、一見してその寿命が来ているのは明らかだった。しかし、それに気づいたとき、ぼくたちは激しくそれに抵抗した。ぼくたちには、あれほどぼくたちの世界に楽しみをもたらしてくれ、ぼくたちの世界を広げてくれた人形の死を認めるわけには行かなかった。それはそのとき、完全にぼくたちと一体となって溶け合い、ぼくたちの潤いある生活の一部となり切っていたのだった。だから、その人形の醜さや寿命は、とうていこれを承服するわけには行かなかった。

――にもかかわらず、死は、その人形に確実に訪れた。ぼくたちに、初めて知る「死」の現実と対面し、その人形と別れねばならないときがやって来た。別に埋葬をしたわけではない。ただ摩耗が余りにも激しく、これ以上使用に耐えないと分かると、ぼくたちは、ごく冷静に決断を下し、ポイッとゴミ箱に捨てて、それで終わりだった。

しかし、それがこの人形の最後ではなかった。ぼくたちがそのとき、どのような悲しい気持を抱いたのか、あるいは抱かなかったのか、もう知る由もない。というのも、すぐそれに代わる人形が現れたのだし、ぼくたちはすぐそれに夢中になることができたので、あるいは悲しい気持は全く訪れなかったかも知れないからだ。しかし、悲しみは、その後意外なところで訪れた。それは、その人形の怨念とでも言うべきだろうか...

最初の人形が消え、二代目の人形にとって代わって数ヶ月が過ぎた頃、もう春か秋か忘れてしまったが、ぼくたちが家からそう遠くない草原を歩いていたとき、思いがけなくもその人形と再会することになったのだ。それは、草原の脇のちょっとしたゴミの山に打ち捨てられていた。他のゴミと一緒に、すっかり風化したその姿は、顔か頭かおぼつかないほどにズタズタになり、破けた一部がただ寂しそうにそよ風に打ち震え、まるで無言の死を永遠にさらすように、そこに横たわっていたのだった。

ぼくは、それが本当にぼくたちの捨てた人形だったという自信は、今はない。というのも、通りがかったぼくたちの誰も、それをしっかりと見続ける気にはなれなかったからだ。だから、他の誰かが捨てた人形や、あるいは全く別のものを、見間違っただという可能性は、あるにはある。しかし、そのときのぼくたちは、即座にそれがあの人形だということを確認し、人形の死という「事の悲しさ」に気づくのだった。そのときに初めて「死の悲しみ」を味わい、心に何かあがない切れぬ穴のようなものを感じ、残したことは、今でもはっきりと覚えている。ぼくたちは、幼いながらも、死の残酷さ、空しさ、その他諸々の仕打ちがその人形に向けられていることを、味わい知ったのだった。

ぼくたちはその場を立ち去り、もう二度とその人形と出会うことはなかった。しかし、その人形がぼくたちの胸に残したものは大きかった。それは「死」であり、生の意味をぼくに考えさせることを教えたのだ...

その後も、何度かぼくの前に「死」は訪れたが、そのたびに、いよいよ深く内省し、あのとき知った原初の問を問わずにはいられなかった。

「生きること、そして死ぬこと、それはなんだろう？」

それは次第次第に、ぼくの心の中で固まり、ついにはぼくの生きる目的にさえなってしまったのだった。他の何もぼくの心をつらぬくものはなく、ただそれだけがぼくの心をつらぬいて放さなかった。ぼくは、幼い頃経験した「人形の死」から出発し、人間の生き死に、ひいては、人生の問題そのものを追求しようと決意したのだった。

きょうはいい天気だ。本当に晴れて、いい天気—— 小鳥が喜びのさえずりをたてている。こんな日には、のんびりとプーストの小説でも読むか、他の遠い時代の史実に思いを馳せるか...

そういうことがだんだんと少なくなっていく日々。思えばぼくは随分多くの楽しい知恵を、天才たちが創造した文化遺産から学んだ。音楽もしかり、絵画もしかり、文学もしかりだ。それに現代の文化である、忘れてはならない映画からもだ。ぼくは、子供の頃、そしてあの貧しい時代を通じて、そういった文化との接触を欠かすことはなかった。それらは、ぼくの精神に多くの喜びを与えてくれた。世の中が辛いだけに、一層多くの喜びを与えてくれたのだ。しかし、それらが積み重なったからといって、ぼくの精神が豊かになったというわけではなかった。むしろますます貧しく、ますます空虚になってさえ行った。それらは、なるほど楽しみと知恵とを与えてはくれるが、決して精神を満たすまでには至らなかったのだ。結局、この究極の目的を担うものは、自分の体験より他にはなく、この体験を基にした自分の創造以外にはなかったのだ。かつて天才たちが創造した数々の文化遺産は、その方向まで照らしてはくれたが、行き着く先までは教えてくれなかった。行くのは自分であり、自分ただひとりだけなのだ...

それにしてもいい天気。夢誘うような空が広がっている。こんなとき、どこへでもいいからついフラフラと外へ出て行きたい誘惑にかられる。結局、ぼくが他人の創造だけで満足できないのは、こうした自然や、かつて自分を取り巻いて来た様々な事象が、ぼくを創造へとかりたてるからなのだ。例えばひとりの魅惑的な少女がいたとする。すると通常的手段としては、彼女に語りかけるなり、誘惑するなり、なんらかの手段が講じられるだろうが、ぼくとしては彼女をそのままにしておいて、彼女について何か書かずにはいられないのだ。もしぼくに絵画の才能があれば、彼女をモデルにしてキャンバスに絵具を塗りたくるあの幸せな画家と同じことをしていただろう。しかし、残念ながら画才のないぼくには、そういうチャンスはない。増して誘惑するなど...

ともかくこの地上に生きている限り、ぼくは創造を続けるだろう。それは何もかも産みはしない。既にあるものを、ただぼくなりには語るという作業だ。それは、世界にとって何んの役にも立たないことかも知れないが、少なくともぼく自身を生きさせてくれる。それは、ぼくの生きる励みとなり、生きる喜びにもつながるものなのだ。

この田舎から遠く離れた都会—— ぼくはそこで暮らしている妹の一人、リサのことについて

考える。彼女は、あの大きな都会という街へ吸収され、消えて行った。

田舎での静かな暮らしが、彼女には向かなかっただろう。ぼくは、多くの女の生き様を、小説や史実で知っている。リサもまた、彼女らの後を追おうとしているのだろうか？ それは分からない。生きた人間を小説に例えるのはよそう。あるがままのリサ、ただあるがままの彼女を見さえすればいいのだ。

そのリサから最近珍しく、ぼくの家にか電話がかかって来た。そのいきさつはこうだ。

ぼくがいつものように昼近く、書斎で本の整理をしつつ、この部屋のしめっぽさを感じていたとき、珍しく電話のベルが鳴り響いた。めったに使うことのない電話だったが、受話器を取ると、あのなつかしい妹の声がそこから聞こえて来たのだ。

“兄さんなの？ リサよ”と、彼女は言った、“長い間お手紙を差しあげないで御免。いろいろと忙しくて。それでつい手紙の代わりに電話になってしまったの”

“そう、元気にしてそうだね”と、ぼくは嬉しくなって、言った。

“元気よ”と、リサは言った、“兄さんは、そこで相変わらず？”

“そう、旅に行く以外はね”と、ぼくは答えた。

“そう、元気そうで何よりよ”と、リサは、ぼくの声を聞いて言った、“あたしの方は、いろいろと忙しくて...”

そこで彼女の話してくれたところでは、あるファッション雑誌の取材や編集の仕事をしているということだった。毎晩会議や何やかやで帰るのが遅く、くたくただということだ。リサは、今は別の仕事をしている友だちと共同で、街中のアパートの一室を借りてそこで生活しているということだった。以前勤めていたカメラマンのスタジオでの助手の仕事はもうやめてしまって、職を変えてしまっているのだ。でもあのカメラマン、ルナールとの付き合いは今もしているということだった。

“それでね、今度の週末、一度会いに来ない？”と、リサは言った、“ちょうど友だちが田舎に帰るのでひとりになるのよ。いろいろと街を案内するわ”

“そう？”と、ぼくは、ためらいつつ答えた。田舎での長い孤独生活にそろそろうんざりしかけていたぼくに、電光石火のようにこの言葉は響いた。誘惑といえば誘惑だった。しかし、都会に対する偏見を抱いていたぼくには、にわかに決心がつきかねた。ぼくは、それにはすぐには答えず、逆にリサの生活について尋ねてみた。

“リサ、今の生活は楽しい？”

“ええ、とっても”と言う楽しそうなリサの声が返って来た、“言ったように毎日が忙しいけど充実しているわ。同僚の人だって、いい人ばかりだし。とってもやりがいのある仕事だって思っているわ”

“まあ仕事柄、楽しいだろうね”と、ぼくは言った、“でも、こんな田舎者、そこへ行って大丈夫だろうか”

“何を心配しているのよ”と、驚くリサの声が返って来た、“誰も兄さんのこと、眺めたりなんかし

ないわよ。大丈夫、あたしに任しといて、兄さんが来れば全部、このあたしが面倒を見るから”

“結構な気づかいだね”と、ぼくはにっこりしながら言った、“じゃあ分かったよ。久し振りだから行かせてもらうよ。どこへ寄せてもらえればいいんだ？”

“決心してくれたのね”と、リサは嬉しそうに答えた、“来るのは簡単よ。列車の到着時刻さえ言ってもらえれば、駅まで迎えに行くわ。ちょうど正午着の列車があるの。それに乗ってやって来たら？”

“分かった。こちらで調べて、その列車で行かせてもらうことにするよ”と、ぼくは言った、“でもリサも”と、ぼくは続けた、“都会の生活で満足しているらしいけど、たまにはこの田舎にも帰っておいでよ。こちらの自然の素晴らしさは、お前もよく知っているだろう？”

“ええ、機会があれば必ずね”と、リサは楽しそうに答えた、“じゃあ待っているわ。週末、メロランスの中央駅に正午ね。迎えに行くから必ず来てね、じゃあそれまでさようなら”

“さようなら...”

電話はそれで終わった。ぼくは意外な約束をしてしまったのだ。この週末には、はるばるとメロランスまでリサに会いに行かねばならない。優に汽車の旅で半日はかかるだろう。そうまでしてリサに会いに行き、それから何が始まるのだろうか？ そんなことはどうでもいい、ともかくリサに会いさえできれば...

この突然の電話があつてからというもの、ぼくの意識は田舎から、再び都会へと振り戻された。この同じ日射しがさんさんと降り注ぐ都会—— 人々の活気と欲望とが渦巻いている都会—— 露店に並べられた果物や野菜売りの掛け声。街を通り過ぎる人々。自動車の警笛の音。裏通りで遊ぶ子供たちの笑い声。そんな様々な都会の風景が、ぼくの頭に浮かんで来た。そしてリサは、そうした都会の中に住み、毎日を暮らしているのだ、少しでもより高い地位、幸せな生活に到り着こうという夢を抱いて...

かつて、ぼくのママもそうだった。彼女がまだ十七のとき、都会に夢を抱いて出て来、それまでの単調な田舎暮らしと訣別した。勿論彼女は、親には黙って出て来たので、親からは離縁を宣告され、以後長く会うことはなかった。しかし彼女も、都会に出てからは、さまざまな苦しみをなめたらしい。一時は、社会的な矛盾に突き当たり、過激派たちと少しばかり交渉を持ったこともあるということだ。最初は女工から出発した彼女も、やがて自分にふさわしい仕事を見つけて行った。都会に出ても勉強を怠ることのなかった彼女は、様々なサークルに顔を出し、その中で、まだ一介の大学の研究員に過ぎなかったぼくのパパとめぐり会ったらしい。家が貧しくきびしい為の家出娘と研究員。この二人の恋はまもなく燃え上がったらしい。それはママが、やっとはたちを越えた頃のことだ。やがて二人は結婚をし、生活をしなければならぬというので、初めはママの収入で暮らしていたが、やがてパパが田舎に教師の口を見つけたので、そこへ移り住んで行ったという次第だ。

ママが望み通りにうまいこと行ったのかどうかは知らない。しかし、これはまあ成功したケースと言えるだろう。そしてリサも、それと似た同じ道をたどって行くのだろうか？

...ぼくに都会生活は何もない。また人々とのめぐり合いもないだろう。ぼくの思う事はただ、田舎の中を真直ぐに伸びる白い道、両側に花の咲くその道を、遠く山の向うまでも歩いて行くことなのだ。

リサが街で暮らすというのなら、それもいいだろう。あえて彼女をここへ呼び戻そうとは思わない。しかしここでの生活が分かり合えるそんな誰かが、ぼくには必要なのだ。そんな誰かを求めて、ぼくは再び旅に出るだろう。様々な場所、様々な地で、そんな誰かにめぐり会えることを求めて、ぼくは旅に出るだろう。そんな感傷旅行の後、本当にぼくはそんな誰かにめぐり会えるかも知れない...

ぼくは結局、リサに会いに行くことを決意した。そればかりではなく、それを機会にまた再び旅に出よう。当てのない、希望を抱いた旅に―― しばらくこの家ともお別れだ。この静かな、ぼくだけの館。小鳥が鳴き、それ以外に何んの音も聞こえては来ない。ぼくは寂しさを紛らせる為に、時折バロック音楽のレコードをかけるのだ。それがこの自然の中に快く広がって行き、隣の部屋にいるぼくの耳に快く響くのだ。バロック音楽ほど、自然とよく溶け合う曲はない。しかしそれが終わると再び静寂が訪れる。どこまでも広がる、澄んだ青い空―― ぼくはこれまで何度、この光景を目にしたことだろう。しかし何度見ても、見飽きることはない。それはぼくに、様々な顔を見せ、広がる世界の様々な思いを告げる。ぼくの心は、世界の広さだけ広がり、様々な想念にかられる。あるときは、アンデルセンの「砂丘物語」の舞台であるスカーゲン近くのまだ見たこともない砂丘に行き、またフランス革命当時のパリに飛んだりする。フランス革命―― それは、この音もない田園にあって、ぼくの心を鳴動させてやまないものだ。もう二世紀も以前に勃発した大騒乱――それが未だに、ぼくの心に伝わり、鳴り響いて来る。この人気のない静かな自然の館の中で。ぼくはそれを、あたかも舞台劇を見るように眺めているのだろうか？ カミーユ・デムーラン、マラー、ダントン、ロベスピエール、サンジュスト、ロラン夫人、ラファイエット、フーシェ、タレーラン、シャルロット・コルデー、ブリッソー、エベール、ミラボーなど、革命家やその犠牲となった人々の生き様が、その騒乱とどよめきの中に、ぼくの目に映って来る。その陰に生きた婦人たちの嘆きや、生き生きとした市民たちの動きが、ぼくの耳に、目に伝わって来るようだ。エリザベド・ル・バヤ、クレール・ラコンブのことは最近知った。しかし、その当時のフランスが、こうもぼくの目に焼きつき、ぼくの心を捕らえて放さないのは、どういうわけだろう？ その後も大きな戦争や、革命を人類は経験して来ているのだが、ぼくが注目してやまないのはこのフランス革命なのだ。

それは、世界で最初の天地をひっくり返すような大事件だったというばかりではなく、恐らくその文化やその思想の中に、その後には失われてしまった一種の高さが存在していたのを、羨み、いとおしむ気持ちが、そうさせるのだろう。そこにはむき出しの経済闘争だけではなく、自由や平等という高まいた思想が、革命の力ともなっていたのだ。そして忘れることのできないのは、そこに活躍した革命家たちの様々な姿である。デムーランは、金持のリュシルと結婚したという罪でなじられた。テロアニュ・ド・メリクールというまるで女優ナナを連想させるような人物までいたのだ。尤も最後は天然痘ではなく、養老院で狂い死にしたという話だが。また、マノン・ロランについては、その尊大さという実像が、つつましきさというこれまでの仮面から立ち現れるのを、初めて知った。やはり革命のヒロインは、マリー・アントアネットをしのいで、このロラン夫人なのかも知れない。

――ともかくこのように、革命の時代に生きた彼らや彼女たちの姿に思いめぐらせるのが、ぼくは好きだ。もう、その怒濤のような時代が去って二世紀になろうとする。しかし、その二世紀は、とても長い距離のようにぼくには思えないし、たといそのあいだにあの時代――ブルジョアの文化が栄えた十九世紀をはさんだとしてもなお、ぼくの間には、まるで膚に触れるように、その息吹が感じられて来るのだ。その彼らの行動と思想は、今も彼らの息吹と共に、ぼくの間の中に生き、今後も長く生き続けて行くことだろう。彼らの誰が好きだというのではない。あの長い騒乱の時代を抜け抜けと生き通し長らえ、大往生を遂げたタレーラン、「本当の幸福は革命以前に生きた人間でないと分からない」とぼくそえんだあのタレーランも含め、ぼくには、彼らすべての生き様が興味の対象なのだ。彼等の動き、涙や血やどよめきが、この静かな自然の中にさえ、ぼくの間には伝わって来、しばしそれらがうごめくままに、ぼくは昼下がりの午後注意を留めるのである...

第2章

その日の朝、ぼくは早く出発した。五時過ぎにはもう家を出たろうか？ 家を出発したとき、まだ周囲はほの暗く、ようやく夜明けの最初の明かりがさし込むように、ひっそりと静まり返っていた。庭の花や、道端の草が、無言のままそよ風に揺れていた。しばらく留守にするぼくの家を振り返ることもなく、荷物も至って簡単にして、ぼくは家を後にした。

三十分程歩いて最初のバス停留所につき、そこから駅までまた三十分も揺られなければならなかった。しかし、予定通り七時八分発の急行列車には十分間に合うことができた。ぼくは、駅で新聞と雑誌を買い、窓際の自分の座席に坐った。朝が早いせい、この客室に他に乘って来る人はなく、ただひとりでゆったりと部屋を占めることができた。

五時間の列車の旅は、長いようで短くもあった。終着駅が近づいて来たのを知ると、人々はあわただしく降車の準備をした。或る人は、コートを取り、また、雑誌をかばんの中に詰め込んだりした。

そうしているうちにも、のどかな田園風景とも終わりを告げ、列車が街の中に入ったことを告げた。鉄道の傍らに生える草木を通して、静かなたたずまいの家々や、ひと目でそれと分かる尖塔のある立派な建物などが、見え隠れして来た。やがて、鋼鉄の陸橋の下をくぐると、他の路線と入り乱れ、線路の数がやたらと多くなって来たと思うや、駅はもうすぐ目の前だった。ここが、リサが半年以上も前、あの田舎から出て来て最初の足を踏み入れたところだと思うと、なんとも言えない気持ちがあった。しかしこの日、日ざしは明るく、彼女と初めてこの街で会うには理想的な日和となった。やがて列車はスピードを落とし、静かに構内に入って行き、ゆっくりとその歩みを止めた。腕時計は、きっちり十二時をさしていた。人々が室内から通路に出て行った。リサは約束通り、迎えに来てくれているだろうか？

商用やその他の用件で来た人々のあとをぞろぞろと歩き、プラットホームに降り立ったが迎えに来ているらしい人の姿は見られなかった。ともかく彼ら乗客にならって、構内に向かってぼくも歩き始めた。年をとった人、傘を持っている人、アタッシュケースを下げたひげの男、ジャンパーを着、ジーンズをはいた若い娘など、思い思いの姿で歩いて行く彼らの後を歩いて行くと、駅の構内の柱のところに、こちらを向いて立っている、コートを着た若い娘の姿が、歩いて行く彼らのあいだに認められた。彼女はしきりに、こちらの方を向いていたが、目的の誰かはまだ見つかっていないらしい様子だった。初め、髪の毛を少しカールさせた恰好の良いその娘が、ぼくのリサだとは、ぼく自身も気が付かないほどだった。しかし、次第に近付き、構内の薄明かりの中に浮かび出たその娘の顔を見て、初めてリサだとぼくには分かった。丁度、構内の大時計は十二時三分をさしていた。彼女もぼくと時を同じくして、ぼくの存在が分かったらしく、急いでぼくの方にやって来た。

ぼくは、かばんを床に置き、そんなリサを両手で歓迎した。

“やっと来てくれたのね”と、リサは、ぼくを見つめながら歓迎の言葉を述べた。

“この通りやって来たさ。あの田舎から...”と、ぼくは、にっこりしながら、彼女の両手をしっかりと握り、言った、“ここは初めての都会だ。右も左も分からないのでよろしく...”

“あれから随分なるわね”と、リサは、つくづくとぼくを見つめながら、言った、“寂しかったわ。でもこれで安心...”

“あれれ。ぼくに会うと急にホームシックにかかったのかい？”と、ぼくは言った、“今まで楽しくやって来たんじゃないか、なかったのかい？”

“そうじゃないの。仕事の楽しさと、寂しさとは別よ”と、リサは答えた、“一人で都会に暮らしていると、寂しくなるときもあるわ。一一とりあえず行きましょ。タクシー乗場はこちらよ”

ぼくは、リサをもう一度抱き締めると彼女を離し、床に置いてあったかばんを取り上げると、案内するリサのあとに付いて行った。

薄暗い駅の構内を通り抜けると、もうそこは、まぶしいばかりの日がさす都会だった。バスやタクシーや乗用車がハデに動き回り、人々が忙しそうに歩いていた。リサは、ぼくと並ぶようにして歩いた。

“汽車の旅、疲れたでしょ”と、リサは言った。

“いや、それほどでもなかった”と、ぼくは答えた、“雑誌を読んだり、朝が早かったから少しうたた寝もした。でも結構、時間が経つのが早かったよ”

“そう、退屈しなくて何よりよ”

“一一それよりもお前”と、そのとき、ぼくは気にかかっていたことを言った、“変わったね、この半年ほどのあいだに...”

そう言うと、彼女はにっこりして振り向き、ぼくを見た。

“そんなに変わった？ 自分では気が付かないけれど...”

“変わったよ”と、ぼくは語気を強くして言った、“髪の色も、以前はそういうじゃなかった。初めお前を見たとき、どこのお嬢さんかと思間違ったほどだ”

“ああ、この髪の色ね”と、リサは、自分の髪に手を当てて言った、“友だちに紹介された美容院でやってもらったのよ。以前と比べてどう？ 気に入らない？”

“いや、よくなったよ”と、ぼくは素直に認めざるを得なかった、“前よりも引き立って見えるよ。それに、コートの好みも変わったようだ”

“都会に住んでいると、いろいろとね”と、リサはにっこりしながら答えた。

“いずれにせよ、以前に比べて大人になったという気がするよ”と、ぼくは、リサを見つめながら、言った、“それにしても、こんなにきれいになったお前を見ることができるということは、嬉しいことだね...”

“さあこちらよ、兄さん、タクシーが止まっているわ”

そう言ってリサは、ぼくをタクシーの方へと呼ぶのだった。

ぼくたちはタクシーに乗ったが市内見物というわけでもなかった。リサは乗るとすぐ運転手に行き先を告げた。

“さっそくだけど、いい店があるの”と、リサはぼくに言った、“料理もいいし、インテリアもなかなかのものよ。ゆっくりと食事ができて、いいところよ”

“お任せするよ”とぼくは、それについてはそっけなく答えた、“ともかくこの街は初めてなんだからね。何もかもお前に頼る他ないのさ...”

タクシーは、人々や車でめまぐるしい街の中へと走り出した。古い物と新しい物とが入り乱れた街――どこかで見たことがあるようで、どこにも見たことのない街の特徴がそこにはあった。古い建物と新しい建物とが、別に違和感もなく、調和し合って建っている。ぼくにとっては久々に見る街の活気と、漂う街の臭気だった。

“どう？ 賑やかでしょ”と、リサは嬉しそうに言った、“ここであたし、暮らしているのよ”

“じゃ、どこに何があるのか、だいたい分かっているんだね”と、ぼくは言った、“それで、お前の言うレストランは、遠いのかい？”

“いえ、もうすぐよ”と、リサは答えた、“食事をしたら、ちょっと市内観光をして、それから、あたしのアパートに来てもらうわ”

“今晚はお前のアパートに泊まらせてもらって、かまわないのかい？”ぼくは尋ねた。

“いいのよ、田舎に帰った友だちにもそのことを言ってあるから”と、リサは答えた。

“じゃ、すべてはお前にお任せするよ”と、ぼくは、目の前の移り変わる景色を見ながら、言った、“それにしても”と、ぼくは続けた、“久し振りに都会に来ると、やはり随分田舎とは違うという感じがするねえ...”

リサは、ぼくの横でにっこりと、ぼくの話しを聞いていた。

“でも、都会にお前がいてくれるから、今回は安心だよ。本当に久し振りさ、お前と会えたのも...”

“会えて嬉しい？”と、リサは尋ねた。

“もちろんだとも”と、ぼくは答えた、“こんな都会で、元気にやっているお前の姿が見られて何よりさ。――でも見違えるほどきれいになった。服装もセンスがよくなったし、何よりもその髪の毛さ。お前の顔にピッタシで、前よりもずっとよくなったじゃないか”

“そう？ 褒めて下すってありがとう”と、リサは答えた。

“ホラ、ぼくにもう一度よく見せてよ”と、ぼくはタクシーの中で、リサの頬に手を当て顔をこちらに向かせた。

前のように長く肩まで垂らした髪の毛ではなく、耳のあたりまで短くして軽くカールをさせた彼女の髪型が、彼女の顔にいかにもよく似合っていた。また、コート陰からのぞく、少女っぽい白いブラウスにカラフルなネッカチーフを巻き、いかにも洗練された都会風のスタイルが彼女のセンスの良さを感じさせた。

実際、今年の夏の夜ぼくの田舎を去ってから半年ほどのうちにこうも変わってしまうのだとは、大きな驚きだった。尤も彼女がモデルとして掲載された初期の頃の雑誌は、彼女がしている仕事の証しとしてぼくの家にも送り届けられていたが、それはあくまでもフォトの上でのことで、実際までも変わってしまっているとは、思ってもいなかったのだ。でも、変わったリサがそこにいた。彼女も服装や髪の毛で変身を遂げてはいたが、しかしそこにいたのは間違いなくあのリサだった。

“でもそうして、前よりも悪くなったんじゃないか、お前らしさが一層際立って来たんだからいいじゃないか”と、ぼくは、彼女の総体を評して言った、“それに、前よりも女らしくなったような気がする...”

“なんとでも言って。今のあたしはこうなんだから”と、リサは悪びれずに言った、“ああ、着いたみたいよ”

タクシーは落ち着いた店の前で止まった。彼女が料金を払い、ぼくたちはタクシーから降りた。ぼくは、ちらっとレストラン名が書かれた表看板を見ると、先に進むリサに付いて、薄暗い雰囲気の中にシャンデリアの輝く室内へと入って行った。

白いテーブルクロスに黒光りのした椅子という取り合わせの席に、やがてぼくたちは坐った。リサの勧めに従い、ぼくは給仕にロースト・ビーフを頼んだ。やがて運ばれて来たワインの最初のひと口が、ぼくの舌に心地よく響いた。

“リサは、毎日こういう食事をしているのかい？”と、ぼくは、ほろ酔い気分になりながらリサに尋ねた。

“まさか”と、リサは言った、“でも、時々友だち同士や、その他のお付き合いでこういうレストランには来るわ。相手が男の人ならおごってもらうこともあってよ。——でもそうでないときは、家で料理を作ったり、簡単な食事を買ったりして済ませているわ。今の給料じゃとてもぜいたくな暮らしはできないわ”

“でも、田舎にいたときよりはずっといい給料をもらっているんだろ？”と、ぼくは尋ねた。

“物価が高いからね”と、リサは答えた、“とにかく都会で一人で暮らすことができ、それにちょっとぜいたくをすることのできるぐらいの給料はもらっているわ”

“確か電話では、雑誌の編集の仕事をしているということだったね”と、ぼくは言った、“具体的にはどういうことをしているんだよ”

“記事を集めたり、編集したり、いろいろよ”と、リサは答えた、“街に出て取材に行くこともあるわ”

“取材にね”と、ぼくは感心したように言った、“じゃインタビューか何かをするのかい？”

“そう”と、リサは事もなげに答えた、“でもたいていはあらかじめ行く所が決まっていて、そこで話を取材してくるだけですむのよ”

“なるほどね”と、ぼくは言った、“で、その仕事、楽しい？”

“楽しいというより、忙しくて大変よ”と、リサは答えた、“でも、やりごたえのある仕事ではあるわ”

“それ、何んていうファッション関係の雑誌だったかな”と、ぼくは尋ねた。

そこで、リサは初めてにっこりと笑った。

“余り名の通った雑誌じゃないのよ”と、リサは言った、“でも大ていの大きな書店には出ていてよ。***という雑誌。男の人には余り関係がないけれど、兄さんもよければ買ってね”

“婦人向き雑誌なんて恥ずかしくて買えないよ”と、ぼくは困ったように、にっこりして答えた、“ところで話は変わるけど、最初勤めると言っていたカメラマンのスタジオの助手の仕事、あれはやめてしまったそうだね。何かあったのかい？”

そのことに話を切り変えると、リサは急に沈んだ表情になった。さっきとは打って変わったように、そのことには余り触れて欲しくないような顔つきだった。

“余り面白くなかったのかい？”と、ぼくは言った、“話したくなければ、別に話さなくてもいいよ”

“いいえ、そうじゃないの”と、リサは、やっと話す決心がついたらしく、口を開いた、“実は、最初は、ファッション雑誌のモデルだって約束だったのに、随分とお粗末な話しだったのよ。ここへ来てみて、初めてそれだけじゃ生活できないってことが分かったのよ。もちろん最初は、十分にやって行けるという甘い誘いに乗ってしまったわけよ。それで抗議もしたわ。でも、そんなことしたってどうにもならない。それで、スタジオの仕事を飛び出してしまったというわけよ”

“それで、どうしたの？”と、ぼくはさらに尋ねた。

“最初は、すぐには仕事が見つからないから、泣く泣くあの人を頼ったわ”

“あの人って、ルナールのこと？”

“そう”と、リサは頭を振った。

“で、何か仕事を見つけてもらったのかい？”

“だから、最初はお粗末な仕事ばかりがころがり込んで来るの”と、リサは言った、“中には、兄さんが心配していたヌードという仕事もあったわ”

“で、裸になったのかい？”と、ぼくは尋ねた

リサは、視線をそらせるように顔を伏せた。

“だって仕方がないでしょ。生活する為ですもの”と、リサはやがてポツリと答えた、“でも、それもほんの数回だけよ。間もなく、これではダメで、自分に合った仕事を捜さなくちゃならないって思い始めたわ”

“でも数回、お前の裸を撮った奴がいるんだな”と、ぼくは言った、“ルナールって奴かい？”

“彼じゃないわ”と、リサは否定した、“彼はただ紹介しただけで、スタジオにも行かなかったわ”

“でもその写真、何に使われたんだい？”と、ぼくは言った。

“知らないわ”と、リサは答えた、それから懇願するように、彼女は言った、“お願いだから、この話しはこれ以上しないで。思い出したくないの。――初め、兄さんにこのこと、話すかどうか迷ったわ。でも、やはり本当のことを話すことにしたし、これで正直に言ったわ。だから兄さんもこれ以上、余り深く追求しないで。心配していたことが現実起こったことは事実だし、今さらどうすることもできないわ”

“分かったよ”と、ぼくは答えた、“お前が自分の意志で決めたこと――それについてぼくはとやかく口出しはしないさ。分かったよ、今のことはもう、聞かなかったことにしよう...”

しかしぼくがそう言ったからとて、その姿に似合わず、彼女の暗い、沈んだ表情は変わることがなかった。それで、ぼくは逆に、彼女を励ますことにした。

“何がヌードさ”と、ぼくは語調を変えて言った、“生活に困っていれば仕方ないじゃないか。それに、今日、誰もが裸になる御時世じゃないか。何、少しぐらい裸になったって、どうってことなんかない。むしろ逆に、ぼくはお前の裸の写真を見たいぐらいさ。――そんなこと、くよくよする問題なんかじゃないんだ。むしろ、若くてきれいな娘にとっちゃ、裸は強力な武器さ。男にとって、体力が武器となるようにね。それを利用したからと言って、とがめられる筋合はどこにもないさ。要は、本人の自覚――それを撮ってもらうのがいいというのならそれもいいし、いやならさっさとやめてしまう、ただそれだけにゆだねられるのさ。だからお前が早くもやめてしまったのは、それなりに評価されることなんだ。どうだい？ 少しは心が休まったかい？”

リサはようやく、ぼくに目を向けて、うなずいた。

“兄さんがそういう風に言ってくれて、嬉しいわ”と、リサは答えた、“いずれにしても、このことはもうこれ以上、話さないで。よし悪しはともかく、余り触れて欲しくないの”

“分かったよ”と、ぼくはリサの目を見て、言った、“ぼくは、お前のことを、ちっとも何も思っちゃいないさ。以前と変わらないリサだ、としか思っただけだよ”

“そう、嬉しいわ”と、リサもやっと元気を取り戻して言った、“あたしのことはもうこれくらいにして、ね、話題をもっと他のことに変えない？”

“賛成！”と、ぼくも、彼女に同調した。

しかしぼくは、この可愛いリサを裸にした奴が、内心羨ましくてならなかった。どんな写真ができ上がったのだろうか？ 全裸なのか、一部隠しているのだろうか？ そしてどんな雑誌の写真に掲載されたのか？ 彼女の口からはもう何も聞き出せなかったが、彼女の裸を前にした奴と、とって変わりたいような気さえした。いずれにせよ、そのリサが、きれいな着こなしで、ぼくの前にいた。ぼくはほんの少しのあいだ、その衣服の下に隠されている彼女の肉体のことを思った。

“それで、兄さんの生活の方は、相変わらず？”と、リサは話題を変えて、ぼくに話しかけて来た。

“そういうところ”と、ぼくは答えた。“田舎にいれば、毎日がゆっくりと、時が流れて行くよ...”

“羨ましいわねえ、のんびりできて”と、リサは笑顔になって言った、“ここにいと、そうもできないわ。あつというまに時が過ぎてしまうし、一日なんて本当にすぐよ”

“でも、お前にとっちゃその方がいいんだろ？”と、ぼくは言った、“お前には、ぼくのような生活は無理さ...”

“まあ、無理なようね”と、リサははっきり言った、“やはりあたしは、この生活の方が向いていて、田舎の生活は向いていないみたいね。――でも、ときには、すごく田舎の生活が恋しくなることもあるのよ”

“本当かい？”と、ぼくは、驚いたように彼女を見た。

“でもあいにくそんなときは仕事が忙しくて... 人生って、なかなか思うようには行かないわ”

そう言ってリサは、自分を嘲笑するかののように、にっこりした。

“じゃ、当分は田舎に帰ることはなさそうだね”と、ぼくは言った。

“今のところはね”とリサは答えた、“でも、あそこはいいところよ。あの辺の景色は全部今でも覚えているわ。――今の仕事が一段落すれば、帰ってもいいわ...”

“いいよ、無理に帰って来なくても”と、ぼくは、冷たく言った、“お前が今の生活がいいと思うなら、それを続けるがいい。田舎のことは、気軽に考えればいいのさ...”

“でも兄さん、田舎にいて寂しくはない？”リサはやっと、本音のところをぼくに尋ねた。

“寂しくはないさ”と、ぼくは、ごく自然に答えた、“本がぼくの友だちだからね。――でも、全く寂しくないと言っても嘘になる。孤独な生活には慣れたが、やはり時々訪れる寂しさには勝てそうもないね...”

“じゃ、時々遊びにいらっしゃいよ”と、リサは優しく言った、“ここにいればきっと気も紛れるわ。兄さんがその気なら、いつでも大歓迎よ”

“そう言ってくれてありがとう”と、ぼくは答えた、“でもぼくは、知っての通り都会生活は苦手さ。お前と違って、静かな田舎暮らしの方がぼくには向いているんだ。――でも、今の言葉は忘れない。気が向いたら、またお前のいるところへ寄せてもらうよ”

“いつでも好きなときに来て”と、リサは、ほほえみを浮かべてぼくに言った、“だって兄さんは、あたしの兄妹だもの。ここでひとりで暮らしていると、あたしだって寂しい気がすることもあるわ。人には余り見せないけどね、本当は寂しいのよ。兄さんが来てくれれば、あたしも嬉しいわ”

“――でもそのうち、もうぼくを必要としない、いい相手を見つけるようになるさ”と、ぼくはリサの目を見つめながら、冷静に言った。

“もう、そんな意地悪な見方をしないで”と、リサは笑顔を絶やさず、抗議するように言った、“仮によ、いい人が見つかったとしても、兄さんは兄さんよ”

“でも、その中味が変わるさ”と、ぼくはなおも皮肉を続けた。

“意地悪ね”と、リサは、子供っぽく言った、“兄さんらしくないわ、そんなこと言うの”

“そうかい？”と、ぼくは答えた、“――いずれにせよ、これから先のことは誰にも分からないさ、ぼくにも、そしてお前にも...”

“でも、ある程度、計画みたいなのはあるんでしょ？”と、リサは尋ねた。

“あるさ”と、ぼくは答えた。

“じゃ、その方を聞かせて”と、リサは促した。

“前から言っていることさ”と、ぼくは言った、“ぼくは本を書こうと思っている。ぼくの生たちなんかをね。別に読む人が誰もいなくたっていいのさ。ぼくは自分の為にそれを書く。今となっちゃ、ぼくにできることと言えば、それしかないんだ...”

“でも、そのことを言ってからだいぶなるわね”と、リサは皮肉めかせて言った、“少しは書いているの？”

“それがまだなのさ”と、ぼくは正直に答えた、“今はいろいろと資料を集めることに追われているんだ。――というの、自分のことを書くことができる為には、まず人のことを知ることが必要だからね。人、と言ってもお前やセーラのことじゃない、かつて歴史上に存在した様々な人のことさ。まず、彼らについて研究し、彼らが歴史とどういう風にかかわり、生きて行ったかについてまで知る必要があるんだ。そうでないと、自分と、この歴史との関係について、何も書かなくなってしまふからね...”

“随分と難しそうね”と、リサはお手上げといった風に答えた、“――でも、兄さんの書いた本を読む人が、最低ひとりはあるわ。このあたしよ。それに、姉さんや、ママもいるかも知れない。その為にも頑張って―― 出来上がるのを期待しているわ...”

“でも、完成するのはいつのことになるか分からないよ”と、ぼくは言った。

“いいのよ。それまであたしは、待っていますから...”とリサは、ぼくに微笑みながら、答えるのだった。

ぼくたちは、食事を終えてからそのレストランを後にした。空はあれほど晴れていたのに、いつの間にか雲が張り出していた。変わり易い一日だ、とぼくは外に出て、空を見上げながら思った。天候の急変で急に風が出て来たようだった。もうすぐ雨になるかも知れない...

“で、これからどこへ行くんだい？”と、ぼくは街路に立ち、振り向いてリサに言った。

リサは、その女学生っぽいスカートを風に震わせながら、ぼくを見つめた。

“天気が悪くなって来たようねえ、美術館にでも寄らない？ いいところがあるのよ”

ぼくは、彼女の提案に賛成した。

すぐ近くに、地下鉄の乗り口があり、ぼくたちは地下鉄で行くことにした。

美術館は、こんなとき時を過ごすのに丁度良かった。中世から現代にいたるまでの名画が各室ごとに置かれているその様は、壮麗でもあった。中世のイコン画。ルネッサンスの巨匠たち、レオナルドやジョルジョーネの絵画、さらにはワトーの、フラゴナールの、装飾的壁掛けを思わせる美術、そしてぼくの好きな印象派の美術の諸ター— それらを見て回るのにたっぷり二時間はかかったろうか... リサもよく、そんなぼくに卒抱強くついて来てくれたものだった。

美術館を出たとき、空はまだ灰色のままだったが、通り雨はやんだようだった。街路はぬれて、そのままだった。人々が、どこへ行くともなく、歩道を行き交っていた。ぼくたちも、その人々の中に吸い込まれて行った...

ぼくたちは、別にこれといった当てもなく、歩道に並ぶ店のショーウィンドーなどを眺めながら、ゆっくりと歩いた。すれ違う人々や、ぼくらと同じ方向をせわしく歩いて行く男。それも、この都会の光景の一つだった。

“いよいよ都会へ来たという思いだね”と、ぼくは、並んで歩くリサに言った、“きのうまで田舎に住んでいたなんて、信じられない...”

“正確にはけさまで、でしょ？”と、リサはにっこりしながら答えた。

“そう。けさまで、だった”と、ぼくは言った、“けさまでぼくは、ここでは信じられないくらい静かな田舎に住んでいたんだ。一体どうなっているんだろうね”

“どうなっているって、別にどうもないわ”と、リサは笑いながら言った、“兄さんは、汽車に乗ってこの街に来ただけよ。そりゃ、ちょっとしたショックはあったと思うけど...”

“ちょっとしたショックどころじゃなく、まだ夢が覚めやらぬといった心境さ”とぼくは少し冗談めかせて言った、“神秘的な国より、いきなりあわただしい国へとやって来たんだからね。—でもぼくにはやはり、神秘の国の方が良さそうだ。この街では唯一つ、あの早く移動して行く雲が、その国のことを告げているよ。早く、田舎へ帰ろうって— ぼくにはやはり、魔法や、童話や、子供だましの世界の方が向いているんだ...”

“兄さんって、昔と少しも変わっていない...”と、リサはひとり言のように言った、“兄さんの言うような国って、確かにここにはないわ。ここには、ただ現実しかないわ。—でも田舎に行けば、田舎にはまだ、妖精がいたり、悪魔がいたり、魔法使いがいたりするって、そう言いたいんでしょ？”

“そう、それが存在することが信じられるのさ”と、ぼくは答えた、“そしてそのことの方が、この都会の仮のきらびやかさや、物質的豊かさによるよりも遥かに、ぼくの精神を豊かにしてくれるのさ。...ぼくは都会に来て、感動を味わったことは一度もないんだ。昔の幸せな時期を思い出すこともなければ、思い出すのはせいぜい、まだセーラがいた頃過ごしたあの苦い都会暮らしぐら

いなものさ...”

“でも、都会暮らしもそう捨てたものじゃないわ。特にあたしみたいな者にはね”と、リサは言った、“田舎は、あたしにとっては寂しすぎるわ”

“お前がそう言うのは分かるさ”と、ぼくは言った、“お前とぼくとが行く道が違ってても、それはそれで別に差し障りのないことなんだ...”

風が出て、街路樹が震えたと思うや、間もなくして再び雨が降って来た。雨に打たれたのはこれが初めてだったが、雨具の備えのなかったぼくたちは急いで、雨の避難場所を捜さねばならなかった。避難の途中、ぼくもリサもかなり雨にぬれてしまったが、石造りの見知らぬ建物の軒を見つけ、ぼくたちはその下に避難した。

雨宿りをすると、ぼくはポケットからハンカチを取り出し、自分の濡れた上着の肩などを拭いた後、横にいるリサに気づいた。リサもかなり濡れたらしく、せっかくの髪の毛も、女学生風の服装も、惨めなものになり果てていた。ぼくはリサに、少し濡れたハンカチを渡そうとしたが、彼女は、自分のバッグの中のハンカチで、濡れた部分を拭き始めた。濡れた衣服が彼女の膚にピッタリと付き、胸の当たりの部分が透けて見えそうなのが、ぼくを驚かせた。リサは、肩を拭き、スカートを拭き、足の下までハンカチで拭いた後、体をしゃんと伸ばした。そしてひと言、“いやな雨”と、暗い空を見上げながら言った。

もう通りには、傘を持った人以外、誰も歩こうとはしなかった。不意打ちの雨の為、たいていのは、ぼくと同じように、どこかに身をひそめ動きが取れなくなってしまっていた。

“しばらくこのまま、待つ他ないらしいね”と、ぼくも、路上をはねる雨しぶきが足にかかるのを気にしながら、リサに言った。

しばらく、沈黙の時が流れた。街中が、少し離れた向いの建物も、記念碑的な建物の正面玄関も、庭に植わった樹木も、雨に打たれ、霧のような白い雨けむりをたてていた。静かで、時折り、赤い色の車が走り過ぎて行くだけだった...

“都会が沈黙した”と、やがて、ぼつりとぼくは言った、“まるで水爆か、何かを受けたときのようにね。こんな都会の方が、ぼくは好きさ...”

リサは、そんなぼくを見つめた。

“兄さんは今でも、奇蹟のようなものを信じているの？”リサは、不意にぼくに尋ねた。

“どうしてそんなこと聞くんだい？”と、ぼくは、リサを見て言った。

“だって”と、リサは言った、“昔、いつとき、奇蹟にこだわっていた時期があったじゃない。何かあるごとに、あたしに、「奇蹟」ばかり言っていたわ。そのときのことを思い出したのよ...”

“無論今でも、ぼくは捨ててはいない...”と、ぼくは答えた、“ぼくにとって、この世は神秘で、謎に満ちている。だって、分からないことだらけだからさ。”

そもそも命って何んだろう？ 生命って？ 「奇蹟」というものは、分からないぼくに、ひとつひとつ明らかにして行ってくれることなんだ。生命の秘密。生命の鍵のようなものをね。それは、DNAや酢酸や、そういうものじゃない。そうじゃなくて、生命のもっと明るい、神秘の部分なのさ。ただ、詩人や芸術家たちだけが見抜くことのできたそういう部分なのさ。そしてもし、「奇蹟」というものが、そういうものをひとつひとつ明らかにして行ってくれるものなら、ぼくは、そういうものとしての「奇蹟」を信じるな。それは、生命の神秘を明らかにしてくれるんだ...”

“兄さんは一種の神秘主義者ね”と、リサは言った、“そういう人生は、現実には適さない...”

“現実に適す、適さないはどうでもいいんだ”と、ぼくは言った、“要は真理なんだ。自分にとって真実なものを見出す— 人々の生き方と多少ずれたとしても、ぼくにはそういう生き方しかないんだ。例えば、つい最近の話しだけど、大空にそびえる長い長い滑り台を夢に見たんだ。そこに登るにも時間がかかるし、滑り降りるまで十分ぐらいはかかりそうだ。ぼくは、その長い滑り台を、誰かに追いかけられるようにして、滑り降りなければならぬんだ... その夢は、一体何を意味しているのだろうか？ ぼくは、あの高名な精神分析学者ユングに習って、その夢の分析をしたい気にかられることもあるんだ...”

“ユング...”と、リサは、不可解な顔をして、ぼくを見た、“その人がどういう人かは知らないけれど、兄さんが昔と少しも変わっていないことは確かね。 — 兄さんは恐らく、精神の病を得ているのよ...”

“ぼくがおかしいかい？”と、ぼくはリサを見て言った、“難しいことを言っているようだけど、ぼくだってごく自然に、例えば風にそよぐ植物が好きさ。雨にぬれたその葉の緑や、花粉をつけた花の周りを飛ぶ蜜蜂を見たりするのがね。それにまた、女の子を見るのが好きさ、特にお前のようにきれいな女の子を見るのがね...”

“そう言って、あたしを口説こうとするやり口も、昔と変わっていないわ”と、リサは言った、“何もかも昔のまま。昔の兄さん、そのままよ...”

“ぼくは変わりたくない”と、ぼくは言った、“お前が変わって行くのは勝手さ。それに、世の中もね。それは、仕方のないものさ。 — でも、ぼくは変わりたくはない。たとえあのときから、何年も年を重ねて行くことになろうとも、せめて心の中では、不動の一点のようなものを保っていたいんだ。少しも変わろうとしないぼくに不満があるんなら、不満を言うがいいさ。しかし、ぼくにはどうすることもできない...”

“何も不満があるわけじゃないわ”と、リサは言った、“ただ心配なだけよ、年を取るのをやめてしまった兄さんが...”

“人は、ほっておいても年を取るさ”と、ぼくは、にっこりして答えた、“ただぼくは、みんなと違ったやり方で年を取るだけなんだ。 — ぼくは、自分の真理を見つめ、片時もこれを忘れることなく、そうして年を取って行きたいと思っているのさ。その人生に、他の人々のようなドラマも波乱もないかも知れないが、それは仕方のないことなんだ...”

“でも、まだまだこれからじゃない？”と、リサは言った、“雨が降り続けているからつい陰気なことを考えてしまうのよ。都会にいれば、そんなことなくなるわ。変化に富んで、忙しくて、でもそれだけじゃなくて、そんな中から、未来の姿や、展望などが見えてくるわ。何をすればいいのか、それが分かってくるのよ”

“リサが言わんとすることは分かるさ”と、ぼくは言った、“確かに都会は楽しくて、誘惑に満ち満ちている。――でも、落とし穴もある、ということも忘れてはならない。かつてぼくが引っかけたのはこの落とし穴だったんだ。ぼくが言いたいのは、せいぜいこの落とし穴に落ちこまないように気を付けることだ、ということさ...”

“それは、気を付けているわ”と、リサは言った、“あたしだって、惨めな暮らしはいやだもの。――一兄さんも、未来に希望を持って、そうして生きて行くように頑張ってるね”

雨はなおも降り続けていた。いっこうやみそうもなかった。ぼくたちは、石の軒下に立ったまま、うっとおしい空を見上げた。

“こんなとき、救いの宇宙船でも来てくれればいいのにね”と、ぼくは言った、“そして、ぼくたちを乗せて、遠い惑星にでも連れて行ってくれればいいんだ、もうこういう苦しみの味わうことのない...”

“あら、でもあたしは御免よ”と、リサは言った、“あたしにはまだこの街に未練がありますからね。まだまだやらなければならない仕事があるし、やりたい生活もあるわ。あたしは別にこの惑星に踏みとどまっても後悔はしませんから...”

“今の言葉、よく覚えておくよ”

そのうち、雨も小降りになって来たようだった。植え込みの葉の上に水滴が落ちる頃、ようやく雨も止んだようだった。あたりは薄暗く、雨に濡れた緑の葉が、まるで悲しむがごとく、風に揺れていた。迫りくる夕闇が、その暗い光を、その葉の輪郭に、建物の角に、街路の上に、そして、記念館の屋根の上に、投げかけていた。ぼくたちの避難していた軒からの雨のしたたりも、ようやく息をひそめた。地面は暗かったが、まだ空には薄明かりが残っていた。

“ホラ、雨がやんだよ”

ぼくは、雨が運んだ急の冷たさをひしと膚に感じながら、空を見上げ、ようやく雨のやんだ通りに向かって、リサの手を取るようにして、最初の一步を歩み出した...

リサの住んでいるというマンションは、都心部の少し離れた川の近くに、他の建物より一段とそびえたようにポツンと建っていた。もう空は薄陽が射すぐらいに暗く、中空にそびえるマンションのあちこちに窓明かりがともっていた。ぼくは、リサに案内されるまま、そのマンションを見上げ、それから明るい玄関ホールに向かって、歩いて行った。

“あたしの部屋は9階よ。夜景がきれいわ”とリサは言った。

“エレベータで行くのかい？ 以前、ぼくらが住んでいたアパートとは大違いだね”とぼくは言った、“でも、家賃も結構高いんだろ？”

“あたしひとりじゃ払いきれないわ”とリサは言った、“友だちと二人で借りているからなんとか払いきれているのよ”

“そうかい。建物もなかなかモダンでいいね”

ぼくたちは一緒にエレベータに乗った。他に人が住んでいるのか、人影は全く見られなかった。エレベータの中は明るく、リサはじっと階数を知らせるランプが順次ついて行くのを見守っていた。

“初めてだね、お前の家に招待してもらうのは”とぼくは、エレベータの中で立っているリサを見つめて言った。

“着いたわ。9階よ”とリサは、表情を変えることなく言った。

エレベータのドアが開くと廊下があった。それが、いくつもの部屋のドアのあいだに延びていた。

ぼくは、リサが行く後ろに付いて行った。ついに彼女はあるドアの前に立ち、ハンドバッグから取り出した鍵でドアをあけ始めた。ぼくは、リサがそうしているあいだ、ドアにとり付けられた部屋ナンバーを見たが、それには「902」とあった。

ドアが開き、真暗な部屋が現れたが、すぐリサは明かりのスイッチをつけた。窓にブラインドを降ろした奥の部屋がぼくの目に飛び込んで来た。

ぼくは、リサに続いて部屋に入った。明るい照明。そして、明かりはついていないが、ムードあるランプ・スタンド。壁にはモダンな絵が掛けてあり、机には、ポーズをとったリサ自身の額入りの写真が、無造作に置いてあった。ソファも、絨毯も、家具も、全体として小ぎれいに、きちんとまとまっていた。無駄がなく、すっきりとして、気持ちが良かった。

“これがあたしたちの居間よ。よければ、くつろいでね”

リサはそう言うと、服を着替えるべく、自分の寝室に向かった。

ぼくは、窓際に歩み寄り、シャッターをあけた。すると、素晴らしい都会の夜景がぼくの目に飛び込んで来た。ビルの谷間の、ヘッドライトの点滅が、ここからよく見渡せた。ぼくが着いた駅のある場所はどこの方だろう？ ぼくは、夜の明かりが放つ素晴らしい夜景に、しばらくじっと見とれていた。

それから再び室内に目を通すと、ぼくは部屋の探検に出掛けた。

“これが浴室かい？”と言って、ぼくは浴室のドアをあけ、明かりのスイッチをひねった。

続いて行ったのは、キッチンだった。明かりをつけて驚いたのは、その清潔さと、機能性だった。

ぼくは、明かりをつけたまま、次の部屋へと向かった。幾つかのドアがあり、そのうちのひとつはリサの友だちの部屋かも知れなかった。

“開けてもいいかい？”と言って、ドアのノブを回すと案外簡単にドアは開いた。

しかし、中から急にぼくの目に飛び込んで来た光景は、ブラジャーとパンツ姿という膚も露わなりサの姿だった。

リサは驚いた顔をして振り向いた。それよりももっと驚いたのはぼくの方で、ぼくは思わずドアを閉めた。

“入るときは、ノックぐらいしてよ”と言うリサの抗議の声が中から聞こえて来たがもう遅かった。ぼくは、リサの裸を早くもこの夜、見てしまったのだ。

“で、ぼくは今晚、どこで寝るんだい？”と、ぼくは、ドアの外に立ってリサに声を掛けた。

“あたしのベッドだよ”と、リサは答えた、“代わりにあたしがポーラの部屋で寝るわ”

ぼくは早くも、リサと共同生活をしているというもう一人の主役に思いを巡らせた。

ぼくのとんでもない間違いにより、もう一つの沈黙しているドアがポーラと呼ばれている少女の部屋のものだと分かった。こっそりと歩み寄ってドアを開けようとしたが、鍵が掛かっている。ドアはビクともしなかった。ぼくはあきらめ、これで部屋の探索は一応終わったので、再び広くて明るい居間に戻った。そして、快さそうなソファに深々と坐る前に、壁にしつらえたキャビネットに近づき扉を開けると案の定、スコッチとグラスとが置いてあった。ぼくは勝手にそれを取り出し、自分でついで、テーブルの上に置いた。最初の一杯は、何んとも言えずうまかった。そうしてグラスを手にしたまま、その心地良いソファに深々と腰を降ろした。

リサが、セータにスラックスという普段着で居間に現れたとき、ぼくはもうほろ酔い気分だった。

“もう一杯、いかせてもらっているよ”と、ぼくはソファに坐ったまま、リサにグラスを見せて言った。

“いいわ。好きなだけやってよ”とリサは、寛容の精神でぼくに言った。

それからぼくをまじまじと見つめると、

“きょうの夕食、軽くていいわね”とリサは言って、キッチンに向かった。

“いいねえ、久し振りにお前の手料理を味わせてもらえるなんて”と、ぼくは、頬を紅潮させて言った、“それだけでもここへやって来たかいがあったよ...”

リサが明るい台所で料理を作っているあいだ、ソファに腰掛けほろ酔い気分になっているぼくの脳裏に、まるで暗い闇の向こう側から突き破って来るかのように、不意にひとりの少女の姿が浮かんで来た。どうしてその少女のことが、ぼくに知れるようになったのかよくは分からない。多分、ずっと昔に、ぼくは街の古書店でその本を見つけ、しばらくそのままにしていたのを、この旅のついでにと持って来て、そして汽車の中で読んだのだ。その書物の題名は、「愛と恐れ」で著作者は、今まで聞いたこともないE、カミュとあった。――ぼくはその本を、列車の出発と共に読み、そして終着駅に着く頃には、読み終えていたのだ。後には言い知れぬ感動と余韻とだけが残っていた――

恐らく、この本の価値や素晴らしさは、それを読んだ人にしか分かるまい。口で語るというわけには行かないのだから。それは、最初の一ページからもうぼくの心を惹きつけ、あとはグイグイとその文章の迫力とみずみずしさによって、次のページへとぼくをのめり込ませて行ったのだ。近頃、こんなに夢中になって読んだ本というものはなかった。というのも、そこには作り話というものはひとつもなく、第二次大戦の最中、肺病に犯された一人の少女の、必死に生きようとする心の軌跡——「愛と恐れ」が書かれていたのだから...

第二次大戦中といえば、もう古い話だ。現在では、戦後はもう終わったとさえ言われている。それくらい古い話しになり、たとえ現在にもその生き残りがいるとしても、その事実は歴史の本に総括されて、それまでの古い歴史と共に、ほこりのかぶった書庫に蔵入りしようとさえしているのだ。歴史の教訓や、その灯し火を消してはならない、といった叫び声も、もう随分小さなものとなり、現代の諸問題や現代病の為、遠く、かき消されようとさえしている。もちろん、第二次世界大戦の有名な少女「アンネ」のことは、今でも誰しもが知っている。しかしそれは神話となり、実際にその時代を生き抜いた少女が実在したのだとはもはや誰れも考えないし、信じもしないだろう。しかしそこへ同じ時代を生きたもうひとりの少女——アンネよりは数歳年上で、娘と言ってもいいくらいの少女だが、その少女がいきなりぼくの前に飛び込んで来、ぼくを驚かせ、ぼくの眠れる心を揺り動かし、当時の記憶へとぼくを覚醒させたのだ...

当時の記憶と言っても、当時の時代についてぼくは何も知らない。まだ生まれてはいなかったのだから。当時の時代については、残された様々な記録フィルム、膨大な文献、様々な証言や、その後作られた数々の映画、ドラマなどによって知るのみである。「一番長い日」とロンメルによって言われたあのノルマンディー上陸作戦についても、ぼくは知っている。その場面に居合わせたわけではないが、推し量ることはできるのだ。

しかしそのような苦難の時代、物資は不足し、人と人々が殺し合うような殺伐とした時代に、運命の皮肉か、その青春を送らねばならなかった数多くの若者がいたのも事実なのだ。「白ばら」のあのショル兄妹がドイツで活動していたのもその時代だった。そして、フランスには、地方のサナトリウムと、セーブルの自宅と、パリの診療所を転々としていた、肺を冒され、明日も知れない運命と必死に戦っていた才能豊かな一人の少女——エリザベト・カミュが、その空気を吸い、その幸福を抱き、その喜びを歌い、生きていたのだった...

そのみずみずしい手紙には、生きる歓びが、人生を享受し、また享受したいと願う、ごく普通の少女の姿が、端々にまで認められる。その手紙の行間に読み取られるものは、あくまでも、彼女が生否定者ではなく、生の肯定者である姿だった。彼女の筆にかかる自然描写のひとつをとっても、それを感じられよう。全く羨ましいくらい、感受性に富んで、みずみずしく、そして才能豊かではないか。彼女は、肺の病にさえ冒されなければ、恐らく人生を幸福に、豊かに生きて行けるはずの少女だった。彼女は、幸福しか信じてはいないし、年を取ることすら信じてはいないのだ。

――しかし全く逆に、病に冒されたからこそ、彼女の才能は開花した、とそういう残酷な見方もできるかも知れない。あの繊細な感性は、病床に伏す者、独特のものだ。健康で忙しい人生を送っている者には気付かないような細い感性が彼女には備わっている。そして健康な体が蝕まれ、もはや皆と同じような生活ができなくなったそのショックを、彼女はその日記の中に、そして手紙の中に語っているのだ。まだ十九になったばかりの彼女にとってそれは、いかに大きな喪失、過酷な運命となつてのしかかつて来たことだろう。――ぼくが、彼女の残した文書を読み進むに当たってまず感じたことはそのことだった。しかしそれでも彼女は、生を信じていた。死にたくはなかったし、死ぬわけには行かなかったのだ。だって人生は、こんなに喜びに満ち、愛にあふれ、生きて行くべき当然のものであったからだ。エリザベートにとって死ぬということは、考えられないことだった。無理もない、彼女はまだ十九で、しばらくして、ある男と婚約すらしている。そして、病に伏した不自由な体で、彼女はその生きがいのすべてを、彼に対する愛にささげるのだ。ぼくは、その愛の不安、愛のいちずさ、そしてその愛の激しさについて、ただ見とれ、感心し、茫然とするばかりだ。それほど彼女の愛は、病床の身であるがゆえに、純粹で、強く、激しいものなのだ。彼女はいつまでも、死を信じてはいない。あれほど何度も手術をくり返し、体は蝕まれ、徐々に衰弱して行っているというのに、そしてその徴候は彼女の体の至る所に出ているというのに... その頃の彼女の書く手紙――恋人に寄せる相も変わらぬ愛と、そして自分の衰弱した描写を読むと痛ましい限りだ。こんな痛ましい手紙、死期が迫っているにもかかわらずそれを信じようとせずただひたすら回復を信じてやまない痛ましい彼女の手紙――こんな手紙をかつてぼくは読んだことがない。そこにはただ、どんなにひどく、惨めな状態（手紙の最後の部分を読めば、それがどんなものか分かるだろう）にあっても、生きようとする彼女の意志――しかもこの上なく崇高な彼女の意志しか感じとれないのだ。才能豊かで、感受性の高かったエリザベートにとって、この意志こそが彼女のすべてであって、しかもその意志は病魔の為、二十四年にして燃え尽きてしまったのだ。まことに不幸な出来事だとしか言いようがない。

ぼくはしばらく、彼女について考えていた。1945年11月、ぼくが生まれる四年も前にこの世を若くして去ったエリザベート・カミュについて、あれこれ思いをめぐらせていた。結局、彼女の不幸はどこにあるのか？ 人は、誰しも死ぬ運命にある。これに例外はない。だとするのなら、彼女の死が特に痛ましいと思われるのは、どこに理由があるのか？ 答えはすぐに見つかった。彼女は、その生を全うしてはいない。少なくとも、生きる意欲にあふれ、生きようと願い、生きる喜びを当然のこのように享受しようと願っていたそのさ中に、死はやって来たのだ。しかしそれだけではない。もしそれだけのことなら、そういう若い死に方をした人々はいくらでもいる。彼女はその上に、その感性を、その「愛」と死の「恐れ」を手紙に書きつづったのだ、しかも誰にもまねのできないようなみずみずしい才能をもって――その才能が十分に開花することなく、中途半端にして失われてしまったということが、他の何にも増して、彼女自身にとっても、残された人々にとっても、痛ましい限りなのだ。

できるものならもっと長生きして欲しかった――彼女に向かってそう願わない人がどこにいるだろう？ そのみずみずしく、また激し過ぎる文章、それをもっと書いて、ついには彼女も願っていたような一つの作品となって結晶することを、ぼくたちも願っていたのだ。彼女の、人一倍、幸福を感じ、それを書き留めることのできた才能――それがどんどんと広がり、作品となり、本となって世に問われる、彼女の願ったそういう時が来ることなく逝ってしまったその事が、ぼくの心を悲しくさせる。

――しかし少なくとも、彼女の作品は残った。手紙という形をしてはいるが、彼女がそこに自分のすべてを注ぎ込んだと言えなくもない。それは、彼女の願った小説ではないが、しかし立派な作品なのだ。しかも小説以上に、人の心を打ち、人に感動を与える作品なのだ。作者エリザベートは、自分の命と引き換えに、命を懸けて、これらの感動的な作品を残した。それは、彼女の愛した紺青の空に空しく響いて行くのか、それとも大地にしっかりと根をおろすのか、ただ残された人々の選択にゆだねられている。

彼女の生きた戦時中は終わり また戦後も終わろうとしている。人々はもう、カミュの名すらその埋もれた古書の陰で、知ろうとはしない。しかし若くして散ったエリザベートは、その時代を生きた自分の生の証を、ただ恋人にのみ語ろうとしたのか、それともその後の人々にまで語ろうとしたのか、それは今となっては永久に隠された一つの大きい謎である...

しばらくしてから、食堂のテーブルの上には軽い料理が並べられた。ぼくは早くもそのテーブルに行き、料理を見て喉をごくんと鳴らした。

“じゃさっそく、このおいしそうなケーキをいただくよ”と、ぼくは言った。

“兄さんはそこで何を考えていたの？”と、リサはテーブルに料理を並べながら、ぼくを見て尋ねた。

“別に”と、ぼくは答えた、“何か考えていたように見えるかい？”

“ええ”とリサは言った、“兄さんは窓の方に向きながら、目はあらぬ方へ向いていたもの...”

“鋭い観察だね”と、ぼくは言った。そして、リサが料理を運び終えて、ぼくの向かいの席に坐るのを見届けると、ぼくは続けた、“実は考えていたのさ、もうこの世にはいないある女性のことをね...”

そう言ってぼくは、リサにエリザベートのことの全部ではないが、その一部について語った。そして最後にぼくはこう締めくくった。

“ぼくはどうかしているさ。今どき、そんな昔の意味もない女性のことを考えるなんて、彼女の不幸な人生を知ったからとて、それが何になるだろう！”

リサはしばらく黙っていた。

“その人、兄さんの話しによると文才もありそうだけど、美人だったの？”しばらくして、リサは尋ねた。

“さあ分からない”と、ぼくは答えた、“写真が一枚あるきりさ。それも妙な角度からのが... 恐らく美人だったのだろうよ、彼女のいわゆる「生きな鼻」が、その写真からもよく分かるから...”

“写真があったの？”と、リサは興味を示した、“その本、ちょっと見せて”

“そこの、ぼくのバッグの中に入っているさ”

そう言って、ぼくは部屋の角に置かれたぼくの旅行カバンを指示した。リサはすぐそばに寄って、カバンからぼくの本を取り出して来た。そして、テーブルに着くとパラパラとめくり、カミュの唯一の写真や、その文章について、ざっと目を通した。

“私はあまりに多くのことを望んでいる。私にほしいのは、一つの生命でなくて、千もの生命。どうしても生きねばならない瞬間が随分多い...”

“なかなか興味を惹く文章ね”と、リサはしばらくしてから言った、“文章から彼女の人間性がよく分かるわ。感受性が強くて、頭が良くて、活発そうで.....しかも病気がちらっとのぞいている...”

“そりゃそうさ”と、ぼくは言った、“それは小説などではなく、正真正銘、生身の日記、生身の手紙だからさ。彼女の見たまま、感じたままがそのまま書かれているんだから。まるで時を越えて、その場に連れて行かれるように感じるだろう？ それは貴重な体験というものさ。その頃の空はきれいだった——それはあまりにも当然なことなんだけど、何か違ったものを感じるのさ。つまり、その文章によってやはり当時というものが偲ばれるんだ...”

“戦争中のね...”とリサは言った、“——でも、この文章からは戦争が感じ取れないわ...”

“ぼくもそれは感じているさ”と、ぼくは言った、“しかしそれは仕方ないだろう。彼女は病気だったのだから。ただ——彼女は恵まれている方だとは感じているけど...”

“それで兄さんは何を考えていたの？”と、リサは再び尋ねた。

“だから、今どき、このエリザベートの手紙や日記に出会うことにどんな意味があるのだろうか？ ってぼくは考えるのさ”と、ぼくは言った、“もう誰も見向きもしないこんな本なんかにね”

“でも全く無意味だとは言えないわ”と、リサは言った、“その当時の人の気持ちを知ること、それも必要なことじゃない...”

“ただ一つ言えることはね”と、ぼくは言った、“リサも言うように「人間性」の問題なのさ。彼女のあふれるような「人間らしさ」や、わずかだがきら星のように輝く彼女の才能など、これは消してはならぬものだとぼくは考えるんだ。十年後、二十年後になっても、いや、五十年後百年後になっても、この貴重な記録は消してはならぬものだとぼくは考えるんだ。そこには彼女との出会いがあり、その文章の持つ不思議な魅力が、人々に人生について改めて考えることを強いるからさ。”

それこそがこの本の持つ意味であり、生前エリザベート自身が願っていたことではないかとさえ、ぼくには思われるのさ。――いずれにせよ、彼女の気持は少なくともぼくには通じたのだし、たいていの人々には知られなくとも、ぼくはこの本にめぐり会えて幸せだと思っているのさ...”

“そういう文章を残すことのできたエリザベートは幸せね”と、リサは微笑んでぼくに言った。

“彼女のやむにやまれぬ気持――というより彼女の人間性の広がり、これをもし名づけるなら「才能」と言ってもいいだろう、その人間性の豊かさが、そうさせたんだ”と、ぼくは言った、“彼女が書き遺したということは何も不思議なことじゃない。ただ彼女が人一倍生きたいと願っていたことをそのことは表しているだけで...”

“でも、そんな人が死ぬなんて不幸なことね”と、リサは神妙な顔になって言った、“まだ二十四才なんでしょ？ まだまだこれからだという時なのに...”

“戦争中の当時としては別に珍しいことでもないんだろう”と、ぼくは言った、“他にももっと悲惨な経験をしている人がいるかも知れない。アウシュヴィッツなんかで若い命を散らして行った人々も数多くいたはずなんだ。しかしその人々の声を直接聞くことはない。彼らは言うこともできずに殺されて行ったのだから... そういう意味においても、カミュの証言は貴重なのさ。彼らとは違った生活、違った状況にあったにせよ、それは、命の尊さ、生きることの大切さを、彼ら無言の人々に代わって、ぼくらに教えているのだから...”

“不幸が当たり前の世の中って、思えば悲しい時代ね”と、リサはしみじみと言った。

“しかしカミュは、病床にありながら、精一杯生きることの素晴らしさを謳歌していたのさ”と、ぼくは言った、“そのような暗い時代、結核という不治の病にあっても、彼女は「死」を信じなかったし、生き続けることだけを信じていたのさ。それだからこそ、その生の中絶は、その本を読んで彼女を知ったぼくらの胸に、大きなショックを与えるのさ...”

“よく分かったわ”リサは、しばらく沈黙した後、ぼくに言った、“兄さんはその本、全部読んでしまったの？ もしそうなら貸して。あたしも読んでみるわ”

“ああいいとも”と、ぼくは答えた、“もう全部読んだから貸してあげるよ。多少暗い気持にさせられるけれど、彼女の生の姿がありありと書かれていて、なかなかいい読み物だよ。そして、読み終わった後で、この本についての感想をお前から聞かせてもらえれば、光栄なんだが...”

“いいわ。感じたことがあれば聞かせるわ”と、リサは答えた。

“じゃ、もうこのことは、これくらいにして”と、ぼくは言った、“カミュには一旦当時の時代に帰ってもらうことにして、今の時代のことについて語ることにしようよ。お前の生活や、他の楽しい話題なんかについてね。さっきから気になっていたんだが、この家賃はいくらなんだい？”

リサはにっこりと、そんな変わりようを見せるぼくを見つめた。そして、正直に家賃を言うと、それから更に話題は他のことへと移って行くのだった...

食事のあと、ぼくはソファーに戻った。さっきの飲みさしのウィスキーのグラスがまだテーブルの上に置かれたままだった。ぼくは再びそれを手に取り、自然に口へ運んで行った。しばらくして、リサも後片付けを終え、ぼくのそばにやって来て、腰を降ろした。

“久し振りのお前の料理、うまかったよ”と、ぼくはリサを見て言った。

室内の照明が、スタンドの明かりだけ、というのがなんともいい雰囲気をかもし出していた。そして、開けられたブラインドの向こうの窓ガラスには、外界の宝石のような明かりが、この場所からも眺められた。

“そう？ そう言ってもらって嬉しいわ”リサのにっこりした笑顔が、明かりの中で浮かび上がった、“兄さんはいつも、食事はどうしているの？”

“ぼくかい？”と、ぼくは言った、“仕方なくあり合わせを買って来て、見よう見まねで料理を作っているよ。時には外食をすることもある...”

“じゃ、今度、家に帰ったら兄さんに料理を作ってもらおうかしら”リサは、いたずらっぽく言った。

“別にかまわないけど”と、ぼくは言った、“ただ味の方は保障しかねるよ。どうも、調味料の分量が難しくてね。――それにしてもさ、料理作りって、いつ見ても邪魔くさいものさ。そうは思わないかい？”

リサは、にっこりと微笑んだ、“あたしは、料理を作ったりするのが好きよ”とリサは言った、“いろいろと献立を考えたりするのが楽しいわ”

“そうかい。じゃお前は、いいお嫁さんになれそうだ”と、ぼくは言った。

リサは、満足そうな表情でぼくを見た。

”ともかく、お前が元気そうにやっているのを見て、何よりさ”と、ぼくは言った、“結構毎日の生活も楽しそうだし、順風満帆といったところかな”

“そんなに恵まれてもいないけど、まあまあ生活を楽しんでいる方よ”とリサは答えた、“そして兄さんも、もっと生活を楽しんで...”

“ぼくだって別に生活が楽しくないわけじゃない”と、ぼくはウィスキーを一口入れて言った、“ただ、いろいろとしたいことがあり過ぎてね、それでお前のような生活を送るわけには行かないのさ...”

“それじゃ、ここの用事が済んだら、またあの田舎に帰るの？”と、リサは尋ねた。

“いや、今回は帰らないつもりだ”と、ぼくは言った、“今回は、ちょっと別のところへ寄ろうかとも思ってね”

“じゃ、どこか旅をするの？”とリサは言った。

ぼくがうなづくとりサは羨ましがった。

“いいわねえ、旅行ができて”と、リサは言った、“あたしなんか今のところ、とてもよ。――で、どんなところへ行くの？”

“いろいろさ”と、ぼくは言った、“別にはっきりした行先が決まっているわけじゃない。ただね、ぼくにはお前以外にも会いたい人がいるんで、その人を捜しに行くだけなのさ...”

“姉さんや、ママのこと？”と、リサは言った。

ぼくはうなづいた。

“ちょっとした手がかりだけでもいいんだ”と、ぼくは言った、“彼女らが、通ったり、行ったところ——そこに行けば、何か新しいことが分かるかも知れない。ここからは随分遠いところもあるようだけど、ぼくはそこへも足を踏み入れてみるつもりさ...”

“頑張っ”とリサは言った、“あたしも見つかることを祈っているわ。今、どこで何をしているのか、あたしも気がかりなところよ。もし会えることにでもなれば、本当に幸せよ...”

“ぼくも願っていることは、今のところそれだけなんだ”と、ぼくは言った、“特にママに会いたい。何んと言っても、もう九年も会っていないんだからね。——それがないと、他に何も始まらないような気さえするんだ。要は、原点に帰りたいのさ。自分の原点。そこから出発しなければ、何も始まらないような気さえする...”

自分の原点とは何んだろう？ ぼくはふと、夢のことを思い出していた。けさか、つい最近見た夢だった...

そこは、もう何度もよく見る場所だったに違いない。気球が、大きな化物のような鉄くずをぶら下げていて、いつ、この平和で静かな民家の上に落ちるか知れなかった。それで早急に近くの草におおわれた広場に移動させる必要があったが、その役目をこのぼくが負わされたわけだった。ぼくはロープを引っ張り、どうにか、人のいない広場まで気球を引っ張って来るのに成功した。ところがその瞬間、風にあおられ気球はふうわり空中に浮き出し、それと共に、ぼくの体まで舞い上がった。気球は、風のおもむくまま、スピードを増し、広場のすぐ近くの湖上を漂い始め、湖面はきれかったが、その上空をかすめるぼくは気が気ではなかった。しかしようやく湖を渡り切り、対岸の山の斜面までぼくを連れて行ってくれ、そこで解放されてぼくはほっとした。そして、着地した周囲をよく見ると、そこには小さな清流が流れていて、一度来たことのある見覚えのある場所であることが分かった。偶然そこには仲間がいて、この小川が***川だということをおぼくに教えてくれた。

“じゃ近くに友だちの家があるからそこに行こう”と、彼はぼくを誘った。

森のようなところを通り、どこをどう通ったか分からないまま、家の中に入ってぼくは驚いた。いくつもある迷路のような部屋——そのどれもが凝っていて、しかも人氣がなくし〜んとしていて、中に入るのが気がひけた。ぼくの友人はどこへ行ったのだろうか？ 二階に上がって廊下を行きドアを開けると、ようやく中に人の姿が見えて、ぼくはほっとした。

こちらを向いた顔の中には若い女の顔もあって、ぼくを当惑させた。しかしすぐ知った顔に出会い、ぼくはそっちへ向かった。彼らと床の上に坐り、久し振りの楽しい話題に花を咲かせていたが、その中で、さっきの若い女のこと話題にのぼった。

“ああ、あれかい？”と、ぼくの友人は言った、“ぼくの兄の嫁さんなんだ。兄は今勤めて家にいないんだが、昼間は、ブラブラしているぼくといつも一緒なんだ。しかし、ああいう嫁さんを見ると、ぼくも早く結婚しなくちゃという気がして来るなあ...”

このきちんとした部屋といい、暖かそうな雰囲気、家庭的な楽しそうな飾り付けなどを見ると、ぼくもこの友人と同感だった。それにしても、何んと幸せそうな家庭が存在しているんだろう。ぼくは、彼と漫画本の捜し合いをしていたが、心の中は次第にそんな気がして来るのだった...

自分の原点。それはもう一つ見た別の夢にも由来するのだろうか？

そこには恐ろしくも、残酷なドラマが展開していた。しかもそのドラマの一方の当事者は、ぼくの母親だった。母親は、ある男とトラブルを起こし、自分の家の隣の人の家に隠れひそんでいた。それは一つの策略だった。たいていの隣人は、遠くへ去ってしまったと考えていたから。しかし実は隣の親切な老婆にかくまわれていて、一日中姿を現すことなく、息をひそめて隠れ住んでいた。ぼくはそのことを偶然知った。家に尋ねて来て空き家であることを知り、隣へ尋ねた時教えてもらったからだった。その日以来、ぼくは隣の母親の家にひとりで住むことになり、夜にはこっそりと親切な隣人の家に立ち寄り、母親と会ったりしていた。そして、夜になると外から見えるという理由でカーテンを閉めるように指示したのもぼくだった。一一ところがある日、そんな母親の姿を、締め忘れたカーテンのすき間から目撃した一人の老婆がいた。この老婆は向かいに住んでいる隣人で、彼女がしたり顔で帰って行く姿を偶然、このぼくが目撃したのだった。しかも、この老婆が、尋ねて来た若い男の耳に何かささやくのすら、ぼくは目にした。ぼくはただちに危険を悟り、この老婆を殺す他ないと心に決め、実行した。まだ全部を教えてもらってはいず、後でやって来た若い男は、老婆が殺されている姿を見て、茫然とその場に立ち尽くした。ぼくはその男のそばに勝ち誇ったように歩み寄り、

“残念だったね。まだぼくの母親の居場所までは聞いていなかったのだろ”と耳もとにささやいた。

男は振り向き、何も言わず、困惑したようにその場から去って行った。

“兄さん、何を考えているの。急に黙ったりして”

そう耳元で言ったのは、リサだった。

“いや何。余りいい気分だから...”

ぼくは振り向いてリサに行った、“一一でも、実は考えていたのさ。自分の心の原点を。

ぼくは長い間待っているような気がする。待ち過ぎて、無駄に時を費やしているような気さえするんだ。何をしてもうまく行かないし、何ひとつ、ぼくの心をつかめるものもないんだ。ぼくは一体、何を待っているんだろう？ どうしてみんなのように、思い切った行動がとれないでいるんだろう？ ——それはきっと、ぼくに後ろ髪を引くような何かがあるからなのさ。それが、ぼくが世の中に出て行こうとすることを食い止めようとしているんだ。それは絶えずぼくの耳元にこうささやく。「世の中ってたかが知れている。出て行ったところで何も期待するようなことは起こらないんだよ」それが、ぼくに二の足を踏ませてしまうことになるんだ。本当に、ぼくは精神ってどうなっているんだろう？”

“兄さんの行動の自由を奪うその正体って、何なの？”と、リサは尋ねた。

“恐らくそれは、世の中以外の何かなのさ”と、ぼくは答えた、“例えばピカソが画くことに生きる目的を見い出したように、未だ何物でもない目的に向かって自分を投げ出すことなんだ。だって、画家には、画き始めには出来上がった作品というものはさっぱり分からない。しかしそれでも画くという行為を始めるし、始めなければならぬんだ——つまり彼の精神には、ほとぼしる火花のようなものが絶えず火の粉を散らせているのさ。最近ぼくは、「抵抗」という映画を見た。あれは名画だった。そこには、絶えず何かに向かって挑戦しようという意志以外に生きる目的を持たない主人公が描かれていたし、その行為は、やがて具体的な目標となって姿を現すことになって来るんだ。つまり、牢獄からの脱出という。あの映画ほど人間の行為の尊さを見事に描いた作品はなかった。——だからまず、未だ姿は明らかではないが、その何かに向かって行為を試みることなのさ。するといずれ、その行為のさ中から、姿は次第に明らかになって来るだろう...”

“その未知なものが兄さんの自由を縛っているというのね”とリサは言った。

ぼくはうなずいた。

“ピカソの作品は、未知なるものの喜び以外の何ものでもない。それは、絵にはこんな描き方もあるということを知ってくれたんだ。——ぼくは画家にはなれないし、その他の才能も持ち合わせてはいないけれど、自分の心に感じるものは、何とか作品に残したいと考えているのさ...”

“この世に本当に未知なものってあるのかしら”とリサは言った、“あたしは、この世の中が好きよ。だって、この世の中にも思いがけないことがいくらでもあるんですもの。思いがけなく、素敵な男の人に出会ったり、変わって良さそうなデザインの服に出会ったり、そういうことにあたしは喜びを感じるわ...”

“それはお前が、普通の女の子だからさ”と、ぼくは言った、“見方も当たり前で、好奇心が旺盛で、生活も安定していて、要するにごく普通の生き方をしているということさ”

“あら、あたしは普通の女の子で結構よ”と、リサは、少し反発するように、ぼくに向かって言った。

“何も普通の女の子がいけないって、ぼくが言ってるんじゃないよ”と、ぼくは言った、“むしろその方がいい。——そして誰もぼくのようになって欲しいとは望んでいないのさ。”

ぼくはたまたまそうってしまった。ただそれだけのことさ。――だから普通の女の子であるお前を見ることは、むしろ嬉しいことなんだ。お前には、もっともっと今の生活を続けて行って欲しい。そんなお前の姿を見ることは、ぼくにとって喜びであり、何よりも一番の安らぎでもあるのさ...”

“もちろんあたしは今の生活を続けるわ、誰にも頼まれなくても”とリサは言った、“――でも、兄さんの話を聞くのも面白いわ。めったに、誰も話してくれないような話しをしてくれるんですもの。兄さんも、今の生活を続けて。そしてそのうち、あつというような作品を書いて、みんなを驚かせてよ。その日の来るのが楽しみだわ...”

“そんなあつというような作品なんか期待されれば、却って困ってしまうよ”と、ぼくは苦笑いしながら言った、“どうせぼくの書く作品なんて、普通の人には退屈なだけの作品なんだからね。――ぼくはもともと、世間を驚かせるようなことなんかには興味がない。人知れずとも、自分にとって真実なものを発掘することの方が遥かに興味のあることなんだ...”

ぼくたちは、お互いにしばらく黙った。

ただこのほの暗い室内に、静かに時は流れて行った。その一秒一秒は、ぼくの二十数年の歳月を刻みつつあった。そのあいだにいろんな事があった。生活圈もめまぐるしく変わり、それと一緒に人も変わった。そのあいだに物の見方も広がり、考え方も深まったが、その根本だけは変わることがなかった。ぼくは未だに求めているのだった。失綜した母親の面影を。そしてそこから派生する生活のすべてを――

ぼくはふと振り返った。何もなかった、空白の、灰色の青春を――そこに家庭はなく、あるのはただ、夕陽に照り映えた美しい雲の色――

それは、もう取り戻すことのできない青春の悲しさをたたえていた。雲は美しく、ぼくひとりだけが、家庭もなく、愛もなく、じっとその雲を見つめていた...

“リサは知らないだろう？ ひとりぼっちの生活というものを――”

しばらくしてから、ぼくはポツリと言った。

“いやねえ。別に知りたいとも思わないわ”と、リサは答えた。

“でも、人間ってひとりになると思いがけない世界を発見するものさ”とぼくは、リサにはかまわずに続けた、“愛や、人間味や、暖かさなどがなくても、そこで、自分ひとりだけの世界というものを見つけることになるんだ。もしひとりというものが許されるものなら旅をするといい。そこでいろんなことを発見することになるよ”

“例えばどんなこと？”とリサは尋ねた。

“それは分からない。でもいろんなことさ。そしてひとりになって、人生について、世の中について、いろいろと考えるようになるんだ...”

“まるで哲学者か、詩人ね”とリサは言った、“でも、あたしにはとてもなれそうもないわ。旅をすればすぐ、いろんな珍しいものに目を奪われてしまうんですもの”

ぼくは思わず笑ってしまった。リサに「ひとりの生活」を説いたところで、所詮無駄なことなのだ。「ひとりの生活」は、それを体験した人にしか分かりはしない。その寂しさや孤独や苦悩や絶望や、そしてその果てに見る、まるで神の国のように平和な「ひとりの世界」は、恐らくそれを身をもって経験した人にしか、分かりはしないのだ。周りに人がいても、常に地上にひとり——そういう生活は、人の心を貧しくも、豊かにするものだ。つまり彼は、人を信じなくても、それにとって代わるもの、神をさえ信じるようになるのだ。ぼくは、未だ神を信じることはできないが、まだ神を信じることのできたそういう素朴な時代に生きた人々のことを、かねがね羨ましいとさえ思って来た——

“ぼくはね、こういう都会でひとりぽっちで暮らしたことのあるぼくとしてはだね、田舎での素朴で、敬けんな暮らしをしてみたいという狂おしい気持があるのさ”と、ぼくはやがてぽつりと言った、“それも、今のようにひとり暮らしじゃなく、ごく親しい人たちとね。一種の理想郷かも知れないけれど、人知れずそういう生活を一生送りたいというのが、ぼくの本当の願望なのさ”

“それじゃまるで隠者の暮らしじゃない”と、リサは驚いたように言った。

“でも生活をして行くうえで、それほど多くのものが必要だろうか”と、ぼくは言った、“科学技術の発達で人類はやがて宇宙に飛び出して行くようにさえなるだろう。また、宇宙の神秘を解くいろんな発明、発見が成されもするだろう。——でも、人間にとって一番大事な心の問題は、それでもやはり解かれなような気がするんだ。ぼくにとってそれは、田舎に行くことによってしか解決の方法はない。普段、人の目に触れることのない自然や空気に触れて、ぼくは自分の心を試してみたいのさ...”

“じゃ、兄さんと一緒にそういうところへ行ってくれる人を、まず見つけることね”とリサは言った。

“まあそういうことだろうね”と、ぼくは、窓の外の夜景を見つめながら言った、“ともかく、ぼくの言いたいことは言った。今度はお前の番さ”

“あたしの？”とリサは言った、“——あたしは、兄さんが来てくれて、それだけで嬉しいわ。だって、本当に久しぶりなんだもの”

“でも相変わらず気の滅入る話しをするんでうっとおしいだろう？”

“そんなことないわよ”と、リサはきっぱり言った、“むしろ夢があっていいじゃない。あたしも時々、田舎に大きな別荘を持って、そんな暮らしがしてみたいって思うときもあってよ。でも、そんなの夢ね。今は、生活するので精一杯。このアパートに住むのがせいぜいよ。だから、兄さんが来てくれるのは、そういうあたしの知らない田舎の香りを運んでくれるので、嬉しいのよ。うっとおしいなんてとんでもない。むしろ面白くて、楽しいわ。あたしの友だちにも聞かせてあげたいぐらい”

“それだけはよしてくれよ。ぼくを見世物扱いにすることだけは”とぼくは、警戒心を怠らずに言

った。

“御免。そんなつもりじゃないわ”とリサは言った、“ともかく兄さんは、この部屋に来てくれた。それでどう？この部屋の感想は”

“なかなかいいさ”と、ぼくは答えた、“いかにも女の子らしくスッキリしていて、感じがいい”
“それだけ？”とリサは言った。

“それ以上、どう言わせようって言うんだい？”とぼくは言った、“他に目につくものと言えば、照明もよければ、壁掛けもなかなか趣味がいい。家具も悪くないし、だいたいそういうところかな？”

“この壁掛けは、あたしが骨董品屋で見つけたのよ。なかなかいいでしょう。案外安くて――”
その壁掛けには、幾何学模様の動物のようなものが描かれていた。

それを見て、ぼくはふと思った。

“ぼくも何か持ってくればよかったな。置物か、何か。気が利かなくて悪いことをした...”

“いいのよ。そんなこと、かまってもらわなくても”と、リサはにっこりして言った、“でも、兄さんに気に入ってもらってよかったわ。何か言われるんじゃないかと、内心恐れてもいたのよ”

“そうかい？”と、ぼくは言った、“なかなかいいじゃないか。これといって悪いところは見つからないな。もっともお前の寝室はまだよく見ていないけども...”

“あら、今晚よく見れるわよ”と、リサは言った、“兄さんにそこで寝てもらうことになるんですもの”

“ぼくが泊まるんで不用なものはとっ払ったんじゃないんかい？”と、ぼくは意地悪く勘繰った。

“一体何をよ”とリサは、少しむっとなって言った、“別に不用なものなんて何も無いわ。そりゃ、この部屋よりはごちゃごちゃしているけれど、余り気にしないで眠ってよ”

“もちろん気になんかなるものか”とぼくは言った、“ただ女の部屋で眠れるだけでも幸運なんだもの...”

“だからと言ってあちこち引っかき回さないでよ”とリサは警告した。

“何か見られて具合悪いものでもあるのかい？”とぼくは言った。

“そうじゃないけど、自分の持ち物を人に見られるって余り気持のいいものじゃないもの。だから引っかき回さないって約束して。そうでないと部屋を貸すわけには行かないわ”

“分かったよ。約束する”とぼくは、リサの瞳を見て誓った、“たとい兄妹でも、その辺はきっちりしておかなくっちゃねえ...”

“それで兄さんは、あしたどうするの？”リサが、ウイスキーグラスを手に、ぼくに言った。

酔ったぼくの目に、彼女は一層美人に見えた。

“あしたはあしたの風が吹く...”と、ぼくは言った、“いや、そうじゃなく、まだお前と過ごせるんだっただね。あしたは楽しく過ごそうよ、この前みたいに。そしてそれが、今回のお別れさ...”

“兄さんって、少し酔っているのね”と、リサはにっこりして言った。

“ああ酔っているよ。少し酔って悪いかい？”と、ぼくは言った、“だって、こんなに可愛いお前が目の前にいるんだから。最近ではめったにないことさ、誰かと話すということはね。少しぐらい酔ったってかまわないだろう...”

“かまわないけど、こんなところで寝込まないでね”とリサは言った、“あたし一人じゃ兄さんをベッドまで運ぶことができないんだから...”

“寝はしないよ”と、ぼくはいい気分になって言った、“だってまだ宵の口だろう。夜はまだまだこれからさ。一一ところで、ぼくは思い出すのさ、まだそれほど日は経っていないけど、お前と一緒に暮らした日々のことを... そして一緒に旅行をしたときのことを。今になって思えば、あの頃が一番幸せだったな...”

リサは黙ってぼくの話しを聞いていた。

“今はひとりで寂しく暮らしている”と、ぼくは続けた、“だからといってお前に何も要求はしないけどさ、しかし、あの頃の生活が幸せだったとは思っているよ”

“あたしも幸せだったと思っているわ”と、リサは答えた、“覚えてる？ 兄さん、夏の日に、一緒に山をハイキングしたときのことを。長い行程で足もくたびれてしまったけれど、空は澄んでいて、とっても楽しかったわ。周りには誰もいなくて、静かな湖と、高原の草花だけ。道を間違えなかったのが不思議なくらいね。あんな楽しい、いいハイキングなら何度してもいいわ。空気はきれいし、快い疲れだったわ。本当に申し分のない旅だったわね...”

“また夏になればそういう旅もしてみようよ”と、ぼくは言った、“本当に静かな、魔法のような国に旅してみたい。ぼくは昔ね、東洋の中国にそういう所を見つけたような気がしたんだ。それも今の中国じゃなく、もう何百年も昔の、すべてが神秘で謎に包まれていた頃の中国にね。もう不可能なことかも知れないが、そういう空想の国に憧れた一時期があったものさ...”

“旅をしたけりや、旅をすればいいじゃない”とリサは言った、“旅って、どんな旅でも楽しいものよ”

“そうだね。しかし、一人旅って寂しいものさ”と、ぼくは言った、“誰かがいないとねえ...”

“もしあたしでよけりゃ”と、リサはすぐ答えてくれるのだった、“また一緒させてもらってもいいわ。でもきょう、あすはダメ。夏にならないとね”

“そう言ってくれて嬉しいよ”と、ぼくは幸せな気持ちになって言った、“またお前と一緒に旅ができるなんて、もうないことだとあきらめていたのに。今の言葉にかすかな希望をつながせてもらうよ。ありがとう、リサ...”

“そんなに感激してもらわなくても”と、リサはにっこりしながら、ぼくの手をとって言った、“兄妹として当然のことを言ったまでじゃない。あたしだって本当は、兄さんと旅するのが一番楽しいのよ...”

“まあ、いろんなことがあったからね”と、ぼくは言った、“お前と幸せな生活もしたし、いろいろと苦勞をかけもした。今は暮らしは別だけど、そこでつながりが切れたわけじゃない。どころか、今もしっかりとつながっているのさ。これからも、いろんな付き合いや、いろんな暮らし方があっていいと思うんだ。どうだい？ この提案に賛成かい”

“賛成よ”と、リサはにっこりして答えた、“それぞれの暮らしを尊重しながら、時には一緒に会ってみる。それでいいじゃない、何の不都合も生じないわ”

“今晚は最高の夜さ”と、ぼくは、グラスを高々と差し上げて言った、“だって、こんなに素晴らしいお前から、最高の言葉を頂くことができたんだもの。空に瞬く星に感謝しなくっちゃ。そして無論お前とも、もう一度乾杯さ”

そう言ってぼくはリサにグラスを差し出し、彼女の差し出したグラスと軽い乾杯をするのだった...

“今、一番気がかりなこと”と、しばらくしてから、ぼくはポツリと言った、“それは、このまま段々と昔が失われて行く、ということなんだ。ぼくもお前も、少しずつ年をとって行く。これは仕方のないことさ。しかしそれと共に、自分に存在した昔のみずみずしい感覚——それまでもが失われて行くのではないかと、気がかりでならないんだ、それはとりも直さず、自分の子供時代の喪失、そして青春時代の喪失にまでつながって行くことなんだからね。ぼくはいつまでも青春時代を続けたいとは思わない。しかしその頃、一体何を考え、どのような感情で世の中を感じ取っていたのか、その記憶だけは大事にしたいと思っているんだ。それは、自分の青春時代の記憶であり、大ていは年と共に忘れて行くものだから、一層、大切に記憶に残していたいと思うんだ。なぜなら、それを亡くすと、もうぼくはただの大人、自分の原点を見失い、時世に流されるだけの、あの白痴面の大人の仲間入りになってしまうからさ。年はとつても、何も考えることのない大人になるのは御免で、いつまでも情熱を失うことのない、若々しい大人でありたいものさ。その為にも、子供の頃、あるいは、青春の頃体験したみずみずしい感覚を、いつまでも忘れることのないことが大切さ。日頃の忙しさの中でつい忘れそうになっても、ふと振り返って思い出すことが必要なんだ。——つまりそれは、自然や、神秘や、美を愛する感覚さ。それも、新鮮な、みずみずしい感覚で愛することが必要なのさ。そしてそれができる限り、彼はまだ老いてはいない。いつまでも子供、という悪い意味じゃなくて、彼はいつまでも新鮮であり続けることができるんだ...”

“そういう人たちにとって、老いとは天敵みたいなものね”とリサは言った。

“ぼくたちはまだ若いんだぜ”と、ぼくはリサに言った、“まだ老いなんて、考えない方がいい。確かに老いた人を見るのは辛く、悲しいことさ、しかしだからといって彼らに同情し、ぼくたちまでもが彼らと同じ気持になる必要なんかどこにもないんだ。――彼ら老人とは、青春の頃からほぼ完全に切り離された人、とそう考えていいだろう。それは実に悲しむべき現象さ...”

“そういう意味でも若いっていいことだわ”とリサは言った、“だからこの間にいろんなことをしておかなくっちゃ”

“ぼくは、青春の持つ意味を絶えず問い直したいのさ”とぼくは言った、“それは、目覚め、感動、憧れ、そして苦悩といった諸々の情動なんだ。大人のように安定した感情なんて存在しない。絶えず揺さぶられ、不安におののき、ときには希望を見い出す――そうしたよるべのない感情の揺れ動きが、ぼくたちの子供であり、青春の意味であったはずだ。安定した生活なんていうものは、そうした青春にとっては、意味を成さないだろう。そしてそうした不安な状況の中で段々と自分というものを見い出して行く――それが青春というものなのさ。そこでは全くつまらない自分を見い出すかも知れないし、もっと可能性の富んだ自分を見い出すかも知れない。いずれにせよ、まだ自分を確立できない不安な日々――それが、ぼく達の青春であったはずさ...”

“それで兄さんは自分を確立できたの？”とリサは、ぼくを見つめて尋ねた。

“いやまださ”と、ぼくは答えた、“だから――まだ確立できないうちに、大人になりたくはないんだ...”

“でもそれじゃ、いつまでたっても大人になることはないんじゃない？”とリサは言った。

“年だけは、いやでも取って行くだろう。でもぼくは、自分の真実なものを見い出したい...”

しかしぼくは、不意に難しい話しになってしまっていたことに気がついた。

“おっと御免ね、つい難しい話しになってしまって”と、ぼくは言った、“せっかくウィスキーでいい気分になっているというのに。やはりぼくはつい、自分の内面に入ってしまう癖があるのさ”

“別にかまわないわ、気にしなくっても”と、リサは明るい顔をして言うのだった、“内面や、内側の話し。それはあたしにとっても興味のある話しよ。話しを少し大げさにすれば、兄さんの心理学によって示唆を受けることだって多いのよ”

“ぼくは心理学者なんかじゃない”と、ぼくは否定した、“ぼくは単なる迷い人さ。あるいは求道者かも知れない。いずれにせよ、足下のおぼつかない風来坊さ。リサのいるところにちょっとやって来てはまた去って行く――そんな根なし草なんだ...”

“別に根なし草だっただけかまわないじゃない。誰れだっただけ少しはそんなところがあるものよ。兄さんにはそれが少し強く働いているだけ。それだっただけ別に悪いことじゃないわ”

“何度も言うけど、ここはいいところさ”と、ぼくは、ほのかなランプの光を見つめながら言った、“ぼくを幸福な気分へ導いてくれる。本当に、幸福って何んだらう？ それは、一瞬のものなのだろうか、それとも、すぐ過ぎ去るような幸福は、本当の幸福じゃないのだろうか...”

“あたしにはそんな難しいことは分からないわ”とリサは言った、“――でも、楽しい気分になるなら、それでいいじゃないの。幸福って、意外と単純なものかも知れなくてよ”

“単純なものか”と、ぼくは言った、“そうした単純なものに帰りたいね。例えば月とか星とか、そうした物の中にぼくたちの本当の幸福が隠されているのかも知れない。それらの世界は余りにも遠くて、秘密のベールに閉ざされているけれども、ぼくたちのこの複雑な地球の姿が、遠くから見れば単純な姿に見えるように、それら単純な星々の姿の上に、それ自身の持つ幸福の表徴のようなものを直観できるような気がするからさ。つまりそれこそは、ぼくたちの持つロマン、空想の成せる技というものさ。――ぼくはまた、なんととりとめのないことを言ってしまうんだらう...”

“そういうところの兄さんがまた面白いわ”と、リサは、にっこりしてぼくに言った、“見てよ。窓の外は満天の星よ。それを見れば、別に難しい説明をしなくても、幸福って何か、自然に分かって来る気がするじゃない。別に解説をしなくても、窓から顔を出すだけで十分よ”

ぼくはにっこりと笑った。だからといって窓から顔を出しに行くわけでもなかったが、リサの単純明快な説明の方が余りにも真実を語っているようで、おかしかったのだ。

“ねえ、ぼくたちは今、都会の中のお前のアパートの一室にいる”と、ぼくはポツリと語り出した、“考えてみれば、この広い都市の中の砂粒のように小っぼけな生活さ。そんな小っぼけな者に何ができるのか、気の遠くなるような話しさ。――でも、その小っぼけな者がこれまでなんとか生きて来た。ぼくは思い出すなあ、こんな都会じゃなく、本当の田舎で暮らした、まだ小さかった頃のことを――”

“あたしたちの子供の頃？”とリサは尋ねた。

“そう、いつか山荘で、朝もやにかすんだ森に日光が射し込むそんな朝に目覚めたときのことを覚えていないかい？ 山荘の部屋の中には、ぼくたちみんなが一緒に泊まっていた。快い目覚めだった。なんともいえない、すがすがしい、さわやかな朝だった。だって窓の向うには、青白い日光の射し込む神秘的な森が広がっていたのだから。ぼくは、そのなんとも言えない神秘的な光景に、その奥深くには、本当に、あの魔法使いや、妖精たちの住まう国があることを信じてきたものさ。子供心ながら、その不思議な日光のきらめきや、もやにかすんだ森の様子が不思議でならなかった。それは、最初の「神秘との出会い」と言ってもいいだろう。ともかくぼくは、その光景に惹かれたものさ。惹かれると同時に恐れをも感じた。そのかすんだ、まるで死んだような森の奥を見つめることが、ぼくをとほうもない孤独な世界へと誘い込むような気がしたからさ。でも、窓のこちら側の部屋の中には、ぼくの家族がいた。両親や、それにお前たちがいた。それで、一瞬の目のくらみも元に戻り、ぼくはほんと安心してできたものさ。覚えているかい？ あの素晴らしかった、山荘の窓から見えた朝の森の光景を――”

“覚えているわ、でも、随分と昔のことじゃない”とリサは言った、“パパがいた頃なんだから、相当昔のことよ。でもちゃんと覚えているわ。とっても楽しい、いい旅だったもの...”

“もう一度あの山荘へ訪れてみたい気さえする”とぼくは言った、“高原の山荘で、特にのんびりすることができたからね。もう忘れることのできない一生の思い出となるだろう。空気は冷たくて、夏だというのに朝はヒンヤリとしていた。今だって、そういう旅はできるかも知れないけれど、あのとき感じたあの新鮮な感覚はもう二度と感じることはないだろう。だってぼくはまだ十才にもなっていなかったのだから...”

“本当に小さい頃ってあったのね”とリサはしみじみと言った。

“窓のカーテンの向うの森は、怖いけど、ぼくに何か呼びかけていた”と、ぼくは当時を思い出しながら言った、“それでぼくは出かけたのさ、ママを連れて”

リサは、知らなかったと言わんばかりの顔でぼくを見つめた。

ぼくはかまわず続けた、

“朝の森は、少し湿って、すがすがしかった。空気が新鮮で、あんなにうまい空気を吸ったことは、もう二度となかった。ぼくは森を少し歩き、やがて、水がちょろちょろ流れる深い窪みにまでやって来たものさ。それはまるで屋根のないほら穴のようにさえなっていて、少し行くと、ぼくの頭より少し高く丸太が渡してあってそこからは、いろんなつるのようなものが垂れ下がっていた。ぼくは足を水に濡らすまいと気を付けながら、そのつるの垂れ下がった丸太のところにやって来て、それら垂れ下がったものを払いのけながらやっとの思いで向う側に行くことができた。そして、その向う側に出ると、湿った岩膚や、生き生きした草の緑の他には、ただまぶしいばかりの光が、それまでの暗がりにはしか慣れていないぼくの目を、突然神々しいまでに打ったのだ。あんな衝撃は、それまで一度も味わったことはなく、ぼくはその一瞬にして、まだ言葉で言い表すことのできなかつた神の本質にまで触れたような気がしたものさ。まだ十才にも満たないほんの子供のときのことだけでもね。本当に、あんなに明るい、素晴らしい光を、後にも先にも見たことはなかった...”

“ママはそのことを知っているの？”とリサは訪ねた。

“いや、恐らく知らないだろう”と、ぼくは言った、“ママはぼくの後についてやって来たけれども、ぼくと同じようにあの不思議な体験をしたものか、どうか。ともかくぼくは、それが余りにも不思議で、余りにも素晴らしかったので、その意味するところをもう少し考えてみる為にも、誰にも言わず、自分の胸の中に秘めてしまったものさ。ママは、そのすぐ後にやって来た。でもぼくは何も言わず、その光の神々しさを眺めた後、引返すことに決めたのさ——ぼくは今でも、あの場所こそが、神の国の入り口だとさえ信じているよ”

“本当にそんな場所に行ったの？”と、リサは驚いたように言った、“そんな場所ならあたしも行ってみたいわ。そんな不思議な光に満ちている場所ってあるのかしら？”

“今でもその場所が残っているのかどうかは分からない”と、ぼくは言った、“一一でも、今でもあのまま残っているのだとするなら、間違いなく同じような神秘的な光にあふれているとぼくは確信するよ。なぜならそこは、神の国と、この地上とを結ぶ接点のような場所なのだから...”

リサは興味ある目で、ぼくを見つめていた。

“ねえ兄さん”とリサはやがてポツリと言った、“そんな場所があるなら、もう一度そこへあたしを連れて行ってよ。その頃の兄さんの体験がどんなものか、その光がどんなものか、とっても興味があるわ。お願い、約束ね。あたしを必ずその場所へ連れて行くって、この場で約束してよ”

“分かったよ約束するよ”とぼくは答えた、“ただ問題は、その山荘に行くことはできても、その場所にまでもう一度たどることができるかということさ。なにせ、もう随分古い、昔のことなんだからねえ...”

“ねえ兄さん、この辺で気分を変えて音楽でも聞かない？”とやがて突然リサが、思い出したように言った、“この前レコード屋へ行ったとき、兄さんのことを思って一枚買っておいたのよ。向うの家で兄さんがよく聞かせてくれた兄さんの好きな曲。何んだと思う？”

さあ分からない、と言った風にぼくは、リサの方を向いて首を横に振った。

“ラヴェルのクープランの墓”とリサは言った、“あたしが出発する晩、覚えているかしら、兄さんは「カノン」のレコードを聞かせてくれたじゃない。それで、兄さんが来れば何か聞かせてあげなくっちゃって考えていたのよ”

“いいねえ...”と、ぼくはにっこりして答えた。

リサはすぐソファから立つと、買っていたレコードを取りに、レコードケースに向かった。やがて彼女が置いたレコードの上に針のついたアームが降りると、この暗い部屋の中に、あのなつかしい響きがぼくの耳に聞こえて来た、“プレリュードだ”とぼくは、心の中で思った。

リサは戻って来てソファに坐ると、静かにその曲に耳を傾けた。

“いい曲だねえ、ここにいながら田舎を思い出すよ”と、ぼくはやがて、音楽が流れている最中にポツリと言った、“この曲を聞いていると、都会の目まぐるしい生活の中での遠い呼び声のようにも聞こえて来る。というより、目の前の都会が消えて、ただ静かな音の世界が広がるみたいだ。そして、この音の世界は、どんな世界を告げようとしているのだろうか？ ぼくは何度聞いても、そしてそのたびに精一杯の創造力を働かせようとするんだけど、いつもその世界を見ることに失敗するんだ...”

リサは目を閉じて、ぼくの話しを黙って聞いていた。

“どの曲も、いつ聞いてもいいけど”と、ぼくは続けた、“その中でも特にメヌエットがぼくは好きだな。

というのは、いつか、もう随分昔のことになるけれども、この曲を初めて聞いたとき、ぼくは強力なイメージが目に浮かぶのを感じたんだ。それは、明るい日ざしに注がれた、背の高い並木におおわれた一本の乾いた道だった。そして、その手前にあるいろんな花をつけた灌木と、その灌木の奥にかろうじて見ることのできる一戸の小さな古い家——それは明るい日ざしを浴びて、のどかな幸福のイメージをぼくの心に焼きつけ、もう忘れることのできない光景となった。その家の中に人が住んでいるのか、いないのか、それはもうどちらでもよいことだった。人気のない静かなところで、ぼくはそんなのどかな家を目にし、その住まいの幸福を感じることができただけで十分だった。——このメヌエットは不思議な曲で、その最初のメロディーの始まりからもう、そんなイメージをぼくの前にくり広げさせてくれたものさ。だからぼくは、この曲を聞いたたびに、あの光景から離れられない思いで、この曲を聞くことになるのさ。そしていつかは、あの時目にしたあの不思議な光景を、なんとか詩にしてみたいとさえ、今では思っている”

“兄さんはいつか、この曲がアンドリュー・ワイエスの絵につながるものがある、と言っていたわ”とやがて、リサは目を開け、ポツリと言った。

“あれは、そのずっと後さ”と、ぼくは答えた、“確かにワイエスの描く静かな、その息吹すら伝わって来る光景は、この曲と一脈通じるものもあるさ。そして何よりも、あのビッコのクリスチーナのことはね。それでぼくはクリスチーナの詩を、このメヌエットにささげることにしたのさ。——でも、本当のクリスチーナは海を知らないわけじゃない。海辺の家に住んでさえいたのだから... それはともかく、ぼくがワイエスの絵を知ったのはもっと後のことで、この曲によって初めてインスピレーションを得たイメージは、そのようなものだったのさ”

“一つの曲が、人によっては、いろんなイメージをかり立てるのね”とリサは言った、“そんな曲って、あるようでなかなか少ないものね...”

“でも、ぼくに言わせれば、そういう曲こそが本物の曲さ”と、ぼくは言った、“単に快く響く曲——それもいいだろうが、偉大な曲というものは必ず何かを人の心に訴えかけるものさ。イメージやその他の姿をとってね”

レコードはちょうど、フーガからフォルラーヌのあの軽快な調子に移り変わったところだった。未だに謎を秘めて語りかけるこの少しメランコリックな舞曲は、ぼくに、そしてリサに、何を訴えようとしているのだろうか...

ぼくたちは静かに室内でレコードを聞いていた。ソファーに腰掛けるリサの瞳が、窓外から射し込む照明灯の光を受けてキラリと輝いた。彼女は無言で窓の外を眺めていた。

その晩は音楽を聞くことで夜が更けて行った。最初はクラシックの音楽から、リサの好きなジャズやポピュラーを聞いたりして、楽しく夜を過ごした。そのうち酔いが回りとうとう眠くなってしまって知らぬ間にベッドにもぐり込んだのはもう夜中の一時頃だったろうか...

不思議と明るい雰囲気の中で、その朝、ぼくは目覚めた。ぼくはベッドの上うつ向きになり、目をあけると、すぐ向うになんとも言えない明かりに満たされたレースのカーテンが目に飛び込んで来た。すぐ自分の部屋でないことは分かったが、ここがどこの部屋であるのか思い出すのに、少し時間がかかった。しかし、どこでもよかった、このいつもと違う部屋で、束の間の朝の幸福な思いに浸れる限りは。しばらく、床や壁を見つめていた後、ぼくはここがどこの部屋か気になった。それで改めて寝返りを打ち、周りを見渡した。陶器の置物や、ぬいぐるみ、雑誌、置き時計に、それから鏡台と化粧品、ブラシまで無造作に、棚や台のあちこちに置かれていた。それでぼくはとうとう思い出した、ここが魔法の国の部屋ではなく、リサの部屋だったことを――

部屋の白い壁には、彼女の好みらしい風景画がひとつ、さりげなく飾られていた。後は、壁のコーナーに温度計、テーブルの上には灰皿、タバコ入れ、その他で、実にさっぱりした部屋だった。しかし、この部屋には至るところ、リサの匂いが漂っており、リサのいないこの部屋で、リサに触れる思いがした。仮にリサがここから遠くにいたとしても、この部屋にいる限り、ぼくはリサを感じ続けることができるだろう。この部屋の雰囲気全体が、彼女という一人の人間を表し、ぼくの感情を、幸福な思いで包むのだった。ぼくはあたかも彼女自身を抱き締めるような気持で、この部屋全体を、そして自分のいるこの彼女のベッドを抱き締めたかった。――ともかく、ぼくは、彼女の部屋で目覚めることができ、幸せだった。それは、彼女との理想的な一体化を感じさせ、より彼女を身近に感じる為の手段でもあったのだ。ぼくは、今しばらくこのままの状態で横になっていたかった。リサという、この得体の知れない妹の正体を知る為にも――

ぼくはしばらく、うつ伏せになったまま、ここがリサの部屋で、その外は森が広がっているような気がした。この快い雰囲気から離れたくない為に、ぼくは窓をあけるのを恐れた。窓は、その外に広がっている世界を知っているが故に、ぼくの夢をぶちこわしてしまうことになるだろう。ぼくは、ただこの柔らかい光りの中で、リサを感じながら、いつまでもこのまま寝ていたかった...

しかし、それを打ち壊したのは、他ならぬリサ自身だった。突然部屋のドアの開く音がし、振り向くと、そこからリサが姿を現した。彼女はもうすっかり目覚めていて、部屋着に着替えていた。

“兄さん、もう起きた？ 紅茶を持って来たわ”

見ると、彼女の持って来たお盆の上に紅茶茶碗が二つ、ポットや砂糖入れと共に乗っていた。

“いいねえ、ホテルよりいいよ”と、ぼくはにっこり微笑みながら答えた。

彼女は、お盆をテーブルの上に乗せて、近くの椅子に腰を降ろした。

“昨晚はぐっすり眠れた？”と彼女は尋ねた。

“ああ、よく眠ったよ。途中一度も目が覚めなかった。――ところで今、何時頃なんだい？”

リサはちょっとテーブルの上の置き時計を見て言った。

“まだ朝の九時少し過ぎよ。さあ紅茶でも飲んで目を覚ましたら”

“ああそうするよ”と言って、ぼくは、彼女の注いでくれた紅茶を取り、一口のどに入れた。本当に、生き返るように、その紅茶は、口にうまかった。

“いい朝だね。特にこの部屋はいい”と、ぼくは、部屋を見渡ししながら、リサに言った、“飾り付けもいいし、すっきりしているしね”

“そう？ 褒めてくれてありがとう”と、リサはにっこりして言った、“あたしって、あんまり物をごちゃごちゃ置くの、好きな方じゃないの。せめて部屋ぐらいは、きっちり整理しておかなくっちゃね”

“いずれにせよ、快適な部屋さ。お前の部屋に寝させてもらうなんて、初めてなんだもの...”

“このベッド、寝心地悪くないでしょ？”

“ああ、並のホテルに泊まるよりか、ここの方がずっとましさ”と、ぼくは答えた、“それに、何んと言っても、ここはお前の部屋なんだもの。この部屋には、お前の香りが漂っているよ”

そう言うと、リサは、手を叩くようにして、にっこり笑った。ぼくも、そんな彼女の笑いを、黙って横から見つめていた。

“それで、今日はどうするの？”しばらくしてから、リサは尋ねた。

“本当はもうしばらくここに泊まっていたいんだけど、そうも行かないさ”と、ぼくは静かに答えた、“きょうの昼まえにはもう旅立つつもりさ。お前の知らない街に向かってね。そこでセーラを捜す。二週間ほどあちこち旅をして、それから、家に帰るつもりさ。もう当分、お前とも会えなくなるね...”

そう言うと、リサはしんみりとした。少し悲しげな顔をぼくの方に向け、そして言った、

“じゃあ、時々電話をしてね。あたし、兄さんの声を待っているから...”

“うん、電話もいいけど”と、ぼくは言った、“これから精出して、滞在先から手紙を書くよ。その方が、何時でも書けるし、素直な気持ちを伝えることができるように思えるんだ。それでかまわないかい？”

“ええ、待っているわ”と、リサはしんみりとうなずいた。それからリサは紅茶を置くと、ぼくに言った、“じゃ、そうゆっくりもしてられないわね。もうしばらくしたら、出かける支度をしましょうか...”

“まだ朝は早いんだ。そうあわてなくても”と、ぼくは言った、“ゆっくりとこの部屋の雰囲気味わわせてもらうよ。出発するのはそれからさ...”

紅茶を飲み終わると、リサは再びそれを盆の上に乗せ直し、それから静かに部屋から出て行った。部屋から出しなに見た彼女の後ろ姿は、ぼくに何かを思い出させようとした。

それは遠い昔に見たママの面影なのだろうか、それとも他の、リサがいた頃の記憶だったのだろうか...

シャワーを浴び、歯を磨き、髪の毛を整えて、すっかり着替えてから、ぼくはリサのいる居間にやって来た。昨晚とは違って、窓の外はもうすっかり明るくなって、きのうの夜、宝石のような明かりをちりばめていたその正体が、一望の下によく分かった。大小様々な建物や、住居やタワー、そして車の走る道。ここが少し町はずれにあると言っても全くの郊外ではなく、まさにこの大きな都市の端に位置しているだけだった。朝の光りに浮かび上がった様々な建物の妙が、ぼくの目を奪った。左手の方には、深い森もあり、視界を横切るようにゆったりと川も流れていた。古い、中程度の建物がいくつも居並ぶその様子が、ぼくの目を引いた。その古めかしい重厚な建物群は、この都市の幾百年にも渡る歴史の重みを、ぼくに感じさせた。

ぼくが来ると、リサは振り向いて、ぼくを見た。

部屋の様子も、朝の光りが射し込んで、昨晚とは違った感じをぼくに与えた。昨夜のように、少し寂しく、そして暗いイメージはもはやなく、朝の光りを浴びて、明るく、さわやかだった。部屋の飾り付けもスッキリしていて、窓辺に活けてある鉢植えのゼラニウムが、一層気分をなごやかなものにした。

リサは、グリーンのソファに坐っていて、ぼくを見た。

“さっぱりしたみたいね。少しくつろいたら？”

“ああ、そうさせてもらうよ”

そう言って、ぼくは、リサと斜めに向かい合うソファに坐った。彼女は、女性雑誌を読んでいたところだった。灰皿からは、リサの吸いかけのタバコの煙が一筋、空中に漂っていた。

“こうしてみると、なかなか素晴らしい眺めだね”と、ぼくは、窓から見える眺望のことを言った。

“ええ、少し高過ぎる気もするけれど...”と、リサは答えた。

そのとき、窓の両端にたぐし寄せてあるカーテンの柄が、ぼくの目に止まった。趣味のいい、ベージュの、爽やかなカーテンだが、どこか見たこともあるような気がしないでもなかった。たぐし寄せてあるのではっきりは言えなかったが、ようやく思い出した。ぼくの家カーテンとそっくりだ。

そのことをリサに尋ねると、リサはその通りだと白状した。

“その通りよ”とリサは言った、“ポーラといろいろ搜したんだけど、結局、あたしの気に入ったこの柄になってしまったの。後でよく考えれば、田舎の家のカーテンとそっくりだったのね。——でも、きのうは閉めてあったのに気が付かなかった？”

“ああ、こちらは壁だと、なんとなくそう思っていたからね...”

大きなガラス張りの窓の他に、小さな窓がもう一つ、朝になってあいていたので、実はぼくも驚いていたのだった...

ぼくは、ソファから立って、そのカーテンの感触に手をやり、田舎の家をなつかしみながら、振り向いてリサに言った。

“リサ、最近タバコ、よく吸うの？”

リサは、別に悪びれることなく、ぼくを見た。

“都会に出てからね。友だちが吸うもんだから、つい...”とリサは答えた、“兄さんは吸わないの？”

“うん、最近はやめているよ”と、ぼくは答えた、“一一でも、お前がたばこを吸うのを見たのは、きょうが初めてだ...”

そう言うと、リサは初めてにっこりと微笑んだ。

“都会に出て、悪いこと、覚えちゃったのよ”とリサは言った。

ぼくは再びソファに戻った。

“それぐらいならいいんだがねえ...”とくぼくは言った、“まあ、都会での女の一人暮らし、いろいろと危険が待ち受けていると思うけれど、せいぜい気を付けることだな”

“そんなの大丈夫よ”とリサは答えた、“あたしには、ちゃんとした人が周りにはいるもの...”

“それならいいんだよ”と、ぼくは言った、“お前のことだからちゃんとやって行くだらうよ。一一でも、困ったときには、田舎に相談に来てくれたっていいんだよ。これはお互いさまだからね”

“ええ、そうでなくてもまた寄せてもらうわ”とリサは答えた。

“ああ、いつでも待っているよ...”

時計が、カチカチと時を刻んでいた。部屋の中は静かで、その中にいるリサが、特にさわやかな印象を与えた。しかし、このリサとも、もう間もなく別れなければならない。ぼくも、このリサも、間もなくひとりぼっちとなり、それぞれの人生を歩んで行くことになるだろう。ほんの短い、半日と一晚の結び付きにしかならなかった。そう思うと、もっと多くのことを話しておきたかった、という気がしないでもなかった。しかし、もう全てはお終いだ。この可愛い、ぼくのリサとも、もう間もなくお別れなんだ...

間もなく、時計の針が十時をさした。

“さて、そろそろ行かなくっちゃね”と、ぼくは言った、“本当はお前と、もっと色んなことがしたかったんだけど、映画を見たり、ディナーショーを見たり、そんなことをね。でも、時間が短か過ぎた...”

“今回は、あたしの家を見てもらうのが目的だったから、これでいいのよ”と、リサはにっこりして答えた、“外で楽しむのは、また今度来てもらったときにしましょ”

“そうだね。是非寄せてもらうよ”そう言って、ぼくは立ち上がった、“一一でも、しばらくここともお別れだね。たった一日だったけど、結構楽しかったよ。いい思い出になるさ”

“そう。そう言ってもらって嬉しいわ”とリサは言った、“また来てね。招待するわ。そして今度は、兄さんの言うように、夜の街を案内するわ。結構楽しいところがたくさんあるのよ。楽しいショーや、舞台劇の場所もたくさんあるし、娯楽には事欠かないのよ。今度はもう少し長くいてもらって、ゆっくり楽しんでもらうわ...”

“ああ、そのときが来るのを楽しみにしているよ。さて、出ようか...”

そう言うと、リサは、正面の窓のブラインドを降ろした。部屋の中は、急に暗くなった。ぼくが部屋を出て、廊下で待っていると、やがてリサもドアをあけて出て来た。

“忘れ物ない？”と、リサは、ぼくの荷物を見て言った。

“これだけさ”とぼくは自分の小さな旅行カバンを見せると、リサはドアの鍵を掛けぼくと揃ってエレベータに向かった...

タクシーに乗って駅に着いたとき、まだ出発の時刻より少し間があったので、しばらくカフェで時をつぶすことにした。

テーブルの座席に腰掛け、ウェーターにコーヒを二つ注文した。中途半端な時刻のせいか、空席が目立ち、新聞を読んでいるめがねをかけた初老の紳士や、家族連れなどがちらほら見られるだけだった。

“それで向うに着くのは何時なの？”とリサは尋ねた。

“午後四時十分さ”とぼくは答えた。

“じゃ、もうそろそろ夕方ね”とリサは言った。

“着いても、もう時間的に何もできないだろう。ホテルをとって、ゆっくりと夕食でも食べるだけさ”と、ぼくは、着いた街のことを想像しながら言った。

“午後四時十分か。その頃には、兄さんは別の駅に着いているのねえ...”とリサは、しみじみと言った。

“リサはこれからどうするの？”と、ぼくは尋ねた。

“適当に時間を潰すわ”と、リサはにっこりして答えた、“きょうはもう一度、あたし、この駅へ来るのよ。ちょうど兄さんが向うの駅に着いている頃に”

“へえーどうして？”と、ぼくは、リサを見て尋ねた。

“四時半にポーラが帰って来るからよ”とリサはごく自然に答えた、“あの子のことだから、きっと田舎のおみやげをどっさり持って来るに違いないわ。いいって言うのに、あの子は言うこと聞かないんだから...”

“そうか。じゃ、それまで時間があくって勘定なんだね”と、ぼくは言った。

“いいのよ。そんなこと心配しなくても”と、リサはにっこりして言った、“ショッピングをしたり、骨董品屋に寄ったり、時間はなんとでも潰すことができるわ。いつもやっていることよ。――それより、兄さんの方は、これから大変ね”

“そうでもないさ”と、ぼくは答えた、“ただ、セーラの後をたどれるだけでもいいんだ。セーラが

見つかることなんか、初めからあまり期待をかけていないから”

リサは、ぼくを見て、にっこり笑顔を見せた。

“――でもこれで、またしばらく会えないわね”と、リサは普通の表情に戻り、しみじみと言った。

“だから、便りを出すさ。リサもときどき、電話をしてくれよ”

“ええするわ”と、リサは答えた、“兄さんの郵便が届いたら、あたしも必ず返事をよこすわ”

ぼくは、にっこりと微笑んだ。

“ホラ、リサ、向うのテーブル”と、ぼくは言った、“お前を見ている男がいるよ。知り合いかい？”

その言葉で、リサは不思議そうな顔をして、横を見た。

ここから、三つほど離れたテーブルに、グラスを注文し、新聞を読んだふりをしていた若い男が、さっきからしきりにリサを見つめていたが、ぼくらの気配に気づいてか、再びひとりで新聞を読み始めた。

“あの男？”とリサは、再びぼくの方を見て言った、“知らないわ。見たこともない人よ”

“でも、お前をしきりに見ていたようだよ。まあなんでもないと思うけど、気を付けなくっちゃ。ぼくも少し気がかりなんだ、お前をひとり残して行くということは”とぼくは言った、“――でも本当にさ、また田舎においでよ。近くに乗馬クラブができたという話しなんだ。そこへお前を案内するよ。なんなら、そのポーラって娘を連れて来たっていい。せっかくぼくの為に、貴重な部屋をお前に提供してくれたんだからね”

“本当にいいの？”と、リサは言った、“もしそうなら、あの娘も喜ぶわ。だって、乗馬って、初めてなんですもの”

“ぼくだって、うまくはないさ”と、ぼくは言った、“でも来るなら、その為に少しは練習しておくよ”

“けがをしないようにね”とリサは、にっこりして言った、“ポーラも一度田舎へ連れて行ってあげたことがあったから、今度はあたしの番よ。ポーラもきっと喜ぶわ。あの娘の田舎って、案外都会なのよ。家もたくさんあって、あたしたちのように、ポツンと建った寂しいところじゃないわ。ただ、親戚の多いのには参ってしまう。それはそれで、賑やかでいいんだけど...”

“まだまだ話しが続きそうだね”と、ぼくも笑顔で言った、“でも、もうそろそろ行かなくっちゃ”

“もう時間なの？ 残念”とリサは悔しそうに言った。

ぼくたちは立ち上がり、テーブルをあとにした。見ると、さきほどリサを見ていたように思えた若い男の姿は、もうどこにもなかった。彼のいたテーブルは空席になっているだけだった。もうしばらく来ることのないリサとの最後のカフェーを、心残りに外に出た。

切符を買って、再び駅構内にぼくたちはやって来た。行先案内や、時刻表、構内の大時計、ポーターや、降りて来る人、これから乗りに行く人など、いつもと変わらぬ駅風景の雑踏の向うに、ぼくの目ざす一台の汽車が止まっていた。あれがそうだ、とぼくにはすぐ分かった。リサは、静かにぼくのあとについて来た。

やがてぼくたちは、頑丈な鋼鉄の客車の乗降口にまでやって来た。

“じゃ、リサ、これまでさ”と、ぼくは、リサに向き合って言った、“ありがとう。今回の旅は楽しかったよ。――でも、また来るからね”

そう言うと、リサは、嬉しそうにうなずいた。

“向うに着いたらさっそく手紙を書くよ”と、ぼくは言った、“リサも、ここで幸せにね”

そう言うと、ぼくは、手に持っていたバッグを地面に落とし、リサの体を力いっぱい抱き締めた。リサは、あまり突然のことで驚いた顔をしたが、すぐ同じようにぼくを抱いた。そうして一分ほど、互いに抱きあっていたらうか、そのあいだそばを通る人はあっても、ぼくたちに気をかける人はほとんどいなかった。やがて、別れるときが来て、リサの体を離すときに、ぼくは彼女の頬に軽くキスをした。

“じゃあね。もう行くよ”と、ぼくは、バッグを手にとって言った。

“兄さんも気を付けてね”と、リサは、ぼくの間を見つめながら言った。

ぼくは、列車に飛び乗り、もう一度リサの方に振り向いた。リサは、ぼくに向かって手を振った。そのとき、汽車がゆっくりと動き出した。ぼくは思わず把手を強く握りしめ、そしてもう片方の手で、リサに合図を送った。リサは、その場に立ったままじっと去って行くぼくを見つめていた。

“さようなら、またね”と、ぼくは言った。

リサは少し列車に向かって歩き始めたが、その姿はみるみる遠ざかって行った。

“さようなら...”と、リサは、小さくなるまでいつまでも手を振り続けていた。

汽車はスピードを増し、構内の大きなドーム屋根を脱出し、すぐ大きな光りが列車に射し込んだ。それと共に再び都会の風景が目に飛び込んで来たが、そのときにはもうリサの姿を見ることはできなかった...

ぼくは汽車の中に入り、空席が目立つ室内の自分の座席を捜した。疲れたような人々の席に着いているその姿を見て、急に何か空虚なものを心の中に感じた。「リサと別れてしまった」そうぼくは、心の中でつぶやいた...

第3章

「別れ」というものは、いつのことであっても辛いものだ。ぼくは、人々のあいだで空いている自分の席を見つけても、荷物を網棚の上に置いて坐ったまま、極力人々の姿を見ないようにした。そして、流れ行く車窓の風景をぼんやりと見つめながら、「リサと別れた」ことの意味を、しっかりと胸に刻みつけようとしていた。この場で、人々の姿を見ることは余りにも辛く、悲し過ぎた。なぜなら、もうぼくは、人の誰も待っていない所へ行こうとしていたのだから...

ぼくの脳裏には、いつまでも、さっきまで言葉を交わしたあのリサの姿が、残っていた。それらはいやが上にも、ぼくの孤独感を一層強めるのだった。こんなに別れが辛く、孤独がこんなに深く、心に突き刺すようにのしかかって来たことはなかった。しかし、どうすることもできなかった。列車はいよいよ遠く、リサとの距離を伸ばしていた。すべては、運命のままに従う他はなかった。悲しければ悲しむが良い。辛ければ、辛く感じているが良い。今は、そうして耐えている以外、どうすることもできないのだ...

ぼくの目は、車窓の流れ行く風景を追っていたが、ほとんど何ひとつ見てはいなかった。

最後にリサと別れたときの彼女の遠ざかって行く小さな姿——それが長いあいだぼくの脳裏を占めていたが、やがて悲しみのうちにそれも消えかかって来た頃、様々な光景が闇の中から記憶を伴って立ち現れて来た...

まだ父親が生きていた頃、ぼくはよく紙に鉛筆で絵を画いていた。どれもたわいない絵だったが、それをひとりで、机に向かい、あるいは床の上で、下敷きを敷いて描くのが楽しかった。宇宙の絵。それが特に、ぼくの得意だった。想像力は、宇宙の果てにまで羽ばたき、様々な宇宙船が、ぼくの鉛筆から生まれて行った。ぼくは、近くの子と遊ぶこともあったが、どちらかというと、ひとりで遊ぶことの方が楽しかった。とりわけぼくは、自分の集めた人形を愛し、彼等とよく語り合った。彼らは、それぞれ王国を有し、家来を持っていた。そしてよくいさかいが起こり、ちょっとしたことがきっかけで戦争にまで発展することもあった。その為にぼくは彼らに、銃や刀を与えてやった。初めはひとりで遊んでいた「王国の遊び」に、後に妹たちも加わった。彼女たちが、そのうちのひとつの王国を奪い、ぼくの王国と敵対し、ときには戦争をけしかけることもあったのだ。たかが人形同士の争いなのに、それが発展して、ぼくたち同士の争いにまでなることがあった。ぼくは妹の、とりわけリサの髪の毛をつかんで引っ張り、彼女を泣かせてしまうことも何度かあった。——しかし、そんなことがある以外は、たいてい仲が良かった。階段で彼女を背負ってやったり、庭の木でブランコを作ってやったり、彼女の好きそうな絵を画いてやったりして、遊んだ。雨の日に、傘をさして彼女を学校まで迎えに行きやったりもした。リサは、そんなぼくが好きだったし、ぼくもリサという、この小さな妹を愛した。——それはまだ父親のいた幸せな日々のことだった。

ぼくは、体もまだ小さく、父親と母親の目に見えない愛情に包まれて、それを感じることもなく、ただ生活の平穩の中で、黙々と絵を描き続けていた。ぼくは、想像のおもむくままに、自分の画く宇宙絵巻に人形たちや、妹たちを登場させた。そしてふと、もう遙か記憶の彼方に埋もれた年月の後の今、その頃過ごした室内の様子がぼくの目に浮かんで来るのだった。戦後の薄暗い電灯の明かりにともされて、手垢に汚れたドアの把手や、ひび割れた天井、傷ついた床や、しみのついた壁の様子までもが目に浮かんで来るのだった。その小さな部屋に、ぼくの机が置いてあった。ぼくは、電球のスタンドの明かりを唯一のよりどころとして、紙と鉛筆とで絵を描き、空想を羽ばたかせた。夜の室内は薄暗かったが、しかしその明かりが唯一、ぼくが生きていることの証だった。部屋の向うには、親がいた。そしてまた妹たちがいた。ドアを開けさえすれば、いつでも彼らの許へ飛び込んで行くことができ、また逆に、ときに彼らが室内に入って来ることもあった。そんなとき、ぼくの作業は中断し、ママや妹たちの中へ飛び込んで行くのだった。だがたいい、ぼくは黙々と作業を続けた。誰に見せるのでもなく、ただひとり楽しむ為に一一人そんな平穩の中で楽しむことのできた幼少の頃が、まるで夢のように思われた。あのようにな幸せと愛情に包まれた時期はもう二度と来ることはないだろう。今、ぼくを乗せた列車は、轟音を響かせながら、ぼくを誰もいない荒野へと運んで行こうとしているのだった...

ふと、ぼくのまぶたには、ママ、セーラ、それからリサの顔が浮かんでは、強くぼくに呼びかけるようにして、消えて行った。それが走る車窓の景色と重なり、ぼくはその意味を探ろうとした。まだ若いままのママの表情——それは年をとらず、別れたときそのままの表情を保っていた。セーラだって同じことだった。彼女の振り向き様の悲しげな表情は、いつか、どこかで見たものだった。リサも、いつかはそうになってしまう運命にあるのだろうか... ぼくは、幼い頃に亡くした父は別として、彼女らのことは、その後片時も忘れたことはなかった。ぼくの幼い日々の思い出として、その後の幸福と不幸の分かれ目として、彼女らのことを思い出さないことはなかった。ぼくが彼女らと別れさえしなければ、その後の不幸な人生をたどることはなかった。——それは一つの強い信念として、今もぼくの心の中で燃え続けていた。幸福な家庭、愛情に包まれた幸せな人生——そういうものがぼくから消失してしまったのも、彼女らと別れることになってしまったからなのだ。とりわけその中でも、ママの存在は大きかった。いくら世の中に身をぶっつけ、それに代わるようなものを得ようとしても、得られることはなかった。必死になって行動し、必死になって考え、本から、世の中から、それに代わるものを求めようとした。しかし、いつも、ポツカリと空いた穴は、埋められることはなかった。ぼくはいつも、この空虚感を引きずり、それに悩まされ続けられた。それを忘れようと、世の中に戦いをいどんでも、また、人生に戦いをいどんでも、いつも負けるのは、自分だった。やはりそこにママはいず、ぼくは、この空虚さを引きずる他はなかった。

それは寂しさとも孤独でもなく、あえて言うなら一つの原因不明の欠如であり、絶対に満たされねばならぬ神のような存在だったのだ... この為、ぼくはいつも十字架を背負っているという観念に捕らわれていた。自分のせいではない原因により、ぼくは十字架を負わされ、狂った運命を歩まされることになってしまったのだ。それはもう回復不可能で、他のいかなるものによっても償われることはあり得ないのだ。ぼくはただじっと、非存在のママを、あるいは非存在の神を見つめた。別に恨むでなく、呪うでなく、ただそれが存在して欲しいという切ない願いを込めて、ぼくは彼女の姿を眺めた。しかし彼女は決して、ぼくの呼び声に答えてくれなかった。答えたのはただ、闇夜にうなる風の音しかなかった。人の言う、いわゆる孤独や寂しさは、その後、それからやって来た。いつのまにか、世間からはずれひとりぼっちでいる自分、そして、世間に出て行ったときに感じる、寂しさや孤独感――それらは確かに辛い感情には違いないが、子供の頃に知ったママの欠如という引き裂かれるような感情に比べれば、まだしも耐えられるものなのだ。背後から襲われた一撃による真暗闇と、その後のすべてを失った空虚さによって、ぼくはこれまで生きて来た。この空虚さを埋めようといろいろともがいて来たが、結局何も得るものはなかった。気晴らしの旅をしても、本を読んでも、また映画や音楽で気を紛らせても、同じことだった。自分の状態は一向変わることはなかった。だからあとはただ、奇蹟を信じて神の光りを見るか、頼るべきママを見つけ出すか、その二つしかなかったのだ。本当にぼくはもう、気が狂ってしまいそうだった。だから、どうかぼくの指針を、ママに教えて欲しいのだ。もうぼくひとりでは何もできない。何ひとつ、して行く気力がない。ママを見るという行為をする他には...

列車に揺られながら、ぼくは自分の過去を追った。周りには年老いた乗客や車内の雑然とした様子があるが、ぼくの目にはもう何も見えない。これから向かって行こうとしている未来は、ぼくにとって全く無意味に思える。ひとりだけの旅。誰にも出会わない旅。そんな旅にどれだけの値打ちがあるというのだろう。もしこれから訪ね行く街の森林の中に、ママという花が咲いているのを見つけられるのなら、この旅も大きな意味を持つことになるだろうが、そのような可能性や徴候は全くと言っていいほど、なかった。だからぼくは、未来を見つめたくはなかった。そこには何んの希望も歓びも見い出すことはできない。ただ孤独と虚無が待っているだけだった。そんなときは目を閉じよう。そして思い出すのだ...

ぼくはれい明が好きだった。特に、人気の全くない森の中での夜明けが好きだった。朝方の幻のような木立が林立する神秘的な木洩れ陽のただ中で目覚めるのが好きだった。そんな経験をおかして、その後も何度も経験しようと、森の中に分け入った。聞こえるのはただ森の小鳥の声と、小川のせせらぎと...

かつてぼくはリサと、そんな旅をしたことがあった。余り気の進まないリサをなんとか説き伏し、リュックをかついで山越えに向かった。

それは余り人に知られない山だったが、起伏に富み、樹木に恵まれたなかなかいい山だった。ぼくのリュックにはテントと寝袋と食糧とが詰め込まれていた。そんなに困難な山でもなかった。ぼくはリサの他にセーレンをも連れて行くことにした。山道にさしかかると、セーレンはまるで生き返ったみたいにはしゃぎ出した。森の草地をとっと駆けて向うに消えたかと思うやすぐ戻って来て、差し出したぼくの腕を嘗めたりする。犬はそうして、ぼくらを中心に一定の距離を保ったその範囲内で、自由に伸び伸びした行動を続けるのだった。ぼくは、そんな犬の動きや、森や谷の景色に目を配りながら、ひたすら歩き続けた。リサは大人しくぼくの後について来たが、決して黙っていたわけではなかった。時には歌を唄い、ときには、ぼくに話しかけながら、息をつきぼくの後について来た。そこは静かな山だった。途中人に会うこともなく、ぼくらだけのぜいたくな旅を楽しむことができた。

夕方近くになって少し雲が出て来た頃、ぼくは尾根沿いの森の途切れた見晴らしのいい場所を見つけ、そこにあった石の上に腰を降ろした。そして初めて向うの山に目を向けたが、驚いたことには、そこには美しい虹がかかっていた。リサもぼくも驚いてその美しさに見とれた。虹は、手に取るように近く、すぐ向うの山の手前にかかっている、丁度上の部分は雲がなく切れていたが、その一方の端が山のふもとの方まで見事に延びて行っているのを眺めることができた。こんなに美しい虹を、こんなに近くに見たことはかつて一度もなかった。

“ほらセーレン、虹だよ”

ぼくは、息を吐き吐き坐っているセーレンの首筋に手を当てて、虹の方を指さして言った、“ほら、あんなに虹が美しい...”

セーレンは、虹の美しさが分かっているのかどうか、ともかくじっとぼくの指さす虹のほうを向いていた。しかしすぐぼくの方に振り向き、こびるように愛きょうを振りまくのだった。

リサはじっと石の上に腰を降ろし、汗をぬぐいながら、虹を眺めていた。

“山に来ると、こんな光景に出会うこともあるのね”とリサは言った、“虹の美しさって、単なる自然現象以上のものよ。何か、見えざる意図のようなものをそこに感じるわ”

“それはどういうことだい？”と、ぼくは尋ねた。

“まるで夢の国へ架けられた橋のようなものね”とリサは答えた、“とっても神秘的でロマンチックな気がするわ。虹のかかった山の向うには、とっても楽しい夢のようなことが待っているに違いない、そんな気がしない？”

“リサって想像力が豊かだね”と、ぼくはにっこりして言った、“ぼくにとっちゃ、あれはやはり単なる自然現象さ。しかし、自然というものはそれだけ、他に例えようもなく美しいということなんだ。その美しさには、ただただ恐れ入るよ...”

ぼくたちはそんな会話をかわしながら、山にかかった虹を、時がたつのも忘れて、ただ魅せられたようにじっと見つめていた。

やがてぼくは振り向き、虹を見つめ輝いているリサの瞳を見て、言った、

“さあ、そろそろ行こう。この虹とももうお別れさ”

やがてぼくたちは尾根を降り、谷間に小川が流れている平坦な場所にやって来た。冷たい雪どけ水が岩の間をほとぼしるように流れていた。ぼくたちは、森と小川のあいだのちょうどよいと思われる所にテントを張ることにした。ポールを立て、杭を打ち、ロープを張ると、ようやく赤い小さなテントも恰好がつくようになって来た。テントが出来上がると、ぼくたちはさっそく薪を集めることにした。セーレンにも枯木が必要だということを言うと、それが伝わったのか、やがてそれらしい木を口に喰わえ、尻尾を振り振り、ぼくたちのところにやって来た。リサはその間、ポリ容器に水を汲みに行っていた。ぼくはどっさり集めて来た枯木を所定の位置に置くとタオルで汗を拭いそこにリサがいないことに気がついた。ふと向うを見やると、川原でリサが一生懸命水を汲もうとしているところだった。岩の上に膝をつき、ぼくには後ろ向きで水を汲んでいるその様子がなんとも可愛らしかった。水の流れは激しく、相当慎重でないと川に落ちそうな危険さえあった。ぼくは、彼女の後ろ姿を見て、リサに声を掛けたくなった。彼女のそばに歩み寄り、ぼくは声を掛けた。

“リサ、水はうまく汲めそうかい？”

彼女は振り向き、ぼくに笑顔を投げかけた。夕陽の消え行く光りが彼女の笑顔に反映し、空気は澄んで、森の緑と空の青が美しかった。水は透明で、水しぶきの様子が見るからに冷たそうだった。

“とっても冷たいわ。でもおいしそうな水——”

“飲んでみたいぐらいだな。少しぐらいならかまわないだろう”

そう言ってぼくは手ですくい口に含んだ。冷たい、なんとも言えずさわやかな水が、ごくんと喉元を通った。

“ああおいしい。喉が乾いていたからとってもうまいよ”そう言ってぼくは手の甲で口をぬぐった、“リサも飲んでみたら？”

“やめとくわ。あとでお腹を通すのが怖いもの”

“大丈夫だよ”と言って、ぼくはにっこりと笑った。

リサはやっと汲み終わり、ふたをして、ポリ容器を手にかかえた。ぼくは彼女がテントに戻って行くのを見守った。それから川を見、その上流を眺めた。うっすらと上流の山や森が夕陽に照り映えていた。川の流れと、山の空気とが、なんとも言えずさわやかだった...

川の上に一番星が見える頃、ぼくたちは焚火を起こし、夕食にありついていた。夕食はバーベキューで、セーレンもすぐ横で肉にありついていた。暖かいスープがとてもうまかった。時々森に風がとおり、それが炎を揺らし、煙の位置を変えた。風向きが変わり、煙がリサにまともに襲ったとき、リサはせき込み、近くにあった新聞紙で煙をあおった。ぼくたちのあいだに笑いが起こり、その笑い声は、同時に起こったセーレンの吠え声と共に、森中に響き渡った。

ぼくは、川でよく冷やしたビールを空け、それを飲んだ。酔いが、じわじわと全身を襲って来た。

“いい気分だねえ...”

ぼくは、徐々に暗くなりつつある夕暮れの、炎の向うのリサに向かって言った。

“キャンプって、たまにはいいものねえ”と、リサはにっこりして答えた。

“オゾンに包まれて、空気はいいし、目には美しく、静寂で、最高だよ”とぼくは言った、“向うの山に星が輝き出した。きょうは晴れているから、きっと今夜は満天の星だろう...”

バーベキューの炎が、彼女の顔を、暗い背景の中で浮かび上がらせた。この日も、じわじわと暮れて行きつつあった。坐っている犬の顔が、炎の明かりに揺れ動いた。

やがて日が暮れると共に急速に夜空の星が輝き出した。あれが天の川と呼ばれるものなのだろうか。普段めったに天を仰ぐことのないこの頃だったが、山に来て他に遮るものもなく、改めて星の豊じょうさに胸が打たれるのだった。まるで薄い雲のようにさえ見える無数の星くずの群れ、そして星座と名づけられた明るい星の織り成す一大パノラマ。それらは何一つ物を言わないが、無限の物語り、あるいは語りかけを聞く思いがした。星のひとつひとつが生命を持ち、その光りを輝かせ続けていた。こんな素晴らしい光景を他に見ることがあるだろうか...

気のせいだろうか、少し空気が冷たくなって来たように感じられた。向うの森の木立が真暗なシルエットとなって広がり、その姿は無気味にさえ思われた。昔、魔物が存在したとするなら、きっとこんなところだろう。

“ねえリサ”とぼくは言った、“この広い森の中で今いるのはこのぼくたちだけさ。別に怖くはないかい？”

“どういうこと？”とリサは尋ねた。

“つまり、何の防備もなくここにいるということさ”とぼくは答えた、“何か得体の知れないものに襲われたとしても防ぎようがないんだ...”

“大丈夫。兄さんがそこにいてくれるもの”とリサは、別に気にしないといった風に言った、“それに火があるわ。火が燃え続けている限り、獣は襲って来ないわ”

“でも常にぼくがそばにいるとは限らないぜ”とぼくは言った、“ここを離れることがあるかも知れない。そんなときお前は どうする？”

“おどかさないでよ”リサは少し不安な顔つきになって言った、“どうしてここを離れることがあるのよ”

ぼくはにっこりして言った、

“悪かった。ちょっと言ってみただけだよ。行くとしても、水を汲んだり、たきぎを拾いに行ったりするぐらいさ。心配するな。お前のそばを離れたりなんか絶対にしないから...”

“意地悪！”とリサは抗議するように言った、“こんなところにおいてきぼりにするようなら、もう二度と兄さんとは一緒に行ってやらないから。たとえ口先でも人を不安に陥れるなんて許せないわ！”

“御免御免”と言って、ぼくは謝った。それから、ぼくは、それとなく話題を変えるように言った、“変わっていないね、お前って”とぼくは言った、“昔のお前と少しも。ぼくの言葉にすぐ乗せられてしまう...”

そう言って、子供の頃のリサのことを思い出していた。

“兄さんが意地悪だからよ”とリサは平然として言った、“あたしのことをすぐからかおうとするんだから...”

“べつにからかうつもりじゃないのさ”とぼくは言った、“でも結果としてそういうことになっているのかな”

“そうよ。いつもそう。昔からそうよ”と、リサはきびしくとがめた、“あたしをすぐおどかさうとしたり、からかったり、いけない性格ね”

“いけない性格さ”と、ぼくは神妙に言った、“でも、お前もすぐ信用してしまうからいけないのさ。ぼくの言うことなど、半分は聞き流してしまえばよさそうなものなのに”

“今ではね”と、リサは正直に言った、“今では兄さんのおどかしなんかに乗らないわ。むかしはよくだまされたけれど...”

“そんなときもあったね”と、ぼくは言った。

特定の事件をすぐに思い出すことはなかったが、よくそうして彼女を泣かせたことがあったのも事実だった。そんなときには必ずと言ってよいほど、よくママに叱られた。そんな頃が、今となってはなつかしかった。

その頃からお互いに成長したが、その本質においては、昔と少しも変わってはいなかった。リサはリサで、ぼくはぼくだった。

“今でも見るよ。時々夢にね”と、ぼくは静かに言った。

“何を？”

“子供の頃がさ。舞台もあの家。夢の中では、ぼくたちは少しも変わってはいないんだ。あの家も登場するし、もちろんママも登場する。時にはパパさえもがね...”

“随分前のことだわ”とリサは言った。

“現実にはそう。――でも、夢の中では今も生き続けているんだ。あの頃の生活と、あの頃の記憶とが。本当に不思議な思いさ。もう十年は過ぎていているというのに。それなのにどうして、他ではなく、まさにあの頃が夢の中にくり広げられるのだろうか？”

“あんまり夢にこだわっていると気がおかしくなってしまうわ”とリサは言った、“ねえ、もっと楽しい話しをしましょうよ。例えば、あのお星さまを見ていて、どんなことを連想するか、なんて、いい？ あたしは剣を連想するわ。剣座なんてあったかしら？”

“どこが剣に見えたりするんだい？”ぼくも一緒になって、リサともう一度満天の星を仰いだ。

リサは空の一角を指さし、あの星とあの星とあの星とを結べば剣に見えることを説明したが、何度聞いてもリサの言う星を、無数の星くずの中から見つけることはできなかった。

しかし、この静かな夜、リサと一緒に過ごすことが出来るのはとても愉快だった。ほとぼしするような幸福感が、やがてぼくの心の中に芽ばえて来た。リサの言っている星がどれなのかは分からなかったが、無数の星々の中に、ぼくたちの幸福が隠されているような気がして来た。なんとたくさんの星が、ぼくたちの友だちであり、静かな森の中のこのぼくたちに語りかけていることだろう。ぼくはその中に、星々の神秘的な運命を見る思いがした。

“ねえ、どれがお前の言っている星かは知らないけれど、星を見ていると何もかも忘れてしまいそうだ...”

“何もかも？”

“そう、何もかもさ”と、ぼくは言った、“だって無限に遠い彼方の世界なんだろう。そんな星を見ていると、地上のささいな、つまらないことなんか忘れてしまいそうだ”

“たとえばどんなこと？”

“たとえば、小さな悩みなんかをさ。ひとりの貧しい子供が生まれたとする。その子の運命はもう分かっている、どうせ生まれたって余命幾莫もないんだ。でも、そんな悲しい運命も、広い広いこの宇宙の星々を見ていると、みんな等しく運命の定めだと思って忘れることができるのさ。そこに神の存在は必要だろうか？ 宇宙の広さは、神の存在さえも吸収し、その広い闇の彼方へ分散させ、やがては等しなみにしてしまうような気さえするんだ。宇宙を前にしては、人のしていることなんて、幸福も不幸も、宇宙は全く何も感じてはいないし、ほんとうに小っぽけなことに過ぎないのさ。――でも、それでもぼくたちの命はかけがえのないものさ。死ねばそれまでだけど、せいぜいそれまでは、星々の奥深さや、ぼくたちの運命や幸福の意味について考えることさ。本当に幸福って何んだろう？ それは、お前のその瞳の奥に隠されているのだろうか？”

“それ、どういう意味よ”と言って、リサはにっこりと笑った。

“その笑顔が、ぼくにはとってもたまらないのさ”と、ぼくは言った、“なぜか知らないけれど、お前がそばにいてだけで、ぼくは幸せな気がしてくる。こんなに宇宙は広いのに、幸福にしてくれるのは、ただお前だけなんだ...”

“それはどうも”とリサはにっこりと言った、“そんなこと言われると、責任重大ね”

“それは嘘じゃないさ。本当にそんな気がするんだもの”と、ぼくは言った、“ぼくにとってお前は、かけがえのない存在さ。この寂しい森にいて、はっきりとそれが分かるのさ。リサ、お前がぼくの妹でよかった。例え離れることがあっても、いつまでもお前はぼくの妹なんだから...”

“年をとっても兄さんは兄さん。死ぬまで兄さんね”とリサは言った。

“年をとっても兄・妹の付き合いは続けたいものさ。例え所帯は別になってもね。ぼくは、そんなお前を見るのが楽しみさ”

“この日、言ったことを忘れない。そうでしょ？”とリサは言った、“いつまでもあたしたちの関係は続くのよ。お互いに死ぬまでね”

“ああ、死ぬまでね”と、ぼくはくり返した、“お互い別々の運命をたどろうとも、死ぬまでぼくたちは、兄・妹さ。そう考えると、運命ってあなどれないね。ぼくたちの絆は一回きりで、永遠なんだから...”

楽しかった思い出がぼくを蘇えらせたのだろうか、そうした思い出が心の中に燃え続ける限り、ぼくはもう寂しいとは感じなかった。車窓の外に広がる青い空――それはぼくの希望を象徴しているようにも思われた。汽車は緑の森と平坦な地形のあいだを走り続けていた。何度も通過した教会のある小さな村とその駅。ぼくは次第次第にセーラの待っている小さな町に向かっていくような気がして、心は希望に燃えた。この列車の揺れと響きとは、そこへぼくを連れて行こうとしているのだ。

今初めてぼくは車内を見る勇気が出た。狭い部屋に、ぼくを含めてもう四人しかいない。向かいに坐っている三人は家族連れなのだろうか、紳士風の男がひとりと、その娘と息子と思われる小さな少女と少年がきちんと腰掛けている。そしてその瞳は、このぼくのことを変な男だとさっきから見つめているようだ。この子らはきっと父親に連れられて母に会いに行くに違いない。母はきっとこの子らを到着する駅まで迎えに来て待っていることだろう。そんな幸せそうな子らが、ぼくには羨ましく感じられた。

やがてぼくは立って顔を洗いに洗面所に向かった。部屋のドアを空け、通路を通って行くあいだ、この列車の様々な乗客の様子を見ることができた。腕を腹の上に組み眠っている婦人。お互い向かい合わせに坐ってサンドウィッチを食い酒を飲み雑談をしている男たち。静かに本を読んでいる娘や、編物をせっせとしている婦人など、各室内ごとに人々のしている様子は千差万別だった。ある若い婦人は、がらの悪そうな男たちの横に坐って迷惑そうに顔をそむけ、静かに坐っていた。列車の中にこれほど多くの人々のドラマがあり、興味ある存在だということに今初めてぼくは気が付いた。途中、通路で車掌とすれ違って、目的の洗面所に着いた。列車の轟音が全身に響き渡り、しかも特にここは揺れが激しかった。ぼくは手を洗い、そして顔を洗って蘇ったような気がした。鏡に映る自分の生気ない顔をしばらく見つめた後、ぼくは戻ることにした。再び各部屋ごとに、さっきの光景がくり広げられた。相変わらずあの婦人は眠りこけている。このままだと目的駅に着いてもまず目を覚ますことはあり得ないだろう。そして、あの迷惑そうな若い婦人は、今ではもう目を閉じて、周りのことはもう聞きたくないと言わんばかりの顔をしていた。それなのに、周りの四人組は、相変わらず楽しそうに大声でふざけ合っている。誰もこの婦人の迷惑に気付いていない様子だ。――そうしてぼくは再び自分の部屋に戻って来た。ドアの音がすると、幼い二人の視線がその座席の方からこのぼくに向けられた。この少年たちは相変わらず、ぼくの心の傷をうずかせる少年たちだ。なぜなら、この少年と少女は、ぼくの過去と、過去の幸せとを投影させる存在だったのだから...

実際ぼくは、この少年の心情を察して羨ましい気がした。この子らは何も感じていないかも知れない。しかし、子供のまっただなかにいる彼らが羨ましかった。もうぼくにとっては戻って来ないその時代――それをこの子らは今、味わっているのだ。世界の広さも、未来に何が待っているのかも知らないこの時代が、恐らくずっと後になってなつかしく、一番楽しく回想される時なのだ。せいぜい世界の不思議とその幸福とを今味わっているがよい。後になってどんな恐ろしい未来が待ちかまえていないとも限らないのだから。

ぼくは再びぼんやりと窓の外を眺めた。広い麦畑と村の教会の尖塔の上をゆったりと流れて行く雲――あの雲のように、ぼくらの子供時代は、心もとなく、あいまいに、いつとはなしに、どこかへ消えて行ってしまったのだ...

陽がゆっくりと西に傾きかけて来た頃、列車は、遠く青がすむなだらかな山の斜面と、モミの樹林におおわれた、曲がりくねった溪谷に沿って走り、やがて目的の駅が近いことを思わせた。まだ狭い溪谷に過ぎないこの急流がいずれ行き着くところ、そこがぼくの目ざす中程度の都市ブラヨーラの街だった。ぼくは、つい一時間ほど前、由緒ある静かな街の風景を目にした。明るい紅葉の樹木のあい間に、古びた聖堂や、工場や住宅のたたずまいが見え、少し郊外の盛り上がった丘の上では枯れかかって白っぽくなった草の群れが印象的だった。人影はどこにも見えず、死んだように静かに、その町はぼくの目から遠ざかって行った...

約束の四時十分が近付いて来た頃、森と川に包まれた白いアパートが印象的なあの都市が見えて来た。さっきのあの溪谷を流れていた川も、今では幅も広くなり、ゆったりした流れとなって、町の中心を流れていた。その上には、いくつもの橋が、鉄橋や石橋などがかかっている。都市の遥か彼方に、そう標高の高くない青い山並が見えているのが印象的だ。空はどこまでも青く澄み、いくつもの明るい雲を浮かべていた。ついにぼくは初めて見る、この工業で栄えた古くて新しい都市にやって来たのだった。それを象徴するかのような白い住居郡がなだらかな緑の丘のふもとに立ち並んでいた。この街の労働者たちが住んでいるアパート形式の真新しい住居郡――その一つにあのセーラが住んでいるのか、知るよしもなかった。ぼくの心は、この近代的な古い町を目にして、底知れぬ希望に燃えた。青い空の下。白い町がぼくを呼んでいた。この町でセーラを見掛けたという情報をすでにぼくはつかんでいたのだ...

間もなく列車は静かに到着した。駅の時計の針は正確に四時十分を指している。旅に来た人、帰る人など何人もの行列に並んで、ぼくはゆっくりと駅に降り立った。秋の日ざしがまぶしく、駅の緑を照らしていた。ぼくの心は、駅の上を流れるあの雲のように浮き立っていた。子供連れの親子や、恋人同士の幸せそうな後ろ姿が、ちょっとぼくに寂しさを感じさせた。しかしこの町には、ぼくのセーラがいるかも知れないのだ。几帳面な、小太りの駅員が合図を送り、ぼくを運んで来てくれた列車が静かに発車した。ぼくは、去って行く列車を後にゆっくりと人々の後を追

うように、駅の外に向かった。

町は、秋の日ざしを浴び、ぼくに微笑みを投げかけているようだった。道を走る車、通りに沿って並んだ建物とその窓。そのすべての光景が、ぼくに新鮮な息吹をもたらした。初めて目にするこの町の驚きは、遙か昔、ぼくがまだ子供だった頃に初めて都会というものを知ったときの感動に、どこか通じるところがあるようだ。ママに連れられて初めて都会に出て来た時のあの日のことを思い出し、ぼくはひとり、微笑んだ。しかしこの微笑みは、この町の微笑みだった。遠い昔から存在するこの町の、ぼくとの出会いの微笑みだった。そこで、人々は生活をしている。あの歩道に行く若い娘も、自転車に乗って駆けて行くあの少女も、ゆっくりと歩いて行くあの老夫婦も、みんなこの空気を吸い、ここで生活をしている。ここを生涯の地と定めている人も数多いことだろう。ぼくだって、この町なら一生暮らしたとしても、それで満足だろう。明るくて、活気にあふれ、近代的な地方都市――その良さと楽しさとをあますことなくこの町は示していた。

ぼくは、とりあえず宿の案内所に向かった。カウンターでは、若い娘が対応に出て、しばらく滞在するのにちょうどいい、それほど高くもなく、余り目立たないところにあるホテルを紹介してくれた。駅から少し離れた、アパート街の一角にそれがあるといことで、ぼくはタクシーでそこに向かった。

公園で遊ぶ子供や、並木道を歩く人々などを目にしつつ、タクシーはやがてぼくの言った場所で、ぼくを降ろした。そこは駅前の賑やかさとは打って変わっていかにも裏通りの、庶民的な風情といったところだった。しかしぼくは、こういう雰囲気の方が好きだった。昔、住んだこともあるあのスラムからはほど遠いにしても、庶民臭さが満ち満ちている。ここからならば、ほんの気軽にホテルから出入りすることもできるだろう。そこにぼくの知っている誰も住んでいなくても、どこかぼくの胸に親しい気がして来ないでもなかった。そこはもう既にぼくの顔の一部を持っているのだ。

古びた木製のガラス戸をあけて中に入り、薄暗いカウンターにいたまだ年若い受付の男に申し込みをした。とりあえず一週間の滞在の予定ということで宿帳に記帳し、部屋の鍵を預かった。一週間が二週間にも一ヶ月に渡るかも知れない。ぼくは、セーラがここで見つかるまで、もしくは最悪の場合だが、この街にもう彼女はいないということが分かるまで、この町にとどまるつもりだった。鍵を見ると、三百三号室と書かれてあった。ぼくは受付人が指示した廊下の突き当たりの階段に向かった。壁の板も所々黒光したしみがあり、決して上等とは言えない。絨毯だって汚れが目立ち、すり切れたところさえあるのだった。しかしそんなホテルに言いようのない愛着をぼくは持つことができた。セーラを見つけさえすれば、まず最初に連れて来ることになるのは、この古ぼけた、これといってとりえのない、いかにも安っぽいこのホテルなのだ...

やがて、ぼくは自分の部屋に着き、ほっとした気持ちと共に、部屋の窓を開けた。出窓には、気の利いたゼラニウムの花の咲いた鉢が一つ、そっと添えられていた。しかし、窓の外の景色も決して悪くはなかった。もともと緑の多いこの町のこと、目の前の空間に芝の敷き詰めた三角形の曲がり角があり、道を隔てたその向うには倉庫らしいそれほど大きくない建物が一つ、ポツンと建っていた。人影はほとんどなく、ホテルの裏側がもうこんなに寂しいところだとは夢にも思っていない。しかし秋の日ざしは、そこの芝地の上にも、倉庫の上にも、そしてこの出窓にも平等に降り注いでいた。ぼくは、窓の外の景色をうっとりした目つきで眺め、自分が落ち着いた先の喜びをしっかりとかみしめた。

それから振り返り、これから泊まることになるぼくの部屋を見渡した。薄暗く、しんとした、寂しいほどの部屋だった。部屋の角にベッドが一つ、それに机とテーブルとランプがある。これといって華やかな要素の何ひとつないこの静まり返った部屋は、ふと昔を思い出させた。都会の中の死角——かつてそういう時期を生きたことがあったし、その頃の夢や絶望が今となってはなつかしく思い返されるのだった。その頃住んだ部屋と、この部屋とはどこか共通性があるというそんな気がした。部屋の窓に西陽がさし、室内の一部を明るく照らしているせいだろうか、かつてそんな光にも心が揺れ動いたあの時代のことがなつかしく感じられて来るのだった。部屋は絶望的に薄暗く、明日というものがなかったあの頃——何もすることなく部屋のベッドに横たえながら、一日、一時間とただ時計の針が時を刻むままに、不安とこうこつとに心は揺れ動いて行ったのだった。そんな絶望的な日々、あのリサが現れたのだった。まるで春風のような笑顔を伴って、無邪気に彼女は、ぼくの絶望の部屋の扉を開いて入って来た... それはもう随分昔のことだろうか、今この部屋を見ると、歴史は繰り返す再びあの瞬間に戻ったようなそんな気がしてくるのだった。しかし部屋は何も答えず、ただぼくのまなざしが虚しく、部屋の角から角へとまさぐり、当時の思いを呼び覚まそうと無益な試みを繰り返すだけだった。

ぼくは簡単な旅行鞆をほどこき、中から着替えや洗面用具を取り出した。そして最後に、退屈しのぎに入れておいた数冊の本。いまのところこれだけが唯一のぼくの友だちとすることができるだろう。本は孤独な状態を癒してくれることはないが、しかし一瞬、孤独を忘れさせてくれるのだ。気がつけばやっぱり孤独であっても、本を読んでいるあいだだけでも、ぼくは物語りの主人公と、あるいは評伝に出て来る人物などと一体化を感じ、孤独を忘れることができるのだ。それが本の効用であって、それ以外のものをぼくは本に求めようとは思わない。単なる知識を得る為に本を読むことなど、今のぼくには何んの縁もない。——しかし、親切な世の中の人に出会うのも、ぼくの喜びであり、ぼくは決してここに閉じ籠もったりはしないだろう。明日にでも、いや今からでも、ぼくはこの街に向かって外に出て行くつもりだった。

洋服ダンスに上着を掛けながら、振り向けばそのベッドの上にあのセーラが坐っていればいい、たとい幻覚でもいいからセーラが現れて欲しいとそんなことを思った。しかし振り向いても、そこにくすんだベッドがあるだけで、セーラの影も形もなかった。むしろ当然のことだったろう。一度消えた人間は再び現れることはあり得ないのだ。しかし、こんな孤独な瞬間、ぼくはそんな色々な事を空想するのが好きだった。この癖だけは、昔から今になっても少しも変わってはいない。まるで魔法の杖の一振りのごとく、思った通りにセーラやリサがそこに現れてくれたなら、どんなに楽しいことだろう。しかしそれは同時に、寂しい空想の産物にしかすぎないことだろう。たとい姿、形は存在しても、本物にはとうてい及びもしないものなのだ。ぼくは、自分の空想が馬鹿げたものであることを知った。しかし、それと同時にすぐまた別の空想へと飛躍して行くのだった。

眠りたい。気分が何んとなく重いとき、ベッドの上にゴロリと横になって目を閉じるに限るのだ。そうすると、色んな思いがまぶたに浮かんでは消えて行くだろう。色んな思いが... なんとなく、酒場の賑やかな様子が目に浮かんできた。あそこは、よく知っている場所だった。しかしただ夢の中でしか出会わない一家の近くの、どちらかと言えば裏手の方の、寂しい通りの余り目立たないところに、その小さな酒場があった。ぼくは友だちとカウンターの一部を占領して酒を飲み、ふざけあっていた。まるで、このうらぶれた街のここだけが賑やかで、太陽が射しているような明るさに満ちていた。みんなの賑やかな歓談の声が、この店の狭い部屋中に響き渡った。若い娘もいて、彼女らもいっしょにぼくらの仲間に加わって笑い合った。ここの店の裏手にある余りはやらない幼稚園がどうだの、そんなことがぼくらの話題にのぼったりした。ぼくたちの住んでいるこの町は、本当に静かな、さびれた町だった。道の筋向かいにもう一軒、モダンな飾り着けをした小さな酒場があったがそこはどういうわけか、いつも客の数が少なくさびれていた。ぼくたちにしてみれば、この古くからある酒場の方が、少々薄汚なくてもなじみがあり、いつもここしか寄りつかなかった。そして、ここだけが明かりがともったように賑やかで、笑いに満ちていた。

こうして振り返って見ると、ぼくは随分あちこち旅をしたようにも思う。しかしたいていが、気楽で、孤独なひとり旅だった。ぼくは街の風景や、そこで生活する人々の姿を見るのが嫌いではなかった。しかし自分はずっと旅人であり、彼らと出会うこともなく、又そこで生活することもないのが寂しかった。要するに、どこにいても、どこに旅をしても、自分はずっとよそ者で、そこにいるという帰属意識を持つことはできなかった。ぼくはずっとひとりで、孤独な心の窓から、世間の動きを眺めていた。たかが知れていると分かっているながら、彼らの交わりを、彼らの家庭生活を、彼らの微笑を羨んだ。そこにいて、そこで普通に生活を送ることが、結局人々にとって一番幸せなことなのだ。しかしぼくはそこに入って行くことを恐れた。彼らと交わりを

結ぶことを恐れた。

どう理由によるのかは分からないけれど、いつもその一歩手前で立ち止まったのだった。自分にはもっと違った生活があるはずだ、といつもそんな気がしていたために... しかし、そうになると、後に何が待っているというのだろう。世間と没交渉の、波もなければ風も吹かない、表情もなく、ただ惨めで、孤独なだけのそんな生活だけである。ぼくはもう随分と長く、世間から隠れひそんだそんな生活を続けて来たように思う。もちろんそんな生活に、いかなる潤いもないことは事実だった。世間に出て行く喜びというのを、ぼくは持ってはいない。あるのはただ、不安と恐れと... そしてぼくは、孤独な心の窓から、何んの疑問もなく、世間と交渉を結んで行く彼らの幸福を羨んだ。とりわけ、才能のある、機知に富んだ恵まれた階層の人々を羨んだ。自己の才能を生かし、世間に脚光を浴びる栄誉を担うことのできたごく一握りの人々の幸福を羨んだ。どうして彼らには、それが可能だったのだろう。そしてどうしてぼくは、いつもこのように惨めで、孤独なのだろう。いつもひとりぽっちで世間の外側を歩まざるを得ないのだろう。しかしまだもし、この世間に交渉を結ぶことのできる相手がいるとするなら、それはぼくと同じように世間から見放され、明日を生きる力を失いかけたような、まるで悲しい娼婦のようにはなく、か弱い女でしかないだろう。そんな女がもしいるのだとするなら、そんな女になら、ぼくは彼女と心をつなぎ合えることができるだろう...

ベッドに横になりながら、こんな、色んなことを空想するのがぼくは好きだった。現実の、孤独な状況はちっとも変わってはいないのに、空想はぼくを様々な世界に連れて行ってくれる。この部屋から空を眺めれば、あの美しい夕方の空がたちまちにしてこのぼくをセーラの居場所まで連れて行ってくれるかも知れないのだ。そのときこそ、ぼくは本当に幸福というものを見つけることになるだろう...

そうしている間にも、ふと悲しい思いが込み上げて来た。この長いあいだ、ぼくは何をして過ごして来たのだろう？ ほとんど何も、実りのあるようなことはして来なかった。ただ索漠とした不毛の人生――そんな人生を歩んで来たような気がして、恐ろしい気さえした。ぼくはこれまで、ただひとつの幻影を、ママという幻影をのみ追い続けて来た。それが、この暗い下界の魂に差し込む、ただひとつの希望、光のように思われてきたからだった。地上のあらゆる苦しみを浄化し、一掃してくれるような、そんな存在のように思われたからだった。だからぼくは、ただママのみを見つめ、他の事は極力見まいと努めて来た。地上にはただ不幸しかなく、不幸の種しか見ることはなかった。ほんのときたま、我を忘れ、逸楽にふけることがあろうとも、そんな楽しみは何んの解決にもつながらなかった。自分の状況は変わらず、そんなちっぽけな楽しみなど、とるに足りないものであることは明々白々だった。この世の不幸を知って以来、ぼくは本当の楽しみというものを知ったことはなかった。いつも覚めた感覚でこの世を見、自他ともに冷やかに見つめる以外、やり方を知らなかった。それには、ぼくの心にポツカリと空いた大きな穴――それが、ぼくに人生の歩みをとどまらせるのに大きな力を果たしたのは確かなことだった。

この穴は、いつのまにどうして大きく拡がって行ってしまったのだろうか？　ともかく、今日の不幸の始まりは、あのときに始まった。ぼくは今や、本当のことを、真実のみを書こう。

家族が見ている前で人形芝居をやったとき、あのときには本当の楽しみがあった。そこには、みんなの笑いに満ちた本当の団らんというものがあった。しかし不幸にして、そのように楽しい場面が演じられたのは、記憶に残る限り、それだけしかなかった。もちろん他にも、いくつもの思い出がある。ママに連れられて祭りにくりだして行った時のことや、賑やかな港や、花火などを見た思い出もある。しかし家族が揃って何かをしたという記憶は意外に少ないということに気がつくのだ。とりわけ一家の柱であった父は、めったにみんなの中に入って来ることはなかった。妹とは、よく話したり、ふざけたりすることもあったようだが、ぼくとの関係は、あるような、ないような関係だった。今になって思えば、ある事情が、ぼくたちの家庭を冷やかなものにしていただと思うのだが、この特殊な事情についてはもう何ひとつ触れるまい。しかしその事情が、ぼくの家族と、ぼくの人生を屈折させ、その後に深刻な亀裂を生じさせることになったのは明らかなことだった。ともかく、そのような事情により意外と団らんの少ないなか、ぼくは孤独を知り、家族がいるなかでもうひとりの自分が、もっと恵まれた、活発な別な人生を歩んで行くのを夢見る性向を強めて行ったのだった。ぼくは、父親がいる中で別の父親を夢見、ママがいるさ中に別のママを夢見、家族が存在するそのまっただ中で、別の家族を夢見たのだった。こんな冷やかな、沈み切った家庭ではなく、もっと笑いに満ちた楽しい家庭が別のところにはきっと存在するはずだ――それは全く未知で、子供のぼくにとっては触れることのない世界だったが、想像することは可能だった。そしてこの想像は、ぼくを苦しめ、悩ませたのだ。それは打ち破ることのできない限界の向うにある世界であり、決して到達することはできないが、しかしそのとき何よりも一番必要としていた世界だったのだから。この人知れず、そして自分でも分からない苦しきは、やがてぼくを活発化から遠ざけて行った。ぼくは孤独のみを愛し、家庭の楽しみを味わうことはなかった。家庭はそこに存在した。しかしぼくたちは、そこで生きることを知らなかったのだ。めいめいが別々の人生を歩み、お互いがつながりのあることを知らなかった。あるいは、知ることをはばまれていたと言うべきなのだろうか。――今となっては、ほとんど不可避なその当時の生活実態について、泣き事を並べたところで、何んの役にも立たないだろう。それは世の中の仕組みから起因する当然の帰結でもあったのだ。ただ不幸にしてぼくは、自分が、そして自分の妹も含めた家族全員が、この世の特殊の事情に置かれていたことを知らなかったし、知る由もなかったのだ。それは、大きくなるにつれ、世の中の仕組みや、他の人々の置かれた位置が見えてくるにつれ、徐々に分かって来たことだった。そして、ぼくは、自分の家庭が最初は恵まれていると考えたこともあったぐらいだったが、今では、むしろごく貧しい、不幸な状況にあった家庭だったと考えるようにさえなっているほどなのだ。恵まれているどころか、世の中の隅に追いやられているような、そんな危機的でさえあった家庭だったのだ。

そんな状況にある親に、ゆとりや愛情といったものを期待すること自体がそもそも間違いだったことに、幼いぼくたちが気が付くはずもなかった。ただ幼いぼくたちは、とりわけぼくは、親の愛情に飢え、それとなく不満を感じ、おそらくは、欠如をさえ感じていたのだろう。

それが、ぼくが子供の頃に体験した世界だった。それは、他の誰しもそうだろうが、ぼくに量り知れない影響を及ぼした。ぼくの全く知らぬ間に出来上がっていた内向的な性格ひとつをとってみても、それは言えるのだ。親の危機的な状況は、子供だったぼくにも危機的に作用を及ぼした。それは出口ふさがりに迫いやるという作用だったのだ。――こうして、ぼくと親との接触は完成されることなく、父親は逝き、ママは立ち去って行ってしまったのだった。その日以来、両親は真実という実体を失い、いささか理想化された幻影となって、ぼくの心の中に生き続けることになったのだった。しかし今ならはっきりと、ぼくはこう言うことができるだろう。

ぼくがそこで生まれ、育った家庭というものは、他の人の理解を越えた複雑で、悲しい家庭だったのだ、と...

ぼくは、ホテルから出ることにした。この部屋から見える光景は余りにもわびしすぎる。それは、見ていると、暗い悲しい過去を思い出させるのだ。ぼくは、心に光を求めて、気分転換をはかる為にも、ホテルのこの陰鬱な部屋から出る必要があった。

ホテルから出ると、秋の空気がさわやかだった。夕方の柔らかい日ざしが、建物の壁や、ぼくにも当たり、ぼくは思わず、青い、澄んだ、美しい秋の空を見上げた。通りに植わっている樹木の葉も秋の日を浴び、秋風に揺れ、快い葉ずれの音を聞かせていた。さっきまでの陰鬱な気分は、これらのさわやかな光景に触れ、解消されたような気分になった。通りに出て、ぼくは当てもなく歩いた。古びて、くずれかかったような塀のそばを歩いていたとき、向うからポメラニアンを連れてやって来るカーディガンを着た髪の毛の美しい一人の若い娘に出会った。彼女は、小さく歩く小犬の方に注意を奪われ、ぼくには気がつかないようだった。しかしすれ違い様、彼女はぼくの存在に気づき、ぼくを見た。彼女が美しい顔立ちをしていることはそのとき分かった。しかし一瞬で、彼女はぼくの側を通り、小犬に手を触れるように前かがみになりながら、小犬の後ろを追い掛けて行った。そのときの、露出した彼女の可愛らしい膝小僧がぼくの目を惹きつけた。ぼくは一寸立ち止まり、振り向きながら、彼女と小犬とが、通りの向こうの樹木の陰に消えて行くのを目で追った。世の中には、こんな可愛い娘もいるものなのだ。しかし、彼女は、きっとこの町には住んでいるがぼくの知らない娘であり、この秋の柔らかい光景の中で、彼女という存在が急に消えて行ってしまったことが、言い知れぬ寂しい思いを呼び覚ました。この美しい秋の光景も彼女がいるからこそ生きるのもあって、彼女がいなくなった今となっては、ただ日ざしを浴びた、無機的な光景にしか過ぎなくなってしまう。

街路に散りしきる落葉も、塀の上で風に震えるつたの葉も、さっきほどの喜びをもうぼくにはもたらさなかった。彼女の登場が余りにも劇的で、しかも一瞬のことだったので、ぼくの心は動揺し、とまどい、整理されないまま、しかし今や一つの欠如を感じていた。それは、ここに彼女が存在しないという欠如だった。ぼくはあわてて、あの知りもしない彼女を追いかけようとさえ思った。今ならまだ間に合うだろう。彼女はきっと、小犬と一緒にその辺にいるに違いないのだ。しかしもう一度出会う、一体ぼくに何が言えるだろう？ ぼくの足はその場に立ち止まったまま、動こうとはしなかった。ただ、この秋の日ざしの中で、悲しい思いを抱いて立っている他はなかった。

ぼくは、やがて再び歩き始めた。結局――彼女と出会ったということは一つの幸運でさえあったのだ。ぼくがホテルから出ようとしなければ、彼女と会えたかどうかは疑わしい。しかしこうして、人通りのない寂しい裏通りで彼女と出会えたということは、彼女が誰であるかにかかわらず、運命の引き合わせなのだ。美しい彼女の存在を知ったというだけでも、地上の歓びを目覚めさせ、ぼくにとって幸福なことなのだ。それに、彼女はこの近くに住んでいるのだし、あわよくばまた会うことがあるかも知れない。何も今彼女の後を追いかけまわすことはないのだ。そして今度会うことがあれば、なんらかのきっかけをつかんでみたいものだ...

やがてぼくは、町を流れる河の上にかかった石の橋のところにやって来た。秋の柔らかい日射しはここまで照らし、土色の淀んだ河がゆったりと流れていた。ぼくは、橋の手すりに身をもたせかけ、河の兩岸に沿う森や、建物の様子を、ぼんやりとしたまなざしで眺めた。それらの光景は、この町の平和を表していた、岸辺にもやわれたボートが、それとなく揺れていた。風は冷たく、さわやかだった。明るい綿雲が町の上空に浮かび、まるで町に住むすべての人々に微笑みかけているようだった。それらは、この町の平和と活気とを告げていた。しかし、ぼくには考えることがあった。初めて来たこの町――この広い町の中で、これからいかにして、自分の運命を切り開いて行こう。見たところ平和そうだがその中に思いがけない落とし穴が待っているかも知れない。とりわけ、ぼくのような田舎者にとっては...

しかし、もう遥か何年も昔、初めて都会に出て来た日のことを思い出すことができたのだった。まだ何も知らなかった少年の頃、ぼくは田舎の施設を抜け出て、仲間と共に港のある都会に出て来た。憧れの大都会だったが、初めて見たとき、予想以上の大きさに驚かされたものだった。その巨大さは、ぼくの感激も、期待も、野望も、やがてすぐ呑み込んでしまい、喧騒とめまぐるしさの中に、かき消えてしまったのだった。やがてぼくは、叫ぶこともできず、その都会の片隅で、毎日をなんとか食いつないでいるだけの惨めな自分を見出した。もし都会にはしごのようなものがあるとすれば、その一番下で踏みつけられ、苦しめられている自分の姿を見出したのだった。

...あの頃が一番苦しかった、とぼくは思い出して思った。どん底。出口ふさがり。光の差し込まない部屋。人々のうめき声――自殺という言葉が何度も頭に浮かんで消えて行った。

その手前まで行ったことは何度もあったが、結局踏み切ることはなかった。なぜだろう？ それは、そんな苦しい時でも、未来に一筋の希望を持っていたからだった。保証されない幸福がぼくを待っていると、そんな風を感じていたからだった。死んでしまえばそれまでだということをぼくは本能的に感じていた。しかし生きている限り、いずれきっと何か、いいことがあるだろう... それに、死ぬに死ねない要素がぼくには存在していた。離れ離れになった家族と出会うというこの望みが、ぼくに死を思いとどまらせたのだ。ぼくは死のうと思ったその瞬間、ママの顔とママの声を聞き、喉に突き立てた短剣をさやにおさめた。それは、苦しい辛い時期だった。今から思えば、まるで嘘のようなあの時代――しかし今だって状況が変わったとは言えないのだ。まだママはおろか、セーラにさえ会ってはいない...

ぼくが橋の上にあった小石を足でけると、それは河の中に落ちて行き、小さな音が鳴った。石は黙って運命に従い、水の中に落ちてそれまでだが、しかし人間はそうは行かないのだ。ぼくたちは、幸福を求めて生きて行かねばならない...

そうしているうちにも、ボートが一漕、向こうの方からこちらへ向かってやって来るのだった。男と、幼い小娘とが乗っていた。よく見ると、少年も乗っているようだった。何か荷を運ぶ家族ぐるみの船なのだろう。それが小さな音を立て、すーっと流れて来る様が、ぼくの目を惹いた。これから未来を持つ小さな子供たち、そして家族。この町でひとりぼっちの異邦人にとっては、心寂しい、羨ましい光景でさえあった。河の兩岸にある町は、秋の日ざしを浴び、生き生きと輝いていた。町は生きて、歓びにあふれていた。しかしそれを見るぼくの心の中は、なんと暗く、沈んでいることだろう...

ぼくは橋を去り、自転車に乗って元気に駆けて行く子供たち、あるいは乳母車を曳いて、公園の中を歩いて行く婦人の姿などを見て、一層寂しい思いをつのらせた。彼らは生きている。明日を持っている。しかし、ぼくは生きてはいないし、明日すら持ってはいないのだ。ぼくはただ通りすがりの異邦人でしかあり得ない。ぼくに目を止める人もいなければ、声を掛ける人もいないだろう。この世に、ぼくを知っている人は少ないし、ぼくは完全に、世間から忘れ去られた存在なのだ... 公園の散りしきる落ち葉が寂しかった。あの、日なたぼっこを楽しんでいるベンチに腰掛けた老人のように、ぼくは、明日のない、忘れ去られた存在なのだろうか？

そうして、芝草の上を歩いているとき、ぼくは無性に、さっきの娘のことが気になって来た。彼女の命。彼女の可愛らしさや、彼女の幸せには、完全なる明日があり、陽光に包まれた未来が待っていた。ぼくは、そんな彼女の炎のような幸せを消し去ろうとは思わない。しかしただほんの一寸、彼女の生活の一部、その炎のような幸せの一部に触れさせて欲しいのだ。それだけでも、ぼくの冷え切った心は、どれほど暖められることだろう。そしてその一部は、ぼくの気の毒な妹の心にもともして、彼女の心を明るくさせてやりたいのだ...

秋の日が暮れるのは早い。せつかく秋の陽光の中で、孤独とこの町とを楽しんでいたというのに、町の西の方で陽は沈み始め、高層住宅の白い壁面を黄色く染めた。西の雲は黄色やピンクの夕焼けに輝いた。冷たい風が町の中を通り抜け、背広姿の紳士も、ビジネススーツの婦人も、トラックの運転手も、家路を急いだ。みんな、それぞれに帰るところが待っていた。家族。親。兄弟が待っていた。ぼくにも帰るところがあった。ぼくは浮浪者じゃない。しかしそこは、人間の顔をしていない、無機的な、ホテルの部屋でしかなかった。いったい誰が待っていてくれるというのだろうか？ ホテルのボーイか？ 掃除婦の老婆か。それも全くないよりはましというものだろう。ふと、通りの公衆電話を見ると、その中で楽しそうに受話器に向かって話しかけているジーンズ姿の若い娘の姿が見られた。それを見て、ぼくはふと、リサのことを思った。そうだ、彼女に手紙を書き、電話もしてみよう。リサの元気な声を聞けば、ぼくもきっと勇気づけられるだろう。

ぼくがホテルに戻って来たとき、もう空は薄暗く、薄ら寒くさえあった。通りの向こうの街路樹が今やシルエットとなって、冷たい風に震えていた。玄関をくぐるとボーイが、食堂の用意が出来ていることをぼくに告げた。一階の奥の間に食堂があるのだ。ぼくはすぐには寄らず、一旦部屋に戻ることにしたが、途中食堂の前を通ったとき、ガラスのドアごしに中の様子がちらりと見えた。空席が目立つ食堂だったが、それでも幾人か客はいるらしく、黄色いシャンデリアの光の中で、大人しく椅子に腰掛けていた。いかにもさびれた、薄暗い印象の食堂だった。二人ほどのボーイが、厨房とテーブルのあいだを忙しく行き来していた。客は、ざっと見たところ、老夫婦と若いカップルとが一組づつ、サラリーマン風の一人者もいるようだったが、家族連れはいないみたいだった。そんな光景をちらっと見た後、ぼくは自分の部屋へ引き上げて行った。

部屋に引き上げると、窓の白い布のカーテンが風に揺らいでいた。窓の向こうの倉庫には明かりがともっていた。相変わらず人気がなく、しんと夜の闇の中に、そこだけ照らされて、存在していた。空を見上げると、真暗な闇の中に無数の秋の星々がきらきらと輝いていた。遙か遠い宇宙に散らばるこれら無数の星くず――ぼくはかつてそれを、幼子の目で見つめたことがあったが、その光景は今も少しも変わりなかった。しかしその時から、何んという長い年月が通り過ぎたことだろう！ あの頃は、部屋の内側には、明るい光と、なごやかな家庭の暖かさとが存在していた。――しかし今は、寒々としたこのホテルの一室。しかも、この周りには誰が住んでいるのか見当もつかない。宇宙の中で、地球がこんなに冷たく、凍るように存在していると思われたことは、かつてないことだった。街全体が夜のとばりにおおわれている。しかもぼくは、ここでひとりぼっちだ...

しばらくしてぼくは再び食堂に戻って来た。部屋番号を告げると、ボーイが白いテーブルクロスでおおった小さな円テーブルの席へぼくを案内した。周りでは既に食事が始まっていたが、ぼくの席だけは空席だった。赤い花が、テーブルの上でそんなぼくを迎えてくれた。ぼくはボーイにワインを注文し、やがてスープが運ばれてくると食事が始まった。通路で見かけたシャンデリアは暗くさえ感じられたが、いざ中に入るとそれほどでもなく、明るくて和やかな感じだった。ぼくは黙って食事をしながら、人々の会話に耳を傾けた。

翌朝、さわやかな目覚めだった。秋の日射しがベッドにも射し込み、ぼくの間をまぶしがらせた。昨夜、カーテンを開けていたせいか、秋の日射しが直にこのベッドにも届いた。ぼくは、横になったまま、窓ごしに外の景色を眺めた。昨日は夕方に着いたせいか、昨日の落日の打ち沈むような風景とは打って変わって、今日の窓の外は明るさに満ちていた。紅葉した木々の色づきが秋の日射しに照り映え、まぶしい美しさを奏でていた。そして、それら落葉樹の上に広がる澄み切った青い空――ぼくは、枕に頭を寝かせたまま、うっとりとした秋の始まりの風景を眺めた。

昨日、今日の不安は、ぼくの心をつかまなかった。ぼくをつかまえていたのは、いつか感じたこの同じような朝の風景の目覚めの日――かつてそんな日があったはずだ。いつとはもう特定できないけれども。しかし、まだ幼い日々をそれを経験し、それ以後も何度も、ぼくはこんな朝を経験して来た。昔は家族がいて、ぼくは寂しくはなかった。幸福な目覚めの日――そういう朝は何度も回帰して来たけれども、その度に、ぼくは年を重ねて来た。永劫の回帰などというものは、ニーチェの考えた不可能な夢に過ぎないのではないだろうか。――しかし、この日に限って、あの幼い日々が目覚めが、今、手元に戻って来たような、その幸せが感じられるような、そんな気がした。その頃の息吹きと、音とが混ざり合って、ぼくの耳に聞こえて来るようなそんな気がした。二階にあったぼくのベッドと、簡素な木目の壁におおわれた小さな部屋。そこが、ぼくの天国につながる部屋だった。朝はいつも、ぼくはそこで目覚めた。とりわけ、秋の季節の朝が一番だった。ぼくは、朝が明けるとすぐベッドから飛び降りて、窓に駆け寄り、窓のそばまで茂っている菩提樹の朝の色づきや、庭に咲いている花や、生垣や、少し離れたところにある雑木林の葉のゆらめきなどを眺めた。まだ最後の星の輝きが、遠くの森の上に残っていた。しかし雲ひとつない朝だった。ぼくはそんな朝の、なんとなく神秘的に包まれた、すがすがしい風景を見るのが好きだった。ぼくは窓を開け、冷たいさわやかな空気を室内に入れてひと呼吸をした。まだ朝は、完全に明け切ってはいなかった。朝の空気ですべて呼吸すると、ぼくはやおら部屋から飛び出し、あわただしく階段を降りて、家の外の犬小屋に向かった。雑種の愛犬はもう起きて、ぼくの出番を待っていてくれた。ぼくは可愛いがるように、犬の背や頭をなで、それから朝の散歩に出かけようとした。時たま、物音に気がついて、妹のリサが、まだパジャマ姿のまま降り

て来ることもあったし、またセーラが、二階の窓から、出て行くぼくを見つめていることもあった。

ぼくは、しかし彼女らのことはかまわず、たいていひとりで散歩に出かけて行った。朝は冷たく、少々厚着をして来たつもりでも、その冷たさが身にしみ入った。近くの雑木林に連れて来ると、犬は、白い息を吐き吐き、林の中で喜び、走り廻るのだった。ぼくも、木の陰に隠れたり、逃げたりして、犬とほたえた。

三十分ほどの散歩の後家に戻って来ると、もうママは起きて、朝のしたくにかかっていた。犬とほたえ、湿った落葉などで汚れたズボンの裾を見ても別に気にも留めた風もなく、ママはただ素っ気なく、“散歩に行ってたの？”とだけ、言うのだった。しかしぼくは、そんなママを非難したりもせず、自分の持ち場（＝部屋）へと戻って行った。

その頃の朝は、そんな風にして明けて行った。自分の部屋に戻って来ると、隣の妹たちの部屋は、ドアは開き、賑やかにひっくり返っている状態だった。パジャマを着たまま顔を洗ったり、髪を解いたり、ピンで止めたり、上掛け布団は乱雑にベッドから落ちかけていたり、しかもリサは、朝っぱらからぶつぶつと姉を攻撃していたりするのだった。しかし姉のセーラも負けてはいず、リサにやり返していた。ぼくは、めったなこと、彼女たちの、女の部屋には入って行かなかった。それとは逆に、彼女たちの、ぼくの部屋への侵犯は何度となく侵されたけれども...

快い汗をかいて自分の部屋に戻って来ると、もう朝はすっかり明けていて、菩提樹の隙間から差し込む明るい日射しが、机の上やベッドの上を照らしていた。光の当たった机の上の花瓶の花が、微笑みかけるように、ぼくにその花びらを見せていた。ぼくは再び窓辺に歩み寄り、菩提樹の向こうに広がる、のどかな秋の風景を見渡した。

それからきつと、ぼくは下へ降りて行っただろう。朝の支度が出来たというママの合図を聞いて。妹たちが続いて、二階の階段からあわただしく降りて来る姿が目映るようだ。

――しかし今は、あの頃から時空を超えて、現代というこの孤独な時代にぼくはいた。あのテーブルも、あの食堂も、なごやかな食事風景と共に、おぼつかなく、消え入るように、ぼくの視界から去って行くのだった。

ぼくはまだ、ベッドの上に横たえていた。かつて経験したことのある思い出だけを胸に携えて――しかし、その思い出の人と出会えるかもしれない街に、ぼくはいた。この考えは、ぼくの精神を勇気づけた。ぼくは再び立ち上がるだろう。そして、過去にではなく、未来に向かって歩み出すだろう。それは、苦しみに満ちているが、必ず幸福をもたらすはずの未来であるはずなのだ...

なお、ぼくはすぐには起きなかった。ひとつは、自分が見た夢のことが、今ひとつは、昨晚早々と眠るまでの二、三の事が思い出されたからだった。それを充分整理してからでない、ぼくは起きるわけには行かなかった。

ぼくは、夕方の街で見知らぬ若い女と出会った。どういうきっかけでか、彼女とちょっとした知り合いとなり、二人で並んで街を歩いた。賑やかな夜の街で、広告灯をつけたタクシーのヘッドライトが次々と、街の人垣を縫って通り過ぎて行った。ぼくは、彼女から、彼女がこの街のちょっとした知名人で、ラジオの夜のディスクジョッキーに出演していることを聞かされた。そんな有名人の彼女と知り合うことが出来て、ぼくはちょっと得意な気持ちだった。彼女は、若く、気さくで、明るくて申し分の魅力を持っていた。しかしもう帰らねばならない。友人のひとりは、ぼくたちから離れて帰って行ったが、ぼくは彼女を家まで送ってあげることを決意した。それにはタクシーが一番いい。ちょうどタクシーの流れが、目抜き通りの少し裏の方の向こう側から来ていることを知って、ぼくたちもその方向に向かった。そこは、ビルの工事現場近くの空き地で、街明かりも遠のき、暗くて、雑草の生い茂ったところもある少し寂しいところだった。しかし、既に乗客も来ていて行列が出来ていたのだから、ぼくもその後ろ側に並んだ。ただ残念なことに、さっきまであれほどたくさん走って来たタクシーがすべて出払ったせいか、ぼくたちが来たときには、もはやただの一台も残ってはいず、次の一台が来るのを、乗客たちは整然と並んで待っていた。場所は暗くて、寂しく、しかもこんな大都会なのに、たとい他のが出払ったにしろ、すぐ次の一台がやって来ないのが不思議な気がしないでもなかったが、それでも一台もやって来ないのは事実だった。まあすぐ来るだろうと踏んで、ぼくたちも待つことにした。ところが、なかなか来ないのだった。ぼくたちは、楽しい話しをかわしながら、時間をつぶしたが、とうとう他の乗客たちが騒ぎだした。メガホンを持った整理中の男が、もう少し待って下さいと叫んだ為、一旦はおさまったが、このようなどよめきは、その後も何度もくり返された。そのうち、ぼくたちもいらいらし始めた。このままでは、本当に帰るのが遅くなってしまふ。しかし、今となつては、他の方法で帰ることも出来ないし——というの、電車はみんな終電車が出てしまったあとのようだし、いつのまにか、あれほど賑わっていた街も静けさを取り戻し、今、人がいるのはここだけというそんな時間に突入していることに、ぼくたちは気がついた。しかし、タクシーは、まだ一台も現れないのだった。とうとうここに残された四、五十人の乗客たちの怒りは頂点に達し、ついに整理人の方も一計を案じねばならなかった。その結果ひねり出て来たものは、コンクリート製の大きなボートだった。ちょうどそこは川の近くでもあったので、このボートに乗せて家の近くまで送るということだった。タクシーがどうなったかについてはひと言の説明もなく、ぼくたちはこうして、ボートに押し込められる結果になったのだった...

今思うと、タクシーが来なかったのは、実はぼくが彼女を手離したくはなかった——その気持ちの現れの結果ではなかったかという気がする。タクシーが来れば、彼女の家はもうすぐそこで、そこで彼女と別れねばならない。夢ではこういうことがよく起こるものなのだ。現実にはこういうことが起こってくればありがたいのだが、そんなことはよもや起こり得ないだろう...

ぼくは、この夢を思い出してから、ようやく起き上がった。そして、ふと、机の上に書きさしの手紙があることに、ぼくは気がついた。ベッドの上で体を起こしながら、ぼくはふと思い出した。昨日は、酒に酔いながら、リサに手紙を書こうとしたことを。しかし、途中で眠くなってしまい、そのまま、ベッドに伏せ寝をしてしまった。ぼくが酒に酔ったのには、恐らく理由があったのだ。一日の孤独な思い。夕方に彼女を見たこと。そして、食堂――そこで見た人々の賑わい。とりわけあの家族連れ。若い息子と娘が二人、家族に連れられて坐っていた。ぼくには、彼らの生活が幸福なもののように思われた。その為に、少し深酒をしたのかも知れない。部屋に戻って来たときには半分酔いつぶれていた。窓を明けた為に入って来た秋の空気が冷たかった。ぼくはリサに、この気持ちをつづるべくペンをとった。しかし、一、二行書いた後、言葉は沸いて来なかった。それから恐らく、ぼくは風呂に入ったのだろう。

――ともかく、ぼくの夢に出て来た彼女は、あの彼女ではなかった。全く別の見たこともない、夢だけの彼女だった。もう夢の彼女には会えないにしても、あの彼女には会えるだろうか？

ぼくは、そんなことを思いながら、もう一度、机の上の書きさしの手紙を見た。朝はまだ早く、すがすがしかった。これから、この日が始まろうとしていた。ぼくは、窓の外の青い空を見つめながら、よろよろと起き上がるのだった。この一通の手紙を、ぼくは誰に出そうとしていたのだろうか？ 言うまでもなく、あのリサにだ。ぼくはふと、彼女についてひとつのことを思い出した。

もう随分と昔のことだ、ぼくが自転車に乗って村の田舎道を走っていると、両側が草原の向こう側から、少女が四人、何かおしゃべりをしながら歩いて来るのだった。長袖のシャツにジーンズをはいた、生きのいい少女たちだった。ぼくは、彼女たちが誰であるかよく確認もせずに通り過ぎようとしたが、そのうちの背が高く、髪の毛の長い、可愛い表情の少女が見たことのある少女であることに気がついた。ひょっとして、と思ったときに、後ろから声が掛かった。

“兄さん！”

自転車を止めて振り向くと、やはりそれは彼女、リサだった。うつ伏せ気味の楽しそうな表情がぼくを惑わせたが、今や、他の少女たちと共に立っているその少女は、間違いなくぼくのリサだった。ぼくは、背の高い彼女と、他の少女たちを眺めた。色の浅黒い健康色が彼女を、明らかに他の少女たちと分けていた。ぼくは、そんな彼女が自分の妹であることが、誇らしい気持だった。

“もう帰るの？ 今日ひとり？”

“うん、もう帰るよ”

そんな会話が二言、三言かわされた後、ぼくたちは別れることになったが、あの頃の、三人の少女に混じって歩くりサの姿が、いつまでも印象深く、ぼくの心に刻まれることになったのだ。

その頃のリサは幼く、少女そのものだった。可愛くて、抱き締めてやりたいような、小悪魔さながらだった...

ぼくはそんなリサを見守って来た。そして、いつかは彼女を連れて旅に出よう。人の知らない、いろんな場所に行って、そこで彼女の可愛らしさを堪能しよう、そんなことをぼくは考えた。彼女との幸福な二人だけの旅は、その後、可成りな期間を置いて実現し、そのときにはもう少女ではなかったが、また別の味わいをぼくにもたらししてくれたのだった。ぼくにとって彼女は、忘れることの出来ない存在、血であり、肉であるような存在だった。

ぼくの前に置かれていた手紙は、その彼女に向かって差し出されようとしていた。昨晚、どうしても言葉が出て来なかった。あんなに親しかった彼女なのに、ぼくは言葉を失おうとしているのだろうか？ それとも、自分の寂しさを、彼女に告げるのを恐れていたのだろうか？ いずれにせよ、ぼくはやはり書くだらう。彼女の存在なくして、ぼくの人生はあり得ないのだ。普段彼女に語りかけるように、ぼくは書くだらう。そして、自分のありのままを、彼女に告げるだらう。そうしてこそ、彼女とぼくの心とは、一つとして結び合わされるのだ...

朝、食堂に来ると昨日とは打って変わって、秋の明るさに満ちていた。秋の日射しがテラス近くのテーブルを照らし、もう幾人かの人々は朝食を楽しんでおり、その中には、あの幼い子を連れた家族連れの様も見られた。しかし、今のぼくにとって、彼らはただの背景にしかなり得なかった。主役はこの秋の明るい日射しと、ぼくの為に空けられている、花の生けてあるテーブル。テラスの上から垂れ下がるつる草の木の葉は、なんと濃い緑色に輝いていることだろう。あの青い空の為に、一層際立って美しい感動を呼ぶのだった。その葉の色こそは、まさに健康の色——健康って、いいものだ。ぼくの病み疲れた魂は、ずっとこの健康というものを求めてさ迷って来た。健康な喜び。そして健康な笑い... それは、その家族連れの中には存在していた。しかし、ぼくの心だって、束の間の秋の喜びに色どられていた。この朝の秋の食堂は、健康なムードに満たされていた。

ぼくは、テーブルを占め、秋の色づいた木の葉や、陽気に晴れ渡った青い空を眺めながら、健康な幸福とは何んだらうと考えた。白い服を着たボーイが、黙々とミルクとコーヒを注ぎに回っていた。幸福とは例えば、あのテラスの片隅で色づいている樹木の葉の緑に心を寄せることなのだろうか。それとも軒から垂れ下がり、秋風に震えているつる草の今にももぎ取れそうな葉の優しさに目を向けることなのだろうか。すぐそばには、人々の生活があった。彼らの歓談のざわめきが、ぼくの耳にも聞こえて来ていた。家族があり、生活があること、恐らくそれが本当の幸福につながって行くことなのだろう。しかし他のすべてのことがぼくにあるとしても、それだけが今のぼくには存在しないことだった。ぼくは、本当の幸福からは見放されているのだろうか。そう考えると、この晴れ渡った陽気な秋の朝も、なんとなく悲しかった。

生きて行くこととは、なんと辛いことだろう。とりわけ、このような日にひとりであることは。しかし、ぼくは決してくじけなかった。決して。ひとりでも生きて行くつもりだった。人々のように、ぼくは弱くはない。自分の中に、愛や喜びや幸福が存在する限り、それらを失わない為に、世の果てまでも真実の道を歩いて行くだろう。人々のように、ぼくは弱くない。なぜなら、それらは、人々と交わるとたん、消えてしまう運命にあるものだからだ。その日から恐らく、にせの、偽りの日々が続くことになるだろう。しかし、ぼくが求めているものは、真実であって、それ以外のものではないのだ。恐らく、ぼくはこの世で一番弱くて、惨めな存在だろう。なぜなら、家族もなく、ひとりぼっちだからだ。しかし、その意志は誰よりも強い。なぜなら、にせの人生を嫌い、ただ幸福しか求めてはいないからだ。

ぼくは、テーブルに向かい食事をしながら、ぼんやりと秋の朝が過ぎて行くのを眺めていた。決して、人生に敗れてはならない。どこまでも、自分の求めるものを追いつけて行くことなのだ。その為に、年齢や、社会的制約や、逆境などは問題にならない。たとい、たったひとりぼっちになったとしても、それでも追いつけて行くことなのだ。まるで取りつかれた少年が何かに熱中するように、その情熱を失わないことだ。それこそが、その人の人生を全うするただ一つの道だろう... ぼくは、テラスの向こうにのぞく青い空の上に、ふとセーラの横顔が見えた気がした。

結局、ぼくが今必要なことは、あのセーラと二人で暮らすことなのだ。どういうわけか、ぼくは、セーラが結婚しているとは思えなかった。きっとこの同じ空の下、ぼくと同じように、ひとりぼっちで寂しく暮らしていることだろう。だからこそ、ぼくとセーラとが、また再び出会い、共に暮らすことは、ごく自然なことなのだ。

...どんよりと曇った空—そういう日には、悲劇を思い起こさせる。秋の日の、どうしようもなく悲しい思いが、ひしひしと押し寄せる。ぼくは街を歩いた。しかしどこまで行っても、あの重く垂れ込めた雲は消えることはなく、冷たい風が小枝や花を揺らしている。このまま秋は更けて行くのだな、という重く、沈んだ思い。もうそのまま、真暗な井戸の底に沈んで行って、どこまでもわびしく、寂しい世界へと入って行くだろう。かすかにのぞく、雲の切れ目の青い空—その彼方には何が待っているのだろうか？

このようにして、ぼくの行動の初日は始まった。朝はあんなに晴れていたのに、それは束の間ですぐ暗い秋が押し寄せて来た。それで、身も心も暗く、冷たくなってしまった。このような日には、何もせず、じっとしているのが一番なのかも知れない。しかしぼくは、ホテルの一室にじっと閉じ籠もっているわけには行かなかった。落葉の敷き詰める路地を歩き、冷たい秋風に吹かれながら、重く、雲の垂れ込めた秋の空を見上げた。その黒い雲と、わずかにのぞく青い空とは、ぼくに何かを思い起こさせた。

もう何度も経験して来た、このような陰うつな秋――ぼくは、そんな日にひとりで居ることが多かった。そして知ったのだ、ぼくの未だ見たことのない若い娘の悲しみと孤独とを――こんな日には、ひとりで冥想にふけり、思い切り深い事を考えるのだ。晴れた日には心を明るくし、こんな暗い日には、心を物思いに更けらそう。街路を飾る木立の木の葉が悲しく震え、灰色の雲が足早に駆けて行き、人々の姿もまばらだ。こんな日に、外をひとりで歩くのは、愚かな事だとさえ言えるだろう。みんな家の中で暖かい日を過ごし、誰も外を歩こうとはしない。しかし今のぼくには、明るく、暖かさに満ちた家というものは存在しないのだ...

ぼくが思い出したのは、ちょうどこのような秋の日、しかも村はずれの麦畑のそばの小川で死んで行った若い女のことだった。ぼくは、彼女がどのような人生を歩んで行ったのか何も知らない。ただ幼い頃、母親に連れられての帰り道、数人の警官と野次馬とに囲まれて横たわっている、まだぬれたままの女の死に顔を見たのだった。母親は、ぼくに見せまいとしたがもう遅かった。風が強く、寒くて暗い秋だったが、その若い死に顔は安らかで、まるで生きているみたいだった。警官たちはその女のことについて目撃者に何か聞き出そうとしていたが、ぼくには話しの内容がよく聞き取れなかった。ただ、このまだ年若い女が、目の前に横たわりながらも、この暗い秋、どこか遠いところへ行ってしまったことだけが、子供心にひしと伝わり、感じ取られたのだった。ぼくは、足早にそこから立ち去ろうとしているママに向かって、その場から離れたくないそぶりを見せながら、尋ねた。

“あの人、死んでしまったの？”

しかし、ママは、答えようとはせず、ぼくの手を引っ張った。ぼくはなおも尋ねた。

“死んだらねえ、あの人どこへいくの？ 教えて”

“遠くよ”ママは、ただ一言、答えた、“遠くへ行ってしまふのよ”

“遠くってどこなの？”と、ぼくは聞いた、

ママはしかし、それ以上、ぼくに答えようとはしなかった。

“そんなことはどうでも、さあ、早く行きましょ”

そう言ってママはぼくの手を強く引いたが、ぼくには、ママの“遠くよ”という一言が、この暗い秋の光景とあいまって、強い響きとなって心の中に鳴り続いたのだった。遠くって、どんな遠くへ行ってしまったのだろうか？ しかも、こんな寂しい秋に、たったひとりぽっちで... また、楽しく、明るい日も訪れるかも知れないのに、あの人はずもう地上へ帰って来ることはないのだろうか？ ぼくは子供なりに考えた。そして何も説明してくれず、その話題を避けようとしているママをいぶかしく思ったりしたのだった。

“ママ、死ねばそれっきりなの？”しばらく歩いた後、ぼくは尋ねた。

ママは、まだそのことにこだわっているぼくに怖い目を向けながら、それでも優しく、

“それっきりじゃないわ”と答えてくれた、“肉体は滅んでも、魂だけはずっと遠いところへ行ってしまふのよ。分かった？ 分かったらもうそのことは考えないで...”

ぼくは、振り向き、遠くになりつつある警官たちの姿を見つめた。女の人はずいぶんシーツをかぶられているようだったが、その瞬間このどんよりと曇った、空恐ろしいような地平の、遙か彼方に、その女の魂が静かに飛び去って行くのを見たような気がした。そうして、その女の生涯のすべてが終わったのだ。遙か、青がすむ丘も、黄色く刈り取られた麦畑も、そして、葉を落として裸になったあの森も、もうこの女の目に触れることはないだろう。そして再びここに訪れる春のことも、この女は知ることもないだろう...

自殺だったのか、事故死だったのか、まだ幼かったぼくには知ることもなかった。ただ母親が死を嫌い、ぼくに見せまいとしたその気持だけはよく分かった。その年の夏にパパを亡くしていたし、これ以上悲しい光景を見せられるのは御免だという気が働いていたのだ。それでも、ぼくは母親に手を引かれながらも、何度も振り返り、だんだんと秋の寂しい光景の中に遠のいて行く、立ち尽くした数人の男の姿だけが、いつまでもまぶたに残ることとなった。

それから何年経ったのだろうか？ 今、再びあの頃と同じような秋に出会って、ぼくははっとしたのだ。あの重く垂れ込めた不気味な秋の雲——それを見る度に、ぼくは、あの安らかに眠るように死んで行った女の姿を見る思いがするのだ。小川のほとりに横たわり、全身がぬれたあの女の記憶が鮮やかによみがえる。ぼくとあの運命的な出会いの日まで、彼女はどのように生きて来たのだろうか？ その短い人生の中に、どのような喜び、あるいは悲しみが隠されていたのだろうか？ ぼくの知らぬ時代を、知らぬ場所で生きたその女—— ぼくは、その女の何を何も知らなかったし、ただ最後の場面だけに劇的に出会っただけだった。その後、その女のことは思い返すこともなく生きて来たが、今、人生の寂しさに出会い、ぼくは、彼女の生きた時代のことを思ったのだ。そして、このような秋に、人知れない場所で、ひとり寂しく死んで行った彼女と、しかも生きていたときの彼女と、もう一度会ってみたいという不可能な夢を抱き、それが実現されることを望むのだった。

ぼくの抱くのは、いつもこのような不可能な夢ばかり。女の悲しみに似て音を立てる秋風は冷たく、木の葉を揺らす。ぼくは歩いたが、どこまで行っても、この沈んだ気持を晴らすような光景には出会わなかった。空は曇ったままで、時折り晴れたようになる日射しも、すぐ秋風にかき消されてしまうのだった。賑やかな市とてなく、ぼくは、夢の市に逃げ込みたかった。しかし、落ち葉の敷き詰める路地を、ただ死んだ女の記憶だけを引きずりながら、言いようもなく暗い秋の中、ぼくは歩いた。ただひたすら歩いた。悲しい記憶が消え去るのを待つかのように、また、永遠の時に会うのが今であるかのように、ぼくは歩いた。そしていつの間にか、彼女の死んだあの麦畑のある小川のほとりにぼくがやって来たかのようなそんな場所に出会い、はっとするのだった。

悲しみは、このようにして過ぎて行く。それは、誰しものが通り過ぎ、そして忘れて行く、一時の停車駅のようなものかも知れない。しかし、その事実は永遠だし、またその記憶も永遠なのだ。そしてぼくは、この寂しく過ぎて行った暗い秋の一日も永遠だった、と付け加えておこう。人生の喜びは、もはや何も見当たらず、ただ目にし、記憶によみがえるものは、死の影ばかり...それが秋であり、このような秋なのだ。その秋が、ひしひしとぼくの頭上に、街の角に迫っていた。

そんなとき、ぼくが出会ったのは一匹の蟻。正真正銘の小さな蟻だった。レストランのテーブルの上に、どういうわけか迷い込んでいた。ぼくは、その蟻がおろおろとテーブルの上を回るのを見つめていた。帰り道を見失い、どういうわけか、ここまで運ばれて来たのだ。そのうちぼくはあることを思いつき、スプーンの上にうまくその蟻を乗せることに成功した。蟻はその上をぐるぐる回っていたが、やがてへりに来て裏に回り込もうとした。するとぼくはスプーンをひっくり返し、蟻を再び目の前に置くことにする。何度かスプーンをひっくり返しているうちに蟻は足場を失い、テーブルの上に落ちたが、ぼくはまたすぐスプーンに蟻を導くことに成功するのだった。そんなことを何回かくり返して遊んでいるうちに、ぼくは、遊ばれ、おののきながらも必死にこの蟻が、自分の家を求めているその泣き声を聞く思いがした。一匹の蟻を、このまま殺すこともできただろう。しかし、ぼくはそうしなかった。やがて可哀そうに思い、蟻を落とさないようスプーンに乗せたまま、レストランの窓辺に歩み寄った。外の庭はすぐそこだった。ぼくは窓をあけ放ち、窓のすぐそばの鉢植えのゼラニウムの花を見つけると、その花びらにそっとスプーンからその蟻を移してあげたのだった。蟻は何も分からないまま、花びらに乗り移り、すぐにぼくの視界から去って行った。庭はすぐそこだし、自分の家を見つけるのも、そう遠くないだろう。窓を閉め、部屋に戻ると、料理を運んで来る途中のウェイターが、訳も分からずぼくのこの奇怪な行動を、驚いたように見つめているのだった。

さて、あの蟻は今、我が家への帰路に着いたことだろう。ところで、返してあげたこのぼくの方は？ ぼくの方は全く帰るところもなく、五里霧中といったところなのだ...

ぼくは、この暗い、底のような日から立ち直れるのだろうか？ このまま立ち直ることもなく、さらに底へと沈んで行くだけではないのだろうか？ このような不安がぼくを捕らえ、ぼくの暗い気持ちを、いっそう暗くした。結局、あの女が自ら死を選んだのだとしたら、このような気分が原因なのだ。その背後に何があったかは、ぼくは知らない。そして今後も永久に知ることはないだろう。しかし、あの女の暗い過去――それが彼女に死を選ばせたのは、ほぼ間違いのないことなのだ。しかしそれが何だったのか、もう十年以上も前の事件だけに、知ることは不可能なことだ。ぼくとしてはただ、どんな事情であるにせよ、この陰うつな秋の今、彼女の冥福を祈る以外にない。そして自分自身、これ以上に暗くならないよう、底に沈まないように、そう運命に祈る以

外にないのだ。他の人の幸せはともかく、ぼくは、自分の幸せを見つけねばならない...

秋は陰うつな方がよいのか、それとも明るい方がよいのか、ともかくこの日、朝のいつときを除いて、ずっと灰色の雲に閉ざされ、淀んでいた。ぼくは、落葉の散りしきる街角を歩いた。ときどき落葉が風に舞い、その姿はぼくに、生きることの寂しさを感じさせた。もう一世紀以上も前に、このような姿を見て、

秋の日のヴィオロンのため息の、身にしみてひたぶるにうら悲し。

と歌った詩人がいた。

彼は、本当の孤独や人生の寂しさ、というものを知っていたのだ。これを歌ったとき、彼はまだ二十才だったと言う。

げにわれはうらぶれて、ここかしこさだめなく、とび散らう落葉かな...

ちょうど、そのような霧囲気の街角を、ぼくは歩いていた。ぼくはこの街にやって来たさすらい人、異邦人だった。どこまで歩いても恐らくぼくの知った顔に出会うことはなく、ただ神秘的ヴェールに包まれたあの淀んだ雲のみが、ぼくの存在を知ってくれていた。ぼくの昔からの唯一の友だち――あの雲... ただ雲だけが、地上の利害や幸・不幸から離れて、ぼくの心を厳粛なものにしてくれた。それは、ただ空に居るだけで、ぼくの人生のすべてを見通してくれているのだ。何ゆえに、ぼくが孤独であり、この街にひとりぼっちでいるのか、ということ。ぼくの過去と、そして、未来までもを、あの雲は、ただ静かに見守ってくれているような気がした。

雲の切れ目から射し込む、秋の日の淡い光が、ぼくにあることを思い起こさせた。ちょうど、こんな季節の日だった、もう十年以上も前のことだろうか、ぼくたちは荒野のどまん中を歩いていた、なだらかな傾斜にまた傾斜が続く、村からそう遠くない田舎道だった。ぼくは、妹たちと歩いていた。歩く道は悪い道で、時々妹たちの手を引いてやらねばならず、また、風は冷たく、遠慮なしに吹き付けて来た。妹たちは、遙か彼方の雲に閉ざされた村の方角を見やり、うっとおしい表情で、この季節の暗さを眺めた。どこまで見渡しても、あるのはただ荒涼とした荒野と陰鬱な黒雲だけだった。ところどころ光が射し込み、黄色く輝いている場所もあったが、それらは、ぼくらの心を柔らげるまでには至らなかった。道端のところどころに自生する木立は、ほとんど葉を失って枯木同然で、恐ろしい印象すら与えるのだった。

“怖いわ”と、末っ子のリサが一番恐れて、ぼくに抱きつくように、つぶやいた。

“何が怖いんだい”と、ぼくは、わざと強がりを見せて、叱るようにリサに言った。

しかし、内心はぼくも恐れていた。この閉ざされた雲のせいで、一度方角を見失いかけたのだ。村はまだ見えては来なかった。見渡す限り、ただうんざりするほどの荒野と暗黒の雲ばかり...

人影はおろか、動物の姿一匹すら見ることはできなかった。果てし無い孤独の中を、ぼくたち三人は歩いていた。

それというのも、セーラの友だちをその家から救い出す為に、はるばると遠くから、日曜という日を借りて、この荒野にやって来たのだった。彼女の書いてくれた地図と標識によれば、彼女の村はもうすぐのはずだった。しかし、地平の方は、真昼というのに暗くてよく見えなかった。しかしやがて、足にまめをこしらえそうになりながらも歩き続けた後、空にカラスの舞う姿が見られるようになり、この強い風を利用してタコあげに興じている数人の子供たちの姿が見えるようになって来た。村はもう、そのすぐ近くだった。タコは、高く、高く、カラスの舞っているすぐ近くまであがっていた。ぼくは、その少年のすぐ近くまで歩み寄って、声をかけた、

“随分高くあがっているね。もっと高くあがるかい？”

“うん、あげることはできるよ。でも、風が強すぎて、糸が切れるかも知れない”

“君の家はこのすぐ近くかい？”

“そういう君こそ、どこから来たんだい？”

まるで天から降って来たようなぼくたち三人の姿を見て、村の子にあやしまれ逆に質問し返されてしまった。妹二人は、少し離れた所に立って、心配そうな面持で、ぼくと、同じ年恰好のその少年とのやりとりを見守っていた。

ぼくは、村が間違いないか確かめようとしたのだが、逆に危険を感じて、その少年たちから離れようとした。少年たちはあやしそうにぼくたちを見つめ、特に、興味深げに、ぼくの二人の妹を見つめた。ぼくはすぐ妹たちのところに戻り、彼らから少し離れた所に通っている田舎道を、さらに先へ進もうとした。

“この道で恐らく間違いないはずだよ”と言って、ぼくは妹二人を安心させ、その場を出発した。しばらく行くと、もう彼らの姿は荒野にさえ切られて見えなくなり、ただ高く、高く、暗い空にあがった五、六葉の凧の姿が、吹く風に揺れているのが見えているだけだった。しかしそれは、なんとぼくたちの童心を打つ光景だったことだろう！ ぼくもその凧を見て、凧をあげたくなった。この暗い季節の空に負けず、どこまでも高く、高く、凧をあげてみたかった。

ぼくが思い出したのは、そのことだった。暗く、重く垂れ込めた雲におおわれ、出口のない、息詰まりを覚えるような季節、心もまた暗黒の中へ押しひしがれて行くような日にこそ、それを打ち破るような、力強いことをすることが必要なのだ。真暗な、灰色の雲に閉ざされた日に、パッと光輝くような陽光がさし込めば、どんなに心もまた、明るくなることだろう。人の心は本当に、季節の暗さ、明るさに左右されるものなのだ。とりわけ、この日のように陰鬱で、ただ暗いことしか連想されて来ないような日には...

秋の寂しい季節、寒い街角を歩いていると、いろんなことが思い出されてくる。時代を超えて、この季節は、人の胸を打ち、人に問いかけて来るのだ。人生の奥行きと、過去と、神秘さとを。ぼくは、長い間、夢と現実を、過去と現在のあいだをさすらって来たが、未だに錨を降ろす場所にめぐり会ったことがない。

かつて、人々と自然の織り成す様々なドラマを目にして来たが、一度だって満足の行く場面にめぐり会ったことがない。どうすれば、そのようなことが可能となるのだろう。どのようにすれば、そのような場所と場面にめぐり会うことが可能となるのだろう。ああ、空に漂う冷やかな雲よ、教えておくれ、人生の神秘と、その奥に隠された秘密とを。ぼくは、その秘密のヴェールをはがし取りたいのだ。そして、この呪われた、暗い、辛い人生から、その重荷を解き放し、早く解放に至りたいのだ。牧場で草を食う馬のように、空を飛ぶカラスのように、季節の重苦しさに関係なく、自由な魂となりたいのだ。ぼくにとってはただ死のみが、それを可能とするのだろうか... たいていの人にとっては、この日、これほどの重苦しさを知らず、それぞれに課せられた生活を過ごしていることだろう。特に幸福を望むこともなく、また、過去を振り返ることもなく、慎ましやかに生活をしていることだろう。できれば、ぼくもそうありたい。そして、ぼくの前に垂れ下がる、この重苦しいヴェールを払いのけたいのだ。そこには、厳しい季節の中にも、暖かな家と、暖かな会話とが存在していることだろう。ぼくも早く、そういう場所に戻りたい。そしてこの苦しさ、重々しい気分の何もかも、早く忘れてしまいたい。ゆっくりと形を変えて行く冷やかな雲よ、一体どこへ行けば、このぼくはそういう場所にめぐり会えるのだろう...

ぼくのこの町の滞在も早、一週間となってしまった。そのあいだ随分、町のあちこちを歩き回り、町の様子も段々と明らかとなって来た。新鮮な野菜や果物の朝市がどこで開かれるかも、また、子供たちが自然と集まって来て遊ぶ広場がどこにあるのかも、町を展望するのに一番いい高台がこのホテルからそう遠くないところにあることも、ぼくはこの一週間のうちに知った。安くておいしいレストランも、スーパーマーケットも、人々の熱狂するサッカーの競技場も、ぼくは知った。しかし、そうして町に対する認識は深まって行ったものの、それと正比例して、セーラが見つかるかも知れないというぼくの高まりつつあった期待は、淡いヴェールの彼方へと消えて行くかのごとくだった。その霧のようなヴェールの向こうで、彼女は岸辺に立ち、このぼくに手招きをしているのだが、ぼくはどうしても向こう岸に渡ることができないのだ。町を隅々まで歩いても、落葉の最後の一枚が風に吹かれて飛ぶその彼方にさえ、彼女の痕跡すら見つけることはできなかった。一体、彼女はどこに消えてしまったのだろう？ 本当に忽然とこの町から消えてしまったとしか思えないほど、彼女に対する何の手がかりも得ることはできないのだった。それで、ぼくは彼女をこの町で見かけたという有力な情報さえ疑わしく思いさえしたほどなのだ。だがその考えだけはかろうじて打ち消した。彼女はきっと、この町のどこかで、ぼくのまだ行ったことのないところで、ひっそりと暮らしている。彼女との距離は、これまでのいかなる時よりも、遥かに近いのだ...

見つからないセーラのことはいくらにして、今はいい朝だ。珍しく空は晴れ上がって、もう冬の白い雲が、澄んだ青い空にぽっかりと浮かんでいる。ぼくは相変わらずこのホテルの一室で、ひとりぼっちだ。ホテルのフロントマンとは多少なりとも顔見知りになれた。だが深い話しにまで立ち入ることはない。

これからまたセーラを捜しに行くとなれば気が重くなるので、今日は小休止だ。リサには手紙を書いた。無事、この町に着いたこと、町の様子や、二、三気づいたこと、それにセーラはまだ見つかっていないこと、リサとの昔の思い出話などを書き綴って投函した。電話で話せばすぐ済むことなのだが、寂しさがぶり返すのを恐れて、あえて電話をしなかった。そしてリサにも、電話は極力しないようにと手紙の最後に書き添えておいた。しかし、リサからの便りはまだ届いてはいない。

ああ、青い空よ、誰からも遠く離れて、ここにひとりぼっちでいるということは幸福なことだ。ぼくは町のホテルの中において、今はまるで田舎の我が家にいるかのように、詩人の心境なのだ。ホテルと言っても街はずれにあり、騒音はほとんど聞こえては来ない。時折り、車の走る音や、子供たちの叫び声、そんな程度で、ほとんど静かだ。やがて来たるべき、あの本格的な、町をも吹雪で閉ざす冬を前にして、今は、楽しいことを考えよう。悲しい季節はすぐ前にあるから、今は、楽しかったことを思い出すのだ。

何年か前の冬の日のことだった。ぼくはリサを連れて、寂しい海岸沿いのホテルに泊まった。翌朝、強い風が吹き、海は荒れていたが、あえてぼくは彼女の手を引き、岩のごつごつした海岸に向かった。波は怒涛となって岩にぶち当たり、まるで地響きのような大きな音をたてて、砕け散った。そのしぶきの一部は、ぼくたちのところに届くようにすら感じられた。リサは、荒れる海を恐れて余り近寄りたがらなかったが、ぼくは無理に彼女の手を引いた。

“こっちだよ、別に恐れるほどの海じゃない”

そう言って、ぼくは、怒涛の押し寄せる海の真上に位置する岩の上に立った。荒れて、渦巻く真白な波が真下に見えて、足がすくむ思いがしないでもなかったが、ぼくは気を持ち直し、リサを手招きで呼んだ。

彼女は、恐る恐る、しかし慎重に足場を選びながら、こちらの岩場にまでやって来た。最後のよじ登りには、ぼくが手を貸してやらなければならなかった。そうして彼女は、身震いをするようにして、やっと、ぼくと同じ狭い岩場の上に立った。すぐ真下には、荒れ狂う波が次々と打ち寄せていたが、その波しぶきはここまでは届かなかった。彼女は恐れるように、ぼくの手をしっかりと握りしめた。髪の毛は、強風にあおられ、既に乱れきっていた。その姿の惨めさが、ぼくの表情をゆるませた。

“そんなに怖がらなくても大丈夫さ”と、ぼくは、彼女をなだめるように言った。

“でも、もし落ちればひとたまりもないでしょ？”

“そう、ひとたまりもないだろうね”

“そうならば、ここでもう一巻の終わりね”

リサはそう、自分に納得させるように言いながら、改めて今にも呑み込みそうな荒れ狂う波打ち際をのぞき込んだ。

“もし落っこちれば、体ごと岩に打ちつけられて、それでお終いさ。もし、死にたければどうぞ”と、ぼくは冗談を言った。

リサは、驚いたように振り向き、“まだ死にたくないわ”と言った。

“死ぬにしても、こんなところで死ぬなんて御免よ。だって余りにも寂し過ぎるもの...”

確かに寂しい場所だった。人はホテルにとどまっても、めったにここまで来ることはなく、今、ここにいるのはリサと二人だけという、そんな寂しい状態だった。しかも空は、曇りがちで、不気味な様相さえ呈していた。とりわけ、水平線の方が、暗くなって、はっきりと見分けがつかなかった。太陽は、分厚くおおわれた雲にはばまれて、光さえ差し込まず、海の至るところ、まるで魚が飛びはねているように、白い波頭をたてていた。ぼくたちは今、陸の果てまでやって来て、海の驚異に、真正面から対峙しているところだった。冬の海がこんなに厳粛で、こんなにも恐ろしい相貌を見せるのだとは、それを目の前にするまでは気がつかないことだった。しかし今、よく風景画では見かけたあの逆巻く冬の海が真実であることを、ぼくは知った。昔の画家は、そこから海の持つ恐ろしさや、神秘をつかみ出そうと、さぞかし心を砕いたことだろう。彼らがその昔、海に感じた驚異の気持が、ぼくにも分かるような気がした。

風は吹き荒れていたが、ぼくはしばらくここにとどまることにした。

“リサもそこに腰掛けたら？”

ぼくは、岩場の出っ張ったところに腰を降ろすと、彼女にも適当な場所を指示してやった。リサは、ぼくに言われるまま、わずかな足場にしゃがみ込んだ。

それからしばらく沈黙が続いた。ぼくらの目は、果てし無い海に吸い込まれそうになっていた。リサは、我を忘れたように、ぼんやりと冬の海を眺めていた。

“海にドラマがあるように、ぼくたちの人生にもドラマがある”

しばらくの沈黙を破ったのは、ぼくだった。

“何よ”と言って、リサは我に戻ったように、ぼくに振り向いた。

“うまく言えないけれど、この海を見ていると、セーラの後ろ姿が見えて来るような気がするんだ。とりわけ、ぼくたちから去って行ったときのあのセーラの後ろ姿がね”

リサは黙って聞いていた。

“もし、あのとき、セーラがそうしなかったとすれば、今頃どうなっていたらろう？ きっと、この岩場にもセーラがいて、三人でしゃべっていたに違いないんだ。しかし、今は二人だけさ...”

“姉さんがいなくなって寂しい？”と、リサは尋ねた。

“やはり少しはね”と、ぼくは答えた、“以前はもっと賑やかだったから。ぼくだって、本質的には、リサと同じく、寂しさよりは賑やかな方が好きさ。セーラがいた頃は、もっと賑やかだったからね”

“みんなで、お祭りを見に行ったときなんかがなつかしいわね”と、リサは思い出して言った、“若者たちが怖い面をかぶって、わたしたち見物人のいるところへやって来るのよ。おかしいから笑っていたら、いきなり姉さんがつかまってしまって、馬車の中にしょっ引かれて行ってしまったわ。驚いているうちに、あたしまでもね。いきなり連れて行くんだからビックリするわ”

“そう言えば、お前たち、連れて行かれたんだったね”と、ぼくは言った、“で、連れて行かれて何かあったのかい？”

“別に”と、リサは答えた、“街のはずれで解放よ。御苦労さんと言ってキャンディーを少しくれたわ。でも、面をかぶったまま、今度付き合ってくれないか、って言う人がいたりして、おかしくって...”

リサは、生き生きとそのときのことを思い出して、にっこりした。

“そんなときもあったね”と、ぼくは言った、“ともかく、セーラがいた頃は楽しかった。彼女には、天性の人を楽しませる力があったみたいだ。本人は、そうとは自覚していないけれどね。どちらかと言えば、少し感じ易い面もあったりしたけれど。しかしそれだけ、何事によらず、物事にのめり込む面があったのだろうよ。セーラが遊んでいるとき、心底から楽しんでいるという風だった。何物にも捕らわれることなく、それに熱中することができたのさ”

“じゃ、兄さんはそうじゃなかったの？”と、リサは尋ねた。

“セーラほどじゃないにしても、楽しむときには楽しんださ”と、ぼくは答えた、“でも疲れ易く、持続性がないのさ。そして、そのうち、どうでもよくなって来る”

“兄さんって、意外と淡白なのね”とリサは言った、“楽しいときにはもっと楽しまなくっちゃ。そうでないと、せっかくの人生を無駄にすることになるわ”

“ともかく、セーラがいると、人生が楽しかった。もちろん、お前も忘れてはいないけれどね”と、ぼくは言った、“三人でいるときの方が、今よりもずっと楽しかった。お前もそう思うだろう。いさかいもよくやったけれど、それも結構いい、ストレスの解消にもなっていたのさ。ぼくはもっともっと、セーラと暮らす時期を引き伸ばしたかった。彼女といろんな場所にも行きたかったし、いろんなことについて語り合いたかった。夫婦のように、まで行かないにしても、せめて恋人同士のようにね。しかし、今から考えると、彼女との期間は余りにも短か過ぎた...”

“でも、姉さんは死んだんじゃないんだから、いずれまた会えるわ”とリサは言った、“人生には、楽しい時期もあれば、辛い時期もあるものよ。そして今は、その辛い時期かも知れないけれど、いずれまた楽しい時期が来ることを期待しましょ。それでこそ、あたしたちの人生だわ”

“リサって、面白いことを言うんだね”と、言って、ぼくはリサの顔を見つめた、“見直したよ”

ちょうどそのときだった、さっきまであれほど固く閉ざされ、もう陽を見ることがないとあきらめかけていた、黒く、分厚い雲の切れ目から、パッと光が差し込んだのは。

その光は、海面にまで届き、さっきまで不気味に沈黙を守っていた海の表面をきらきらと光らせた。雲の一部にできたほんの少しの隙間と、海面とを結ぶその光のヴェールは、幻想的な、まるで絵のような光景をつくり出した。ぼくは、自然の織り成すその美事な光景を、ただ、ため息まじりに見る以外にはなかった。そして、雲から海へと到達するその光は、何か、ぼくたちの未来を暗示する光のように、ぼくには思われた。

“素晴らしい光だね。海があんなにきらきらと光っている”と、ぼくは言った、“幻想的ですからある。今は昼だから、きっと太陽は、この雲の上にあるんだ。――でも、余り早く、太陽を見ない方がいい。今は、その姿を見なくとも、その存在が感じられるこの光だけで十分なんだ。そう思わないかい、リサ”

リサは黙ってうなずいた。

“あたしたちの人生は、こんなにも暗くはないけれど、でも暗いところに光がさし込むって素敵ね。このまま行くと、どうも晴れるようね”

“ぼくも、晴れることを祈るよ”と、ぼくは言った、“雨になるのはいやだからね。このまま、海も晴れて欲しい。...さあ、そろそろ戻ろうか、体も冷えて来たことだしね”

ぼくたちはそう言って、ゆっくりと立ち上がった。この荒れた、幻想的な海と別れるのは、名残り惜しい気もしたが、ぼくたちは去ることにした。リサの手を取り岩場をまたぐようにして、その怒涛のように押し寄せる波と、しぶきと、暗い中にもきらきら光る幻想的な海に、別れを告げたのだった...

楽しいことを回想するにも、結局、本当に楽しいことを思い出すことはできない。

それは、冬というこの季節にもよるだろうが、そのこと以上に、思春期に、本当に楽しい経験を味わったことがなかったことによるのだろう。恐らく、本当の楽しみは、それよりも遙か前に、ぼくの内では終わってしまっていたのだ。この寒い冬の日――空は晴れてはいるが――楽しい春先のことを想像することは不可能に近い。しかしそれでもあえて、楽しかったことを回想する為に思い起こそう、ぼくたちがまだ幼かったとき、うららかな春先の、花の咲いた野で遊んだときのことを――そのときこそ、本当に、無垢と、陽気さと、楽しさとが満ちあふれていたのだった。その後にはもう二度と、あのような幸せが、訪れることはなかった...

今になって思えば、幼少の頃のあれらの日々が、まるで夢のように思われる。本当に、それらの日々は存在したのだろうか？

初めてレコードに触れた日のことは、忘れられない。もちろん、それまで音楽というものは知っていた。学校にはオルガンがあり、豎笛や、シンバルや、ハーモニカの音は知っていた。しかし、家に初めてレコードというものが侵入した日は、特別な意味を持っていた。それが、学校でレコードというものに触れ、ぼく自身がねだったせいか、ママの思いつきで、自主的に買って

くれたせいなのかは、もう分からない。

いずれにせよ、それが届いた日、ぼくは心からの喜びをかみしめないわけには行かなかった。それは、コンパクトな畜音機で、現在のオーディオから見れば、ほど遠い代物で、音ももちろんモノラルだったが、ぼくには、この珍しい機械が面白くて仕方がなかった。ぼくは、畜音機の存在は、既に知っていた。こわれて鳴らない大きな畜音機が、長いあいだ家に、物置代わりに置かれていたからだ。時折り、それは古い一世代前のレコード（SP）を鳴らすこともあったが、音が悪く、ほとんど聞くことはなかった。だから、この新製品の蓄音機が、事実上、ぼくがレコードに触れる最初の機会となった。初めてレコードを聞いたのは、残念ながら、ぼくの家ですでにあった古いレコード（SP）なのか、それともその為になんか買ってきた新しいレコード（LP）なのか、忘れてしまったが、ぼくはさっそく説明書を読み、コードをつなぎ電源を入れて、ママと一緒に、初めて聞くそのレコードから流れて来るクラシック音楽に耳を傾けた。それは、暖かい春の日のことだった。暖かい日ざしが、窓一面にあふれ、ぼくは、ママと並んで坐り、その小さな蓄音機上でレコードが回る様子を、そして、蓄音機の上面に取り付けられた銀色のモノラルのスピーカから音が鳴り響いてくる様子を、じっと眺めた。それは、この世にクラシックが存在し、それが空気を伝わってぼくの耳に到達し、その得も言えない世界をぼくに認識させてくれた、初めての体験だった。それまで全く知ることなく過ごして来たぼくにとっては、それは、驚くべき、豊かで、奥深い、また知りがいのある世界だった。ぼくは、ママの買ってくれたこのささやかな蓄音機により、いっぺんにクラシックファンになってしまった。そして、こんな素晴らしい贈り物をしてくれたママのことが、いっぺんに好きになってしまった。その当時のとぼしい家計の中で、よく決断をして買ってくれたそのささやかな贈り物は、その後の何物にも増して、ぼくにとってかけがえのない贈り物となった。ママは、ぼくのそばでじっと、目を閉じて、しかも満足深げに、蓄音機から流れ出る音楽に耳を傾けていた。今から思えば、それは単に、ぼくに買ってあげることが出来たという満足感からばかりではなく、自分自身、長い生活の中で久し振りに聞くことのできた好きなクラシック音楽の喜びからあふれ出た表情のようにさえ、ぼくには思われるのだ。ママは、本当に久し振りに自分の好きなクラシック音楽に触れることが出来て、内心、ほっとするような安らぎを感じていたのだろう。しかし、子供のぼくには、そうしたママの、心の動きを読み取ることはできなかった。ママが、ぼくと一緒になって、この蓄音機をプレゼントしてくれた喜びを、喜んでくれていさえするなら、ぼくはそれだけでよかった。春の晴れた午後、伸びやかなクラシック音楽が部屋中に充満し、ぼくは幸せな気分だった。ぼくの心は晴れ晴れとし、クルクル回るその小さなレコードと、そのレコードがかなでる音の世界に魅せられ続けた。それは、ぼくの人生における、クラシック音楽のデビューの華やかな一瞬だった。ぼくは、自分がこの世界に属していることすら忘れ、晴れた春の日の午後、部屋に充満する音の響きに熱中し、ママと一緒に音楽の世界を楽しんだ。他には何もなく、心を煩わされるような未来もなく、ぼくたちは、二人だけで幸せだった。

そうして、幸せな、明るさに満ちた、伸びやかな午後に過ぎて行った。その日以後、クラシック音楽は、ぼくの心にしっかりと根づき、ぼくの生活に欠かせない存在となった。今でもぼくは、クラシック音楽を聞くたびに、あの日の幸せな気分が再びやって来るのではないかと、秘かな期待を抱きながら、音楽にじっと耳を傾けるのだ。――しかし、その日は、なんと遠い日となってしまったことだろう！

何ものにも思い煩わされることのない日々――というのが、今となっては、一番なつかしい。毎年、新年になるたびに、ぼくは、自分が時代とは無関係になって行くことを感じる。二十一世紀――それほど遠い未来ではないが、そのときにはぼくはどうなっているのだろう。その世紀とはもう、何の関係もなく生きているか、それとも、もうこの世から消えているのかも知れない。そう思うと、寂しい。

確か、何年か前の正月、ぼくはリサと二人きりだった。あの誰もいない、静かな田舎の、隠れた館の中で...

“ねえ”と、リサは、応接間のぼくのいるソファのところにやって来ると、そこに腰掛けて言った。

外は雪の降るような寒さだったが、幸いにもこの日は晴れていた。

“とうとう年が明けたわねえ。おめでとう...”と、リサは笑顔で言った。

いい朝だった。ぼくはコーヒを飲みながら、朝刊を読んでいた。部屋には、静かなクラシック音楽が聞こえていた。ぼくは、コーヒをすすりながら、やって来たリサに目を向けた。

“ねえ、一年が明けてどう？ 気分は”

“別に。特別変わりはないさ”と、ぼくは答えた、“リサの方は、何か変わりがあるのかい？”

“これでまた一つ、年を取るからね”とリサは、急にしょぼんとした表情になって言った、“でも、去年は、何も無い、変わりばえのしない年だったけど、今年こそは何かある期待のもてる年でありますように、そう願いたいわ”

“期待のもてる年―― それはいいね”と、ぼくも言った、“明るい未来が待っているものならそれもいいだろう。リサは何か、変化がありそうに思えるのかい？”

“分からないけど、そんな胸騒ぎがするの”とリサは答えた、“本当に、いい年って余りなかったんだから、今年こそいい年でなくっちゃ”

“同感だね”と、ぼくも言った、“何んとはなしに一年が過ぎてしまう。そして、去年もまた――今年こそは違った年でありたいという気持は分かるさ。でも、そのようにして一生が過ぎて行くのが真相なのかも知れない...”

“いやねえ、正月早々から暗い話しをして”と、リサは顔をしかめて言った、“そんな一生のことじゃなく、楽しい今年のことを考えましょうよ。今年は何がしたいのかとか、もっと人生に期待をもちましょうよ”

“人生に期待—— そう、それこそぼくの待ち望んでいることさ”と、ぼくは言った、“天の使いがぼくたちの人生に割り込んで来ることをね”

“そんな、夢みたいなのを言わないで”とリサは言った。

“夢みたいなのじゃないさ”と、ぼくは否定した、“現実そのものさ。ぼくが待っているのは、今年こそは、ママとセーラが見つかることさ”

“またそのこと”とリサは、落胆したように言った、“でも兄さんには、その二人が大事なのは分かるけど、それ以外の人を捜す努力も必要よ”

“それ以外って？”とぼくは尋ねた。

“誰かは分からないけど、それ以外の人よ”と、リサは言った、“兄さんにピッタリの人が、他に見つかるかも分からない...”

“ああ、そういう意味なのかい？”と、ぼくは納得して言った、“ぼくに、結婚の相手を自分で捜しに行け、とそう言っているんだね。新年早々、良き忠告をありがとう。でもその点に関しては、あの青空のように、一点の曇りもないほど、ぼくの心は平静なのさ。ぼくはまだ、何も考えてはいないし、今はまだ、そのことについて考える時期でもないんだ。とりわけまだお前が、ここにいるあいだはね”

“それは、あたしがいる限り、結婚しないっていう意味？”と、リサは尋ねた。

“いや、そういう意味じゃないけど”と、ぼくは言った、“お前がいようと、いまいとは関係なく、ぼくは今、結婚のことは全く考えていないのさ。そりゃ、お前が言うように、ピッタシの人が現れれば、ぼくも考えるかも知れない。でも、今のところ、自分からそういう人を捜す為に行動するなんてことは全く考えていないのさ...”

リサは分かったという風に、ソファーに背をもたせかけた。

“いい天気ねえ... こんな日にはどこかへ出掛けたい”とリサは、窓から見える空を見て、言った、“ねえ、どこか遠くへ誘われるようないい天気ねえ...”

“きょうはダメさ”と、ぼくは釘を刺すように、リサに言った、“本の整理をしなくちゃならないしね。この一年間、積んだままの本とか、読みさしの本がずいぶんとあるんだ。それらをきっちりと整理したいのさ。そして、この日ざしだから、本の虫ぼしも兼ねてね”

“それで、きょうの楽しみはなくなったわ”と、リサは嘆くように言った、“あたし一人じゃ車も運転できないし。どうして一日を過ごしましょ”

“適当に過ごしゃいいさ”と、ぼくは冷たくあしらった、“本を読むのもいいし、いろいろと考えるのもいい。この日でないと考えられないようなことも、中にはあるからね”

“例えばどんなこと？”とリサは尋ねた。

“それは、リサの言った、去年一年間の締めくくりと、今年一年間の計画とさ、じっくりと振り返ってみて考えてみる必要がある。リサには何か考えることはないのかい？”

“そりゃあるわ”と、リサは言った、“一年ってすぐ過ぎてしまうから、心を引き締めてかからないとまたこの一年も同じことのくり返しになってしまう。それじゃつまらないものね”

“全く同感さ”と、ぼくは言った、“人間、行動を起こすときが肝心なのさ。去年一年間は、これと言って行動を起こすことがなかったからね。今年こそは何かしたい。リサだってそうだろう？ とりわけ、この寂しい家には、我慢ならないんじゃないのかい？”

“それほどでもないけど、少しはね”と、リサは言った、“そうね、何もしないで一生を過ごすって寂しいことね。人間として生まれて来た以上、何かをしなくっちゃ、ただ、それが何なのかを見つけ出すことは難しいことだけれども...”

“どうやらそこで、ぼくとの認識が一致して来たようだね”と、ぼくは言った、“実はお前がここへ来る前、ぼくはいろいろと考えていたのさ。ぼくは何になればよかったのだろう。何か大事なものを取り逃がしたのではなかろうかってね。全く人生には色んな道があったのさ。科学者の道や、技術者の道。あるいは、営業マンや医者や教師って道もあったのさ。そして好きな女と結婚して家庭を築く。苦しいけど、人生にはちゃんとした目標が出来上がっているのさ。それが人生だし、それでこそ世の中で生きているという実感も沸くというものなんだ。同じような人々との交流も増え、世の中の認識も随分豊かなものとなり、それが同時に生きる活力ともなるだろう。そしてそういう人々には、子孫の時代までも関心を抱き、遠く二十一世紀という将来までも展望できる、というものなのさ。――しかし、ぼくの人生は、そのいずれでもなかった。目標を見失っているわけじゃないけれど、後になって考えれば、そういう人々とは随分違った目標を持っていたことに、自分ながら驚かされているわけさ。ぼくの目標は、人生から決して感動を失わないこと、そして世界中に、それを捜して集める、ということなのさ。――しかしそれらは、この地上に、有益な何物ももたらしはしないし、真面目に働く人々で構成される社会にとって、ほとんど何んの意味も成さないことかも知れないんだ。なぜならそれらは、しょせんぼく一人だけの感性にしか訴えかけるものでないかも知れないからさ。ぼくが消えれば、それらもまた、この世から姿を消してしまう。そのような、ごくささやかな代物かも知れないからさ。そう思うと、ぼくのやっていることはすごく軽いこと、あの雲のように軽いことのように思われて、何か寂しい気さえする。――しかしそれを捨てるわけには行かない。なぜならそれが、これまでぼくが歩いて来た人生だし、ぼくの人生を支え、励まして来たただひとつのものだからさ。今さら、これを失って他のものに変えるなど、不可能なことのようには思えるね...”

“よく分かったわ。兄さんの考えていること”と、リサは真剣に言った、“でも一つ言わせてもらえれば、人間は感動だけで生活することはできないのよ。兄さんは詩人になりたいのなら詩の創作をしなくちゃならないし、芸術家になりたいのならともかく何らかの作品をつくる必要があるわ。それについてはどうお考えなの？”

“今は待っているだけさ。行動の日に向けてね”と、ぼくは言った、“それまで色んな事を蒐集しなくっちゃ。例えばぼくは最近、曇った空に向けてもくもくと煙を吐いている一本の煙突を見たんだ。それは何んということもない光景だったけれど、ただ一箇所、そのすぐ後ろに見える空がとりわけ明るく輝き、それは分厚い雲に隠されてはいるけれど、その背後にはきっと太陽があるに違いないという、ぼんやりした明るさが特にぼくの気を引いたのさ。

その雲の明るさを背景にして、煙突が一本、もくもくと煙を吐き続けていた。ぼくはその光景を見て、都会の華やかさとは違って、人々の目からこぼれ落ちたところに存在する「美」のようなものを心に感じたのさ。とりわけ、うらびれたところに存在する工場など誰の目も引かないし、美しいはずがないのだが、ぼくはその日、本当に美しいと感じた。それはどこから来ているのだろうか？ 工場労働者のほとんどは引き上げた後だったが、それでも稼動しているその煙突の煙がこんなに感動をぼくに与えたその理由は何んだったのか？ 答えはやがて見つかった。都会の虚飾さをはぎ取った、その煙突の素朴さにあったのさ。そればかりではなく、人々に顧みられることもなく、人々から忘れ去られているというその中にこそ、その秘密が潜んでいたのさ。ぼくは昔から、人の振り向かないところを振り向く癖があったんだ...”

“いずれにせよ、ぼんやりと煙突の煙を見ながらでも一年は去ってしまうのよ”とリサは言った、“去年は終わったわ。そして今年ね。今年は、何かもっと楽しいことが待っているような気がするわ。そうは思わないこと？”

“年が明けたからって、そんな気はしないね”と、ぼくは言った、“ただ新年にあたってぼくの思うこと、――それは、ぼくらがまだ子供だった頃の新年は随分楽しかったということなのさ。ママもパパも晴れやかな顔でいたし、家中全体が何か楽しい雰囲気になぎっていった。そして子供心ながら、今年こそはというような期待感が満ちていた。そんな雰囲気だった新年のことを思い出すよ。――でも、年を経るにつれ、年々そういう雰囲気がまやかしである――とは少し言い過ぎになるが、とそんな気がして来た。だって、年が明けたからと言って、世の中も、自分もそんなに変わるわけじゃないからね。いずれにせよ、華やかな気分の正月というものは、ぼくにとって、もう遠い過去になりつつあるのさ。そして思うことは、二十一世紀の新年には、そのときにはどうなっているだろう、ということなのさ。そのときには、お前には子供がいて、子供と一緒に二十一世紀の新年を祝っているかも知れない。――しかしぼくは、この世に存在しているにしても、この地上の片隅で、誰の目にも止まらず、もはや世の中とは関係もなく、ただひとりで二十一世紀という未知の世紀の年明けを迎えているのかも知れない。その頃にはもはや夢もなく、二十一世紀の社会に参画しているという歓びさえなく、冷静に、静かな世界を見つめているだけなのかも知れない。そして今と同じように、それまでの過去がこれでよかったのかと振り返っているのかも知れない。いずれにせよ、活力あふれた、豊かで、幸福な未来というものは、ぼくの場合、あり得ないのさ...”

“そんな悲しいこと”と、リサは、心配顔になって言った、“いいえ、あたしがいるから大丈夫よ。兄さんにそんな生活を決してさせないわ。ねえ、だからその為にも、これからどうすればいいのか、一緒に考えましょ。一緒になって悩み、一緒になって苦しみ、一緒になって行動しましょ。そうしてこそ、道が開けてくるわ。今年こそ、いい年になりますわよ。ねえ、そうしましょ。そう、信じましょよ...”

“ありがとう、リサ”と、ぼくは、初めて笑顔を見せて言った、“これでぼくもようやく新年を祝う気になったよ。あけましておめでとう、リサ”

リサの表情に、再び明るさが現れて来た。

見れば、木目のテーブルは冷たく光っていたが、ソファも、クロスの壁も、置物の時計も、部屋全体が新年を祝っているように思われた。そして何よりも、ぼくの心を、新しい年に向けてふくらませたのは、窓の向うに見える、あの、さわやかな、旅に誘うような、底知れぬ、まっ青な、澄んだ空――

目を転ずれば、視野には、木の葉を落とした寒々した樹木しか見えず、花々の姿を全く見ることもなかったが、このほのかな陽光を浴びて、景色全体が新年の歡びに満ちていた。そして、この部屋の中には、リサがいるから安心だった。また、外の犬小屋には、セーレンがいたから孤独ではなかった。ぼくはリサを見つめ、彼女と改めて、新年の歡びと、朝の静寂とをかみしめた...

“新年の朝、外にでも出て見ようか。少々寒いけれどね”と、しばらくして、ぼくは言った、“セーレンも連れて行ってあげればいい...”

リサは早速、上着を着に自分の部屋に戻った。

ぼくが玄関で、セーレンと戯れていると、やがてリサが玄関から現れた。厚目のカーディガンを着、いかにも暖かそうだった。

“じゃ、行こう”

空気は冷たかったが、日ざしが柔かった。セーレンは、楽しそうに、ぼくやリサにまといつき、ときにはリサのスカートに抱きついて、彼女を困らせた。吐く息は白く、遠くへ駆けて行ったかと思うと、すぐ草の生える野道に戻って来た。道の一方には木立が茂り、小川が流れていた。もう、ぼくたちの家は、遠く、屋根と屋根から突き出た煙突しか見えてはいなかった。草地は、ひっそりと陽光を浴び、命を吹き返しているようだった。ぼくたちは、駆けて行くセーレンの後ろ姿を見守った。

“まるでぼくたちの子供みたいだ”とぼくはふと、言った、“ぼくたちが結婚していればの話したがね”

リサは、うっとりとして自然を見つめるように、聞いていた。

“きっと昔、ママたちは、ぼくらのことを、このように見つめていたに違いない。でも、ぼくらはもう、こんなにも大きくなってしまったんだ... リサは、結婚はしないのかい?”

“何よ、急に?”リサは振り向いて、ぼくを見た。

“そりゃ考えているわ”と、リサは、目をセーレンの方に向けて言った、“...でも、今のところまだ夢の段階よ”

“結婚に夢を抱くなんて、羨ましいね”と、ぼくは言った、“ぼくなんか、あり得ないと思っている

から、考えもしていない...”

“どうしてあり得ないの？”と、リサは言った。

“本当は、お前と結婚したいぐらいだからさ”と、少し冗談を交えて、ぼくは言った。

“なら、あり得ないわね”と、リサは不真面目さに怒った顔をして言った、“兄さんと結婚するなんて、あり得ないわ”

“だからぼくは結婚をあきらめている”と、ぼくは続けた、“お前に代わるような、そんな素晴らしい女の子にめぐり会えるなんて、思っていないもの”

“そんなことないわよ”と、リサは言った、“兄さんは女の子を知らないだけ。もっと世の中に出れば、それこそ女の子なんていくらでもいるわ。それを、より取り、見取りできるんだから...”

“知ってるよ”と、ぼくは言った、“長い間都会にも暮らしていたからね。でもやっぱり、お前が一番さ。結局、お前のところに返って来る”

リサは、困ったという風に顔をしかめた。

“でも、そんなこと言ったって、どうにもならないわ。あたしが兄さんと結婚するなんて、できない相談だもの”

“分かってる”と、ぼくは言った、“だから、お前が誰かと結婚するまでのあいだだけさ、こうしてお前といて、お前と楽しい思いをさせてもらえるのは。いずれ、お前と結婚する相手が現れるだろうが、そいつの面をこのこぶしでなぐってやりたいぐらいさ。だって、こんなにも可愛いお前をものにし、しかも一生楽しい思いをさせてもらえるんだもの。全くそいつこそ、羨ましい限りさ...”

リサの表情は、自然ほころんだ。

“兄さんがそう言ってくれるのは嬉しいわ”と、リサは言った、“でも、兄さんの心配どおり、別な人が現れることも、確かなことよ。そんなとき、本当にどうする？”

“もちろん、お前をその男に渡す。それだけだよ”と、ぼくは、真面目に言った、“お前の運命を、ぼくがとやかく言う立場にはないんだからね。――でも、心の中では悔しがっているよ。これは、間違いのないことさ...”

“あたしって、兄さんが思っているほど魅力に富んだ女の子って思っていないわ”と、リサはにっこりしながら、言った、“大丈夫よ、あたしがいなくなってもまたすぐ、代わりの女の子が見つかるわよ。そして、あたしの値打があれだけのことだって分かる時が、すぐ来るわよ”

“それは、ほとんどあり得ないことだね”と、ぼくは言った、“お前がいなくなれば、埋めることのできない空白ができるだけさ。――でも、これを障害だと思わないで、自由に振るまってくれていいんだよ。これは、ぼくの、ぼくだけの問題なんだから...”

リサは黙って、歩く足下を見つめていた。

“いずれにせよ、お前はまだ結婚していない”と、ぼくは気分を変えて言った、“今は、お前はここにいるんだから、ぼくと一緒さ。一緒に、この新年の朝の空気を吸おうよ。”

そして、一緒に、この自然の恵みに感謝しようよ。セーレンが向うで待っているよ。さあ、セーレンのいるところまで、一緒に走って見ないかい”

ぼくたちは、そう言って駆け出した。冷たい草原に、ぼくたちの足音だけが響いた。セーレンは、驚いたように、さらに向うに駆け出し、ぼくたちは笑いながら、セーレンに追いつくのに骨を折った。セーレンの白い息が、ぼくたちの白い息に変わった。胸の鼓動が早くなり、ぼくたちはもうくたくただった。それでも激しく呼吸をしながら、モミの木立が壁のように立ちはだかる、さらに奥の方の道へと駆けて行った...

やがてぼくたちは、三方がモミの木でおおわれ、ただ一箇所だけ、遠く幾重にも重なった草地を見晴らせる、少し高くなった空地にやって来て、ちょうどころがっていた岩の上に腰を降ろした。ぼくがぐったりして腰を降ろすと、すぐ犬がやって来てぼくにじゃれつき始めた。

“こら、余り顔をなめてくれるなよ”と、ぼくは、身を避けるようにして、セーレンに言った。そしてふと振り向くと、少し遅れてトボトボ歩いて来たりサが、疲れ切ったように少し離れた岩の上に腰掛けるところだった。

“疲れたかい？ リサ”と、ぼくは彼女に声を掛けた。

リサは、力なくぼくの方に振り向いた。そして、ぼくと犬の様子を指さして、急に笑い出した。

“兄さんったら、セーレンに相当好かれているようね”

“そうだよ”と、ぼくは相変わらず続くセーレンの舌攻勢に身をかかわしながら、言った、“おい、セーレン、たまにはリサのところにも行って同じことをしてあげたらどうなんだい？”

そう言って、ぼくは犬の体に手をやり、その向きをリサの方に向けようとした。

“やめてよ！”と、リサは驚いたように言った、“せっかくここで休憩しているのよ。あんたの相手はできないわ”

しかし犬は、リサの言葉が通じたのか、ぼくの手から離れてもリサのところには行かず、すぐそばの草の上にくころがった。そして、何か虫でも見つけたのか、ひとり遊びに興じているようだった。ぼくたちは互いに、その犬の様子を見つめていた。

“ああ、いい空だ”と、しばらくしてからぼくは言った、“少し寒いけれどね。ねえ、こんなにのんびりできるって、お前も久し振りじゃないのかい？”

“そうねえ...”と、リサも空を見上げるようにして、言った。

“こんな静かなところにて、寂しくはない”と、ぼくは、それとなく言った、“なぜだろう？”

リサはうっとりとして、空から、遠く、モミ林のあいだに見える地平線に目をやったところだった。

“それは、ぼくの心の中に、この世界が入っているからさ。色んな世界の事件や出来事がね”と、ぼくは言った、“ぼくは、居ながらにして、どんなところにも行ける。そんな気がするんだ。ベニスにも。ギリシャにも。それも時間を越えて、一時代前のそんなところへ行くことさえできるんだ。ぼくが都会にいた頃、よく映画を見たものさ。それらはたいてい古いフィルムで、少し前の時代の、ぼくの知らない都市を見せてくれたものさ。それらはぼくの胸にしみ入り、異国の、とてもかなえられそうもない夢をかきたててくれた。ずっと昔に見て、もうそのほとんどを忘れてしまったが、イタリア映画の「女友だち」という映画は、今も心の隅に残っているよ。それらは、その時代の雰囲気――かげりのある明るさ、とでも言うべき雰囲気を伝え、それを見ているときは、ただ何んとはなしに見ていたんだけど、あとになって思えば、貴重な時代の証言のような気がするのさ。もはやあんな時代ではないし、その頃若かった女優たちもみんな年とっているに違いないから、それだから一層、そういう時代のイタリアの雰囲気を伝えてくれるあの映画が好きなのさ。ぼくはもう一度見たい、という気もするけれど、もう永久に上映はしてくれないかも知れないね”

“兄さんは、都会にいた頃、映画が好きだった”と、リサは言った、“あの頃は随分見たんじゃない?”

“随分とね”と、ぼくは答えた、“でも、そのほとんどを忘れてしまった。例えば今の映画だけど、一回見たきりで、美しい女の人が、ミラノにやって来て、またミラノから去って行くという初めと終わりの汽車のシーンと、若い娘が二度の自殺をはかり、結局は死んでしまうということと、その他、いくつかのことぐらいしかも覚えているのだから。――でも、その当時の風物が見られることは間違いないし、是非、もう一度見たいな。そうすれば、案外、期待するほどの映画じゃなかったということが、分かるかも知れない。――それは、しんどい部類の映画に属するんだろうけれど、他にも、楽しい映画はいくらでもあったものさ”

“兄さんは、映画に熱中していたわね”とリサは言った。

“ああ、世の中の辛いことを忘れることができたからね”と、ぼくは答えた、“たとい周りでは、いやな光景をいくら見せつけられても、通りから一度、あの暗い劇場の中に滑り込み、スクリーンに映し出された映像を見れば、不思議と心は落ち着き、いつのまにか夢の世界に入り込むことができたんだからね。孤独な人生にはそれが一番向いていたのさ。だから映画は、見ても見飽きるということはない”

“もう今は、余り見ないんでしょ?”と、リサは尋ねた。

“ああ、最近はね”と、ぼくは言った、“ぼくが見て感動を覚えたような映画や、見たいような映画は、たいてい見てしまったさ。それは、ぼくの世代よりも、少し上の世代の青春の歓びと苦悩を扱った映画だったけれども、ぼくは、たいてい見てしまった。

そういう時代はもう終わり、その時代の終えんと共に、そういう映画もすべて消えてしまったのさ。――最近の映画は、ほとんど見たいという誘惑にかられないね”

“最近の映画は、ほとんど夢がなくなったからかしら？”と、リサは言った。

“ぼくは映画で、いろんな国のいろんな都市へ行くことができたし、それによって行きたい誘惑にかられもし、どうにもならない現実との板ばさみに会って苦悩しました”と、ぼくは言った、“――でも今は、そんな都市へ行くことに価値があるとは思えない。ぼくが行きたかったのは、その当時のその街へだったのだから。その当時なら、ミラノに行くことはとても価値のあることだったろうが、今のミラノに行くことには、それほど興味を覚えないのさ。――そこから自然、ぼくの興味は、この地上から少しづつ離れて行くのさ。こうして、この誰もいない草地のまっただ中で目を閉じればいい。そうすれば、何もわざわざ、現在のミラノやギリシャに行くこともなく、あの当時のミラノや、そこで生活していた人々の姿が目に見えて来る。それだけで、ぼくの求めていたものは満たされる、というものなんだ...”

“兄さんって、随分孤独ね”と、リサは、少し心配したように言った、“この、全く人気のないところで満たされる方法を知っているんだから。そんなの、寂しいとは思わないの？”

“そりゃ思うさ”と、ぼくは答えた、“みんなと共通の意識を持たず、ただ一人である、ということは何。この広い自然の中で、ぼくはただ一人だし、しかもこの時代に対して、ぼくの意識は閉ざされているのさ。意識が向いているのは、近くて、遠い昔のこと。決して、未来に向くことはあり得ないのさ...”

“本当に孤独な兄さん”と、リサは、ぼくを見て、言った。

“でも、自然の中にいる、ということはいいいことさ”と、ぼくはしばらくしてから言った、“この寒い冬のさ中でも、周りの自然を見れば、何もかも忘れてしまう... 少し草地が多くて、森の大きさが小さいけれどね。ぼくはもっと深い森の中に入って行きたい。深い森の中にある、ぽつ々と建った館に住んでみたい。そんな中なら、朝の日ざしは、まるで木の葉を金色に輝かすように素晴らしいだろうし、昔、中世の時代に信ずることのできた、「眠れる森の美女」などの物語の世界が分かるようにもなるだろう... お前は、そんな生活を好まないだろう？”

“嫌いじゃないけど、それじゃ余りにも寂し過ぎるわ”と、リサは言った、“やはり人間ですから、人間の多いところの方が好きよ。森での暮らしがお伽話なら楽しいでしょうけれど、実際は、お伽話じゃないんですもの。楽しさから言えば、街の方がいろんな可能性にも恵まれて、楽しいわ”

“ぼくも、街の暮らしが嫌いじゃない”と、ぼくは言った、“――でも、そこでは、ぼくのように体と意志の弱い人間を受け容れてくれる余地はないのさ。それでどうしても、ぼくは、田舎での暮らしが向いている、と結論を下さずにはられないのさ...”

“確かにこういうところに来れば、気持ちがほっとするわ”と、リサは言った、“要は、余り人生のことについて考え込まないで、単純にふるまえばいいのよ。あのセーレンを見てよ、何も思い悩んでなんかいない...”

リサの言葉に、ぼくの目は、野原の上で舌を出して息をしながら伏せているセーレンの上に注がれた。

野原の上にいる犬の姿を見て、ぼくは、心がなごむのが感じられた。

コンクリートに打ち込まれた鉄格子からしか外を眺められなかった牢獄や、ごみが散らかり放題の場末の裏通りや、ゴロツキ達がたむろする球戯場などから、ここは全く無縁なのだ。何がいいのか？ この地が本当にぼくの求めて来たところなのだろうか？ いや、ぼくにはまだまだ、人生を探究せねばならぬ道があることを、感じていた。それは、この場にはなく、恐らく、あの森の空遠く、地平線の彼方に存在するものなのだ...

“リサ、やはりぼくは、ママやセーラを捜しに行かねばならない”と、ぼくは言った、“さっきリサは、ぼくの人生が寂しい、と言ったね。それで、ぼくの孤独の原因がそこにあることを知ったんだ。——ママやセーラを見つけた後、どこで暮らすようになるのかは分からない。でも、それがぼくの人生の出発点となることは、間違いがないんだ。そこでもう一度、ぼくの人生を見つめ直し、未来について考えるのさ。そのときにこそ初めて、ぼくは、自分の生活というものをつかむことができるだろう。しっかりと地についた、この社会の中で生きて行くことのできる展望を見出すことができるはずさ。だって、その新しい場所で、もう一度ぼくは、人生をやり直すことになるんだから。今度はぼくひとりじゃなく、みんなと一緒にだし、みんなと一緒に未来の設計を打ち立てて行くことさえできるだろう。そして、そんな幸せな人生って、他にあるだろうか？ ...でも、今の状態じゃ、ぼくは何をしていいのか分からない。心は完全な空白だし、それを埋める手だては、何もないのさ。まるで幽霊のような暮らしさ、あのとき以来というもの。ママがいなくなってからというもの、ぼくは完全な猶予状態のままに置かれてしまったんだ。まるで時間が停止したみたいに、ぼくは、人生の歩みをやめてしまったみたいなんだ。なにをしても、うまく行かなかったし、うまく行くはずもなかった...”

“兄さんの望む家庭の幸福。やはりそれは、兄さんにとって必要なものだったみたいね”と、リサは、しみじみと言った、“いいわよ、捜しに行きなさいよ。あたしも見つかることを願っているわ。それで、兄さんの心の曇りが晴れるものならね”

“ああ、晴れるとも”と、ぼくは言った、“十分なぐらいさ。ぼくは再びあの頃に戻ることができるんだ。失った十年前のあのときにね。そこから再出発さ。今からでも遅くはない。だってぼくは、彼女らの為に——もちろん、お前も含めて、人生を頑張ることができるからさ。もう悪の道になんかに踏み迷わない。みんなが歡びそうなそんな道を、ぼくも歩いて行くだろう...”

“そういう日が来ることを楽しみにしているわ”と、リサも、笑顔を取り戻して言った。

“考えが変わると、自然もこんなに違って見えるものさ”と、ぼくは意気揚々となって言った、“さっきはまるで墓場みたいに見えていたのに、それが全然、未来を志向している赤ん坊のように見えてくるんだから。この地全体が可能性に満ち、歓びあふれているようにも見える。それは束縛の地じゃなく、自由に往き来のできるそんな土地なんだ。まして、ぼくの終えんの地、墓場なんじゃない。ぼくは自由さ。そして、可能性にあふれているんだ。そのように見えないかい？”

“見えるわ”と、リサも、表情をほころばして言った、“そうよ、兄さんはもっと自由になるべきよ。今まで、何かに囚われ過ぎている。それから自由になることよ。そうすりゃ、未来も見えてくるし、自ずと何をすればいいのかも分かって来るわ。ねえ、自由って本当に素晴らしいことだとは、思わない？”

“思うさ”と、ぼくは、満足深げに、リサを見て言った、“今、それをつくづくとかみしめているところなんだ。心のもやもやを晴らし、今、ぼくは全く自由なんだからね。その中で、ぼくは、自分の行くべき道までもが見えて来た。それは、希望と可能性のあふれた道で、決して、踏み誤ることのない道なのさ。その目から見れば、今までぼくを閉じ込めて来たものが、なんと小っぼけなものだったのだろう、という気がしてくるのさ。もっとたくさんのこと、もっと多くのことが、今、ぼくの前に見えて来ているんだ。やるべきことはいくらでもある。人生は無限なのさ...”

リサは、黙って、満足深げに、ぼくの言葉を聞いていた。

“リサ、そろそろ行こうか”と、ぼくは言った、“この晴れやかな森を、しっかりとかみしめながら、歩こうじゃないか。こんなにいい気分になったのは、本当に久しぶりのことなのさ...”

そう言って、ぼくは立ち上がり、リサの前に立った。手を前に差し出すと、リサは喜んで、ぼくの手を受け、そして立ち上がった。その表情には、明るさがみなぎっていた。ぼくは、リサを抱き寄せ、深い草むらの中、さらに森に囲まれた奥の道へと歩んで行った...

...暗い夜、言い知れぬ不安に捕らわれることがある。ぼくは一体、どこへ流れて行こうとしているのだろうか？ もはや、誰も知る人もないこの身を引きずって... あの灯台、夢に見たあの灯台、荒波に洗われ、絶海の孤島にそびえるあの灯台こそが、ぼくの最後の安住の地と言えるのだろうか？ いや、そんなはずがない。安住の地は見い出せないでいるのだ。この年になってもなお、ぼくはまださ迷い続けている。そして、ただ一人のベッドの中で言い知れぬ悲哀を感じているのだ。ああ、ママ、今も生きていて欲しい。そして、決して死んじゃダメだよ。死ねば、もうぼくは、どうしていいのかわからなくなる。ママの死——それは、この世で最も恐ろしいことなのだ。その事実、ぼくの前を真暗にするに等しいだろう。なんと暗く、悲しい事実だろう、ママが死ぬということは... それは、永久にあってはならぬことなのだ。春が永久に春であるように、ママの生命は永遠であるべきなのだ。

本当に愛するが故に、ママの命は、永遠であるべきなのだ。それが途中で切れるなんて、決して容認はできない。せめてもう一度、ぼくはあの、かつての生き生きしたママの笑顔に出会いたい。それは、余りにも幸せな時期で、今でも思い出すと、心がとろけてしまいそうなのだ。そんな幸せな時期と、その頃の絶頂期にあったママの笑顔に、ぼくは再びめぐり会いたい。そうでないと、ああぼくは、ぼくは、死んでしまいそうなのだ。頼むから神様、ぼくの願いを聞いて下さい。ぼくをママに、そしてセーラに、もう一度会わせて欲しいのです。幸福は一時で、苦しみがずっとです。今もなお苦しみは続き、ぼくは救われることはない。ただママだけが、セーラだけが、この苦しみからぼくを救うことができるのです...

リサの想い。ぼくの心の中には、今もリサとの思い出が生きている。彼女と暮らした幸せな日々。ぼくは、彼女なしでは生活はできなかった。ただ彼女だけが、当時のぼくのすさんだ生活を支えてくれたのだ。都会をのがれ、森の中で見た彼女は美しかった。彼女は妹というより、ぼくの心の女王だった。春の光、太陽だった。冷やかな春風がさわやかだった。彼女を見て、ぼくは、この世の幸福というものを知った。そういう時期を過ごす、ということはもう永久に許されないことなのだろうか。誰もいない静かな森の枝に彼女は腰を掛けたのだ、素足を中空にぶらつかせて。地面は湿って、シダやコケ類がまだぬれていた。森の中をぬって通る小さな水の流が、ちょろちょろと音をたてていた。ちょうど雪溶けのまだ肌寒い頃のことだった。ぼくは近くの枯れた切り株に腰を降ろしてそんな彼女を見た。彼女は片手で幹をつかみ、もう片方の手でほぼ水平に延びた、彼女自身が腰掛けているやや細目の枝をつかみ、体のバランスをとると、幸せそうに、ぼくに笑顔を向けた。それから、遥か頭上の、空の青さや光をさえ切ろうとしている頭と枝とを突き合わせた森のこずえの方を見やった。ぼくはじっと、そんな彼女を眺めていた。とりわけ、スカートから見え隠れする彼女の両膝がぼくの目を惹いた。その足が風を切るように、枝の下で自然に揺れているのだ。そのとき、ぼくは彼女を欲望の目で眺めていたのではない。森の中の妖精のように、ぼくは彼女を見つめ、驚いていたのだ。

しばらくして彼女は、その枝から降りた。そしてスカートや背中についた汚れを手で払いのけながら、ぼくの方に振り向いた。

“あたしの木登りもまんざらじゃないでしょ？”と彼女はにこやかに言った。

ぼくは、満足気に立ち上がり、彼女のそばに近づいた。

“枝が折れなくて幸いだったね”と、ぼくは言った。

彼女は、生き生きと目を輝かせてぼくを見た。

“ねえ、ときにはこんな、誰もいない森に来るのもいいものね”と彼女は言った、“静かで、空気がよくて、神経がなごむわ。それに、向うには光があって、川があって、青い空がある。こんなに気持ちのいい気分させられるのは久しぶりよ...”

“ぼくは、お前がいるだけでいい気持ちさ”と、ぼくは言った、“ねえ、もう少し暖かくなって来たら、ハンモックを持って来よう。時間の経つのも忘れてその上に眠ることができれば最高さ...”

そう言ってぼくはふと、彼女が森の中のハンモックで、まるで眠り姫のように眠りこけているその安らかな姿のことを思った。

“いいねえ、永久にそんな生活ができれば...”

リサは、その言葉を聞いたのか聞かなかったのか、森の一方の光の満ちている方向に向かった。

“ああ、待って、あんまり急がないで！”と言って、ぼくは、彼女の後を追った。

森の中へ差し込む青白い光の筋が、やがて束となり、まるで霧のように淡い光の中へ彼女の黒い影は吸い込まれて行った。ぼくは、森のはずれの光の中に消えた彼女の後を追って、駆け出した。

森の薄暗がりから、急に明るい場所に出て、一瞬、ぼくの目はくらんだ。

気がつくと、すぐそばに、茫然と彼女が立っていた。

ぼくたちの出たところは、断崖だった。わずかな、光に萌えるような草地のすぐ向うは、もう絶壁となっていて、遥か下に川が流れていた。そして、その対岸からは、再び広大な森が、幾重にも重なり合って続いていた。それら、黒々とした森の上には燦々と陽光が照り注ぎ、ところどころ空地となった草原は、明るくてまぶしいほどだった。すぐ足下の川の流れは、雪溶けのせいか、急流となり、逆巻く波しぶきをたてていた。しかしここ、ぼくたちのいる断崖の上は、明るく、穏やかだった。

“いい景色ねえ...”と、彼女は、ぼくがやって来るなり、目を細めて遠くを見つめながら言った、“ねえ、こんなところで暮らせれば、素敵でしょうね...”

“ああ”と、ぼくは、後ろ姿の彼女を見て言った。

彼女は絶壁の上にあたり、このまま、あの急流へ突き落とすこともできたのだ。

そして、この幸福な瞬間を、永久に彼女と共に葬り去ることもできたのだ。しかしぼくは、そうはしなかった。むしろできるものなら、彼女の背に羽根が生えて、このまま、この森の上空へ飛び立たせてやりたかったのだ。しかし、彼女はそこにいた。ぼくの心の動きとは無関係に、ありのままの姿でそこに立っていた。

“確かにここはいいところだ”と、ぼくは胸を張って答えた、“葉ずれや、風のうなりの音と共に、いろんな森のざわめきや、ささやき合いの音が、この空気を伝わって聞こえて来るような気がする。恐らくここでは、人間は暮らすことができず、森自身が生活をしているんだよ。――しかし、これらを見ていると、詩人になったような気分がしてくるね...”

“ねえ、このまま死ねたら、幸せね”と、彼女はふと言った、“この思い出だけを持って天国に行くの。ひょっとすれば、ここは天国それ自身なのかも知れない。でも、生きているかぎり、また外界に舞い戻って行かなくっちゃならないわ。外界にもそれなりの楽しみもあるけれど、天国の気分にさせてくれるのはただここだけよ...”

どういう理由によるのかは分からないが、ぼくの両手は、自然と彼女ののどに伸びようとした。しかしすぐ引っ込めた。それは、ぼくの心の中と余りにも符号した彼女の言葉に驚き、その衝撃からそうさせようとしたのか、それ以外の理由によるのかは、もう分からない。しかし、余りの心地良さが、思わず理性を失わせようとしたのは確かなことだった。

“そんなに死にたいと言うのなら、ぼくはお前を殺すことだってできるんだよ”と、ぼくはにっこりして言った。

“リサは、その言葉に、初めて振り向いた。

“どのように殺すの?”と、彼女は、にっこりして言った。

“ここから突き落とすことだってできるし、首を締めることだってできる”と、ぼくは、平然とした口調で言った、“――でも、そんなこと、できっこない。第一、理由がないもの。とりわけ、可愛いお前を失いたくはないからね。息の事切れたお前なんか、何んの値打もないよ...”

リサは、笑顔でぼくを見た。

“いいのよ、その気になれば、どのようにしてくれたって”と、リサは言った、“殺してくれたって、あたしは何も言わないわ。――でも、兄さんには無理ね。どうやら、あたしにまいているらしいもの。あたしの言うことなら、何んでも聞きそうな雰囲気なんだもの。あたしが勝つか、兄さんが勝つか、いつもその戦いのようなものね”

“ぼくはいつも、お前に負けっ放しさ”と、ぼくは言った、“お前のその可愛らしさには勝てないよ、決してね。ぼくは、お前の言う通り動くしかない。男って、みんなそうなんだ。可愛い娘には弱いのだ。全く、芯まで骨抜きにされてしまう...”

そう言うと、リサはゲラゲラと笑い出した。

“どうして笑うんだい?”と、真面目な顔をしてぼくが言っても、リサは笑うのをやめなかった。

“だって、おかしいんだもの”と、リサは笑いながら言った、“兄さんたちって、どうしてそんなに単純なの? あたしなんか、遥かに弱い存在なのに指一本触れようとはしない。一体何がお望みなのか、知りたいところだわ。あたしのどこに興味があるのか、教えて欲しいわ...”

“すべてだよ”と、ぼくは間を置かずに答えた、“簡単なことさ。リサの言うように、ぼくなんか単純なのさ。つまり、お前のすべての事に、ぼくは興味があるのさ。そして、まるで籠の中の小鳥のように、お前のことを観察したい”

“いやよ、そんな風に見るなんて”と、リサは言った、“あたしも人間よ、好きなようにさせて欲しいわ”

“それは分かっているよ、お前の自由さ”と、ぼくは言った、“...でも、お前は可愛いし、そうあるべきなんだ。そして、永久に、ぼくの、又他の男の心を、魅惑させ続けて欲しいのさ。お前のような若い娘にとって、魅力というものは、何よりもかけがえのない宝物なのさ。ぼくが言いたかったのは、そのことなんだ...”

リサは、しばらく黙って、他の一点を見つめていた。
やがて、おもむろに彼女は言った、
“さあ行きましょ。ここは退屈なところよ...”

リサの中に魔性が宿っていた、とまで言えば大げさになる。しかし、その大きな瞳や、つんとした鼻、あるいはまだあどけなさの残る仕種の中には、ぼくの心を惹きつけて止まない魅力があったのは確かだった。何が、彼女を、それほどまで魅力ある存在にしていたのだろうか？ 何よりも彼女の若さ、長い人生の中で、ほんの短い一時期に当たる彼女の若さが、彼女を最高のものにまで高め、並ぶもののない魅力をつくっていたのだ。しかしこのことは決して、彼女が年をとれば、その魅力を失うということの意味はしないだろう。大人になればなっただ、彼女はまた、違った魅力を発し続けるに違いないのだ。彼女は永久に、魅力のある女であり続けることだろう。そしてそうである限り、ぼくの彼女に対する賛嘆の念は、永久に消えることがあり得ないのだ。彼女もまた、この地上で生きて行って欲しい。その運命に、予期せぬことが多々あろうとも、彼女のおもむくままに生きて行って欲しいのだ。そして、ほんのわずかでもいいから、このぼくのことを覚えていて欲しい。できればいつまでも、その心の中に覚えていて欲しいのだ。ああリサ、ぼくはお前のことを忘れたことがない。そして、お前のことを忘れ難いが故に、ぼくはもっと追求したいのだ、女の不可思議な魅力と、ぼくの心を虜にするその魔力の意味についてさ。ぼくは、それが知りたい。どうしてぼくの心をこんなに惑わし続けるのか。そして、こんなに苦しめるのか。お前は去ったが、その余韻だけは、今もなお、ぼくの心の中で生き続けているのだ...

...孤独な朝。オートバイの元気な音とともに目を覚ます。何か、不安な夢にうなされた後の目覚めのようにもあった。かつてのように、さわやかで、すがすがしいという気分は全くなかった。むしろ鈍重で、重苦しくさえあった。しかし、ベッドに横になったまま、昨日、居場所を変えたことを思い出した。ぼくの心になかった静かな田舎の宿に越して来たのだ。街での生活に行き詰まり、また資金も不足して来たので、汽車に乗ってこの田舎にやって来たのだった。近くの山中に修道院があるという。近々、ぼくも行ってみることになるだろう。

こんなことを考えながら、淡い光が射すベッドの上で、暫く横になっていた。ぼくは、文明の地を離れ、再びこんな田舎にやって来てしまった。もう、こんな田舎では、セーラと会う望みさえないだろう。しかし、ここへ来たのは、心の欲求でもあったし、町の生活で疲労したぼくの心を休め、しかも気持ちを整理する為にも必要なことであった。

昔一都会ですさんだ生活をしていた頃、よく夢に見たあの田舎の風景によく似た景色に出会わないかという秘かな期待もあった。

それは、簡素な住宅街のすぐそばが一面麦畑で、しかも、その中の一軒からは心なごむようなピアノのレッスンの音が聞こえて来る。道端を通るぼくの目に、ふと、ほどよい加減の光線を浴びた麦の穂が見え、こんないいところで学べたらいいな、という一種羨みとも喜びともつかない、和やかな気持ちに満たされたのを覚えている。

しかし、ここへ来るまで、そんな田園には出会わなかった。ときたま田園が開けたがすぐ森に隠れ、しまいには、山と森しかも目につかなくなってしまった。思えば随分深い、山奥にまでやって来てしまったようだ。しかし、この辺は、灌木が茂り、小川が流れ、リンゴの木が植わる、ほっと息のつけるような場所だ。ぼくはそこで、昨日の夕方、美しい夕暮の雲を眺めながら、ポツツと木立の中に立っているさびれたようなこのホテルを見つけた。

ぼくは、ここでしばらくを過ごすつもりだ。もうすぐ春だし、自分自身を見つめ直すのにこれほどふさわしい場所は他にない。できたら、ぼくはここで、何かを書きたいとさえ思う。誰にも読まれることのない詩。ただ彼女にだけ、読まれることを願う詩、などだ。それに、ぼくは、読みたい本も幾冊か、持って来ていた。とりわけ、パヴェーゼの「月とかがり火」――これだけは、手放すわけには行かない。これほど、故郷についての郷愁と喪失が同時に書かれた本は、他に見当たらないからだ。まだ、ざっとしか読んではいないが、さらに深めて行く必要があるだろう。

そんなことを思いながらも、ぼくはまだベッドに横たわったままだった。

この年になってぼくはついに、この田舎を見つけた。それ自体は別に珍しいことでもない。しかし、様々な経験を経た後にこの地に至り着いたということは、何かしら、不思議な気がするのだ。あの都会で、リサやセーラと暮らした日々は、苦しくもあわただしかったあれらの日々は、どこへ行ってしまったのだろう。ただ、静かに広がる青い空を見つめていると、気が抜けるのを感じるのだ。今は余りにも静か過ぎて、事件にも乏し過ぎる。――しかしあの頃は、毎日が、何かしら事件であり、苦悩と絶望と狂気との連続だった。やがてセーラは、忘れもしない年の瀬のさむい夕方、涙に暮れてぼくたちの部屋から飛び出したきり、もう二度と戻って来ることはなかった。あの貧しいアパートの一室に残されたのは、ぼくとリサの二人だけだった。様々な動揺や浮き沈みの生活をくり返した後のとどめのようなあの事件があってから、もう何年が経過したことだろう。セーラはもう再び、ぼくたちの前に姿を見せることはなかった。その後、ぼくとリサの二人きりの生活は恵まれたものとなったが、何かしら心寂しいものを感じないわけには行かなかった。しかしその生活も遂に去年、終止符が打たれた。田舎暮らしの生活では余りにも物足りないと考えたのか、彼女は単身、都会へ去って行ったのだ。ぼくはそのリサの姿の中に、かつてママもそうだったことを聞いたことがあり、ママの姿とダブらせて見たのだった。ともかくもそうしてリサも去って行き、とうとうぼくは一人ぼっちになってしまった。この日が来るのを昔からぼくは予期していたのだろうか？

ぼくの遠い過去の中にその芽生えを見ることは、確かにできるのだ。幼い頃からの空想癖。ひとりぼっちで何かをする楽しみ。晴れた日、ぼくはよく妹たちを伴って近くの野原に遊びに出掛けたが、結局、ひとりでもぼくは楽しむことができたのだ。そして、木の枝や、草原などに腰掛け、春のうららかな日を浴びながら、ぼんやりと周りの景色に目を向け、耳を傾けながら、夢見心地の時を過ごすのが好きだった。――もうその頃から、学校の教室に閉じ込められて授業を受けることや、大勢のクラスメートと一緒に遊ぶことが嫌いではないにせよ、本当の喜びをもたらしてくれるものでないことを、密かに感じ取っていた。ぼくが本当に、心から打ち解けられたのは、孤独に戻るときや、あるいは、ごく少数の親しい人々――親しい友人や、妹たちと放課後、一緒に行動するときだった。しかし何よりもぼくの心をわくわくさせてくれたのは、学校から自分の部屋に戻ってそこに見る、宇宙やその他のことについて書かれた謎々の本や、少年少女向けの科学の本、それに部屋に飾られた人形たちだった。何よりも、世界の不思議が、ぼくの心を虜にし、魅了した。そして、宇宙に対する空想は広がるばかりだった。なぜ、夕焼けは赤いのか？ なぜ月の出や月の入りの満月は、天空にいるときの満月よりも大きく感じるのか、眼の網膜では像は倒立に映るはずなのに、なぜ景色は逆さまに映らないのか？ 考えれば、身近かなことの中で、不思議なことばかりだった。ぼくはひとりで、シリーズとなったその小冊子に夢中になり、ますますのめり込んで行った。それは、子供が生まれて初めてぶつかる知恵という謎と格闘する姿であり、今となっては、母親が、そんな孤独な闘いをしているぼくの姿を、不安なまなざしで見つめていたことがよく分かるのだ。おかげでますますぼくは、友だちとの付き合いが減って行ってしまったからだった。しかし何も知らないぼくは、母親の心配とほうらはらに、空想的な絵を、その頃よく描いた。結局、知識よりも空想の方が、ぼくの性によく合っていたのだ。その頃から宇宙が好きだったし、宇宙船の絵をよく描いた。そしていつかは、こんな宇宙に飛び出したい、というひそかな願いさえ持った。

――だから、ぼくの心は、妹たちと近くの野原に遊びに行っても、絶えず他のものに向けられていた。無論、遊びそのものに熱中したこともあった。しかしそれは、ずっと昔のことだ。ローラスケートや、石けりや、竹馬や、かくれんぼなどたいていの子供がたどる遊びを、ぼくもたどってはいた。そしてそれに夢中になりもした。――しかし小学校のとき、家を田舎の方に引越してからというもの、そういう遊びはパツタリとしなくなってしまった。

子供の頃の思い出にはきりがなく、いくら書いても書き尽くせるものではないだろう。しかし、そうした遠い過去の中から、ただひとつ呼び声が耳に聞こえて来るのだ。それは、その頃には確かに感動があった、というただ一つのことなのだ。その頃、世界は新鮮に思えたし、ほんの身近いことのなかにも、感動すべきこと、驚くべきことを、毎日、いくらでも見つけることができた。

友だちと初めて行く隣の村や家々の中にも新鮮なことは、いくらでも隠されていた。それらに素朴に驚き、冒険心はますますかり立てられたのだ。――しかし、年月が経つと共に、そうした経験はだんだんと薄れて行ってしまった。ぼくの人生の中に、悲しいこと、辛いことが余りにも多過ぎたのだ。そうした出来事が、それまでの暖かく春の陽光に包まれたような少年の頃の幸福を、暗雲に包んで、遠い伝説の時代へと追いやってしまったのだ。父親の死、すぐに訪れた貧しい生活、そしてやがてママの失踪。そしてより貧しいレオノール爺さんの家での暮らし、お決まりの家出と、都会でのどん底の暮らし、盗みや暴力などが、その後のぼくの人生を一層暗いものにした。

しかし今となっては、それらの暗い人生も、なつかしい思い出となって蘇るのだ。まだその頃の方が、考えようによっては、スリルに富んで人生を活気づけたのかも知れない。今、それらすべての辛い思いから解放されて自由となったが、人生の張りのようなものを失い、空虚な感じさえするのだ。

かすかな春の気配すら感じられる明るい陽射しが、この部屋にも射し込んで来る。春の目覚めと共に、ぼくは、少年のようにこの日、生まれ変わることができるのだろうか。少年の日の感動――それを再び、ぼくはこの手に取り戻してみたい。人生には人生のその時々感動があるはずだ。疲労し、張りの失った人生ほど悲しいものは何もない...

ぼくはなおもベッドに横になりながら、考え続けた。ぼくのたどった人生については、自分でもよく分かっている。それが決してベストだと言うわけではないが、他には仕方のない道筋だったのだ。そして今――ぼくがたどり得なかった道について様々に考えをめぐらせた。例えば、ここへ来るに至る道々の白い残雪などを目にすれば、一面の銀世界でスキーを滑るということは、どういうことだろうと思うのは自然の成り行きだった。ぼくの人生に、そういう世界は全く無縁のものとして、通り過ぎて来た。しかしまた、そういう世界が羨むべきことだとも、ぼくは思わなかった。確かに金持的な、金持風の生活、金持風の交際などは知らずにぼくは過ごして来た。彼らの人生と、ぼくの人生とは全く別個のものとして、存在して来たのだ。彼らの家庭的で、なごやかな生活というものをぼくは知らないが、しかし今さら、そういう生活がなかったことを悔いても仕方のないことなのだ。もっと昔には、ぼくにもちょっとした小市民的な家庭のある生活があったのだし、そのときにはもう既に、家族に連れられて山やスキーに行った思い出さえ持っていた。ぼくを、運命の女神が見放したのは、そうした思い出が形成された後のことであり、確かにそのとき以降、ぼくは金持風の生活はおろか、最小の小市民的な生活からさえも見放されたのだ。そのときに失ったものは、確かに大きかったに違いない。だがそれと同時に、ぼくの現実の生活は夢と化し、ますます夢の世界へとおぼれて行ったのだ...

現実の生活が耐え難いとき、人間には、確かに「夢」という最終の避難場所がある。ぼくはそこへ逃げ込むことによって、自らを救うことができたのだ。それは、あのマッチ売りの少女に似た夢から、とほうもない夢まで多様に渡っていた。見知らぬ美女を恋する夢もあれば、金持になる夢も当然含まれていた。しかしひとたび貧しさを知った人間が急に金持になったからといってそう簡単に生活が変わるなどとは、とうてい考えられなかった。身についた貧しい習慣というものは、ただ経済のみで簡単に変わるものではないのだ。そこに複雑にからみ合っている人間関係や社会構造などが、その人をその人たらしめていることは、何もマルクスを借りなくとも、すぐ分かることだった。その社会の中で破れた以上、再びその社会の中に回復されることを望むことではもはやなく、真実の夢は、そういう社会から去り、しかも生活を続けて行くことのできるそんな地を捜すことだった。ぼくは、真剣に一時、そういう夢に取りつかれたことがあった。そして、若いセーラやりサの胸を痛めさせもした。

あの頃の夢、それは今もなお、新鮮なイメージを伴って、ぼくの脳裏に浮かんで来る。もしあの頃、ぼくに詩を書く技術が伴っていたら、ぼくは詩人となっていただろう。多くの詩、多くのイメージ、多くの苦渋、それらは次から次へとあふれて来て、汲めども尽きせぬものがあったのだ...

...こうして横になっていると、遙か遠い呼び声が耳に聞こえて来るようで、なかなか聞こえては来ない。一体、あの時代はどこへ行ってしまったのだろうか？ 夢を多く待っていた日々——世界がまだよく分からず、それを理解しようとし、また世の中の不正と戦おうという情熱のあふれていた日々——その頃から確かに孤独だったが、悩みながらも理解に努め、まだ未来に希望を託していた日々——それらは今、どこへ行ってしまったのだろうか？ 結局、はにかみ屋だったぼくは、世の中の力とはなり得ず、それをかすめて生きて来たに過ぎなかったのだ。時代は変わり、世の中の人々の顔も変わり、今はただ、心寂しさと空しさだけが心を通り過ぎて行く。これまでぼくが生きて来たこの長い年月——それは何んだっただろう？ それは、ぼくら同世代の人々の体験とも違った。ぼくは、いつも孤独で、自分ひとりだけの体験を望んだし、その結果、そうなったのだ。それらの人生の中で、とりわけぼくの心を奪ったのは、自分の見知らぬ世界を見せてくれた映画と、そして、遠い国のさらに古い時代の文化を伝えてくれる音楽や絵などだった。それらによって、ぼくは、孤独の中で、様々な国の、様々な時代の文化を学んで行った...

結局またぼくは一人に戻った。昔からそれが好きだったし、あれこれと一人で考えるのが好きなのだ。それは自由で気楽な生活だが、同時に寂しさと引き換えであることも、ぼくは知っている。しかしそれは、昔からぼくが望んで来たことだったのだ。昔からぼくは、みんなと一緒に何かをして楽しい思いをしたという経験は一度もなかった。ぼくが心から幸福を感じることが出来たのは、本当に一人に戻ったときなのだ。

誰もいない部屋で、あるいは世界で、自分の心に立ち帰ったときなのだ。だからぼくは、結婚などというものは、その存在に気づいたときからあきらめていた。自分が家庭をつくるなど想像もできないことだった。家庭の中で生まれ、育ちながら、ぼくは自分が家庭を作ることを恐れた。なぜならぼくは、家庭の崩壊の悲劇というものを身を以て知っていたし、自分のように世間の動きとは無関係に過ごした人間に家庭が作れるなど、想像もつかない事だったからだった。しかしそれでいて、ぼくは幸せそうな人の家庭を羨み、それに嫉妬を感じた。そして自分では出来そうもない家庭を何度も夢見、それをありありと思い浮かべさせたのだ。

そういう時代も、もう今は過ぎた。今、振り返ってみるにぼくの人生に、進歩というものがあつたのだろうか？ ぼくは、これまで何を身につけて来たのだろうか。およそ世の中で役に立ちそうなものは、何ひとつ身につけては来なかった。一時、技術者になることを夢見たこともあつたが、その道は遙か昔から閉ざされていた。それで、ぼくは相変わらず昔のまま、まる裸だ。まるで野性の動物のように、文明のシステムからは何ひとつ学ばず、それに染まりもしていないのだ。しかし、そんな人生に別に後悔もしていない。ぼくが歩むべき道は、これしかなかったのだから...

ああ自由。そして空想と追憶の日々... それは今も続いている。この年になっても続いているし、これから先もずっと続いて行くことだろう...

昔、ぼくが机に向かって本を読んでいたとき、窓辺にぽっかりと急に笑顔を見せたりサの表情がなつかしい。何んの憂いも含んでいない、うららかな春の午後、遙か彼方の野原には、白やピンクなど可憐な花々が咲き誇っていた。リサのにこやかな表情は春そのものだった。

“何をしているの？”と、彼女は窓辺に腕を組み、机に向かってぼくを見上げて言った。

“本を読んでいるところさ、サルトルの”と、ぼくは答えた。

“どうしてそんな難しい本を読んでいるの。もう春よ。外に出ない？”

見ると、彼女の後ろにはセーレンがいた。彼女は知らぬ間に犬と散歩に出掛け、今、戻って来たところだったのだ。

“でもまだ外は寒いだろ。それにこの本、なかなか面白いのさ。一読の価値はありそうなのさ...”

“何んていう本なの？”と、リサは、げげんな表情をして、机の上に置かれているその本に目を向けた。

“「存在と無」さ”と、ぼくは答えた、“これまでいろんな哲学書をひもどいて来たけれど、これほど手ごたえのありそうな本はないよ。ちょっと冒険をする前のスリルを味わわせてくれるような本なのさ、この本は”

“でも――難しそうな題ね。分かるの？”

“今のところさっぱり分からない。だから、分からないところに魅力を感じるそのような本なのさ。初めからすぐに分かれば、そんなつまらない本なんかないだろう？”

“ふ～ん”と、リサは不思議そうな顔をして言った、“でもね、そういう本を読むのもいいけど、今は明るい昼よ。薄暗い部屋の中に埋もれているなんてもったいないとは思わない？ 明るい陽射しを浴びて何かしている方がよっぽどいいと思うけどなあ...”

“確かにいささか熱中し過ぎたきらいがあるようだ”と、ぼくは、明るい陽射しを浴びている窓辺のリサを見つめて言った。彼女の白い長袖が、日を浴びて一層まぶしく感じられた、“おかげで少し、読むのに疲れたようだ。しばらく本から離れてみようか...”

“そうよ、本はそこに置いて”とリサは言った、“ホラ見て。向うの野や森を。もう春よ。さっき、少し小さ目のカササギが飛んで来ていたわ。春を、あたしたちに告げようとしているのよ。それに、あの白い花が素敵。ねえ、一緒に出て、行ってみない？”

“ぼくは、そういうお前を見ているのが一番楽しいのさ”と、ぼくは言った、“春を背景にしたそのお前の笑顔。それを今すぐ写真に撮ってやりたい気持ちさ”

“いいわよ”と、リサはにっこりして言った、“兄さんがお望みなら写してもいいのよ。あたし、喜んでモデルになってあげる”

“でもやっぱりやめておくよ”と、ぼくは言った、“写真のお前よりも、生身のお前の方がよっぽどいいもの。――じゃあお前、先に行っていてくれるかい。ぼくはあとで追いかけるから...”

リサは、窓際に腕組みをしたその上にあごを寄せ、分かったと言う風に再びにっこりすると、窓際から離れ、セーレンに合図をすると、そのままぼくに背を向けて、ダッダッと向うの方に駆けて行った。ぼくは、そんなリサの後ろ姿を、彼女の白い服が春の陽を浴び、風を切って行く様子を、自分の部屋の椅子にもたれて快く眺めていた。リサは、遠く、春の野の中に、一緒に駆けて行く犬と共に、次第に小さくなって行った。そして立ち止まり、振り向いて、ぼくに手を振った。同時に何か言っているようだが、その声はもうぼくのいるところまでは届かなかった。やがてリサは振り向き、さらに向うの花の咲いている野へと駆けて行った...

今振り返ると、あんな日があったのがなつかしい。サルトルの「存在と無」はその年の春から夏にかけて読み進んで行ったが、そのような日々の思い出と切り離せないのが、この本をより魅惑的なものにしてしている理由でもあるのだ。その本に込められていた深い真理は、その後何年も経た後によくその完全な理解が得られたが、ぼくにとってその頃は、読むこと自体が楽しかったし、また毎日の生活も楽しいという幸福な思い出として残っている。その本は、人を苦渋に追いやるのではなく、毎日をより充実したものにする、そういう役割としてぼくの前に存在し、事実ぼくは、その本によって結構楽しい日々を過ごすことができたのだ...

静かな冬の昼下がりに、ぼくはぼんやりと窓の外の景色を眺めている。別に何をするのもなく、明るい日ざしが、庭の樹木や芝草に降り注ぐのをじっと眺めている。冬が去り、再び春が訪れようとしている。春が忍び足でやって来て、もうすぐそこだという気配が感じられる。しかし、そんなある日、ぼくはこんな片田舎のホテルの一室で、ひとりぼっちだ...

何が人生の目標だったのだろうか？ 今となっては分からなくなってしまった。ただ流木となって、波間を漂う他は... そして今、その漂着の果てに、ぼくはこんな寂しい宿に来てしまっている。行き場のない悲しみ... 空はあんなに晴れて、雲もあんなに白く、光が燦々とこの雪解けの庭に射しているというのに、ぼくの心は暗い。昔は、春が来るのを喜び、妹たちと一緒に心踊らせたそんな幼年時代があったというのに、あの妹たちの笑顔はどこへ行ってしまったのだろうか？ そして、ぼくの笑顔は？ 窓から外を眺めるぼくの表情は、今、険しくて、暗い。何がそんなに暗くさせるのだろうか？ 季節が再びめぐって来るというのに、もうぼくの前には、春も、夏もやっては来ないのだろうか？

その理由は、この孤独、世間からとり残されてたったひとりぼっちでいるというこの孤独にあることは、自分でもよく分かっている。しかし、同時に、ジレンマに悩まされてもいるのだ。もし、世間に割り込もうとすると、もう社会の網の目に引っかかってしまって、二度と出られず、こうして自分であり続ける機会を永久に失ってしまうことになるだろう。だからと言って、ひとりでいれば、孤独で、気が狂ってしまいそうになることもあるのだ。——どうすれば、このジレンマからののがれ出ることができるのだろうか？

ああ、きららかな早春の光、まるで神の御告げのような光、ぼくの心は今、一番深い底に沈み、また、ぼくの悩みも深いのです。教えて下さい、どうしたらいいのかを... お導き下さい、ぼくの行くべき道を...

こんなことを、窓の外のあの明るい、神のような大空に向かって言ったところで、何んになるろう？ 結局は、悩みというものを、いつもひとりで解決して来た。若いときだってそうだったし、今も同じことだ。あの頃だって、ぼくは何度も、大空のどこかにいるはずの神に向かって願い事をしたし、ときには、呪いの言葉さえ吐きもしたが、結局、神は何も答えてはくれなかった。——しかし、今回は、少しばかり答えてくれたかのようだ。ぼくの心の中に今、ムラムラと、過去を見つめるのではなく、春のささやきが聞こえてくるように、未来を見つめる勇気が沸いて来たのだから。未来は楽しい。未来は明るい。今や決してぼくは、行き場のないぼくではあり得ないのだ。希望にあふれた、大いなる道を歩んで行こう。もうすぐそこまで来ている春の光が、そうぼくに呼びかけている。

その道に向かって真直ぐ進んで行けば、ぼくの苦しみも解き放たれ、ぼくの悲しみも、やがて消失して行くことだろう、まるで早春の光が、草原に残った白い雪を溶かして行くように...

そういえば、向うに見えるあのりんごの木の前も、芽を出し、やがてはつぼみが花を咲かせることになるだろう。陽春のまっただ中の頃には、この辺の木々という木々は、花を咲かせ、見違える光景となっていることだろう。その頃には、この暗くて、長い冬とも、もう完全におさらばだ...

...こうして再びぼくは、我に返ることができた。今、自分はどこにいる？ 帰りの列車の中にいる、とでも言おう。これまで書いて来たその場限りの心の軌跡だけではなく、あの日以来たどって来た実際の出来事や、ちょっとした事について書くことにしよう。

この旅の本来の目的は、あくまでセーラを捜すということだった。あの中規模の商業都市B... ..では、延びに延びて、結局、約二ヶ月の滞在となってしまったが、何も出ては来なかった。その間、街で見聞した様々な光景がぼくのそばを通り過ぎて行ったが、それらはただ一つのこと、ぼくの孤独を指し示す役割しか果たさなかった。パン屋のおじさんと語り合う、子供を連れた若妻の姿や、セーラが見つからないいらだたしさから、絶望にかられて、街を一望の下に見降ろすことのできる山頂の展望台に上がったときも、結局、そこにいた人々のあいだにいる自分が、惨めなだけだった。しかし、そのようにあわただしく過ぎた夢のような日々の中でも、市電に乗りかけたとき、そこから降りて来たうつ向き加減の一人の少女が、一瞬リサかと思わせたこと、そして、あの初日の夕方、枯葉の散る裏通りを、子犬を連れてやって来た、ぼくの見知らぬあの少女のことが、印象的だった。あの少女のことは、その後も気になり、一時はセーラのこととも忘れて、住んでいる家を探そうともしたが、結局ダメだった。しかし、あの一角は、随分大きな屋敷が立ち並び、彼女もきっとそのうちのどこかから出て来たに違いない、ということは想像された。だとするなら、どうしてあのとき、彼女の後について行かなかったのだろうか？ 彼女の満たされた、幸福な生活を思うにつけ、そのことがあとになって、悔やまれたのだ。しかし、見つからないものは仕方がない、あきらめる他はなかった。——でも、今でも、あの彼女の微笑みだけは、くっきりとぼくの脳裏に焼きついている。

これには一行も書きはしなかったが、あの手この手を尽くし、街の隅々にまで出掛けて行って、これと目をつけた場所でセーラを捜し歩いたが、結局、何んの手がかりも得ることはなかった。セーラは、まるで風のように、この街から消えてしまっていたのだ... 昼は捜し歩き、夜はホテルの自分の部屋に戻って、苦しみ悶えた。そのつれづれに書いたのが、今までのあの心の軌跡だ。どんなに沈んでいたかは、そこから分かるというものだろう。

リサには手紙を書いた。

夜になって一度、リサから電話がかかって来たことをホテルのボーイから知らされたが、ぼくは電話をせず、用があるなら手紙を書くようにと、もう一度、リサに書き送った。そして、滞在が延びそうなこと、セーラはまだ見つからないが、見つかりと見つかるまいと、年が明ければこの街を去ること、を告げた。すると、リサからさっそく手紙がやって来た。仕事は順調に行っているから自分のことは心配いらぬこと、セーラはまだ見つからないのを案じているが、きっと見つかることを祈っていること、などの内容だった。ぼくは、リサの小さな心づかいをいじらしく思った。こんな孤独な街のまっただ中で、まだリサと結ばれていたことは幸せだった。

結局、年明けに、ぼくはその街B.....を去り、より寂しい田舎の温泉地、マルーラの少しはずれのホテルに移り住んだ。そこでは、温泉で療養を続けている人々の姿や、また、近くには僧院があって、歴史が刻まれた古い建物や、こんな山奥でと驚く場所で今も黒い僧衣に身を包んで神に祈りを続けている僧侶たちの姿が印象に残った。ただ、そこから、自分の住んでいるホテルへ歩いて帰る途中出会った一人の幼い少女の姿は、急に自分の昔を思い出させ、胸に熱いものを感じたのは、今も記憶に残っている。その日は、晴れてはいたが、雪の積もったこんな田舎の道で、ただ一人歩いて来る、あどけなく、可愛い少女に出会うとは。ぼくは、なんでもいいから、彼女に声を掛けてやりたい気がした。しかし、いたずらに彼女を驚かせることや、彼女の警戒を恐れて、ぼくは何も言わず、その少女とすれ違った。彼女は、ぼくのことには気にも止めず、手に大事そうに何か(=人形?)を抱え、ぼくのそばを通り過ぎて行った。ぼくは、少し行ってから立ち止まり振り向いたが、とぼとぼ歩いて行く彼女の後ろ姿が、ぼくにある感動を与えた。それは、幼い日の幻影をそこに見た為か、彼女自身の行く末の未来に思いを馳せた為なのか、もう忘れてしまったが、何かを感じたのは確かだった。

そんな日々が過ぎ、予定していたパヴェーゼの「月とかがり火」も読んでしまい、もう目標が何もなくなってしまったので、ぼくは、この静かな温泉地を去ることに決めた。

――月とかがり火、これは恐ろしい本だった。こんなに悲しげな調子ですべてが書かれた本が他にあったらどうか？ここに書かれていることは、生ある物のはかなさ、空しさ以外の何ものでもない。春は一度きりしか来ない、しかもずっと早い頃に。さもなくば、春など永久にないのかも知れない。モーラのマッテオさんの娘たちの話。素晴らしい金髪のイレーネと、黒髪のシルヴィア、そして一番年下の、パルチザンで劇的な死を遂げるサンタの三人姉妹の物語は、本のほぼ半ばから始まる。ビッコの息子チントを抱えたヴァリーノ一家の悲しい結末も合わせ、ここにはすべての人々の崩壊のドラマ以外、何も書かれてはいない。音楽師ヌートがチントを引き取り、昔、ここで暮らしたことのある主人公もまた、この村から去って行く。

ぼくも、この本を閉じて、ドラマの世界に別れを告げると同時に、この美しい田舎町とも別れを告げることにした。そして、この物語の主人公のごとく、たったひとり寂しく、心のふるさから去って行くことにした。

そんなぼくを待っているのは、数ヶ月前に後にした、あのなつかしい、しかしもう誰もいない我が家――

しかしぼくは決して寂しいとは思わなかった。人間は、結局、ひとりでも生きて行けるものなのだ。季節は春めいて来たし、のどかな青空の雲間に、希望の片鱗さえ伺えるような気がするのだった。

そうして荷作りを済まし、一ヶ月ほど滞在することになったこの温泉地の宿の親しみのある部屋を後にして、何もかもあきらめて田舎の道をとぼとぼと歩いているとき、ちょうど道のはずれの茂みの向うに古びた石造りの館が見えて来たときだったが、そこから若い女の歌声が聞こえて来たので、春めいた風の香りにも誘われて、つい道をはずれ、草むらの中をその方向へと歩いて行ってしまった。澄んだ娘の声は、草も木もまるで沸きたつようなこの春めいた香りの中でよく響き、ぼくの心を、しばしうっとりさせしてくれた。周囲には、まだ冬のヒンヤリした冷たさが残っていたが、ぼくはなおも、心にしみ入るような甘い歌声に誘われて歩き続け、森のような庭を囲ってある生垣のところまでやって来た。うさぎ小屋や、鶏が餌をつついていて庭の光景が目に入って来、ちょうどその娘は、庭の物干しで洗濯物を干しているところらしく、まめに動く足や手が、真白なシャツやその他の干し物の陰に見えていたが、その姿は見えなかった。白いシャツは、うららかな風にはためき、娘の歌声はいかにも陽気そうだった。ぼくは、ちょっとした覗き心を働かせ、生垣の陰から、彼女の形のいい足や、ほっそりした手がしきりに動く様子を眺めていた。とそのとき、彼女は、空になった籠を抱えて、物干しの陰から勢いよく出て来た。その彼女の顔を見て思わず、ぼくは、手に下げていた荷物を落としてしまった。それは、すぐぼくに気がつき、ぼくを見た彼女の表情とて、同じことだった。いかにも農家風の地味な服を身につけ、籠を持った、薄いピンクのエプロン姿のその娘は、紛れもないあのセーラだったのだ...

“セーラ”と、思わず、声が口を突っついて出て来た。

余り大きな声ではなく、強まる興奮を静めるような、自分を納得させるような声だった。

物干しの手前で突っ立った彼女の目も一段と大きく見開き、驚いた表情に変わりがなかった。

“兄さん...”と、あの聞き覚えのある声が、目の前の突っ立っている彼女の口から洩れた。

ぼくはもう我慢できなくて、彼女との障害となっている生け垣を乗り越え、すぐ彼女の下へ駆けて行った。そして彼女の胸元に飛び込むと、しっかりとセーラを抱き締めた。本当に何年ぶりだろう？ 彼女の暖かな柔らかい感触がすぐに、ぼくの体に伝わって来たのは。セーラは、余り突然で、籠を放すこともできずに、ぼくに抱き締められていたのだ。ぼくは、余りの嬉しさに、つい目頭が熱くなって来た。

“セーラだね。本当にお前はセーラだね”と、ぼくは、このことが本当に信じられず、何度も念を押すように言った。

“兄さんこそ、本当に兄さんなの？”とセーラは、籠を持ってない方の右腕をぼくの背に回しながら、全身で歓びを表すように言った。

早春のヒンヤリした空気と、草や木々の香りの中で、ぼくたちは抱き合ったまま目を閉じ、しばらく夢のような時が流れた――

ひとときが過ぎ、ぼくは目をあけてもう一度セーラを見つめた。すぐ間近の彼女の顔は、あの家を飛び出した当時に比べだいが大人になってはいたが、以前の美しさは少しも失われてはいなかった。セーラの耳にかぶさった数本の髪の毛が、風にそよと揺れていた。そして頬には、数本の、まだ乾きやらぬ涙の筋が残っていた。

“間違いなく、お前は、ぼくのセーラだ”と、ぼくは言った、“その顔と、その涙が証明しているよ。――でも、この永いあいだ、どこでどうしていたんだい。ここで見つかるまで随分捜したんだよ...”

“わたしもよ”とセーラも、嬉しげに言った、“兄さんに会えるなんて思ってもみなかった。――でも、こんなところで会うなんて...”

“でも、どうしてここにいるんだい？”と、ぼくは、ようやく彼女を離して言った。

セーラはやっとぼくから解放され、ほっと一息ついてからぼくを見た。

ぼくは、一瞬不吉な予感が頭をかすめながらも、それを打ち消すように言った、

“ここはお前の家かい？ どこか、もっと適当な場所に行って話そうよ”

“とりあえずこの籠を置いてから”と言って、セーラはやっと動き出した。

彼女は、空籠を抱えて、勝手口の方へ行き出したのだった。

“主人はいま留守よ。家には他に誰もいないわ”とセーラは、ぼくの前を歩きながら言った、“残念ながらわたしの家はここじゃないの。ここへはただこの家のお手伝いに来ているだけよ”

「手伝い」この言葉がぼくの頭を打った。ぼくは籠を抱えた彼女の後をゆっくりとついて行った。

“ここには、クラレさんが住んでいるの。今は、息子さんと娘さんと一緒に食料の買い出しに行っているわ”と、セーラは言った、“ついでに親戚の家にも寄ると言っていたから帰りが遅くなるかも知れない。だから、わたしは今日は、ずっとここで留守番よ”

“よく分かった”と、ぼくは言った、“それで、お前の家がここじゃないって言うのはどういうことなの？”

“知っているでしょ。ルブライラって、大きな街ですから”と、セーラは、家の角にやっと籠を置くと、振り向いて言った、“あの街にわたしのアパートがあるの。そこからここへ通っているのよ”

“じゃ、お前はそちらに住んでいるのかい？”とぼくは言った。それから一息つくと、ぼくは一番気になっていたことを、それとなく彼女に尋ねた、“それで、一人で住んでいるの？”

セーラは、ぼくの気にかかった表情からその意図が分かったのか、初めてにっこりすると、ぼくをよく見つめて答えた、

“ううん。一人じゃない。おばさんと一緒よ”

“おばさん？”と、ぼくは驚いて言った。

“話せば長くなるわ”と、セーラは笑顔を絶やさず言った、“ともかく今は、その人と二人よ。——でも、おばさんはだいぶ体が悪くって...”

“じゃ、お前はまだ結婚はしていなかったんだね”と、ぼくは、半分高ぶる心を押さえながら言った。

“結婚？ それはまだよ”と、セーラは、さりげなく、しかし、はっきりと言った、“兄さんの方は、どうなの？”

“もちろんまださ”と、ぼくは、ほっとして、胸をなで降ろすように言った、“じゃ、これでまた、お前と一緒になれそうだね...”

しかし、セーラの表情は、急に真剣になった。

“待って。そうあわてないでよ”と、セーラは言った、“あたしにも、ここでの生活があることだし、兄さんに会ったからと言って、急に兄さんと一緒にになるわけにはいかないわ。分かるでしょ。だからその説明を今からさせてもらうわ...”

この言葉は一瞬、せっかくの再会に水を差すようで、ぼくをがっかりさせた。しかしまだ分からないのは、セーラのこれまでの生活で、それが分かれば、彼女の言う意味がきっと分かるだろう... ぼくは一刻も早く、彼女の説明が聞きたかった。

“じゃ、こちらに入って。今、紅茶を沸かすわ”

そう言って、セーラは、家の中にぼくを案内した。

“いいのかい？ 勝手にぼくが上がって...”と、ぼくは、大そう立派な屋敷の中の飾り付けなどを見上げながら、言った。屋敷の中は暗く、空気もヒンヤリとしていた。

“別にかまわないのよ。主人も留守だし、もし帰って来ても、あたしの兄さんと言えば分かってくれるわ”

そう言って、セーラは室内を手で指し、ぼくを、床が柔かな毛の絨毯におおわれたソファのある居間に案内した。

ぼくは、深々とソファに腰を沈めると、まず室内を見渡した。ちょっとした大きさの室内で、外から見た限りの古びた屋敷とは異なり、壁は羽目板でおおわれ、天井にも、がっちりした太い梁に沿って何枚もの板がはめられていて、ほどよく置かれたソファや、机や、スタンド、彫刻の置物などとよく調和していた。壁の角は一面本棚となっているコーナーがあったが、本はそれほど置いてはいず、むしろ珍しい陶器の皿や、壺などが方々に飾られてあった。他には、立派な唐草模様のタペストリーと、その壁と向き合うように構成された石造りの暖炉がよく目立った

火かき棒や薪が、無造作にそのそばに置かれてあった。それらは全体として、この家の主の趣味の良さを反映しているようだった。直接、外と行き来の出来る大きなガラス戸は、今はまだあけるわけには行かなかったが、そこからは明るい日が射し込み、もしあけることが出来れば、あのさわやかな庭から漂ってくる春の香りがかぐことができるのは、間違いがなかった。しかし、まだ季節は寒く、暖炉さえ必要としていた。

ぼくがそうして、珍しそうに、室内や窓の外を眺めていると、やがて、セーラが紅茶を運んでやって来た。

“どう、気に入った？”と、セーラは、茶わんをテーブルの上に置きながら、言った。

“でも、お前の家じゃないんだらう？”と、ぼくは言った、“でも、ぼくもこんな家に住みたい...”

“あたしの家じゃないけど、家族の一員みたいなものよ”と、セーラは、砂糖を入れた紅茶を口に運びながら、言った。

セーラのその言葉は、相当親しい付き合いがあることを思わせた。

“それで、セーラ、さっきの話しに戻るけど、お前はここでずっとお手伝いをしているのかい？”とぼくは、紅茶を飲み、一息入れてから言った。

“そんなに昔からじゃない”と、セーラは、ぼくを見て言った、“実は、ここの主人のクラレさんは、近くにある農業試験所の研究員なの。色んな花を咲かせてみたり、作物の成育を研究したり、そんな仕事をしているわ。それで、あたしも、時々雑用のような仕事を手伝うこともあるわ。どちらかと言えば、その方が主で、家事の手伝いは、それほどしなくてもいいのよ。——でも、ときどき、子供さんの相手をしたり、外国語ができるから、その勉強を教えたりしているわ。それで、給料をもらっているの”

“じゃ、難しい仕事もしているんだね”と、ぼくは言った、“試験管とか、そんなのを使うのかい？”

“顕微鏡をのぞくこともあるわ”と、セーラは答えた、“——でも、やってみれば結構面白いものよ。植物の組織を見たり、おしべやめしべを見たり...”

“ふ～ん、ぼくには分からない世界だね”と、ぼくは言った、“ぼくにとっちゃ花なんて、眺めるだけで充分だし、作物だって、おいしく食べられればそれで文句はないさ。——でも随分変わった仕事をするようになったものなんだね”

“これには、色々と訳があるのよ”と、セーラは言った。

もう、セーラのいるところまで射している早春の光が明るく、快かった。

以上のようにして、セーラとの劇的な再会の日が始まったのだった。思えばもう、春は始まりかけていた。いろんな花々が芽ぶき、昆虫たちが待ちわびていた春の到来を喜ぼうとしていたそんなある日、ぼくは、ほんの偶然からセーラと再会した。空は澄んで美しく、冬のあいだ何も身につけていなかった樹木も装い新たに葉をつけ、一面の草の緑には明るい日ざしが照りつけ、何もかも、心も喜ばしくなるようなそんな春の日、ぼくは、あの捜し求めていたセーラと再会した

のだった。

本当に、暗い冬のトンネルを抜けて来るような思いだった。すべてが空回りして、精神も、体さえ、バラバラに瓦解するのではないかと一時は心配するほど、危機的な状況にまで追い詰められたこともあったが、ぼくは無事、生き延びることが出来た。そうして迎えた喜ばしい春、ぼくは、セーラと再会した。

再会したセーラは、面影こそ残っていたが、もう以前のようなではなかった。以前よりずっと大人になり、表情も明るく、心の安定を保っていた。長いさ迷いの後、自分の生きる道を見出したのだ。彼女の日課は研究所で働くこと、そしてときたま、主人の家で留守を預かったり、子供に外国語の家庭教師をしたりして収入を得、そういう日々のくり返しの中に満足を見い出していた。その後、聞いたところによると、彼女は、この静かな村でちょっとした有名人になっていたのだ。村の子供たちが、週に一度、週末にこの家で開く彼女のたくみなおとぎ話しに聞き入り、この話し上手の美人のお姉さんをしたってやまなかったからだった。子供の親たちも、無償で奉仕してくれるそんな彼女のことを、心から喜び、感謝していた。ぼくはその後実際に、彼女が子供たちを、この家の自分の部屋に招き、素晴らしいお伽話を聞かせてあげるシーンに居合わせたことがある。村の子供たち十人ばかりがどこからともなくやって来て、そろそろと彼女の立っている入口の中に吸い込まれて行った。セーラは、子供たちがみんな入ると一番最後に中に入り、小じんまりしたその部屋の中で、めいめい思い思いの恰好で床の上に坐っている子供の前に来て、一緒になって坐ると、話しを始めるのだった。表情は豊かで、しゃべり口もうまく、話しが始まると、たちまちのうちに、子供たちは大人しくなり、彼女の話しにうっとり聞き入っていた。ぼくは、出来るだけ目立たないように一番後ろの壁に坐って一切を見ていたが、彼女が手ぶりをも交えてしゃべり、子供たちが男の子も女の子もまるで魔法にでもかかったように大人しく聞き入っている様子は、驚くべき、というよりは、一つの感動的な光景だった。彼女の話しにより、子供たちは、森の奥深く入り込み、そこで起こるいろんな不思議な出来事や、王子やお姫様と出会うのだった。壁にもたれながら、ぼくも思わず、彼女の語るお伽の世界の中へ引き込まれて行った。殆ど小一時間ものあいだ、ほとんどテキストも使わずに話すと、その夢のような物語も終わった。

“...それで、お終い”と、彼女が言うと、子供たちは伸びを始め、すぐセーラのそばに駆け寄り、手を引っ張ったり、スカートを引っ張ったりして言うのだった。

“ねえ、もうちょっといてよ”とか、“もっと話しをしましょうよ”とか、“ねえ、次はどんな話なの?”とか言われて、せがまれるのだった。

それに対してセーラは、
“さあ、もう帰らなくっちゃ。余り遅くなればダメよ。来週の話はまだ考えていないわ”と答えていた。

そうして、彼女の話しを惜しみ、彼女にまわりついて離れない子供たちをなんとか出口まで連れていくと、一人ひとりに優しく別れの合図をしてあげるのだった。

“じゃまたね。今度は居眠りをしちゃダメよ”とか、“風邪で休んでいる***君によろしくね。来週は必ず一緒に来るようにね”とか言って、彼女は一人ひとり家から送り出した。

そうして、まだ余韻が覚めやらず、未練がましく、来た道を去って行く子供たちに向かって、セーラは精一杯手を振り、最後の合図を送るのだった。

ぼくはずっと、ドアの陰から、そんな彼女と、子供たちの交流を見守っていた。

いつも、話しが終わるのは午後五時で、夕陽がゆっくりと西の空に傾いて行く中を、子供たちは、めいめいの我が家へと帰って行った。

この感動的な光景は、ぼくの心を揺り動かし、ぼくを、遠い子供時代に立ち戻らせたり、そして今、歴史はくり返されることを思い知らされた。かつて、ぼくたちの母親の生徒であったセーラは、今や、村の子供たちの先生なのだ...

最後の子供を送り出し、戸口のところに立って、三人連れ立って去って行くその子供たちに一生懸命、その子供たちの姿が見えなくなるまで手を振り続け、やがて森の陰に見えなくなると、彼女は力なくその手を降ろし、ほっとため息をつくとき、ようやく向きを変えて、家に戻ろうとするのだった。彼女には、子供たちが散らかした部屋の後片づけが待っていた。しかし今回は、後ろの扉の陰にぼくが立っていて、今初めて気が付いたかのように、彼女は驚いた表情をした。

ぼくは、にっこりとして彼女の前に歩み出た。

“いい場面だったね。ぼくは全部見させてもらったよ”と、ぼくは、あふれる感動をこらえ切れずに、彼女に言った。

セーラは、恥ずかしそうに目を伏せた。

“子供っていいものよ。いつ見ても”と、彼女は言った、“あの子たちを見ているとね、自分も昔に戻ったような気がして来るの。それだけでも楽しいわ。これからもずっと、これを続けて行くつもりよ...”

“本当に、ぼくもそれを感じたよ、たった今”と、ぼくは言った、“歴史は繰り返すということをね。見てごらん、いい空だ”

と言って、彼女を、再び外の世界に引き戻した。彼女は、戸口に立って、もう一度、もう誰の姿も見えなくなった、静かに広がる明るい草原を見渡した。

“昔、ママが語ってくれた日も、ちょうどあの空のようだった。青くて、明るくて、浮き浮きするような空。子供心に、それは、ぼくたちに夢をもたらせてくれた。——ところで今、お前のしていることはそのことなんだ。きっとあの子たちは今、あの頃ぼくたちが感じたのと同じことを感じて、そして家路を急いでいることだろう。それは、この世で一番素晴らしいことなんだよ...”

セーラは、ゆっくりと暮れ行く、明るい草原を眺めながら、うっとりとおぼくが話すのを聞いていた。

“本当にいい空ね、いつ見ても”と、彼女は、やがてポツリと言った、“あれを見ていると、いつも心が爽やかになるわ。それと子供たち。ともかく今、この生活で満足しているのよ。――兄さんも、早く、自分の生活というものを見い出してね”

そう言って彼女は、ぼくを見た。

ぼくは、彼女の目の奥に、人生の充実と、幸福とが宿っていることを見出した。あと、彼女に欠けているのは、彼女と一緒にいるべき婚約者だけなのだ。しかしそれも、いずれ見つかることになるだろう...

こうして、ぼくは、彼女と別れた。ほんの短い、三日間の再会の日々だったが、それはこれまでの十数年の歳月にも匹敵する、凝縮された充実の日々だった。ぼくは、再会の翌日、朝もやに包まれた彼女のアパートにも訪れた。白い塀に沿った石畳の路地を行くと、相当の年月を経たせいか、ところどころひび割れのした石造りの彼女のアパートがあった。中は暗かったが、彼女は自分の部屋で待ってくれていた。彼女の言う“おばさん”は、その部屋にはいなかった。ただベッドが置いてあり、その他、古びた品々などでその存在を匂わせるだけで、“おばさん”はいなかった。もともと体が弱いうえ、持病が再発して、目下近くの病院へ入院中だということだった。セーラの部屋には、彼女らしい品々の他に、本棚に童話の本がどっさり置かれてあるのが目を惹いた。しかし、その日は彼女に会うこと自体が目的ではなく、彼女がこれから見舞いに行くという、彼女の言う“おばさん”――パイク夫人――に、ぼくも彼女について会いに行くのが目的だった。

ぼくは、窓辺に立って、セーラが暮らしていた部屋の窓から、もやに包まれ、すっかりかすんだ裏通りの風景を眺めた。彼女は、こんな静かな村の、何んの変哲もない一角で、ぼくの目をくらし暮らしていたのだ、という思いが、そのときぼくの胸を打った。もやにかすんだ彼方の樹木からは、朝の小鳥の鳴き声が、この窓辺にも聞こえて来た。それ以外には、何んの音も聞こえない。

しかしこの日、セーラは、この部屋にいたのだ。ぼくは、しばらく目を閉じてセーラのいなかった日々を胸の中に閉じ込めると、くるりと振り向いた。すると、セーラが立っていたのだ、手に紅茶を持って。

ぼくは、この薄暗い部屋の中に立っているセーラの姿を見て、一瞬、これも幻ではないかと、自分の目を疑った。しかし、そこに立っている若い娘は、疑いもなく、セーラ自身だったのだ。彼女は、薄いピンクのカーディガンを背に羽織り、そこに立っていた。

“それでおばさんというのは具合悪いのかい？”と、ぼくは尋ねた。

“ええ、可成りね”と、セーラは、弱々しく答えた。

“お前の話しによると、昔、パイク夫人の他にももう一人少年がいた、ということだね。でも、その少年は先に死んでしまった...”

“そうよ。その墓は、こちらの村のはずれの墓地にあるわ”と、セーラは答えた。

“もう少し詳しく聞かせてくれないか”と、ぼくは言った、“どうも心に落ちないんだ。どうしてお前が、そんな少年と暮らすことになったのかがね”

そう言うと、セーラは、にっこりと微笑んだ。

“――でも、もうすっかり終わってしまったのよ”と、セーラは目をそらし、部屋の角のあらぬ方を見やって言った、“遠い昔の話し。何もかもね。話せば長いことになるわ。――でも、今は余り思い出したくないのよ。だってやっと、辛い思いから、ふっ切れたところだったのに”

そう言って、セーラは、悲しげに目を落とすと、テーブルの前に座った。

“辛いことは誰の身にもあるものよ。――でも、それを乗り越えて行かなくっちゃ”と、セーラは、坐るなり、ひとり言のようにつぶやいた、“兄さんも坐らない？ 紅茶が冷めるわよ”

ぼくも、セーラに指摘されて、椅子に腰掛けた。

“じゃ、過去のことは、おいおい聞かせてもらうことにして、今は問わないよ”と、ぼくは言った、“それで、おばさんは相当悪いのかい？”と、ぼくは再び尋ねた。

“持病の心臓が今度は相当悪そうなの”と、セーラは深刻な面持で言った、“他に腎臓にも影響が出ているということだしね。悪くすれば、今度こそ、もうもたないかも知れないわ...”

“へえー、そんなに悪いのかい？”と、ぼくは驚いて言った、“じゃその人、もうこの部屋には帰れないで、逝ってしまうかも知れないね”

辛いけどそうなるかもしれないわ”とセーラは言った、“――でも、まだ息のあるあいだ、十分に尽くしてあげて、何ひとつ思い残すことなく死ねるようにしてあげることよ。今のあたしにはそれしかできないわ。――だから毎日、見舞いには行っているのよ...”

“毎日かい？”と、ぼくは言った。

セーラの表情にやっと笑顔が戻った。

“本当はね、もっとついていてあげた方がいいんだけど、いろいろと仕事があってね”と、セーラは言った、“でも、クラレさんは理解があって、もっと見舞いに行っておあげると言ってくれるのよ。――うふん、暗い話しばかりになって御免”

そう言ってセーラは、輝かしい瞳をぼくの方に向けた。

“仕方がないさ。話題が話題なんだからね”と、ぼくは言った、“――それにしても、お前と別れてから随分年月が経った。あれは忘れもしない...”

そう言いかけると、セーラはぼくの言葉をさえ切るようにして、言った、

“あれからもう五年にもなろうとしているのね... 随分長いようで、思えば短かった。――それで、兄さんは今、ひとりで暮らしているのね”

“ああ、リサとも別れて、気儘なひとり暮らしさ。まるで浮き雲のようなね”と、ぼくは言った、“――でも、そのあいだ中、別れたお前のことを思い出さない日はなかった。お前は、どうだったんだい？”

“もちろん、兄さんらのことは気にかけていたわよ”と、セーラは言った、“でも、こっちの方の生活も大変で、なかなか会いに行くというまでには至らなかったわ。それに、家を飛び出した頃は、もうすべてから逃れたという心境だった。気がついて、兄さんらのいるアパートに行ったときは、もうもぬけの殻で、どこに行ったかも分からなかった...”

“その頃は、お爺さんの家に行っていたんだよ”と、ぼくは言った、“つまり、その頃ぼくが住ませてもらうことになった家さ”

“あのレオノール爺さんの？”と、セーラは、ちょっと心配そうな目つきで言った。

レオノール爺さんと言えば、ぼくたちの目には悪い印象しか残ってはいなかったのだ。

“レオノール爺さんの家と言っても、皆、ぼくたちがいたことのあるあの家じゃないよ”と、ぼくは言った、“そうじゃなく、リランの近くの、爺さんが晩年に買い求めた小さな家。人里離れた、湖畔近くの、なかなか素敵な一軒家さ。その頃はリサとそこに暮らしていたんだ... セーラは、きのうも言ったように、ぼくと暮らす気はないんだろう”

“今はね”とセーラは、真面目な顔つきになって言った、“今はこちらの生活があってダメよ。——でも、そのうち、兄さんの家とやりに寄せてもらうわ”

“ああ、是非来てもらいたいね。今はドシアンの近くにいるけど、そこもとってもいいところなんだ”

“ドシアン。——リランじゃないの？”と、セーラは尋ねた。

“これも話せば長い話しになるのさ”と、ぼくは言った、“その後、事情があってドシアンなのさ。リランで爺さんが死んでから半年程後にね”

“あの爺さん、死んでしまったの”と、セーラは、初めて驚きの表情を見せて言った。

ぼくはうなづいた。それから、セーラをさとすように言った、

“あの爺さんこそ、ぼくたちの本当の爺さんだったんだよ。ママはまだ知らないだろうけど”

そう言うと、セーラは二度、驚いたような顔になった。

“でもあの爺さんは、ママの本当の父さんじゃないって、ママはそう言っていたわ”

“——でも、本当の爺さんで、ママの正真正銘の父親だと言うことを、死ぬ間際に言ってくれたのさ”と、ぼくは言った、“随分複雑な話しだけどね、でも本当なんだ。ぼくも、それを聞いたときはビックリしたさ”

“もちろんそのことは、リサも知っているんでしょうね”と、セーラは言った。

ぼくはうなづいた。

“じゃ、ただママだけが知らないのね”と、セーラはしんみりと言った。

“きのうも言った通り、まだママの行方が分からないままだからね。爺さんもそれだけは知らなかった”と、ぼくは言った、“——でも、ママのおかげで遺産がころがりこんでさ、おかげで、慎ましくしてさえいれば、一生暮らして行けるだけのお金はあるんだ。もちろん本当は、それはママのもので、ママが行方不明だから、ぼくたちがもらうことになったんだけど、そのうちの一部は、セーラ、お前がもらってもいいはずのものなんだ...”

セーラは、余り突然に、次から次へと飛び出す意外な事に、目を丸くしているようだった。

“それが本当だとしても、いいのよ、お金のことは”と、セーラは言った、“わたしは今、自分の収入で何んとか暮らして行っているわ。それにおばさんの入院費だって、これまでの貯えで、何んとか人の手を借りずにやって行けそうよ。だから、お金の方は、別に心配してくれなくてもいいのよ。もちろん見ての通り、決していい暮らしぶりだとは言えないけれど、これでもわたしにとっちゃ、ここがお城みたいなものよ...”

ぼくは、にっこり笑った。

“ともかくお前はここで暮らして来た”と、ぼくは言った、“ぼくはぼくで、向うで—— そのあいだにお互い、いろんなことがあつただろう。語っても語り尽くせないほど色々だね。ぼくが今思うことは、お前に会えてよかった、とのそのひと言だよ。そしてこの知らせを、一刻も早くリサに伝えてあげなくちゃね”

“あたしもよ、兄さん”と、セーラはにっこりして言った、“あたしも、心から嬉しいわ。それにリサとも、出来るだけ早い機会に会ってもみたい...”

“リサもきっと喜ぶだろう”と、ぼくは言った、“だって、こんなにも長いあいだ会わなかったお前なんだから。リサのことは、きのう話したね。四年ほど一緒に暮らしたけれども、結局出て行ってしまったのさ。最初はドシアンの本屋に勤めていたけれど、田舎暮らしは退屈と見えて、結局は華やかな都会に出て行ってしまった。だいぶ苦労は積んでいるらしいけれど、なんとかやっ
て行っているみたいだ。ただぼくだけが、昔と変わらない、進歩のないひとり暮らしさ。——でもおかげで、本を読むことができて、心は以前よりもずっと豊かになったと思っているよ...”

セーラは黙って聞いていた。彼女は彼女で、胸の内にある自分の過去を振り返っていたのだろう。それは、近くて、もう返っては来ない昔のこと——

ぼくは、心の中にドラマを持ちたいとずっと願い続けて来たし、持ち続けても来た。そして今再び、ドラマのヒロイン——セーラに出会うことが出来たのだった。数年振りに出会った彼女は、今もなお美しかった。

しばらく彼女の部屋でお茶話しに花を咲かせた後、ぼくらはそのアパートを後にした。そして彼女の“おばさん”が入院しているというこの街随一の町立病院に向かった。

その日は一日中もやが立ち込め、冬への逆戻りを思わせるような天気だったが、どんよりした雲の下にやがてその病院が現れた。周囲は森のような木立がおおい、その中央にそびえる建物は、厳粛なふんいきを感じさせた。

パイク夫人は、長い廊下の突き当たりから二番目の病室で、他のひとりの患者と二人で、ベッドに横たわっていた。苦労ばかり背負った風に見られるその額のしわが、年齢よりも老いて見せ、長い病苦の果てのもちゃもちゃした髪の毛や、やせた体が衰弱を明白なものにし、細い腕にまつわりついた点滴の管が痛々しかった。しかし、パイク夫人の意識はまだしっかりしていた。

彼女は、セーラを喜んで迎え、その後ろに立っていたぼくを驚いた表情で見つめた。何も知らなかった彼女は、初め、ぼくのことをセーラの恋人と勘違いしたらしかった。しかし、セーラがすぐぼくのことを説明した。

パイク夫人は、それですべてを悟り、空いている方の細い手でぼくに握手を求めた。

“あなたのことはかねがね、このセーラから聞いておりました”と、パイク夫人は、弱々しい声で言った、“噂に聞いてどんな人だろうと想像しておりましたけれど、まさかその実物にお会いできるとはね... 暖かいお手だこと。本当に、セーラに似て、しっかりしたお顔をしてなさる。セーラには迷惑のかけ通しで、心から感謝しているんですよ...”

そう言って、パイク夫人は、目に涙さえ浮かべるのだった。

ぼくは、その細い、冷たい手を持ち、必死になってそれを打ち消そうと努めた。

“いいえ、あなたこそ、このセーラの恩人なんです”と、ぼくは言った、“セーラに聞きましたが、セーラが一番困っていたとき、あなたの家にやさしく迎えられたということです。その優しさは、他の何ものにも換えられない貴重な宝物のようなものなのです。だから、困ったときはお互い様でしょう...”

パイク夫人は、分かったという風にうなづいた。そして涙をためた目を閉じた。

ぼくがここにいるということは、彼女に昔を思い出させ、彼女を悲しませるだけだということが分かったので、やがて、看病のセーラだけをそこに残して、ぼくは去ることにした。きっとパイク夫人には、ぼくがいると不都合で、セーラにだけ話したい様々なことがあるだろう。それに、セーラにとって、それを聞いてあげることが、唯一の看病にもなるのだ。それで、パイク夫人に何度も感謝の言葉を言いつつ、ぼくはひとりだけ、その場を後にした。

パイク夫人とセーラのいる病室をあとにして、長い廊下を歩き、病院から出て初めて、ぼくは、セーラの生き証人をこの目で見て、セーラがこれまで暮らして来たその生活の重みというものを、胸にひしと感じた。彼女はこれまで、ぼくとは違った世界の中で、ぼくとは違った人生を歩んで来たのだ。だから、彼女をいきなり、ぼくの世界へ連れ戻すのではなく、しばらく彼女の様子を見守る他はない、とぼくは思った。長い年月は、ぼくと彼女とを別々のものに造り上げたが、しかし決して心まで引き裂いたわけではなかったのだ。今、ようやく彼女と会うことができ、ぼくは決して急ぎはしなかった。この後、いかに時間が経過しようとも、ぼくは待とう、彼女が再びぼくとの関係を取り戻し、昔のあのよう日々にはまでは至らなくとも、彼女の生活の中にぼくという存在が感じられるようになる日まで――

...こうしてぼくは、一冬の思い出深い出来事を後にして、列車の中にいた。車窓の向うには、もう一面、春の野が広がっていた。樹木に、一斉に花開いた丘や、まだ実ってない畑や、牛どもがのんびりと草を食んでいる草原などが、次々と過ぎて行く...

空は、雲一つなく澄み渡り、こういう光景は、何度見ても見飽きることがない。黙々とした遠くの森も、光を浴びてまぶしいぐらいだった。ぼくは、そうした光景のすべてに満足して、再び車内に目を向けた。すると、向かいには、セーラがいた。と思ったのは一瞬で、彼女の子供の頃のような少女が坐っていた、両親にはさまれて。この麗しい家族が、どこから来て、どこへ行こうとしているのか、ぼくは知らない。また、彼らの生活の中に、ぼくが割り込むことができないことも、知っていた。しかし、長年に渡る孤独は、ぼく自身の生活の影を薄くしていた。ぼくも生活がしたい。ひとりきりではなく、誰かと。そして、目の前に生活があると、ぼくは無性に、それが羨ましく感じられ、その一部でもいいから、かい間見たい誘惑にかられさえした。しかし、そんなことが許されないことであることも、知っていた。この感情は、すべて、ぼくが十分に生活していないところから起因していたのだ。しかし、今や、セーラとのつながりが、疑いもない事実として、存在していたのだ。この細い糸を、もう二度と切ってはならないことを、ぼくは心に誓っていた。汽車は、どんどんと、彼女のいる地から遠ざかっていた。しかし、遠ざかれば遠ざかるほど、彼女との絆が一層きつくなることを、ぼくは感じていた。この絆は、ぼくの向かいに坐っている見知らぬこの家族の絆よりも、あるいは強いかも知れないのだ。そう言えば、けさ、セーラは、ぼくを見送りに来てくれさえしてくれた。

彼女は、木陰になったプラットフォームに立って、ぼくを見つめながら、なごり惜しそうに言った、

“もう帰るの？”

“ここは、ぼくの街じゃないからね”と、ぼくは、それほど大きくない旅行カバンを脇に置いて、セーラに言った、“ここにいつまでもいて、お前の生活の邪魔をするわけには行かないさ”

“あら、邪魔じゃないわよ”とセーラは、否定した、“兄さんがいてくれて、結構楽しかったわ。一一でも、もう帰るのね”

“ああ、ぼくの家は、向うにあるからね”と、ぼくは言った、“ここにお前がいたということが分かっただけでも収穫だったさ”

“でも、向うに帰っても、兄さんはひとり暮らしなんですよ？”とセーラは、少し心配そうな顔をして、言ってくれた。

“今のところはね”と、ぼくは答えた、“一一でも、ひとりでも適当にやって行けるんだ。結構忙しい日もあったりしてね。なに、ぼくのことには心配ない。一一でもそのうち、お前にも一度来てもらいたいね、少し遠いけど”

“ええ、行くわ、そのうち必ずね”と、セーラは、やっと明るい顔に戻って言った、“兄さんから聞いたドシアンのおうちって、きっと素敵じゃない。どんなのか、見せてもらいに行くわ”

“ああ、いい家だよ”と、ぼくは答えた、“いくつも部屋があって、リサの部屋はそのままにしてあるけれど、今度は、お前用に部屋を一つ、あけておかなきゃね...”

セーラは、にっこりして、口をつぐんだまま、顔を左右に振った。

“そんなにしてもらっても、あたし、兄さんの家に住む訳には行かないわ”と、セーラは言った。
“分かってるよ”と、ぼくは言った、“ただ泊まってもらうだけでいいんだ。その日が来ることを、今から楽しみにしているよ...”

そう言うと、セーラは、愛くるしい笑顔を、ぼくに向けた。

そのときだった、駅の向うの方から、機関車が音を立てて、プラットフォームに入って来たのは。列車は、その大きな姿を見せたかと思うと、間もなく、静かにぼくたちの横に止まった。

ぼくは、旅行カバンを手を取った。

“じゃ、行くよ”と言って、ぼくは、空いている方の手で、しっかりとセーラの手を振った。しかし、それではまだ足りないのか、彼女をぼくの方に抱き寄せ、その頬にそっと口づけをした。それから、ぼくは、彼女を解放した。列車の昇降口に足をかけると、振り向いて、ぼくはセーラに手を振った。

“兄さん、元気でね”と、セーラは、その場に立ちながら言った。

ぼくは、日射しと、木の葉の影とが交互に彼女の表面で陰影を形づくっているそんなセーラを見つめながら、

“お前こそ、いつまでも元気で”と言った。

そのとき、列車が再び動き出した。セーラも、それにつられ、少し動き始めた。

“じゃ、待っているからね”と、ぼくは言った、“必ず来てよ...”

“ええ行くわ”と、セーラは、手を振りながら、答えた、“じゃ、またね”

“さようなら...”

それが別れだった。セーラの姿が、みるみる小さく、遠ざかって行った。セーラは、いつまでも、ぼくに向かって手を振り続けていた。ぼくも負けずに振り続けた。空は晴れ、よく茂った樹木の葉が風に揺れて、キラキラと光るようだったが、それを目にしたとき、もうセーラの姿は、どこにも見えなかった...

車窓からは、春の光景が流れていた。澄んだ空に浮かぶ真白な雲――さわやかな気候のせいかな、ふとうたた寝をしていたようだったが、今やぼんやりした頭の中で一つのことを考えていた。あれほど長いあいだ待ち望んでいたセーラに出会ったとは、未だに信じられないような事だった。ぼくは、そのときの感触をもう一度呼び戻そうと努め、そのことが与える意味や、併せてそれまで考えていたセーラ像のことなどを心に描いたりしていた。セーラとの出会いは、一口に言って新鮮さとの出会いだった。田舎暮らしで、読書と音楽とに明け暮れし、世間という存在が一層遠のいていたぼくにとって、セーラと出会ったということは、世間というものがまだまだ魅力ある存在であることを、ぼくに教えてくれたのだった。かつて、ぼくにあれほど苦痛を与えた世間――絶望と悲しみとをもたらした世間に対して、もはやぼくは大した関心を持ってはいなかった。

それは、ただ傍らを通り過ぎる影にしか過ぎなく、ぼくの目標とする世界とはなり得なかった。――しかし、セーラと出会ってからというもの、様相は一変した。なぜなら、その世間の中に、セーラは生きていたのだから... 初めてセーラと出会ったとき、ぼくは、ぼくの内面の中で失われかけていた春のさわやかさのようなものを感じた。世間に対する無感動と冷たさが一遍に吹き飛んで、世間にまだ、このような魅力的なものが存在していたのかという思いで、胸が一杯になった。それは長い迷路のような暗い人生の果てに、春の光を浴びて咲いている野の花を見つけたときの驚きに似ていた。セーラと子供たち、クラレ氏、パイク夫人、その他彼女を取り巻く人々に囲まれて生活しているセーラがいるという、その世間が、突然、一挙に、それまで、あいまいで、真暗だったぼくの目の前に立ち現れた。それまで、世間はただ通り過ぎて行くものと考えていたのに、この世間だけは、がちりとぼくの心をつかんで離さなかった。いや、向うがこのぼくを離さなかったのではなく、ぼくがその世間を見、もはや目を離せられなくなってしまったのだ。なぜなら、その世間の中心に、あのセーラがいたのだから... 彼女は、もうぼくの内面の中では忘れかけていた、生き生きとした新鮮さでもって、世間の人々のあいだを立ち回っていた。彼女の笑顔や笑い、そして悲しい表情まで含めてそのすべての姿が、ぼくの心をすっかりとりこにしてしまった。ぼくは、彼女が他人と語っている表情や、後ろ姿を見ていたとき、一種の恋のような感情が心の中に芽生えるのを感じていた。彼女はもはや、単に再会しただけのぼくの妹ではなく、ぼくの胸に恋心すら感じさせる不思議な魅力を持った娘として、ぼくの前に登場したのだった。その魅力の源には、彼女の一段と成長した女らしさや、生きようと意志する生命力、とりわけ、エネルギッシュな毎日の生活に象徴される彼女のフレッシュな生命力が存在していたのだと気づくまで、そう長い日数を要しはしなかった。彼女の頭脳の明せきさや、快い語り口のさわやかさに、ぼくはますます心を魅かれて行った。それこそは、ぼくがそれまで頭に描いていた幾つかの断片的な彼女の像、時間の停止した世界とは全然別の、生きた日常生活の中における彼女の発見、という驚きでもあった。毎日の活気づいた生活、生き生きとした彼女の動き、それらすべてがぼくの目を奪い、ぼくに、新たな生活の興奮をもたらしたのだった。ぼくは、短い期間ではあったが、彼女と一緒にめまぐるしい日々を送った。そして、ある驚きを発見したのだった。ぼくにはとても出来ないことだが、いかにうまく、世間を立ち回り、豊かな、地位のある人々とも交際して行っているそんな彼女の姿だった。彼女は、それをごく自然に、しかし、毎日の努力の積み重ねの中で行っていた。そんな彼女を、男なら、恐らく見逃しはしていなかっただろう。しかし、彼女の付き合っていた男は、ぼくの知る限り、不思議と成熟した男ばかりで、若い男の匂いをかぎつけることはできなかった。恐らく彼女は、それら経験を積んだ男から様々な知恵を授かることに歓びを見出し、自分自身はまだ未熟な存在であることを自覚しているのだろう。そのせいか、彼女の人生は潤ってはいるようだったが、結婚話しは一つとして聞いたことはなかった。セーラは、結婚のことはまだ考えてはいなかったのだ。――そんな、日常生活の渦中であつたセーラを見い出して、しかもそのセーラがまだ独身であることを知って、ぼくは恋のような感情が胸の中にほとばしるのを感じた。

恐らくぼくひとりだけではなく、男なら誰もが、彼女を見ればそう感じることだろう。そして、もしぼくが全く初めて彼女を知ったのだとしたなら、あるいは結婚を申し込んだかも知れなかった。答えがノーと出ようとも、男なら、彼女を見逃すはずはない。幸か不幸か、あいにくぼくは、彼女の兄だった。だから彼女は、兄のようにぼくに接してくれ、特別な感情を抱くということもなかった。――だが反対に、ぼくは彼女を妹だとは見なかった。彼女を、一人の魅力ある娘と見、彼女といる間、彼女をまるで恋人のように感じていたかったのだ...

...しかし、そうした追想も次第に一抹の夢のようになって行ってしまった。彼女は、向うの街の、ぼくが夢想だにしなかった所で、生活を送っている。それはまるで、長い夢想の果てに、急にパッと霧が晴れて、驚くべき生活世界が目の前に開かれたような強烈な印象で、今再び、その生活世界は、霧の幕に閉ざされようとしていた。セーラがそこで生活していた、明るく日ざしに注がれたあの街は、今再び、ぼくの目の前から、さらにぼくの記憶からさえも、追憶の奥に消え去ろうとしていた。そして、汽車の中で、一種の虚脱状態に陥り、一体あの街は、そしてそこにセーラが本当にいたのだろうか、と自問した。ぼくにとって、彼女との出会いは、何を意味したのだろうか？ それは、もはや一抹の夢、単なる追想に過ぎなくなってしまったのだろうか？ ぼくは、彼女と別れて、今再び、孤独な旅立ちをしていることに気が付いた。もはや誰も追いかけては来ない。ただ一人の長くて、暗い、孤独な旅――そう思うと、彼女といた日々が、むしろように楽しかった出来事として、なつかしく思い出されてくるのだった。それは、本当に夢のような出来事――まるで宮殿でお姫様に出会ったどこかの王子様の物語のように、現実離れしたお伽話のようにさえ、今となっては思われてくるのだった。そして、彼女と初めて出会ったあの石造りの館は、彼女のお城で、彼女の本当の住まいの古ぼけたアパートは、彼女の離宮、彼女と一緒に歩いた田舎の小道は、おごりの道、という風にぼくの追想の中では組み立てられ、その中でぼくは彼女と恋を語り合ったのだった。そのような夢物語も、彼女が住まいとしていた彼女の王国と共に、別れを告げなければならなかった。ぼくの脳裏に残された追想は、余りにも甘く、余りにも歓喜に満ちていたので、たったひとりそこを去るはめになった今、ぼくは悲しかった。そのような人生の諸々の歓びに別れを告げて、ひとりになった今、ぼくは、なぜかしら悲しかった。――これから先、また何が待っているというのだろうか？ これまで味わったあの歓びをさし置いて、どんな歓びが待っているというのだろうか？ それを思うと、ひからびた、空白の未来を前にして、まるでめまいにも似た絶望的な暗い気持になるのだった...

――光は、もはや射し込まないのだろうか？ そんなことはない。たとい、どんなに暗い、奈落の底に落ちて行こうとも、ぼくは生きている。生きている限り、また何かがあるし、起こるはずなのだ...

ぼくは、ひとりきりになり、色んなことを思い起こそうとした。人生は流れて行く。たとえ、どんなにゆっくりであろうとも、それは大河となり、やがて海へと合流して行くのだ。あの広い、大きな海——それは再び雲となり、静かな山あいの村に雨となって降り注がれることになるだろう。ところで、これからの行く先も分からないぼくの人生の流れは、今、どこにいるのだろうか？ あの冬枯れの木立のある川岸をゆっくりと流れているのだろうか？ ともかくぼくは、自分の流れの過去を振り返った。雪解けの、岩にほとぼしる清流でもあった自分の過去を——流れは、様々な人間模様を目にし、自分でも多くの経験を積んで来た。笑いや、歓びや、怒りや、悲しみを経験して来た。ところが今や、ぼくの流れは、無表情であり、無感動なのだ。もし、今のぼくの流れを人が見い出すとすれば、きっと驚くだろう。その無表情な流れの過去に、どんな様々な経験と波乱とが隠されていたかを、その人が知れば——

...旅の帰りの汽車の旅は、寂しく、孤独で、胸が痛いほどだった。

しかし、今回の旅は、少なくとも大きな収穫があったのだし、今や、この地球上の二つの地点に、リサとセーラが確実にいる、ということが分かり、大いなる安堵感が伴っていたことも事実だった。そうして、ほぼ半日がかりの長い汽車の旅を終え久し振りの我が街へ、そして我が家へと、ぼくは帰って来た。数ヶ月振りに見えて来た我が家は、出て行ったときの印象と異なったその変貌ぶりに驚かされると同時に、近寄ってよくよく見れば、雑草がよく生えて廃屋のような印象を与えている他は、以前と何ひとつ変わっていないことに気づくのだった。ぼくは、なつかしくも、孤独な思いにかられながら庭に入って家の様子をつくづくと眺め入った。それから、異常がないか、家の周囲をひと通り見回った後、家の中に入る決心をした。そして、ドアに行きかけたとき、ふと、玄関のそばの庭先に、風に揺られながら、可憐な紅いバラの花が咲いているのが、ぼくの目に止まった。それは、旅から帰って来たばかりの疲れたぼくの心を突き刺し、やがて、思いもよらない文句が、ふと口を突っついて出て来ることになったのだった。ぼくは、その紅い花を目にして、たちまちのうちに、一つの詩をつくることになってしまったのだ。

旅から帰って来て 虚しい思いに捕らわれているとき

ふと見つけた 咲き匂う紅い花——

それは 風に揺られながら このぼくの帰りを待っていてくれたのだ

誰の目にも止まらずに 我が家の庭で ひっそりと咲きながら...

その花の無言の表情は 風に揺らめきながら

人生の虚しく 悲しい思いを癒してくれた

それはお前 風香る五月の空に 光輝く小さきお前 宝石のような花よ...

ぼくは 風に揺らめくお前の顔の中に 微笑みがこぼれ落ちるのを見る思いがした

この五月の朝に どこからともなく 爽やかな歓びのうねりが伝わってくる...

お前にも お前の短い一生に 辛くて 悲しいことがあったはずなのだ

そのことはよく分かる

それなのに 五月の光の中で 精一杯輝き続ける けなげなお前...

それが偽らざるぼくの心境だった。ぼくは、その花の靈感の中に、以上のような詩の内容を認めた後、ドアをあけて、真暗な我が家へと入って行った...

言うまでもないことだが、そこでは一切が、旅立つ前の昔のままだった。テーブルも椅子も、掛け時計も、ベッドも、書齋に置かれた本も、昔のままに時を刻んでいた。それらすべてのものを目にして、ぼくは、ほっとした、というよりも、何かしら空しい気持がした。

結局、ひとりきりの自分なら、宿なしで十分なのだ。何ひとつ待たず、気楽な身分で、それこそ全世界を渡り歩けばいい。定住の自分の家を持つなど、空しいことだ...

しかし、それが唯一、自分の家と言えるものだった。そこには、自分のものばかりではなく、リサの持ち物（置き去りにして行った物）や根跡、あるいはセーレンの思い出、までもが残っていた。おいそれと手離せる代物でもなかったのだ。そればかりか、やはり自分が落ち着ける唯一の場所と言うべきものでもあつただろう。空しく、孤独ではあつたが、それは、ぼくに必要なものであつた。

ぼくは服を着換えた後、書齋に行って、窓をあけ放した。何ヶ月も忘れていたさわやかな風と匂いとが部屋の中に入って来、ぼくは、以前の生活に戻ったことを確認した。窓の外は、以前と変わらぬ光景――そして空は明るく、雲が漂っていた。ぼくは、ざっと外を眺めた後、ゆっくりと書棚に歩み寄った。そこには、自分が興味を抱き、所かまわず買って来た本が、整然と並んでいた。ぼくは、そのひとつを手にとると同時に、ふと目は、ステレオの上に置かれた一枚のレコードに注がれた。そうだ、久し振りに音楽を聞こう。かくて、手に取った一冊の本の上に重なるように、ある快い音楽が、部屋中に響き渡るようになった。

その一冊の本とは、十九世紀の若き数学の天才が、ただ一度の女の迷いの為に決闘で命を落とす物語を描いた、「神々のめでし人々」であり、流れて来た音楽は、「リュートの為の古風な舞曲とアリア」（レスピーギ作）であった。ぼくは、それらを、自分の書斎で、目と耳にして、しばらくのあいだ、我れに返る思いがした。

夕陽が、最後の蝋燭の灯のように、茜色の雲の彼方へと消えて行った後、ただひとりだけの孤独な夜が、この家の部屋の中にも迫って来た。ぼくは、部屋のソファに坐ったまま、明かりもともさず、ただ自然に暮れ行くまま、夜空に一番星、そして二番星とシルエットとなった森の上に輝き始めるのを、窓辺から眺めていた。心地良い、冷たい風が、窓辺から、この部屋の中に吹きつける。

ぼくは、庭の片隅で、最後の明かりを頼りに、揺らいで見える白い花や、その他、無言の自然を前にして、ただぼんやりとした思いに捕らわれていた。

なんとはなしに流れて行く自分の過去——そして、この時間——

もう、あいまいとして、明確ではないが、自分には自分の過去があったはずなのだ。恐らく、人には決して言うことのない、自分ひとりだけの、しかも感嘆すべき過去が——それは、ぼくの夢の世界と結びついていて。夢は、なんと神秘的な光景や、世界をくり広げてくれたことだろう！それは、この世に決して存在しないがゆえに、ぼくにとって、この上なく貴重な体験だった。この世に存在するすべてのものは、結局、このぼくに苦しみしかもたらさなかったのだ。たとえば、そこに可憐な一輪の花があるとす——しかし、それはもう、ぼくの手から離れ、誰かの花であって、ぼくのものではなかった。ぼくはいつも、この苦しみをなめて、世の中を生きて来た。だから、ぼくだけしか所有することのできない世界、即ち、この世に決して存在することのない世界を求めて、ぼくは生きて来た。それが存在しない限り、その幻の宝庫は、誰の手からも逃れて、ぼくのものとなるであろう。夢は、それだけで、ぼくにとって、大きな驚きだった。その神秘や、驚きや、魅力に抗するものは何もなく、貧しい少年時代、ためらうことなく、その夢の世界にのめり込んで行った... リサとセーラ。この二人の妹には、大きな迷惑をかけた。しかし、この可愛い二人の妹も、いずれは、ぼくの手から離れることを、そのときから既に知っていたのだ...

今、二人の妹が、別々の世界に、あそこあそこに住んでいることを、ぼくは知っている。リサに姉のことを話すと、驚き、なおかつ、そんなセーラに会いたがっていた。セーラは、今頃、村の子供たちを集めて、アンデルセンの童話や、その他のお伽話を話して聞かせていることだろう。子供たちは、ただランプの光だけのその薄暗い雰囲気にも吞まれ、その光に、かすかに浮かび上がった彼女の顔と、その抑揚のついた声に、すっかり、お伽の国の神秘的な世界にのめり込まされていることだろう。それは、本当に、子供のときだけに味わえる幸福なのだ。一生涯にもう

二度と来ることのない、貴重なひとときなのだ。

そういう子供の胸に、貴重な印象を植えつけるお姉さん役のセーラもまた、幸福者と言えるだろう。小さな、三十人ぐらいしか入らない、飾り気のない部屋に、子供たちとだけのひとときを過ごし、しかも、みんなから、“お伽話の姉さん”とか、“魔法使いの姉さん”とか言われて、慕われているセーラは、幸福者だ。彼女は、彼女の世界を、着実に、実現して行っている。

しかし、ぼくがけさ見た夢は、実に、むごたらしい夢だった。その大筋についてはほとんど忘れてしまったが、深い、澄んだ池に落ちた小さな生き物を拾おうと、ぼくは危険な岩場に近づき、まだ浅い岩のすき間に引っかかっているその生物——蝶々のようでもあったが、なんだかは忘れた——に、手を差し伸べた。しかし、ぼくの体は、なかなか思うようには曲がらない。しかも、手の先がようやく水面に達したとき、水面下の浅い岩のすき間にいたその生物は、さらに深みへとすい込まれて行き、永遠に、ぼくの手から離れて行ったのだった... 水は透明で、深い底へ落ち込んで行く様は、この目ではっきりと追うことができたのに、それに対して、もうどうすることもできなかった。

以上のことは、何を意味していたのだろうか？ 普通なら黙って見過ごしてしまうようなつまらない夢の中にも、大きな意味が隠されているように、ぼくには思われる。目の前に広がる大きな宇宙と、ぼくの頭の中に閉じ込められた意識下の小っぼけな宇宙と。この二つのあいだには、一見、なんのつながりもないように見えるが、実際は、なんらかの形で作用し合っているのかも知れない。それは、人生に対する不安——ぼくの不安を現しているに違いないのだ。

この暗い夜空の下で、ぼくは見る——ぼくの、まだ幼かった日々のことを。

そんな日々があり、ぼくは二階の自分の部屋で、夜が更けるのも知らず、絵を画いたり、ブリキの飛行機を作ったりしていたものなのだ。

ママがこっそりと二階に上がって来て、まだこうこうと明かりのともったぼくの部屋のドアをあけたものだ。

“何をしているの？ もう十時よ。いい加減に寝なきゃ”

と彼女は言った。

“でも、暑くて、寝られやしない”と、ぼくは、ママの方には向かずに答えた、“それより、起きて、こうしている方がいいんだ”

“ブリキを切ったりして、それ、何んのつもり？”

と、ママは、今度は、ぼくの製作に興味を示して言うのだった。

“飛行機だよ。これに人形を乗せるんだ”

“でも、重くて飛ばないでしょ？”と、ママは言った。

“飛ばばいいんだけどね”と、ぼくは、ひとり言のように言った、“そのうち、飛べるような飛行機も作ってみるさ。——でも、今は、これで我慢だね。パパはもう寝たの？”

“ううん。書齋にまだいるわ”と、ママは答えた、“お仕事が忙しくってね。――でも、二階であんたが時々大きな音をたてるから、見て来いって...”

“ぼくなら、問題ないさ”と、ぼくは答えた、“いずれにせよ、もう終わろうと思っていたもの。あしたは、これを折り曲げて、ハンダ付けをして、色を塗れば、それで完成さ。あれに、リサの人形を乗せてあげるんだ。そして、目を閉じれば、あれは空中に飛び上がり、窓の外へ飛び出してしまう...”

“想像力豊かな子ね、あんたって”と、それを聞いて、ママは言った、“――でも、本当にもう遅いのよ。そろそろ寝なきゃ”

ぼくがピーターパンの映画(=アニメ)を見たのが、その頃だったかどうかは、もう忘れてしまった。しかし、父に連れられて行ったその映画が、子供の夢――即ち、大空を自由に飛べる、という夢を、大きくはぐくんでくれたことは確かなことだった。それまで、地上の祭などにしか行かなかったぼくの目が、初めて、あの暗い大空に、いぶし銀がばらまかれたような天の川や、その他の星々の方向に向けられ、そのスケールの大きさに胸がワクワクして来るのだった。ぼくも、ティンカーベルのような妖精が欲しい。もしそうなれば、あの魔法の粉のひと振り、窓から自由に町の上空を往き来することが出来るだろう。多分、ブリキの飛行機は、その幼な心の延長線上にあったことなのだ。

“でも、窓をあければ虫が入って来るし、暑苦しくて、寝れないんだよ”と、ぼくは、すぐさま寝させようとするママに抵抗すべく、訴えた。

“部屋の明かりを消せば大丈夫よ”と、ママは優しく言った、“隣の部屋じゃ、セーラやリサがもう寝てるじゃないの。さあ、早くベッドに入って”

“分かったよ。寝るよ”と、ぼくは言った、“でも、寝る前に、マッサージをして。体が、暑さで参っているんだ。体がだるくて、このままじゃ、寝られやしない...”

ママは、ぼくの甘えた言い種に、初め驚いたようだったが、すぐ思い直したようだった。

“いいわ。ちょっとだけよ。その代わりすぐ寝るのよ”

ぼくがベッドの上に横になると、ママは、明かりを消し、窓の外から差し込む星明かりを頼りに、ぼくの腕や足を、優しくさすってくれたのだった。

それは、非常に心地よい、筋肉のほぐれだった。明かりを消したせいもあって、真夏の暑さも、しばし忘れさせてくれた。

ぼくは、うつ伏せになり、ママの柔かい手のマッサージを感じながら、暗い窓の外の星空を眺めた。

“ねえ、あしたになれば、飛行機をもう一機作るよ。もう、二、三機作らなくっちゃね。そうでないと、空中戦ができやしない。それから、ロケットも作る気なんだ”と、ぼくは言った、“もう設計図はできている。円筒形の先っちょが少し難しいけどね。――でも、三段ロケットで、できるものなら、本当に飛ばしてみたいな”

ぼくが急に、能弁になりかけると、ママはたしなめるのだった。

“シレール、黙って寝なさい。パパも、いつまでも待っててくれないのよ”

そう言ってママは、真暗なぼくの部屋の中で、ベッドに腰掛け、ぼくの手足をもみ続けてくれるのだった...

人生も、様々に経験を積み、年を重ねると、感動というあの原初的な喜びも、段々と薄らいでいくものなのだ。しかし、その脅威から身を守る為には、孤独が一番だ。世間から身を引き、ひとりきりになると、再び感動が身をもたげて来る。それまで忘れていた様々な人々の事や、その他の事が次々と頭に浮かんで来る。今、ぼくが一番心配なのは、こういう状態がいつまで続くか、という問題なのだ。ぼくから、この“感動”というものを取れば、後に何が残るだろう？ このさき、四十、五十、六十になっても、感動を失うことなく、生き続けられるのだろうか？ もし、それを失い、ただの人間となったぼくは、そのとき、どのようにして生きて行くのだろうか？

実際の話し、そのようなときの来るのが怖い。世の中に――自分の心の内にさえ――いかなる感動すべきものも見い出せず、ただ惰性に流されて生きるしか方途のない、そのような人生を生きて行くことに、ぼくは耐えられるだろうか？ ぼくが今、一番恐れているのは、そのような人生なのだ。しかしまた、それだからこそ思う、今、この若いうちに、感動というものを、大切にしておくことなのだ。

ぼくがいつも感動を汲む源泉、それは、昼なら、空に沸き上がる雲、そして夜ならば、夜空に瞬く星座の群れ、だった。この二つのものが、いつも、ぼくを自然に近いものとし、世間のしがらみにどっぷりとつかることから、ぼくを遠ざけてくれた。それは、いつ、どんなところでも、手軽に手に入れることのできる自然だったのだ。それらは、人間の源は自然であることを、いつもぼくに教えてくれた。そして、この自然への讃歌は、ときに、ぼくに二つの傾向へと走らせた。ひとつは、科学への探究心であり、今ひとつは、言うまでもなく、自然に対する芸術的な感動、だった。今では、この科学と芸術という二つの異なった分野は、自然という同じ源泉の異った側面という風に、ぼくは解している。芸術家は、科学する心を夢見るであろうし、科学者は、芸術家の心を愛するだろう。――ぼくは、幼い頃、この二つのうち、いずれかになりたいと思った。しかし、そのいずれにもなれず、こうして今、孤独で、ひっそりと暮らしているのだ...

どうしたのだろうか？ ぼくはもう、人生への冒険をあきらめたのだろうか？ 何もせずに暮らす日々。いや、ぼくは再び、リサに会いに行くだろう。そして、セーラのことを話し、もう一度、みんなでやり直すことについて、語るだろう。それぞれの心は、長い歳月のうちに、遙か遠いところへと離れてしまっているが、決して不可能なことではない。みんなの意見を聞き、ぼくの夢について語るのだ...

...ただいたずらに、静かな日々が過ぎて行く。青い空にゆったりと浮かぶ雲。もう、今年も夏も終わりだな。これを書き始めて、一年というサイクル、ぼくの人生に大した変化は起こらなかった。ほとんど何も、何ひとつ――セーラーの消息が分かったというただひとつのことを除いては。ぼくは、この夏を余り有意義には過ごさなかった。ただ、読書と音楽とT. V. と、ごくたまに行く散歩だけの日課をこなして来ただけで――しかし、このあいだにも、目が回るほど忙しくて、息が詰まるほど楽しかったそんな夏を過ごした人々もいたはずなのだ。リサは、この夏を涼しい森のロッジで友だちと過ごしたことを、手紙に書いてよこして来た。山岳から流れて来る小川の清流で水浴びをしたり、魚を釣ったり、プールに入ったりの楽しい毎日が、その手紙のはしばしからにじみでていた。バーベキューを食ったり、近くの森へ探検に出掛けたり、まるで童心に戻ったような毎日で、とっても楽しいという内容だった。そして最後に、兄さんはこの夏をいかがお過ごしですか？ という文章で締めくくっていた。――しかしぼくは、この夏をどこにも出かけてはいない。昔からある自分のこの家の近辺を、ただうろついていただけだ。いつも家の中にいるのでは気が滅入ってしまうので、気分転換をはかる為にも、近くの野原に茂っている大きな樹木の木陰で、ただひとり、寝そべるようにして読書をしたり、小川に足を浸したり、それから数度、海にも出かけた。自転車で、半日がかりの行程で、疲れたが行ってみるだけの価値はあった。ほとんど無人の、と言っていいぐらいの波打ち際に降り立ってみれば、頭上にはたくさんセグロカモメや、ウミネコなどが空を舞っていた。ぼくは、砂浜に打ち寄せられた貝殻などを見ながら、心と海の方に目を向けた。真夏の太陽の照りつける海は、キラキラと光って、淡く、広がり過ぎて、ぼくの身も心も呑み込んでしまいそうな気持になった。ごつごつした岩や崖がすぐそばまで追っていて、白い砂浜がまぶしかった。こんなに景色が良くて、気分が爽快なところなのに、人の姿はほとんど見られなかった。だから、崖の上に残して来た自転車のことも、余り気にならなかった。ぼくはただ、真夏の海を前にして、我を忘れ、波の打ち寄せる音、カモメの鳴く声などに耳を傾け、目の前に広がる大海原に、じっと見とれているだけだった...

そんなとき、ぼくは岩陰などに身を休めて、いろいろなことを空想したり、またいつのまにか眠っていて、夢を見たりしたものだ。ぼくが空想したこと、それは、この真夏の孤独の海を前にして、人々の様々な生活のことを頭に描くということだった。世界中の、色んな人の色んな生活が、頭に浮かんで来ては、消えて行った。空想の夢は広がり、それは、現代の、とは限らなかった。そしてまた、地球上の、とすら限らなかった。そのように、宇宙上の、様々な生物の、過去、現代、未来に渡る様々な生活を思い描いた後に、やがて立ち現れて来たのが、ぼくたちの、生活だった。小っぽけで、孤独の影を背負い、心もとない、ぼくたちの、それぞれの生活だった。毎日が忙しければ、こんなことは決して考えないのに、どうしてぼくはすぐ考えてしまうのだろうか？ 自分は何もしないくせに、人の生活をすぐ羨んでしまう、なんてことを――確かに、いい暮らしや、いい生活は、この地球上にすら、いくらでもあるに違いない。しかし、ぼくは、ここで、このように海を眺めながら暮らすしか、他に方法はないのだ...

ぼくは波打ち際で眠っていた。すると、いつのまにか、夢が現実となり、砂浜に、リサが立ち現れたのだ。

“どうしてここへ？”と、驚いてぼくが、彼女を見上げて言うと、

“兄さんのことが、少し心配だったからよ”と、彼女は、にっこりした笑顔で、ぼくに答えてくれた。

“さあ、いつまでもここにいないで”と、続いてリサは言った、“いつか言っていたレストラン、あれがこの近くにあるのよ。そこで、昼食を一緒にしない？”

“でも、乗り物が...”と、ぼくは、ひとりで、自転車に乗って来たことを思い出して言った。

すると、リサは意地悪く笑った。

“そんなこと、心配するに及ばないわ。ここまで、ちゃんと車に乗ってやって来たんだから...”

“へえ〜”と驚き、リサの後を付いて行くと、崖の上の道に置いてあったのは、真赤なオープンカーだった。

リサはいつのまに、こんなに金持になったんだろうと、ぼくには不思議でならなかった。

リサは、ぼくを助手席へ案内すると、自ら運転をした。涼しい浜風が、顔面いっぱい吹き付けた。大海原は、どこまでも広くてすがすがしかった。

やがて、ぼくらは、海が良く見えるホテルのレストランの中で、向き合ってテーブルを囲むようにして、坐っていた。

何百羽ものカモメが、海の上を、ゆったりと飛翔していた。

“それで、どうなの？”と、リサは尋ねた。

“何が？”と、ぼくは答えた。

“最近、どうしているかって、いうことよ”と、リサは、じれったそうに言った。

“ああ、そういうこと”と、ぼくは言った、“この春、セーラに会って、それ以来は、相変わらずさ。庭の手入れをしたり、本を読んだり、時には街に出掛けたり、そして、今日のように、わざわざ海にやって来たりしてさ...”

“ねえ、言ってたこのレストラン、気に入った？”

“うん、雰囲気は気に入った”と、ぼくは、大きな窓ガラスから入る光以外は、明かりを押しえた感じの薄暗い室内を眺めながら、言った、“でも、問題は、味というところだね...”

“味も大丈夫よ。まあ、見ていらっしゃい”と、リサは自信ありげに言った、“車えびのゆがいたのやら、貝のフライや、その他、色んなのが出て来るわ。それに、ここのソースが特別なのよ...”

“まあ、それは来てのお楽しみというところだね”と、ぼくは、にっこりして言った、“ところで、話しは現実的になるけど、これは、お前のおごりなの？ それとも、ぼくのおごりなの？”

“もちろん、あたしのおごりよ”と、リサはにっこりして答えた、“あたしが招待したんだから、今回は、あたしがおごらせてもらうわ”

“それにしてもさ”と、ぼくは言った、“どうもふに落ちないのは、どうして最近、お前は、そんなに羽振りがよくなったんだい？ あの車、一台だけでも、数万※※はするぜ”

リサは、にこっとするだけで、すぐには答えようとはしなかった。

“白状すると、あれは、あたしのじゃないのよ”と、リサはやがて、答えた、“あたしの男友達のを借りて来ただけ。考えても見なさい、あたしにあんなの、買えるわけ、ないじゃないの”

“そう言や、そうだ”と言って、ぼくたちは互いに笑い合った。

“こうしているの、楽しい？”と、しばらくしてから、リサは言った。

“うん、楽しい”と、ぼくは、リサを見つめながら、言った、“窓の外には海と、そして、内にはお前——まるで、時の経つのも忘れてしまいそうだ...”

“あたしもそう”と、リサは言った。しかし、どこか悲しそうだった、“あたしも、いつまでもこうしていたい。——でも、忘れるわけには行かないのね、都会の生活のことが。いずれ、帰らねばならないわ...”

“せっかく楽しい思いをしているのに、もう帰らなきゃならないの？”とぼくは言った、“まるで、お前は、海から来た人魚さ。そう言えば、お前は、ぼくが海辺で眠っているとき、突然現れたんだ。どこからやって来たとも告げなかった。それでもう、海の向こうの故郷が恋しい、というわけなのさ...”

“あるいは、そうなのかも知れない...”と、リサは、しんみりと答えた、“でも、本当、これだけは信じて。今日は、楽しかったわ。この夏、最高の思い出よ。いろいろと忙しくて、兄さんに会える日がなかったんだけど、会えて、本当に幸せよ。さあ、そろそろもう行かなくっちゃ”

まだ、最後のコーヒが残っているというのに、そう言うなり、リサはテーブルから立ち上がった。

ぼくは、あっけにとられて、そんな彼女を見つめた。リサはそのまま、会計に行くと、ぼくの方を指さして、二人分だと分かるように支払いを済まし、玄関から出て行った。出て行き様、振り向き、

“じゃ、ゆっくりね”と言ったのが、最後の言葉だった。

ぼくがあわてて彼女の後を追い、ホテルの外に出たときには、彼女の真赤な車は、砂ぼこりを立てて、炎天下の海岸ハイウェイの彼方に去って行くところだった...

うつら、うつらとしているぼくの耳に、波のざーざーと打ち寄せる音と、背黒カモメのうるさい鳴き声が入って来た。今の出来事が夢だと分かるまでしばらく時間がかかった。海岸は、相変わらずの真昼で、向こうの浜には、さっきまでなかった親子連れの姿が小さく見えていた。

ぼくは、まぶしそうに、青い空を見上げ、それから、茫漠とした海を眺めた。海は、何も語らなかったが、あるいは、ぼくが寝てる間に、本当に人魚をよこしたのかも知れない。そして、その人魚が、リサとなって、ぼくの夢の中に現れたのだ。そう思うと、海は、謎に満ち、神秘的で、美しくすら、感じられて来るのだった...

しかし、そのことがあって以来、人魚はともかく、ぼくは、本当のリサに会いたい、という思いが一段と強くなって来た。また、リサに会いに行こう。そして、今度は、しばらく滞在して、都会というものをもう一度、しっかりと見極めるのだ...

夜のプール。静かなプールを、ぼくはよく夢に見た。あたりは全部寝静まっているというのに、その建物の窓だけが、明々と明かりがともっているのだ。周りは静かな草地で、空には月が輝いている。しかし、その建物の内部だけは、明るくて、若い人々の活気に満ちている。五十メートルプールもあれば、ガラス張りの三メートル（深さ）プールもあり、なおかつ、小さなホールもあって、そこでは絶えず何んらかのショーが行われて、全体に賑いだ雰囲気だ。そしてぼくは、そんな雰囲気がとても好きだった。――そして、夢から醒めるたびに、あの一大レジャーセンターはどこへ行ってしまったのだろうと、惜しい気持ちにさせられたものだ。まるでそこだけが、このめまぐるしい地球からかけ離れた別天地のようであり、ぼくの心のオアシスのような気さえさせてくれたのだ...

しかし、夢は、それだけに限らず、すべてが神秘的な雰囲気に満ちていて、ぼくの心をずっと、魅惑し続けて来たのだった。それをすべて記述し続ければ、それだけでも、数巻の書物に匹敵する内容となるだろう。しかし今は、そんな暇もないし、根気もない。ただぼくは、自分の夢と無縁でなく生活を続けて来た――そのことが言いたかっただけなのだ。夢は、今も、ぼくの生活の一部であり、もし、死後の世界というものも許されるとするのなら、夢こそは、死後に、ぼくが行きたい世界だと言うことができるだろう...

夜、ぼくは、窓辺のソファに腰を降ろし、物思いに耽る。

色んなことがあったぼくの過去。書物の知恵。音楽や映画の楽しみ。しかし、それらは、次第に、ぼくから遠ざかり、ほとんど何もない現在のぼくだけが、ここにいることに気づく。ぼくは、これまでの数十年というもの、一体、何を身につけて来たのだろうか？ ほとんど何も、なにひとつ。昔、ぼくは何も身につけていなかったが、今も、当時と同じように、何も身につけていないことに気が付く。昔と同じように、現在の自分があるだけだ。ぼくが、他人に誇れるものって、何があるだろう？ それは、ぼくがいつまでも、過去と同時的で、進歩や成長や、要するに、あのうさんくさい大人になることを、執ように拒否しているという、この一点に尽きるだろう。しかしそれは、誇るべきことではなく、むしろ逆に、自分の無能力さ加減の証明にしか過ぎないのかも知れない。しかし、それでもいいのだ、ぼくはぼく。自分にしかねれないのだ...

過去を見ないで、未来を見よ、とよく人は言う。しかし、ぼくの目はすぐ、過去に向いてしまう。それは、自分に未来がないからなのだろうか？

ぼくは、この静かな夜、窓の外を見る。あたり一帯は、闇に閉ざされ、孤独の静けさだけが、ひしひしと感じられる。人は、本能的に賑やかさを好むとするなら、ぼくのこの環境は、それとは正反対のものだ。ぼくは、孤独の中で生きる。精神の死滅寸前のところで、生きる。そのときこそ、それまで見えなかった裸形の世界が、闇の地平の彼方から、段々と姿を現して来るのだ。

ぼくは、リサと車に乗って、見知らぬ国の無限に続く夜のハイウェイを、たくさんの敵に追われる夢を見た。ぼくの車の前は、ヘッドライトに照らされる視野の他は、全くの闇。そして、バックミラーに映る光景は、この車を追いかけて走って来る、たくさんの懐中電灯のようなヘッドライトの明かり。この車と、追う車とのスピードに差はなく、縮まるということもなければ、広がるということもなく、ほぼ数百メートルの一定の差を保つだけだった。道はカーブとなり、しばらく、追いかけて来る車の群れの姿が、バックミラーから消え歓んだのも束の間、直線コースになると、再びあの距離を保ったままのあの車の群れが、バックミラーに映り出すのだった。助手席のリサは、ときどき恐怖のまなざしで振り向き、ぼくの車を追って、闇に浮かぶたくさんのヘッドライトの明かりの恐怖について、語るのだった。そのようにして、延々と、どこまで続くかも知れない、闇のハイウェイのレースは続くのだった。

ぼくは、目が覚めてから、この恐怖のレースがどのような展開になるのか、もっとその後を知りたいと思った。しかし、目が覚めた以上、後は、想像するしかなかった。きっとどこかで――河原か、どこかで、敵をうまくまいて、その窮地を切り抜けるに違いない。ぼくは、そのうまい切り抜け方を、なんとかして知りたい、と思った。

そんなことを想像しながら、夜も段々と更けて行く。

...ぼくが思うのは、人間の幸福というものは、社会的な地位や名誉や成功の中にあるのではなく、まして、豪しゃや華美な生活の中にあるのでもなく、もうとっくの昔に忘れ去られてしまった、子供の頃のちょっとした歓びや、素朴な生活の中にこそ、存在していたものなのだ。そういう意味では、人は成長するにつれ、もう永久に、本当の幸福というものにめぐり会えないという絶望的な宿命を背負っているのだ。後は、それを紛らせる為の、決まり切ったおしゃべり、その場限りの笑い、等々で飾り立てられた空回りの人生を生きて行く他ないだろう...

この優しい夜、ぼくは何を望もうとしているのだろうか？

窓の外の闇に向かって、ぼくは、ぼくの過去に叫びかける。だが過去は、ぼくの指のあいだからすり抜けて、何も答えようとはしてくれない...

...きょうの夕方だった。いつものように散歩から帰って来て、庭を見て回り、静かな夜を迎えようとしていたとき、突然、書斎の電話のベルが鳴り響いたのだ。長いあいだ鳴ることもなく、沈黙に閉ざされたままほこりをかぶり、そろそろ蜘蛛の巣も張ろうかというこの頃、生命があったかのごとく鳴り響いたその音は、異様でさえあった。紛れもなく、執ように鳴り響く電話のそばに歩み寄って、ぼくはそっと、受話器を手に取った、半信、間違い電話ではないだろうか、恐れもしながら... しかし、そこから流れて来たのは、聞き覚えのある、あのハキハキとした声、柔かで、人の心を魅了するようなあのリサの声だった。

“...もし、もし、兄さん？ お久しぶり...”という挨拶で彼女の話し口は始まった。

彼女のアパートと、ぼくの館とを結ぶホットラインは、久しく結ばれるということがなかったのだ。

“リサかい？ どうしているんだ”と、ぼくは、電話に向かって話しかけた。

“この前と同じよ”と、リサは答えた、“雑誌の取材などで、相変わらず忙しくてね。一一でも、少し休暇が出来たの。それで、本当に久しぶりだけど、兄さんのいる家に帰ろうかと思って...”

“へえー、どういう風の吹き回しなんだい？”とぼくは、驚いて言った、“ここのことは、もうとっくの昔に忘れていたのかと思っていたのに...”

“まあ、意地悪ね”と、リサは言った、“ずっと気にはかけていたのよ。だって、兄さんのだけじゃなく、あたしの家でもあるんですもの。でも、やっと帰れる日が来たらしいわ。あっ、夏のキャンプ場から出した手紙、届いた？”

“ちゃんと、拝見させてもらったよ”と、ぼくは答えた、“とても楽しそうな内容だったね。二週間ぐらいの行程だったのかい？”

“ええ、きっちり二週間”と答えた彼女の声は、のびやかで、生き生きとしていた、“近くの湖でね、ヨットに乗せてもらったり、水上スキーも初めて味わわせてもらったわ”

“そりゃ、楽しかったろうね”と、ぼくは言った、“また、色々と聞かせてもらわなくっちゃね。それで、いつ帰って来るんだい？”

“あしたよ”と、リサはきっぱりと言った、“実は、今夜の夜行で帰ろうかと思って。いけない？”

“いけない、なんてことあるものか”と、ぼくは言った、“ちょうど、ぼくの方から参ろうかとさえ考えていたぐらいなんだから... でも、また、急なんだね”

“御免。白状すると、急に思いついちゃったのよ。ふと、郷愁のようなものを感じた、とでも言おうかしら”と、リサは言った、“それで、急に帰りたくなったのよ。そう思った以上、早く帰らなくっちゃね。御迷惑じゃない？”

“喜んで歓迎するよ”と、ぼくは嬉しくなって、言った、“一でもまた、どうしてそんな心境になったんだい？ 何かあったのかい？”

“別に”と、リサは笑って答えた、“きっと息抜きのようなものが欲しいって、感じたんでしょうよ。だって、あまりにもめまぐるしい毎日なんですもの。それで、兄さんのところに帰ってゆっくりとしたい一そう思ったの。かまわないでしょ？”

“いいよ。いつでもおいだよ。ぼくはいつでも待っているから...”と、ぼくは言った。

“ただ、残念だけど、余りゆっくりもしてもらえないの”と、リサは言った、“三日ほどの滞在で終わりそうよ。それでかまわない？”

“本当はもっとゆっくりしてもらいたいけど”と、ぼくは答えた、“リサがそう言うならかまわないさ。お前の好きなようにするがいい。ぼくは心から歓迎するよ...”

“じゃ、兄さんに会えるの、今から楽しみにしているわ”と、リサは可愛く言った、“じゃ、あしたね”

“うん、またあした”

電話は、そこで切れた。ぼくは、立ったまま受話器を置き、感動がじわじわと全身に広がって行くのを感じていた。窓の外は、落日の美しい空が広がり、部屋の内外全体を、孤独と冷たさの雰囲気満たしていたが、ほんのひとかけら、自分の心のうちに、暖かいものを感じていた。それは、秋の晴天直下、遠く電波によって運ばれて来たリサのメッセージにより燃焼させられた暖かさだった。それはなんとさわやかな喜びを、ぼくにもたらしたことだろう... 予期もしていなかったあのリサが、明日、この家に帰って来るのだ。そう思うと、いつも見慣れた、何んの変哲もないあの空が、周囲の風景が、いつもとは違って、なんと生き生きと歓びに満ち、そしてまた、一層神秘のヴェールに包まれた何かの象徴として、目に映って来たことだろう！

ぼくは、嬉しくなって、ソファーにどっと体を埋めた。そして、彼女が明日来ることや、かつてこの家でリサと過ごした日々ことや、その他のことについて、様々に頭をめぐらせるのだった...

...秋が深々と更けて行くようなこの夜、ぼくは夕食後の一段落を得、再び居間にやって来て、ソファーに体を埋めた。それから、窓ガラスに映る真暗な外を見つめながら、いつか、リサと過ごした日のことを思い出していた。

まだ、あのセーレンがいた頃のことだった。ちょうどこの日のように、秋の気配が一段と深まり行くさわやかな昼、ぼくは、リサと、彼女の勤めている街へ出かけて行ったときのことを思い出していた。彼女の勤めていた書店を見、その近くのレストランで昼食を食べた後、少し小高い丘の森に広がる、あのさわやかな大学にまで足を運んだのだった。あの日、それとなく過ごした出来事が、今となっては、なつかしく、また心高鳴る思い出として、脳裏に焼きつき、目に浮かんで来るのだった。

それは、ちょっとした人生上の冒険、数年前の、全体が秋に色どられた一日のアバンチュールと言えるものだった。なぜなら、もうそれは、過去という日々の中に滑り込み、あの秋の色あいも、街路樹のほのかな雰囲気も、通りを歩いて行く若いリサの微妙な美しさも、二度と構成されることは有り得ず、それらが相互にからみ合っただけかもしれないあの秋の雰囲気は、現在という日常から切り離されて、どこか遠い世界に存在する、一幅の絵、あるいは、神話の世界の出来事のようにしか、感じられないものになってしまっているからだ。しかし、それは確かに、幸福の思い出、あるいは、こう言ってよければ、ほのぼのとした秋のしるしに満ちた一日、みたいなものとして、ぼくの脳裏に焼きついているのだった。ぼくは、その日がもう失われたからと言って、別に悲しみはしなかった。むしろ、ぼくの経験上の宝物として、自分の宝石箱のコレクションの中にしまっておくこともできるだろう。そうして、その思い出をしまったうえで、きょう、この夜を安心して過ごすことが出来、ゆっくりとこの夜を楽しむこともできるのだ...